京都府遺跡調査概報

第 54 冊

1．国道176号関係遺跡

（1）蔵ヶ崎遺跡

（2）下岡古墳

（3）桜内遺跡

2．定山遺跡第3次

3．平安京跡(聚楽第跡)

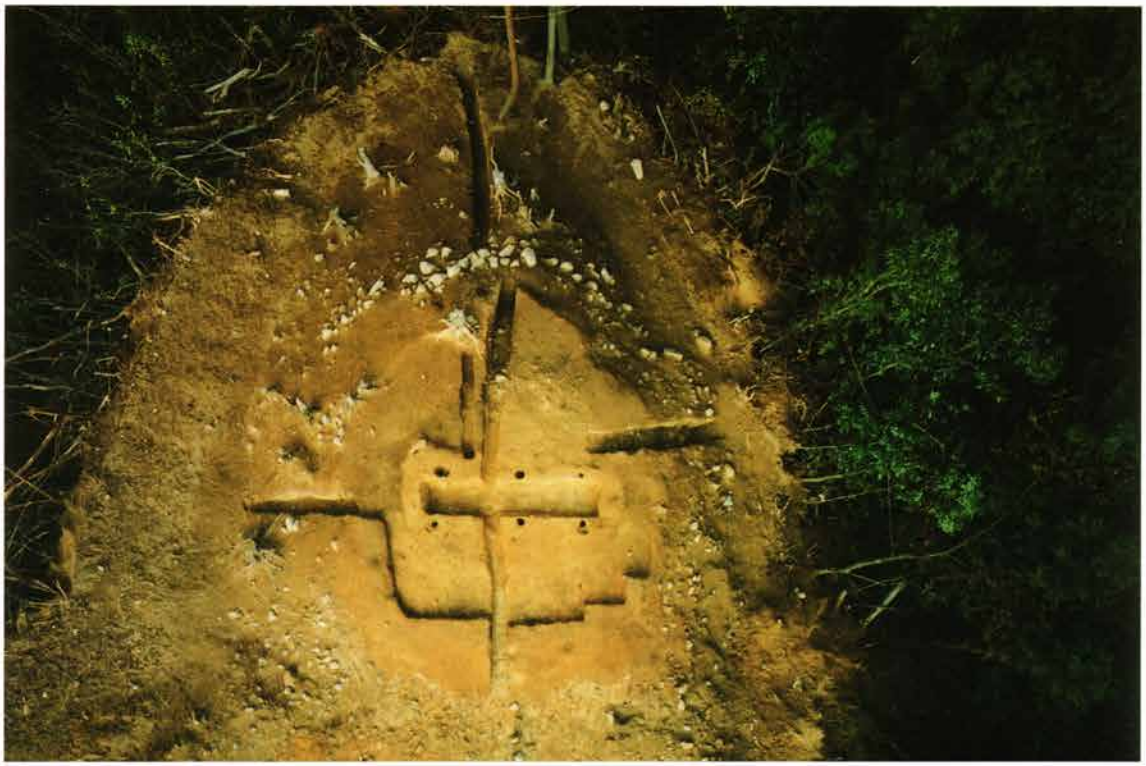
4．植物園北遺跡第11次

1993

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版第1　下　岡　古　墳

(1)　下岡古墳全景（北西から）



(2)　下岡古墳墳丘（直上から）

巻頭図版第２　　平安京跡（聚楽第跡）

(1)　調査地全景（北西から）

(2)　聚楽第跡東堀断面（南から）

巻頭図版第3　平安京跡（聚楽第跡）

(1)　聚楽第跡出土瓦 (1)

(2)　聚楽第跡出土瓦 (2)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや10年余を経過し、さらに新しい10年に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去10年をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成４年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した国道176号関係遺跡･定山遺跡第３次、京都府労働部の依頼を受けて実施した平安京跡(聚楽第跡)、京都府総合府民部の依頼を受けて実施した植物園北遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・加悦町教育委員会・岩滝町教育委員会・京都市文化環境局・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．国道176号関係遺跡　2．定山遺跡第３次　3．平安京跡(聚楽第跡)

4．植物園北遺跡

2．　各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．国道176号関係遺跡				
(1) 蔵ヶ崎遺跡	与謝郡加悦町明石蔵ヶ崎	平2.11.1～平3.3.13 平3.10.22～平4.3.13	京都府土木建築部	森　正 伊野近富 中川和哉
(2) 下岡古墳	与謝郡加悦町後野	平4.9.22～12.11		黒坪一樹
(3) 桜内遺跡	与謝郡加悦町金屋桜内	平4.11.27～平5.3.5		黒坪一樹
2．定山遺跡第３次	与謝郡岩滝町弓木	平4.5.18～8.27	京都府土木建築部	石崎善久
3．平安京跡(聚楽第跡)	京都市上京区大宮中立売通下ル	平3.11.19～平4.2.28	京都府労働部	森島康雄
4．植物園北遺跡	京都市左京区下鴨半木町	平4.9.22～平5.2.10	京都府総合府民部	竹原一彦

3．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

目　　次

1．国道176号関係遺跡発掘調査概要----------1
（1）蔵ヶ崎遺跡----------2
（2）下岡古墳----------55
（3）桜内遺跡----------69
2．定山遺跡第3次発掘調査概要----------85
3．平安京跡（聚楽第跡）発掘調査概要----------119
4．植物園北遺跡第11次発掘調査概要----------153

挿　図　目　次

1．国道176号関係遺跡

(1)蔵ヶ崎遺跡

第１図　蔵ヶ崎遺跡周辺地形図----------3
第２図　調査地位置図(1/5,000)----------4
第３図　土層柱状模式図----------5
第４図　上層(奈良時代)遺構配置図(1/300)----------6
第５図　下層(弥生時代)遺構配置図(1/300)----------7
第６図　土層断面図----------8
第７図　矢板列１実測図(1/20)----------9
第８図　ＳＤ101木製品出土状況図(1/30)----------10
第９図　ＳＤ203木製品出土状況図(1/30)----------10
第10図　上層水田面に残された足跡(1/80)----------11
第11図　出土遺物実測図(1)----------13
第12図　出土遺物実測図(2)----------14
第13図　出土遺物実測図(3)----------15
第14図　出土遺物実測図(4)----------16
第15図　出土遺物実測図(5)----------17
第16図　出土遺物実測図(6)----------18
第17図　出土遺物実測図(7)----------19
第18図　出土遺物実測図(8)----------20
第19図　出土遺物実測図(9)----------21
第20図　出土遺物実測図(10)----------22
第21図　出土遺物実測図(11)----------23
第22図　出土遺物実測図(12)----------24
第23図　出土遺物実測図(13)----------25
第24図　出土遺物実測図(14)----------26
第25図　出土石器実測図(1)----------29

第26図　出土石器実測図(2)----------30

(2)下岡古墳

第27図　調査地位置図(1/50,000)----------55

第28図　調査地周辺遺跡分布図----------56

第29図　調査地地形測量図----------57

第30図　下岡古墳墳丘地形図----------59

第31図　墳丘断面図----------60

第32図　主体部実測図(1)----------62

第33図　主体部実測図(2)----------63

第34図　出土遺物実測図(1)----------64

第35図　出土遺物実測図(2)----------65

(3)桜内遺跡

第36図　調査地周辺地形図----------69

第37図　トレンチ西壁断面図----------70

第38図　遺構平面図----------71

第39図　溝(ＳＤ03)平面図----------72

第40図　井戸(ＳＥ01)上層平面図----------72

第41図　井戸(ＳＥ01)下層平・断面図----------73

第42図　井戸(ＳＥ02)平・断面図----------74

第43図　井戸(ＳＥ03)・土坑(ＳＫ02)平・断面図----------75

第44図　出土遺物実測図(1)----------76

第45図　出土遺物実測図(2)----------77

第46図　出土遺物実測図(3)----------79

2．定山遺跡第３次

第47図　調査地周辺主要遺跡分布図(1/50,000)----------86

第48図　調査地位置図----------89

第49図　グリッド及びトレンチ配置図----------90

第50図　トレンチ土層断面図(1/100)----------91

第51図　検出遺構配置図(1)----------92

第52図　ＳＫ01実測図----------93

第53図　ＳＫ01出土土器実測図----------94

第54図　ＳＨ01・02実測図----------95

第55図　ＳＨ01床面出土土器実測図----------96
第56図　ＳＨ03実測図----------96
第57図　ＳＨ04・05実測図----------97
第58図　ＳＨ05出土土器実測図----------97
第59図　ＳＸ02実測図----------98
第60図　鍛冶炉実測図----------99
第61図　ＳＸ02出土土器実測図(1)　須恵器(1)----------100
第62図　ＳＸ02出土土器実測図(2)　須恵器(2)----------101
第63図　ＳＸ02出土土器実測図(3)　須恵器(3)----------102
第64図　ＳＸ02出土土器実測図(4)　土師器(1)----------103
第65図　ＳＸ02出土土器実測図(5)　土師器(2)----------104
第66図　ＳＸ02出土土器実測図(6)　土師器(3)----------105
第67図　ＳＸ02出土土器実測図(7)　土師器(4)----------106
第68図　定山遺跡出土石製品実測図----------107
第69図　ＳＫ03・04実測図----------107
第70図　検出遺構配置図(2)----------108
第71図　第Ⅱ層出土遺物実測図----------109
第72図　定山遺跡出土金属器実測図----------110

３．平安京跡(聚楽第跡)

第73図　調査地位置図(1/25,000)----------119
第74図　調査区及びボーリング孔位置図(1/800)----------120
第75図　Ａトレンチ南壁断面図(1/100)----------121
第76図　Ａトレンチ平面図----------122
第77図　聚楽第跡東堀断面図及び地質柱状図----------123
第78図　出土遺物実測図(1/4)----------125
第79図　軒丸瓦実測図１(1/4)----------126
第80図　軒丸瓦実測図２(1/4)----------127
第81図　軒丸瓦実測図３(1/4)----------128
第82図　軒丸瓦実測図４(1/4)----------129
第83図　軒平瓦実測図１(1/4)----------131
第84図　軒平瓦実測図２(1/4)----------132
第85図　軒平瓦実測図３(1/4)----------133

第86図　軒平瓦実測図4(1/4)----------134
第87図　軒平瓦実測図5(1/4)----------135
第88図　軒平瓦実測図6(1/4)----------136
第89図　菊丸瓦実測図(1/4)----------137
第90図　棟込瓦類実測図(1/4)----------138
第91図　飾瓦実測図1(1/5)----------139
第92図　飾瓦実測図2(1/5)----------140
第93図　飾瓦実測図3(1/4)----------141
第94図　方形道具瓦実測図(1/6)----------142
第95図　鬼瓦類実測図1(1/5)----------143
第96図　鬼瓦類実測図2(1/4)----------144
第97図　鬼瓦類実測図3(1/5)----------144
第98図　鬼瓦類実測図4(1/4)----------145
第99図　丸瓦実測図1(1/5)----------147
第100図　丸瓦実測図2(1/5)----------148
第101図　平瓦実測図(1/5)----------149
第102図　熨斗瓦実測図(1/4)----------150
第103図　文字瓦実測図(1/2)----------151

4．植物園北遺跡

第104図　調査地位置図----------153
第105図　調査地平面図----------155
第106図　ＳＢ１実測図----------157
第107図　出土遺物実測図----------158

付　表　目　次

1．国道176号関係遺跡

(1)蔵ヶ崎遺跡

付表1　出土遺物観察表----------32

(2)下岡古墳

付表2　玉類一覧表----------66

2．定山遺跡第3次

付表3　ＳＸ02出土須恵器観察表----------113

付表4　ＳＸ02出土土師器観察表----------116

3．平安京跡(聚楽第跡)

付表5　軒丸瓦計測表----------130

図　版　目　次

1．国道176号関係遺跡

(1)蔵ヶ崎遺跡

図版第1　(1)調査開始時風景(南から)

(2)土坑(ＳＫ01)遺物出土状態(南から)

図版第2　(1)Ｂトレンチ上層水田面(北から)

(2)水田畦畔(北から)

(3)ＳＲ101(西から)

図版第3　(1)Ａトレンチ弥生時代遺構(南から)

(2)Ｂトレンチ弥生時代遺構(西から)

図版第4　(1)矢板列1(西から)

(2)矢板列細部(西から)

(3)矢板列細部(西から)
図版第5　(1)ＳＤ101断面と土層の状況(南から)
(2)Ａトレンチ矢板列２(西から)
図版第6　(1)ＳＤ202(南から)
(2)ＳＤ201(北から)
図版第7　出土遺物(1)
図版第8　出土遺物(2)
図版第9　出土遺物(3)
図版第10　出土遺物(4)
図版第11　出土遺物(5)
図版第12　出土遺物(6)
図版第13　出土遺物(7)
図版第14　出土遺物(8)
(2)下岡古墳
図版第15　(1)調査前墳丘全景(南から)
(2)南側平坦部試掘地点(東から)
図版第16　(1)墳丘掘削風景(南西から)
(2)主体部上部土層断面
(3)主体部検出状況(南から)
(4)主体部東側石組細部
図版第17　(1)杭跡と主体部ライン検出状況
(2)杭跡と墓壙断面
(3)主体部掘削状況(南から)
(4)杭跡
図版第18　(1)主体部墓壙(南東から)
(2)主体部完掘状況(東から)
図版第19　(1)主体部完掘状況
(2)土師器杯出土状況
(3)ガラス製小玉出土状況
図版第20　(1)出土遺物(主体部内他)
(2)出土遺物(盛り土中)

(3)桜内遺跡

図版第21　(1)調査風景(南から)
(2)溝(ＳＤ03)と井戸(ＳＥ01)
図版第22　(1)井戸(ＳＥ01)上面
(2)井戸(ＳＥ01)完掘状況
図版第23　(1)井戸(ＳＥ02)
(2)井戸(ＳＥ02)内土器出土状況
図版第24　(1)土坑(ＳＫ02)
(2)土坑(ＳＫ02)内黒色土器出土状況
図版第25　出土土器
図版第26　(1)ＳＥ03出土瓦器椀(表面)
(2)同(裏面)

2．定山遺跡第３次

図版第27　(1)調査地遠景(東から)
(2)調査地全景(上空から　上が西)
図版第28　(1)調査地全景(上空　北東から)
(2)調査地全景(南から)
図版第29　(1)ＳＨ01・02全景(南から)
(2)ＳＨ01竈検出状況(南西から)
図版第30　(1)ＳＨ03全景(南東から)
(2)ＳＨ04・05全景(東から)
図版第31　(1)ＳＫ01全景(北から)
(2)ＳＸ02鍛冶炉検出状況(東から)
図版第32　(1)ＳＸ02遺物出土状況(1)(南から)
(2)ＳＸ02遺物出土状況(2)(東から)
図版第33　(1)ＳＫ03検出状況(東から)
(2)ＳＸ01検出状況(南から)
図版第34　(1)調査地北半全景(南から)
(2)ＳＤ01検出状況(北東から)
図版第35　出土遺物(1)
図版第36　出土遺物(2)
図版第37　出土遺物(3)

図版第38　出土遺物(4)
図版第39　出土遺物(5)
図版第40　出土遺物(6)

3．平安京跡(聚楽第跡)

図版第41　(1)調査地全景(江戸時代・北から)
(2)地下室1　断面(南から)
図版第42　(1)地下室1　完掘状況(南から)
(2)土坑2全景(東から)
図版第43　(1)土坑3遺物出土状況(東から)
(2)土坑1・2・3完掘状況(南から)
図版第44　(1)堀埋土堆積状況(Aトレンチ北壁)
(2)堀埋土内瓦堆積状況(Aトレンチ北壁)
図版第45　堀出土 軒丸瓦1
図版第46　堀出土 軒丸瓦2
図版第47　堀出土 軒丸瓦3
図版第48　堀出土 軒平瓦1
図版第49　堀出土 軒平瓦2
図版第50　堀出土 軒平瓦3
図版第51　堀出土 軒平瓦4
図版第52　堀出土 軒平瓦5
図版第53　堀出土 軒平瓦6
図版第54　堀出土 軒平瓦・棟込瓦類
図版第55　堀出土 飾瓦類
図版第56　堀出土 飾瓦類・鬼瓦類1
図版第57　堀出土 飾瓦類・鬼瓦類2
図版第58　堀出土 方形道具瓦
図版第59　堀出土 丸瓦・熨斗瓦
図版第60　堀出土 平瓦・熨斗瓦・文字瓦
図版第61　(1)堀出土 土器類　(2)土坑1出土土師皿
図版第62　土坑2出土遺物他
図版第63　土坑3出土遺物1(肥前磁器)
図版第64　土坑3出土遺物2

図版第65　土坑３出土遺物３
図版第66　土坑３出土遺物４
図版第67　地下室１出土遺物１（肥前磁器）
図版第68　地下室１出土遺物２
図版第69　地下室１出土遺物３
図版第70　地下室１出土遺物４

４．植物園北遺跡

図版第71　(1)試掘トレンチ全景(北から)
(2)拡張調査区全景(南から)
図版第72　(1)拡張調査区全景(北から)
(2)建物跡ＳＢ1(北から)
図版第73　(1)柱穴列ＳＡ1(北東から)
(2)土坑ＳＫ4(南から)
図版第74　(1)焼土坑ＳＸ1セクション(東から)
(2)焼土坑ＳＸ1砂礫層除去(西から)
図版第75　(1)焼土坑ＳＸ1完掘状況(西から)
(2)遺物出土状況
図版第76　(1)高杯　(2)その他の出土遺物

1．国道176号関係遺跡発掘調査概要

はじめに

本概要報告は一般国道176号道路新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け、平成２年度と平成３年度に調査を実施した蔵ヶ崎遺跡と、平成４年度に実施した下岡古墳・桜内遺跡について報告する。

蔵ヶ崎遺跡は、当調査研究センター調査第２課調査第１係長水谷壽克、同調査員森　正が担当した。調査期間は、平成２年11月１日～同３年３月13日(第１次)と、平成３年10月22日～同４年３月13日(第２次)で、現地説明会はそれぞれ平成３年３月２日と同４年２月28日に実施した。調査面積は約500㎡(第１次)と約600㎡(第２次)である。所在地は京都府与謝郡加悦町字明石小字蔵ヶ崎他である。ここでは弥生時代前期の矢板列とともに包含層からではあるが、良好な土器の一括資料が得られた。また、朝鮮半島製と思われる石ノミ等も出土し、丹後の弥生時代前期を考える上で貴重な資料となった。ここは低地で、水田耕作等の存在を知るため、プラント・オパールの分析を古環境研究所に実施を委託した。

下岡古墳は、同郡加悦町字後野に所在する。調査は、調査第１係長伊野近富、同調査員黒坪一樹・石崎善久が担当した。調査期間は、平成４年９月22日～12月11日で、現地説明会は、12月４日に実施した。調査面積は約300㎡である。この古墳は、従来遺跡地図には記載されていなかったが、郷土史家杉本利一氏によって教示されたものである。調査の結果、古墳時代中期の木棺直葬墳であることが判明した。また、主体部の周辺で６基のピットが確認され、構築物が存在したことが判明した。

桜内遺跡は、同郡加悦町字金屋小字桜内に所在する。調査は、伊野・黒坪と調査第２係調査員河野一隆が担当した。調査期間は、平成４年11月27日～平成５年３月５日で、関係者説明会は平成５年２月９日に実施した。調査面積は約700㎡である。調査の結果、平安時代末期の土器一括資料が確認された。これらの概要報告の執筆は各担当者が行い、プラント・オパール分析については、古環境研究所によるものである。

このほかに、嗎岡遺跡の発掘調査を平成５年１月18日～２月25日まで行ったが、一部を調査したのみで、報告は完了後に行う。調査中には関係諸機関や調査参加者に多大な苦労をかけた。記して感謝したい[注1]。なお、発掘調査にかかる費用は、全額京都府が負担した。

（伊野近富）

(1) 蔵ヶ崎遺跡

1．はじめに

現地調査は、第1次調査を当調査研究センター調査第2課調査第1係長水谷壽克(当時)、同調査員森　正(現京都府教育庁文化財保護課技師)が担当し、第2次調査では水谷、森と同調査員石崎善久が担当した。また、本概要の執筆は第1章～第4章(3)までを森が行い、第4章(4)遺物については、調査第1係長伊野近富と調査第4係調査員中川和哉が行った。

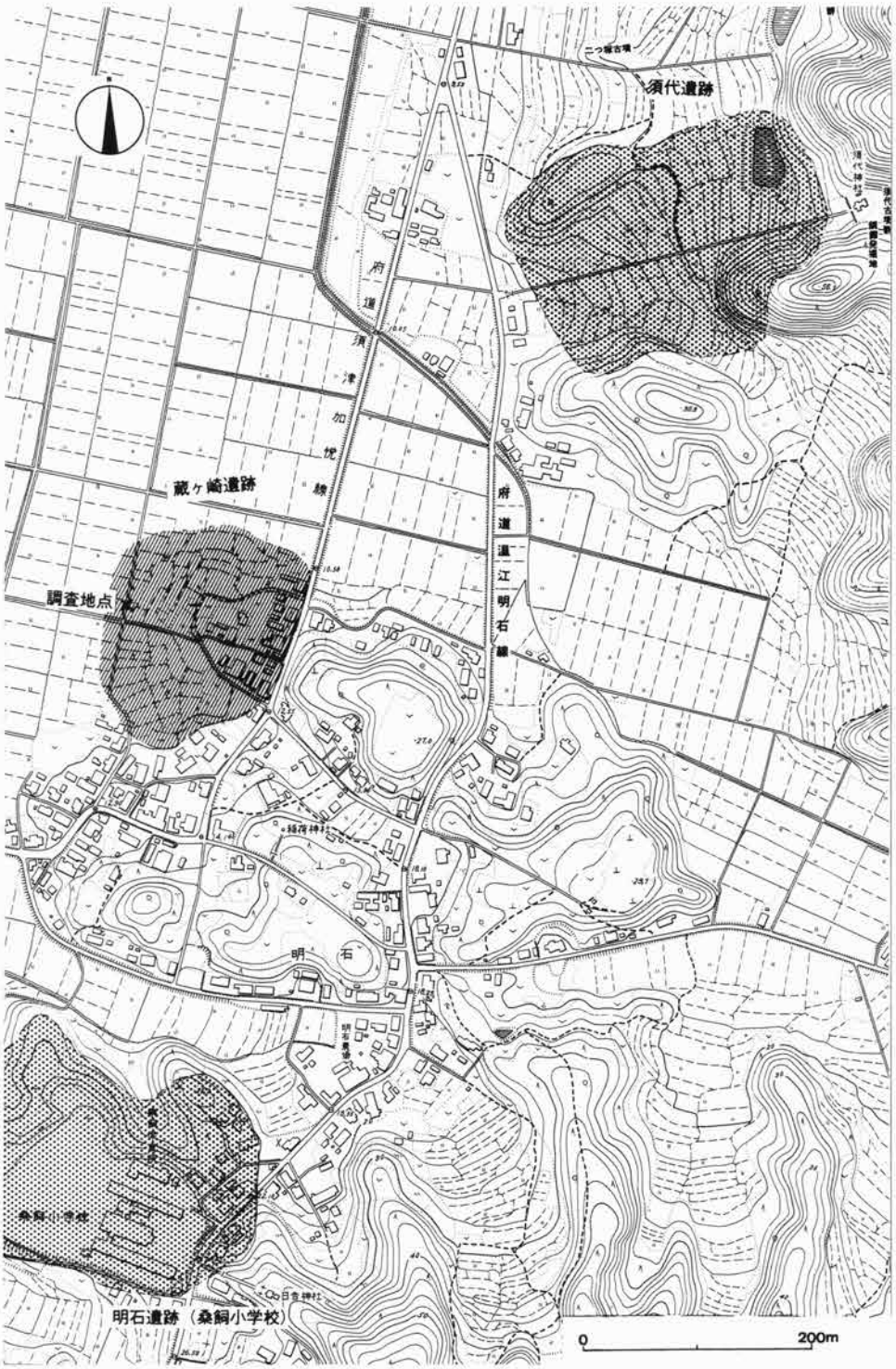
2．遺跡の位置と周辺環境

蔵ヶ崎遺跡は、日本海へ北流する野田川の中流域右岸の、低台地及び野田川が形成した沖積地に位置する。現在の野田川からは東へ約1kmの地点にあたる。現在は、丘陵先端部の低台地上は、宅地化されており、さらにその先端は水田となっている。調査を行った地点は、標高8m前後である。また、蔵ヶ崎遺跡の周辺には、須代遺跡・明石(桑飼小学校)遺跡という弥生時代中期の集落跡が知られている。須代遺跡は、蔵ヶ崎遺跡から北東へ約500mの地点で、沖積地を望む丘陵上及び中位段丘上に位置する。これまでに4次にわたる発掘調査が行われており、中期中頃から後半にかけての、環濠をめぐらせる集落であることが判明している[(注2)]。また、古く明治26年には偏平鈕式流水文銅鐸が、丘陵斜面から出土している。明石(桑飼小学校)遺跡は、今回の調査地から南へ約500mの中位段丘上に位置する。ここも中期後半頃の集落跡と見られ、銅鐸形土製品が出土している。このように、弥生時代前期から中期にかけて、当地区においての集落跡の変化を見ることができる。

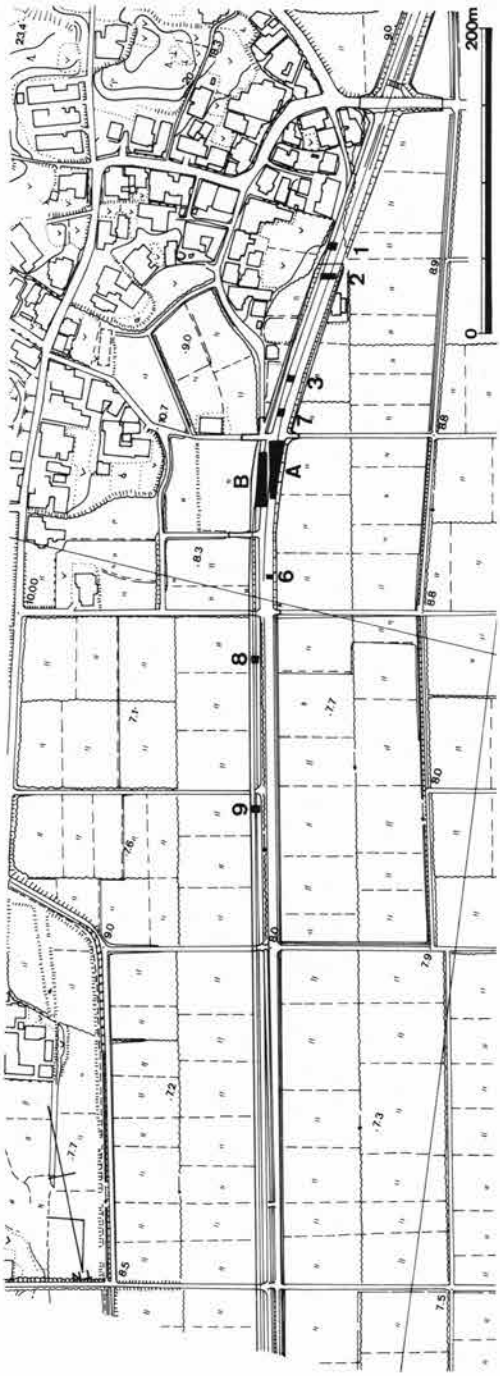
3．調査の経過

蔵ヶ崎遺跡は、過去の土地改良事業によって多量の土器が出土し、丹後地域でも数少ない弥生時代前期の遺跡として周知されていた。今回は、遺跡の立地する低台地周辺部をかすめるように道路建設が計画されたため、まず計画路線内で試掘調査を行うこととした。

第1次調査は、平成2年11月1日から平成3年3月13日まで行った。合計9か所の試掘グリッドを設定し、弥生時代前期の包含層及び、杭・矢板等が打ち込まれた状況で確認されたNo.4・5地点を中心に、約500m²の拡張トレンチを設定し、調査を行った。ここでは、上層で奈良時代の自然流路、下層では弥生時代前期の溝状遺構を検出した。調査の最終段階で、下層溝内堆積土のプラント・オパール分析を行ったところ、多量の稲のプラント・



第１図　蔵ヶ崎遺跡周辺地形図（加悦町作製の町全図　昭和38年に加筆）



第2図　調査地位置図(1/5,000)

オパールが検出された。(注3) このため、溝状遺構が前期水田に係わる、水利溝である可能性が予想された。

第2次調査は、第1次調査地の東に隣接する地点とし、平成3年10月22日から4年3月13日まで行った。ここでは、上層にも水田土壌の可能性のある土層が存在していた点、及び水田土壌の面的広がりを確認する必要がある点から、掘削に先立ち、再度プラント・オパール分析を、現地表面からのボーリングによるサンプリングで行った。この結果、水田土壌の可能性のある土層が、上下2層あることが確認された。そこで、重機による掘削を第4層暗青灰色砂層までとした。後述するように、上層では畦畔を伴う水田面を検出でき、下層においても溝・土坑・多数の杭列・矢板列等の遺構を検出することができた。

2次にわたる調査ともに、冬場の作業となり、冬の丹後地域の悪天候と降雪と、激しい湧水に悩まされ、現地調査は困難を極めた。

4．調査の概要

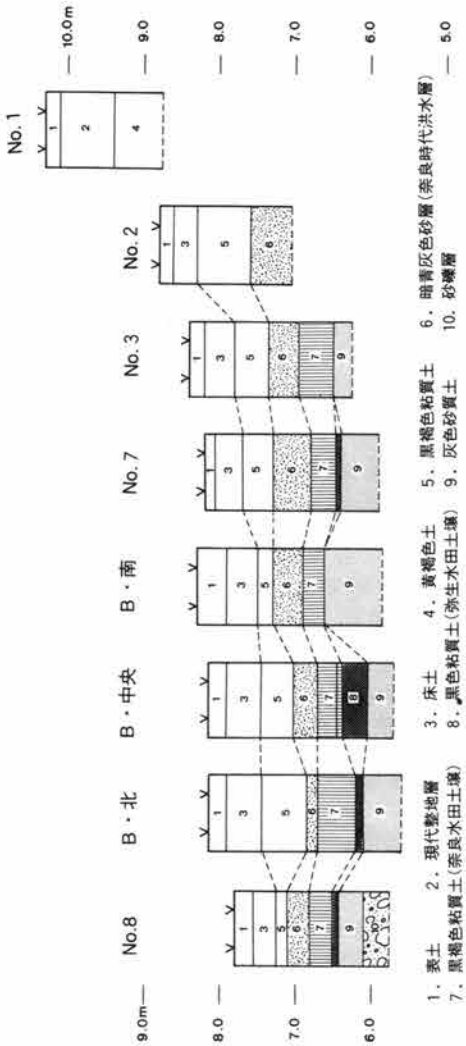
(1)試掘調査及び土層堆積状況(第2・3・6図)

試掘調査において遺構及び遺物包含層を確認したのは、No.4・5の2地点のみである。ここではまず調査

地全体の土層堆積状況について述べ、拡張調査地での土層の状況についてもふれておく。

No.1については、東からのびる丘陵の先端部台地上であり、表土下1m・標高約9.4mで黄褐色のベース面を確認した。ただし、攪乱がかなり深く及んでおり、遺構・遺物の検出はできなかった。No.2においては表土下に黒褐色粘質土その下に暗青灰色砂質土が厚く堆積している。この暗青灰色砂質土はこれより以北の各地点においても確認できる。また、Bトレンチにおいて確認した上層水田面を覆っており、出土した土器から見ても、奈良時代の中で堆積した洪水層と見られる。上層水田土壌(黒灰色粘質土)は、No.3以北に存在し、No.8でも確認しており、奈良時代水田域はさらに北側へと広がっているものと見られる。その下の、黒色粘質土層は10～20cm堆積しており、No.3から途中途切れながらもNo.8へと続いている。この土層についても、プラント・オパール分析の結果、水田耕作土の可能性が高いものと見られる。この層以下には、灰色の細砂層及び砂礫層が、堆積している。また、No.6及びNo.9地点においては、耕作土下に激しい湧水を伴う砂礫層が存在し、以下に掘り進められず、掘削を断念した。

次に、A・Bトレンチの堆積状況であるが、Aトレンチでは、上層水田耕作土(灰黒色粘質土層)の下に黒色粘質土層が認められ、これを除去した段階で、SD101を検出した。セクションによる土層観察結果でも、溝(SD101)との新旧関係が跡づけられる。Bトレンチでは逆に溝(SD201)がこの黒色粘質土を切って掘削されている状況が確認できる。



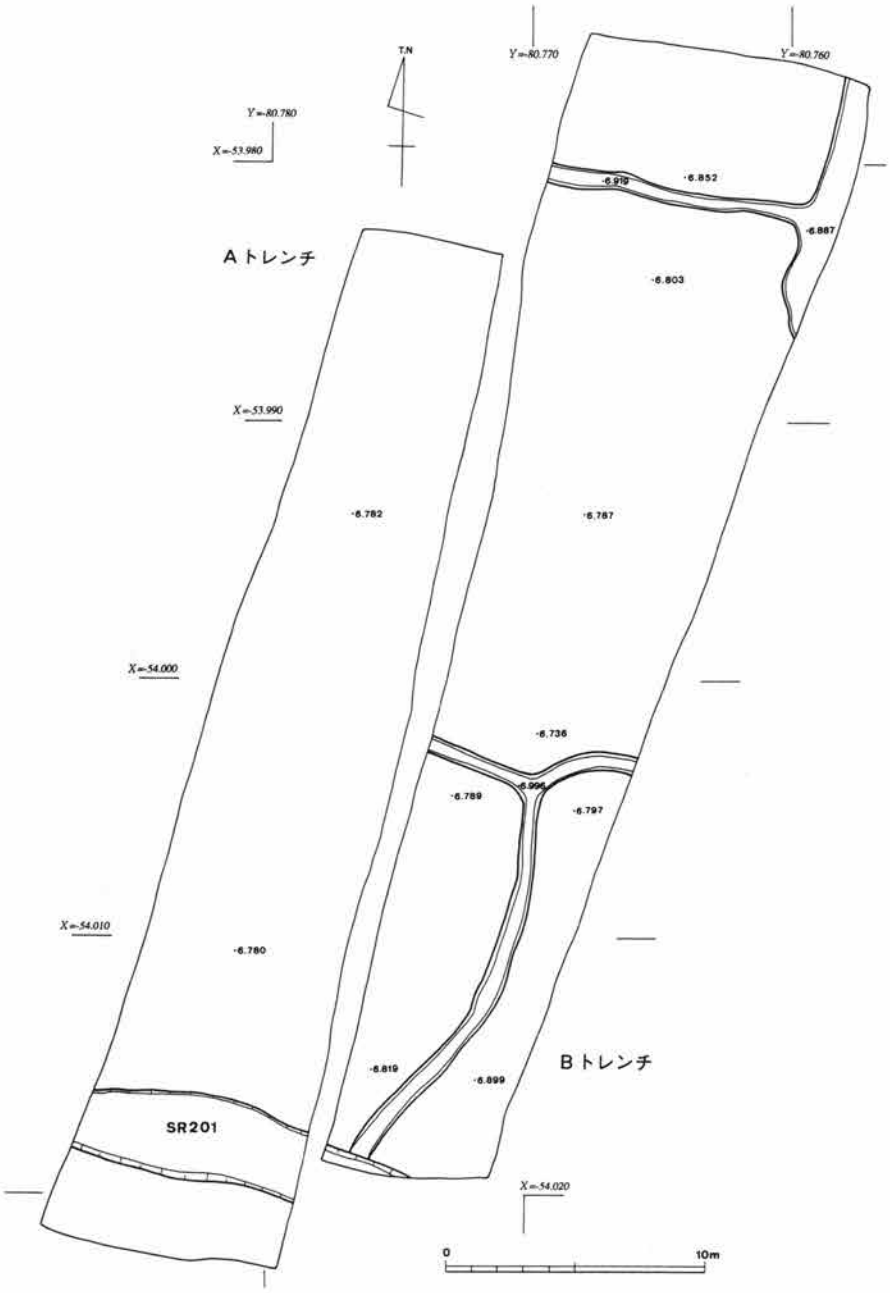
第3図　土層柱状模式図

(2)弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては、溝状遺構(SD101・SD201)と矢板列・杭列・土坑(SK204)がある。

SD101　Aトレンチにおいて確認し

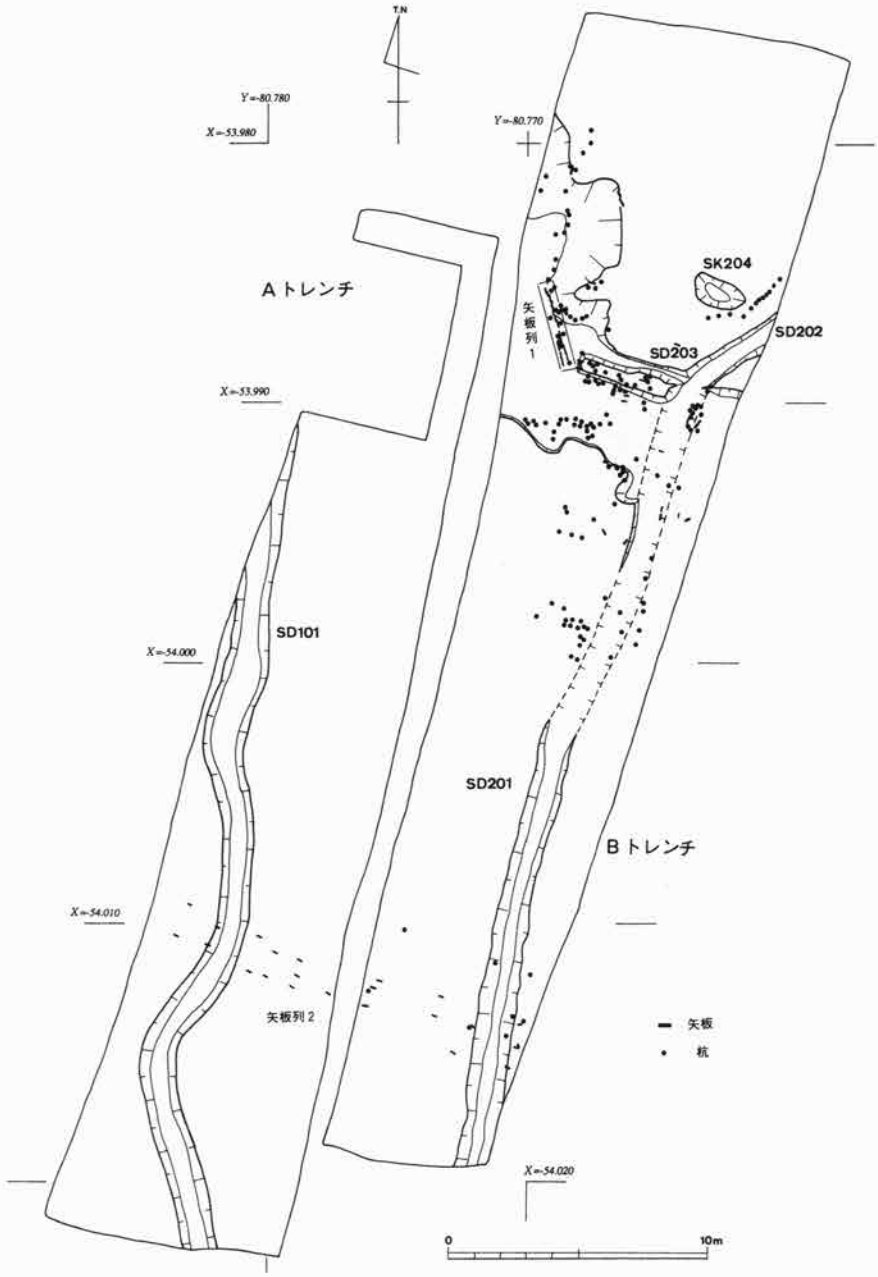
た南北方向に蛇行する溝である。トレンチ南端から約35m分を検出した。検出面での幅約1m・深さ30cmを測り、断面形は緩い「U」字形を呈する。南から北へ向かって、底面のレベルは下がっていく。埋土は、灰黒色粘質土で占められ、弥生前期の土器及び木製農具などの木片が出土した。出土した土器から見ても弥生時代前期に属するものと考えられる。



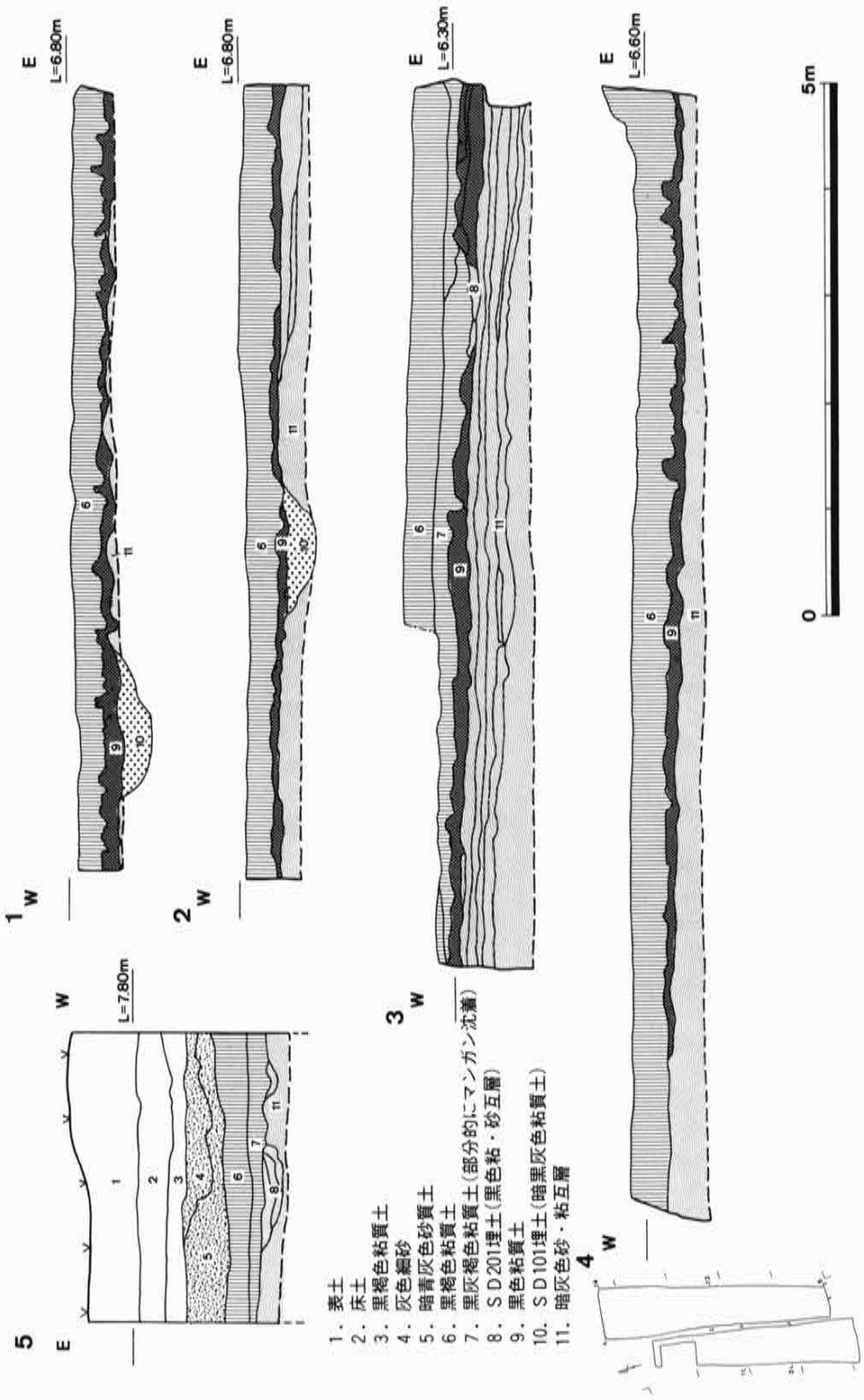
第4図　上層(奈良時代)遺構配置図(1/300)

また、先述のように、溝埋土のプラント・オパール分析の結果では、周辺域で水田耕作が行われていた可能性が高いと考えられる。

ＳＤ201～203　Ｂトレンチにおいて確認した、同じく南北方向にのびる溝状遺構である。これについても、トレンチ南端から直線的にのび(ＳＤ201)、南端から約32ｍの地点

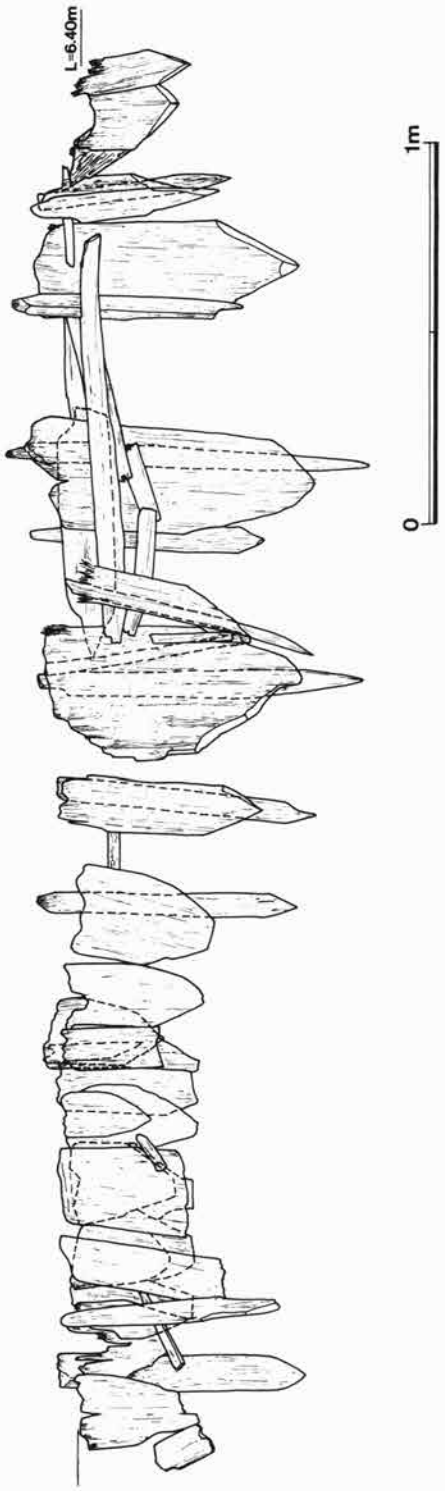


第５図　下層(弥生時代)遺構配置図(1/300)

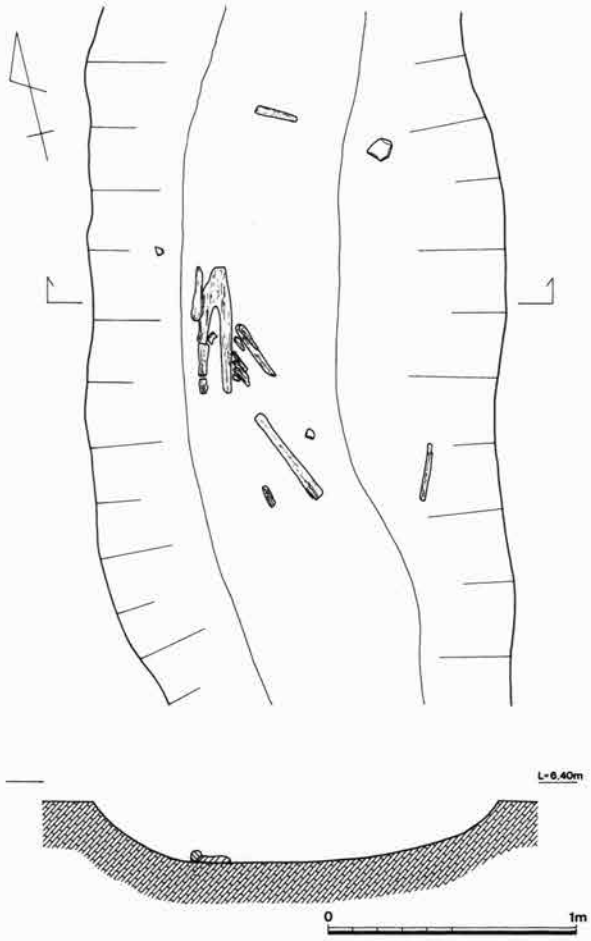

1
W
E
L=6.80m
2
W
E
L=6.80m
3
W
E
L=6.30m
4
W
E
L=6.60m
5
E
W
L=7.80m
1. 表土
2. 床土
3. 黒褐色粘質土
4. 灰色細砂
5. 暗青灰色砂質土
6. 黒褐色粘質土
7. 黒灰褐色粘質土(部分的にマンガン沈着)
8. SD201埋土(黒色粘・砂互層)
9. 黒色粘質土
10. SD101埋土(暗黒灰色粘質土)
11. 暗灰色砂・粘互層
0
5m

第6図　土層断面図

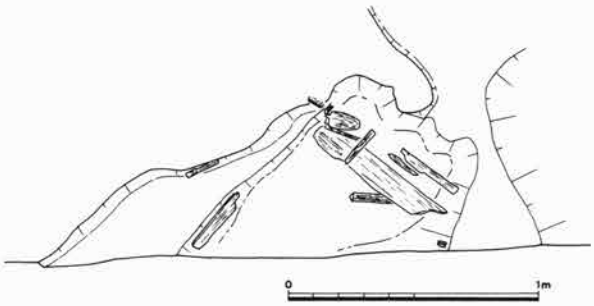
で東に屈曲して調査地外へのびていく（ＳＤ202）。この屈曲点では、西方向へも分かれて直線的にのびる（ＳＤ203）。このうち南北方向のものは、底面のレベルを見ると、先の屈曲点に向かって南から下り、また、ＳＤ202も北側から下ってきて、合流して西方の溝ＳＤ203へと導かれる構造となっていることがわかる。西へのびるＳＤ203は、合流点から約８ｍの地点で、溝に斜行する矢板列１にぶつかり、これより先は、明確な溝として確認できず、幅が広がっていく。ＳＤ203の南側には、特に集中して杭列が存在する。これらは、幾度もの補強・打ち換えがあるためか、同一時期のものを抽出するのは困難であるが、おおむね溝に平行する東西方向のものと考えられる。ＳＤ202の北側にも、溝の肩から約１ｍの余地をもって、平行する杭列が存在する。また、ＳＤ203の南側は、東西方向の浅い溜まり状を呈している。矢板列１は、全長６ｍにわたって施設が施されており、幅20cm・長さ40cm程度のものと、幅50cm・長さ80cm程度の大小の板材を組み合わせて、杭及び横棒材で止めている。杭は、矢板材の東面を止めており、ＳＤ203から流れ込む水流の調節機能を持つものと見られる。矢板材の先端は尖らせて打ち込まれている。これらＡトレンチの溝状遺構の埋没時期については、弥生時代中期後半と考えられる。



第７図　矢板列１実測図（西からの見通し　1/20）



第８図　ＳＤ101木製品出土状況図(1/30)



第９図　ＳＤ203木製品出土状況図(1/30)

ＳＫ204　Ｂトレンチの北寄り、ＳＤ202の北西に位置する土坑である。平面長円形を呈し、短軸1.2m・長軸2.2m・深さ30cmを測る。土坑埋土中からは土器片・板材等が出土した。土器から見て、弥生時代前期に属するものである。

(3)奈良時代の遺構

奈良時代の遺構としては、東西方向の流路(ＳＲ101)とＢトレンチにおいて、畦畔を伴う水田遺構を確認した。

ＳＲ101　調査区の南端で確認した、東西方向の流路である。幅約３ｍであるが検出面からの深さはわずかに15cm程度である。東の台地上から、西に向かい流れたものである。流路内からは、多量の木製品が出土したが、大半は、用途不明の部材であった。出土土器から見て、奈良時代に埋没したものと考えられる。

水田遺構　Ａトレンチでは、重機掘削を水田耕作土の直上まで行ったため、第１次調査の時点では、水田面であることを確認しえて

第10図　上層水田面に残された足跡(1/80)

いなかった。Bトレンチでは、畦畔によって区画された4面の水田を検出しえた。しかし、各面ともに水田の全形は知りえない。ただ、中央の水田では、畦畔間が南北方向で約25mを測る。北端の水田においては、人の足跡を含む多数の凹みが残されており、人の歩行状況を確認できる部分もある(第10図)。これら水田面を切り込んで流路跡(ＳＲ101)があり、前後関係を有しているものと考えておく。

(4)出土遺物

第1次調査で出土した遺物は、整理箱22箱分である。包含層出土遺物が17箱で、ＳＤ101出土遺物2箱、ＳＲ101出土遺物が2箱である。大半が弥生土器であるが、このほか、石ノミや木製品、奈良時代の須恵器・土師器などが出土した。

第2次調査で出土した遺物は、整理箱114箱分である。包含層出土が69箱で、ＳＤ201出

土遺物が38箱、ＳＤ202が２箱、ＳＤ203が３箱、ＳＲ02が１箱、ＳＫ01が１箱である。このほとんどが弥生土器である。石器・石製品は10箱程度、須恵器などが１箱程度ある。また、矢板を中心とした木製品は100点以上が出土した。

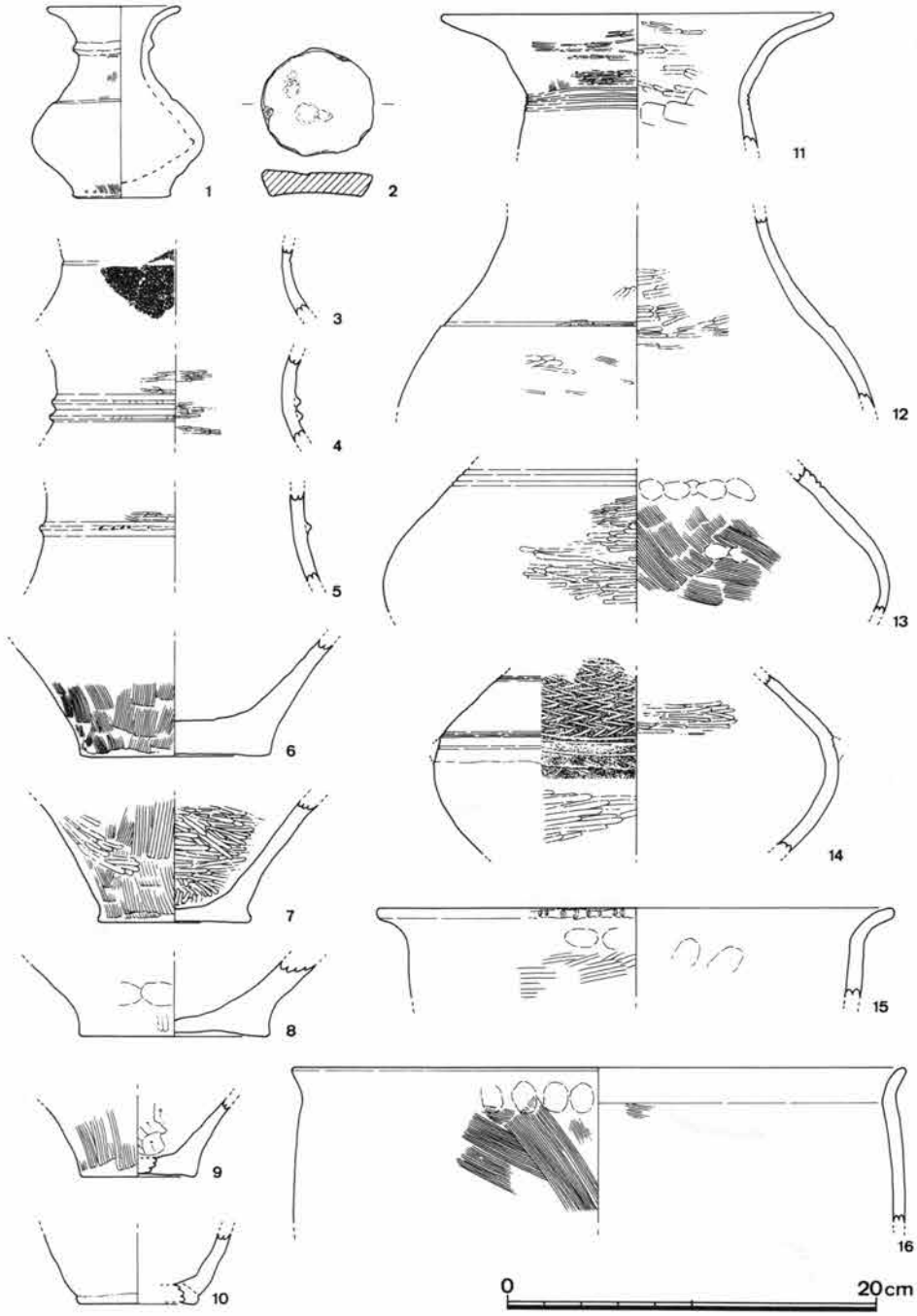
この項では、まず第１次調査分について注目されるものを抽出して説明する。その後、第２次調査分について言及するが、石器・石製品については後でまとめて紹介する。

（第１次調査） ここでは、１の弥生土器壺が良好な資料としてあげられる。頸部に１条の突帯を施し、体部上半に削り出し手法による段差を設けている。『京都府弥生土器集成』（以下、集成と略する）で、丹後町竹野遺跡21の土器として紹介されるものに類似する。そこでは第Ｉ様式中段階とされている。11のように頸部に沈線を施し、口縁部が大きく外反したものは、出雲・隠岐地域に類例があり[注4]、そこでは第Ｉ様式を４つに細分した中のＩ－３様式に比定されている。

奈良時代に属するものの中で、23の土師器皿が注目される。内底面に螺旋状暗文を施し、外面にミガキをかける。胎土は在地で、色調も赤褐色系であることから畿内産土師器を模倣したものといえよう。暗文やミガキの点から、奈良時代前半に相当するといえよう。また、21・22などの墨書された須恵器の存在も注目される。これらの製品の存在は、官衙または寺院など、もしくはそれら

弥生土器・壺(1)

石ノミ



第11図　出土遺物実測図(1)

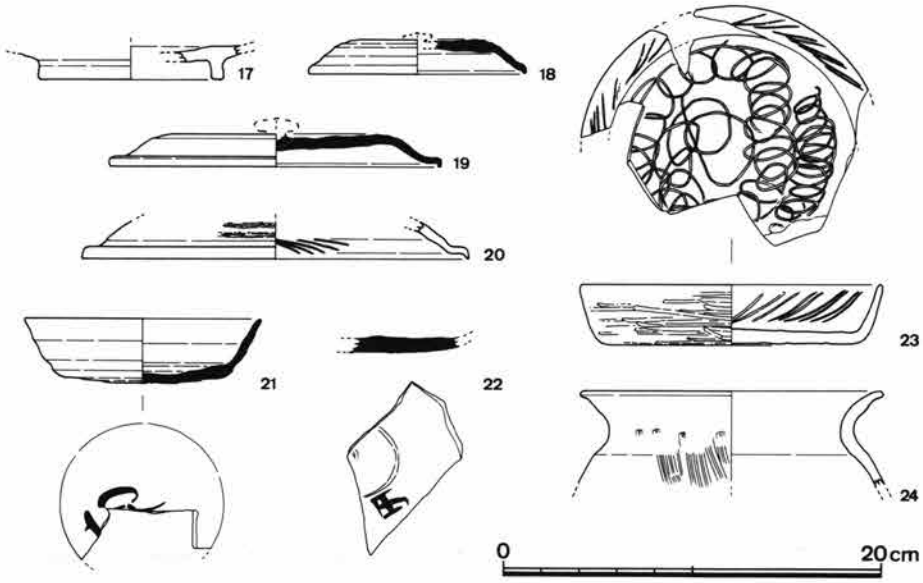
に出仕する人々との関連がうかがわれ、今後、周辺の調査で注意する必要がある。

17や20は、本来須恵器の形態ではあるが、焼成方法は土師器に分類される。特に、20は、内外面ともミガキをかけており、土師器の調整技法を使い、須恵器の形態を真似たものである。このことから、土師器工人によって須恵器製品が真似て作られたことがわかる。今後はなぜそうなったのかを考えなければならない。

木製品については、25の馬形が注目される。これは鞍を作り出しており、飾り馬をイメージしたものである。馬形は土馬と同じように、水霊信仰とかかわり水神への捧げものとする見方が多いが、金子裕之氏は、馬は本来貴人の乗り物で、人間の穢を負った人形を他界に運ぶため、人形の傍らに立てたのではないか、との見解を『律令期祭祀遺物集成』のなかで示している。ただし、当該地で人形は出土していない。なお、1988年の上記の集成では全国で25か所確認されており、丹後では岩滝町定山遺跡に次いで２例目である。

（第２次調査）　ここでは加飾された土器が多く出土した。施文具は貝殻状工具によるものと、ヘラによるものとの２種がある。文様は羽状文が多いが、斜線のみで表現されたものや刺突文もある。また、貼り付け突帯や削り出しを施した段差（突帯状となる）もある。

41は、壺の体部上半に羽状文を施したもので、上下に横位の貼り付け突帯を施し、その上面に刻み目をするものである。羽状文の中は縦位で２条の沈線を施し、区画している。このような施文のほか、ＳＤ201で注目されるのは、77のように、体部外面に渦巻き状の貼り付け文を施し、その上面に刻み目を施したものである。備前Ｉ－３様式で類例がある[注5]



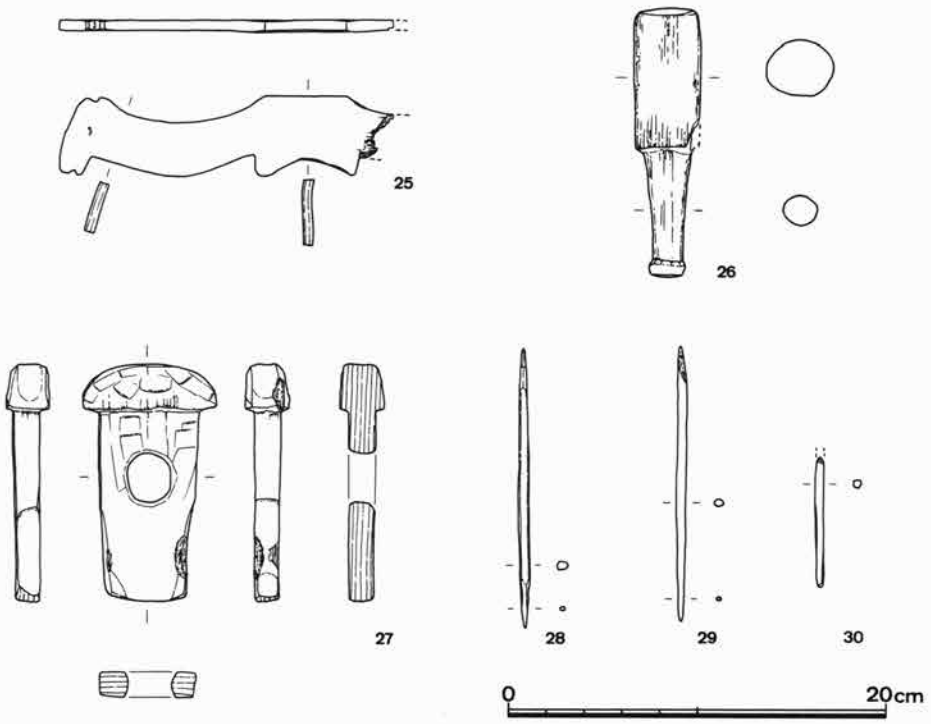
第12図　出土遺物実測図(2)

が、これは口縁部内面に貼り付けたものである。沈線は５～６条のものが多く、第Ⅰ様式の中でも新しい様相を示している。116は、口縁部が逆Ｌ字形になったもので、三角形の粘土紐を口縁部外面に貼り付けて成形している。口縁端部内側に刻み目を入れている。頸部は剝離しており、不明瞭ではあるが、沈線は施していないようである。第Ⅰ様式でももっとも新しい傾向は、口縁部直下に多条化した沈線を施す点であるが、この資料はそれよりもやや古い傾向を示している。

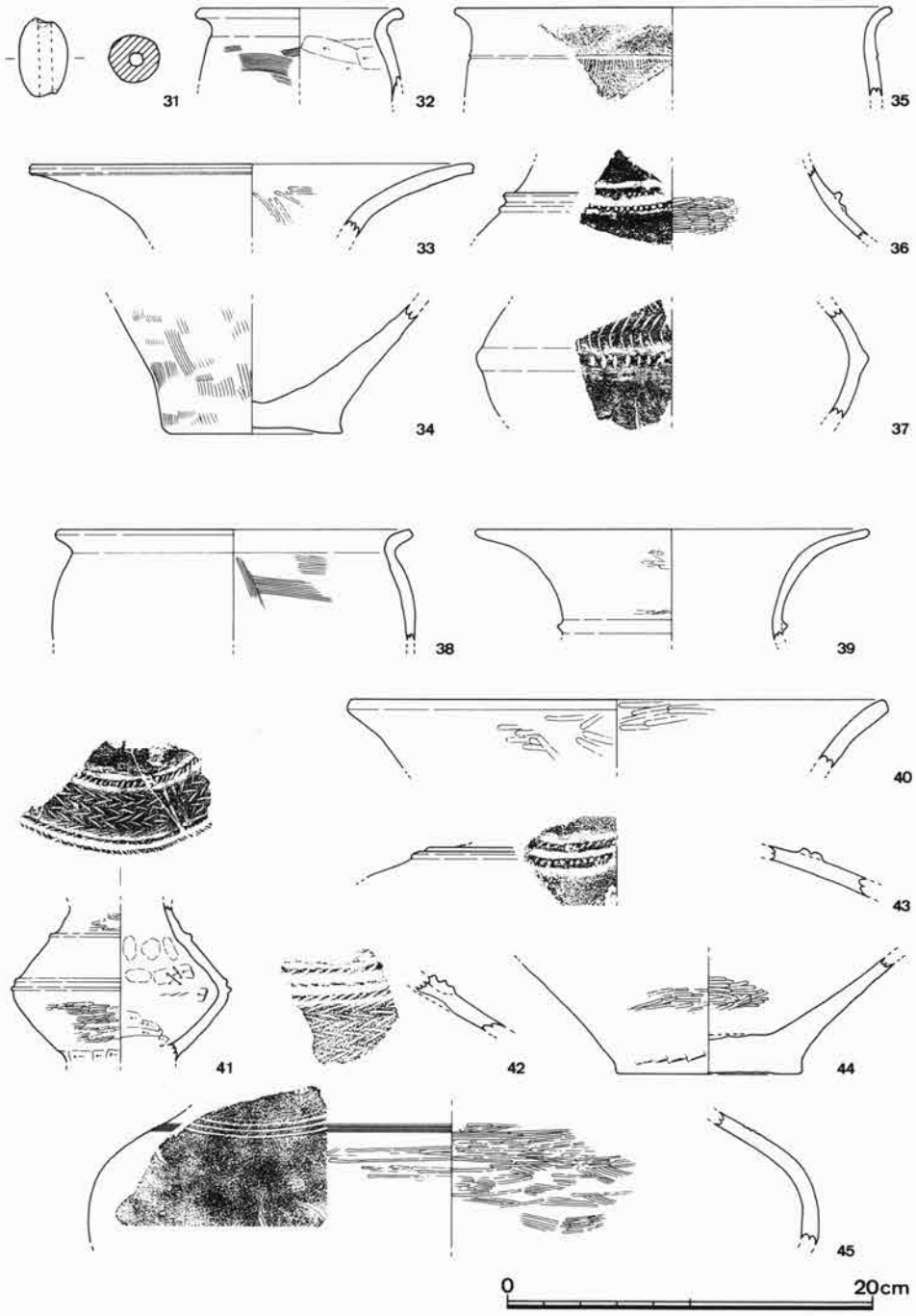
127は、体部外面に削り出し手法により突帯を施したもので、この幅広い突帯の表面に３条の沈線を施している。141は、今回の資料のなかでももっとも多条化した沈線で、８以上を確認でき、前述したように、第Ⅰ様式のなかでも新しい傾向を示している。

171は、７Ｅ地区の４か所から出土した加飾が著しい壺である。口縁部内側には波状文と櫛状工具による列点文を施し、外面は擬凹線を３条施し、部分的(12か所)に６個ずつの円形浮文を貼り付けている。そして、直立する頸部に凹線文(逆にいえば突帯文)を４条施している。部分的に朱が付着している。第Ⅳ様式に相当できる資料である。

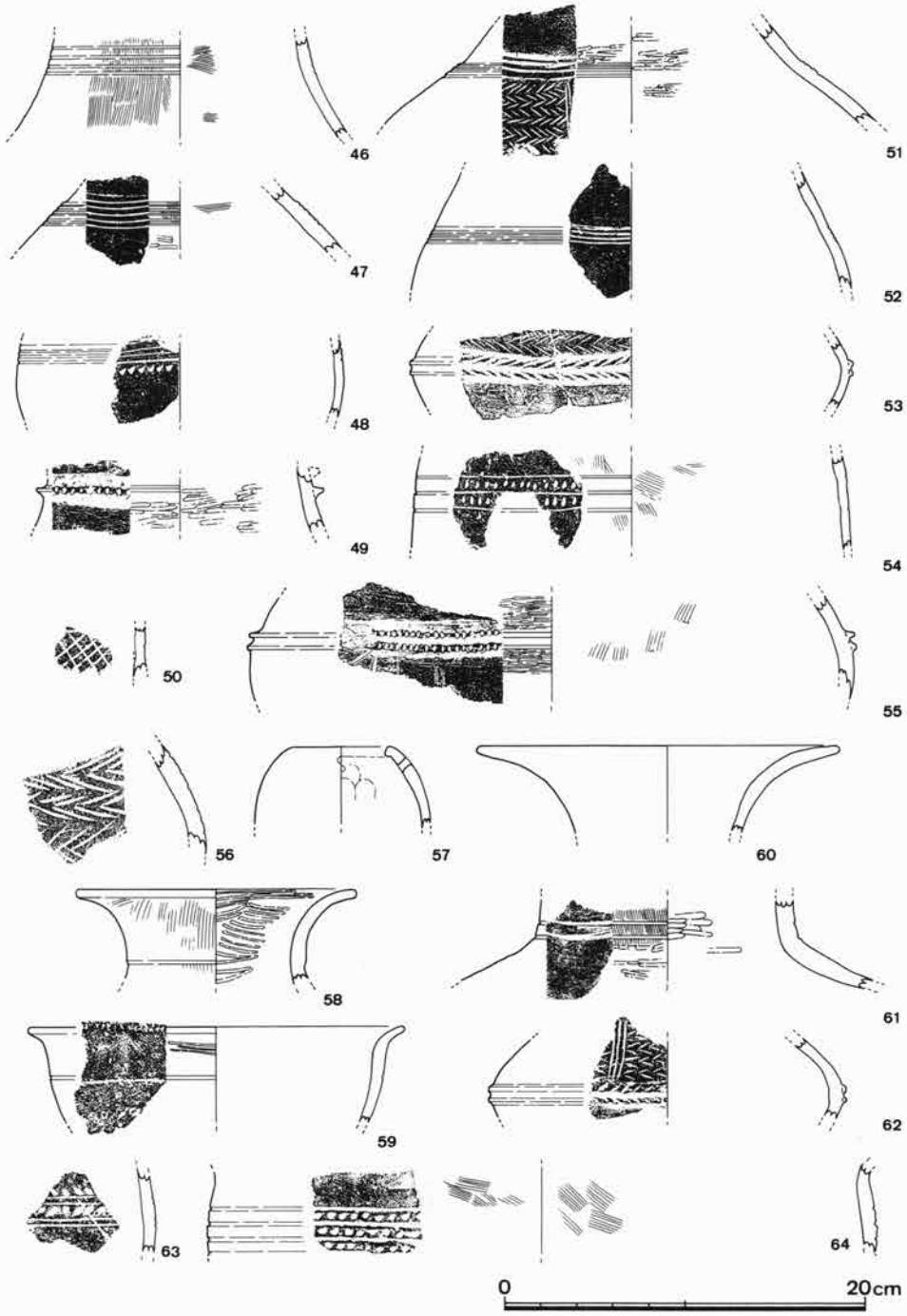
173は、ＳＤ201から出土した甕であるが、第Ⅲ様式の中で収まるものと考えられ、溝の埋没時期を示す資料である。



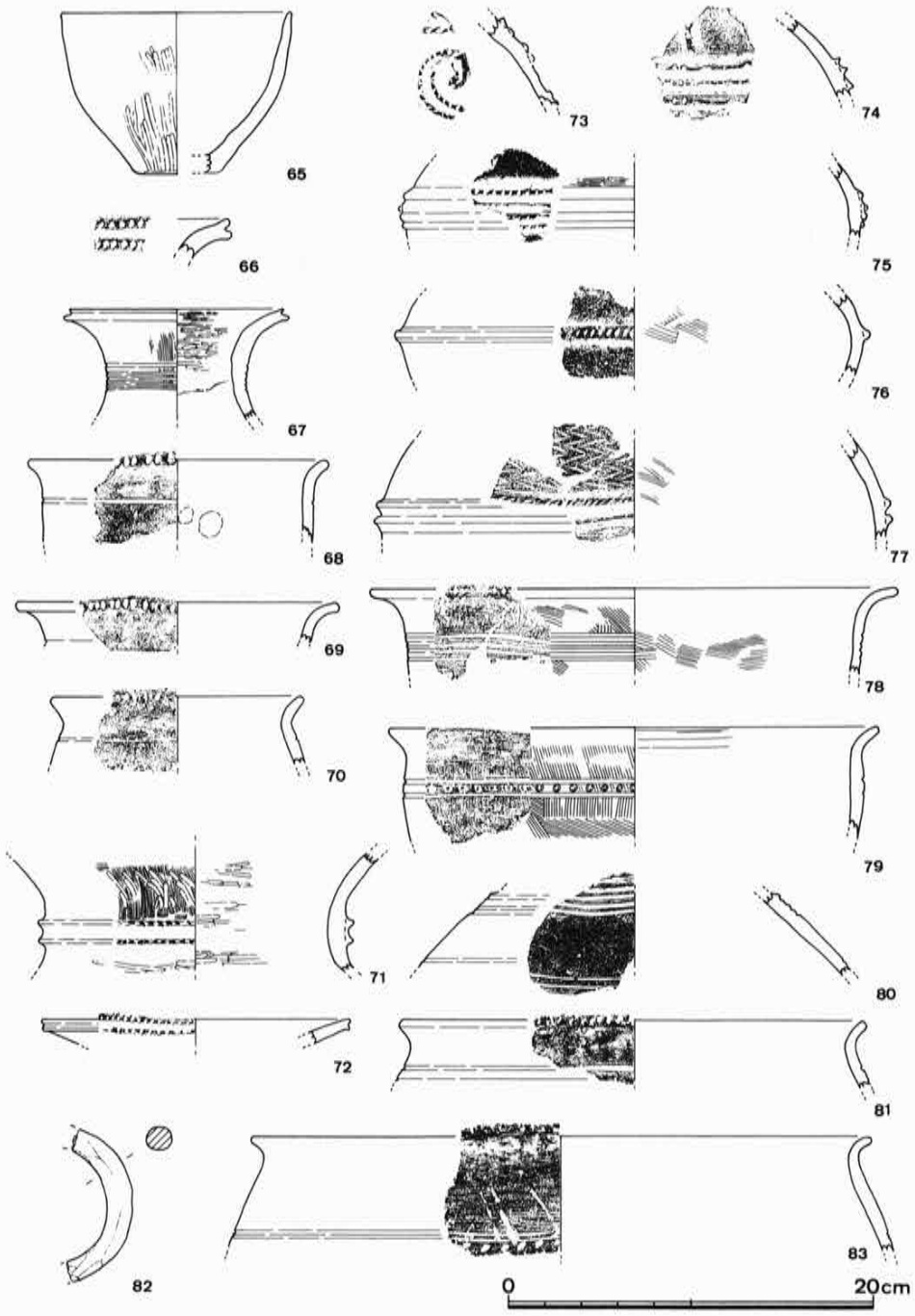
第13図　出土遺物実測図(3)



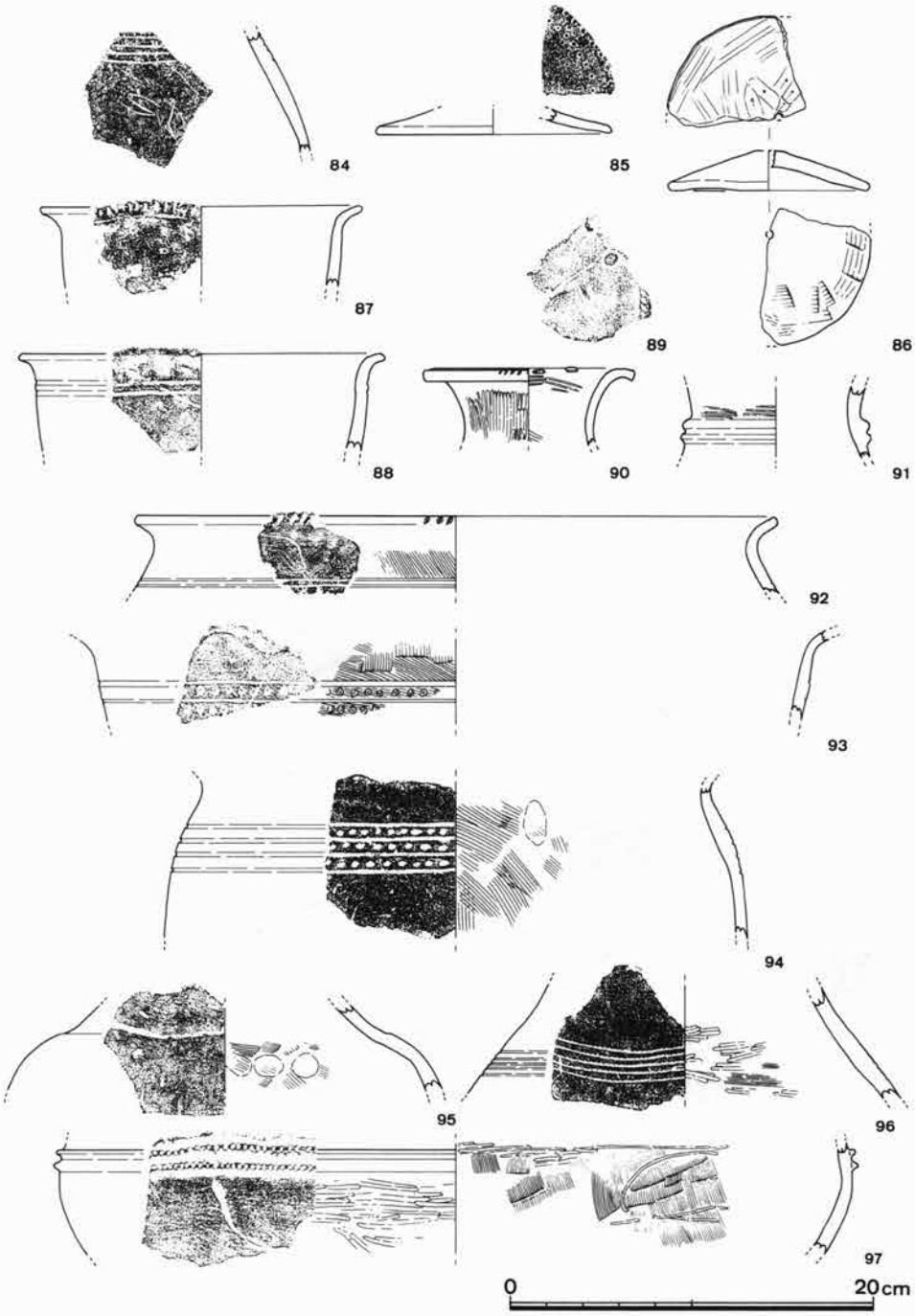
第14図　出土遺物実測図(4)



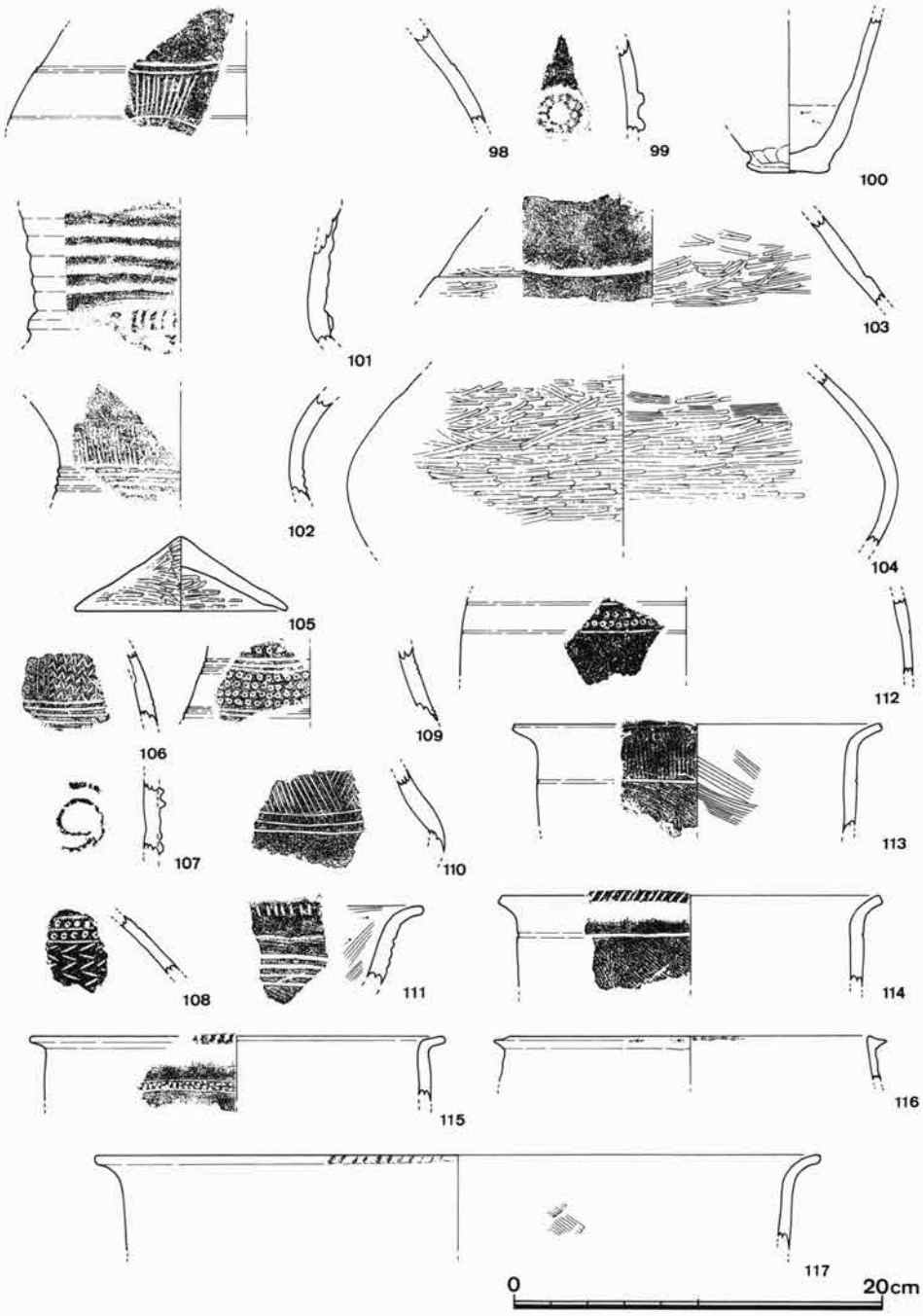
第15図　出土遺物実測図(5)



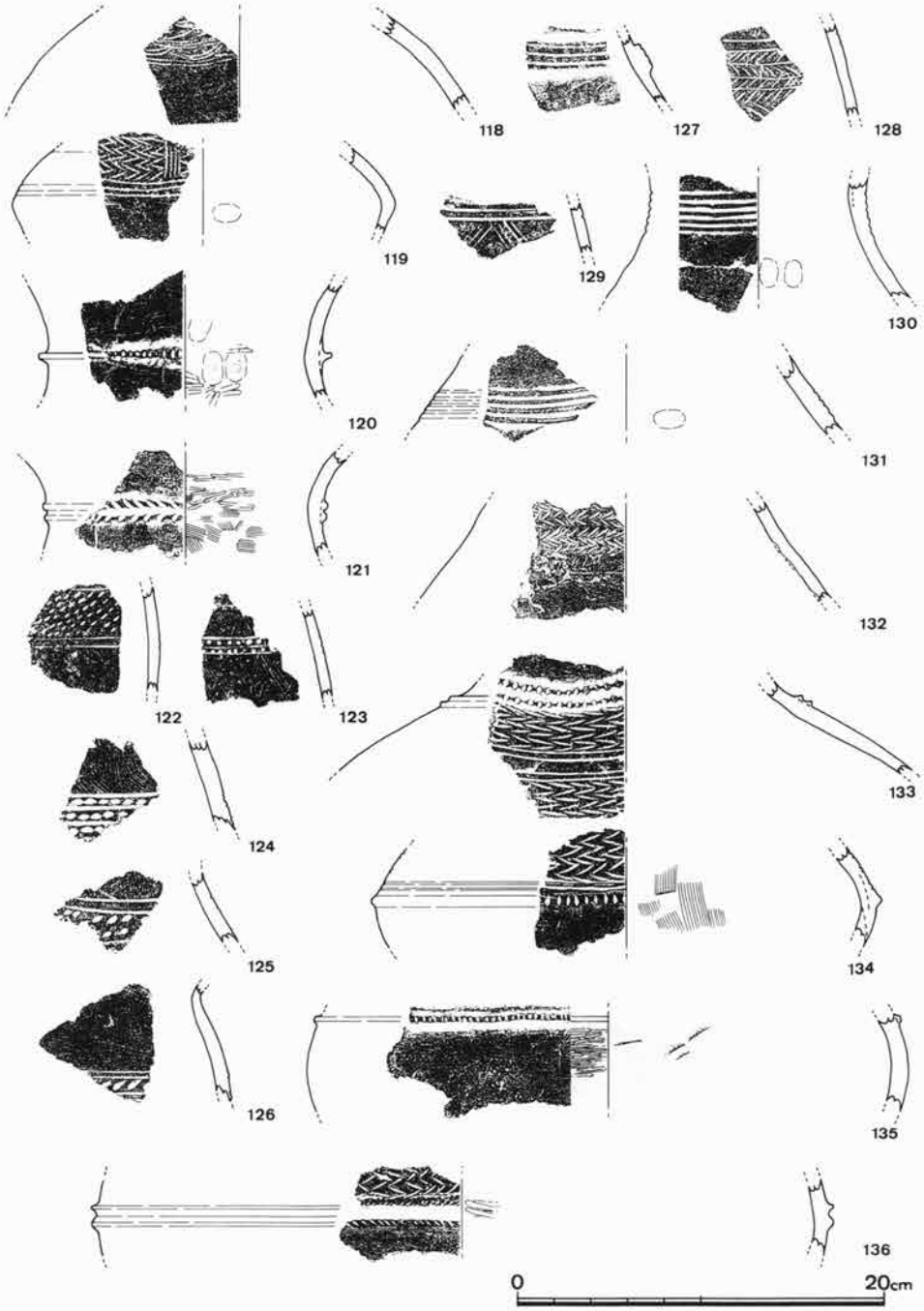
第16図　出土遺物実測図(6)



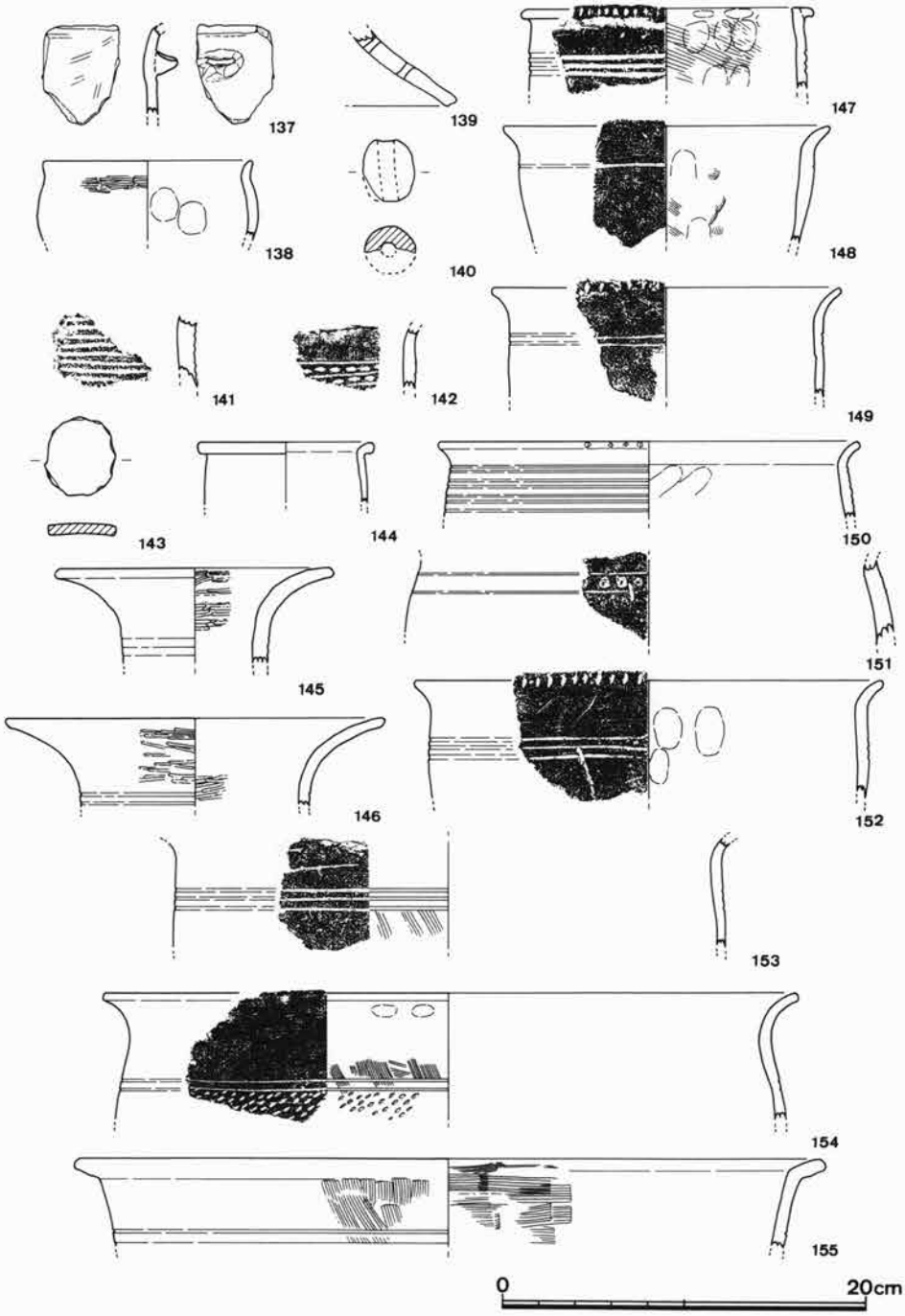
第17図　出土遺物実測図(7)



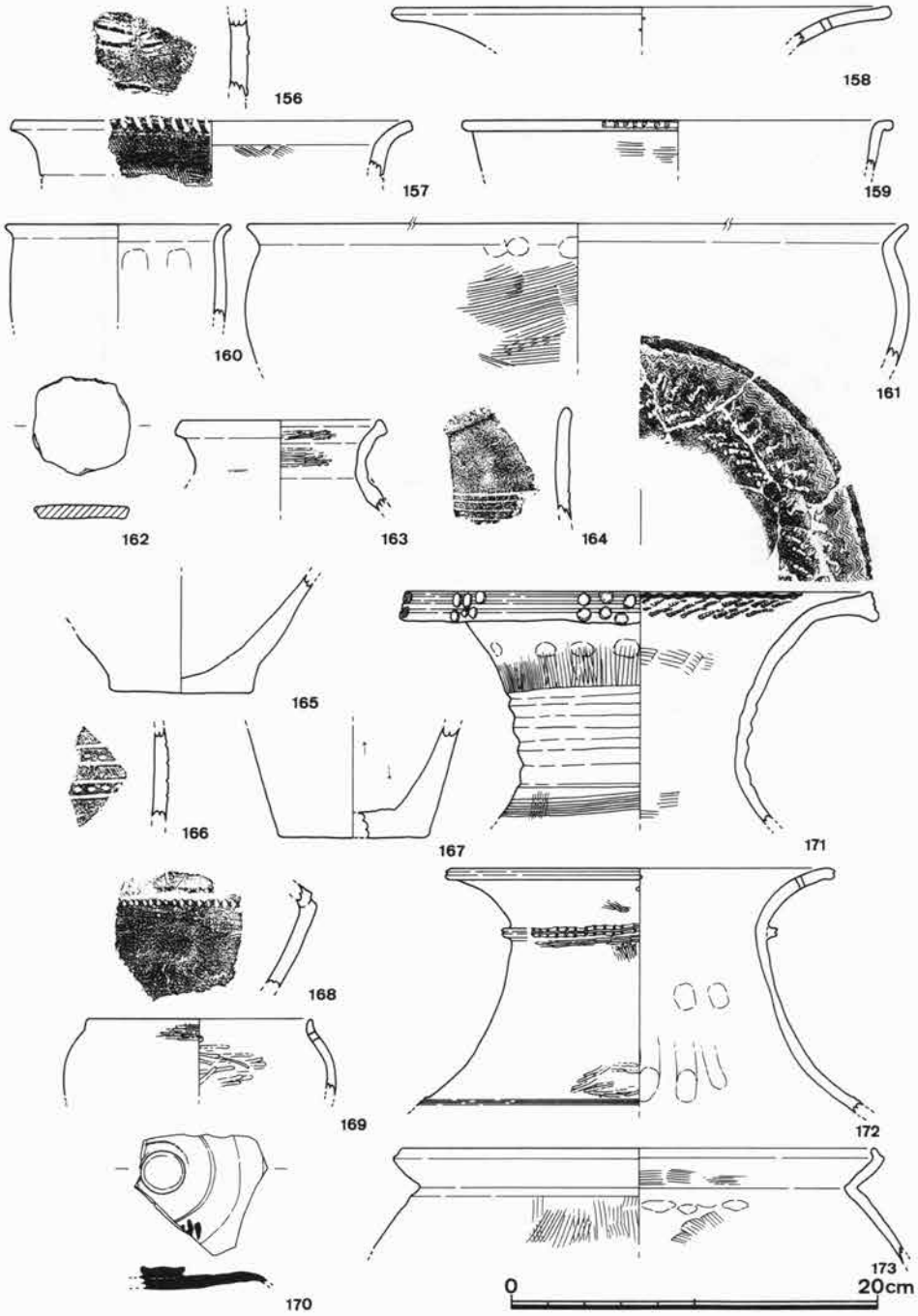
第18図　出土遺物実測図(8)



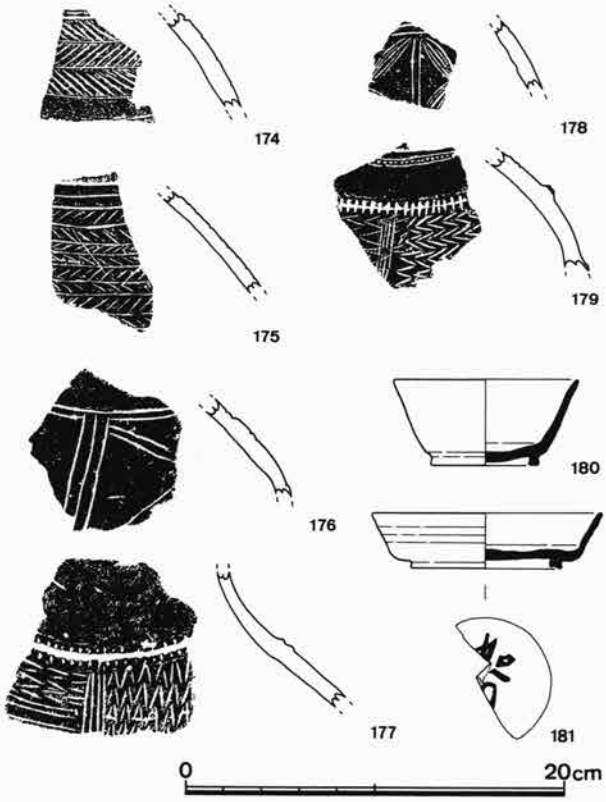
第19図　出土遺物実測図(9)



第20図　出土遺物実測図(10)



第21図　出土遺物実測図(11)

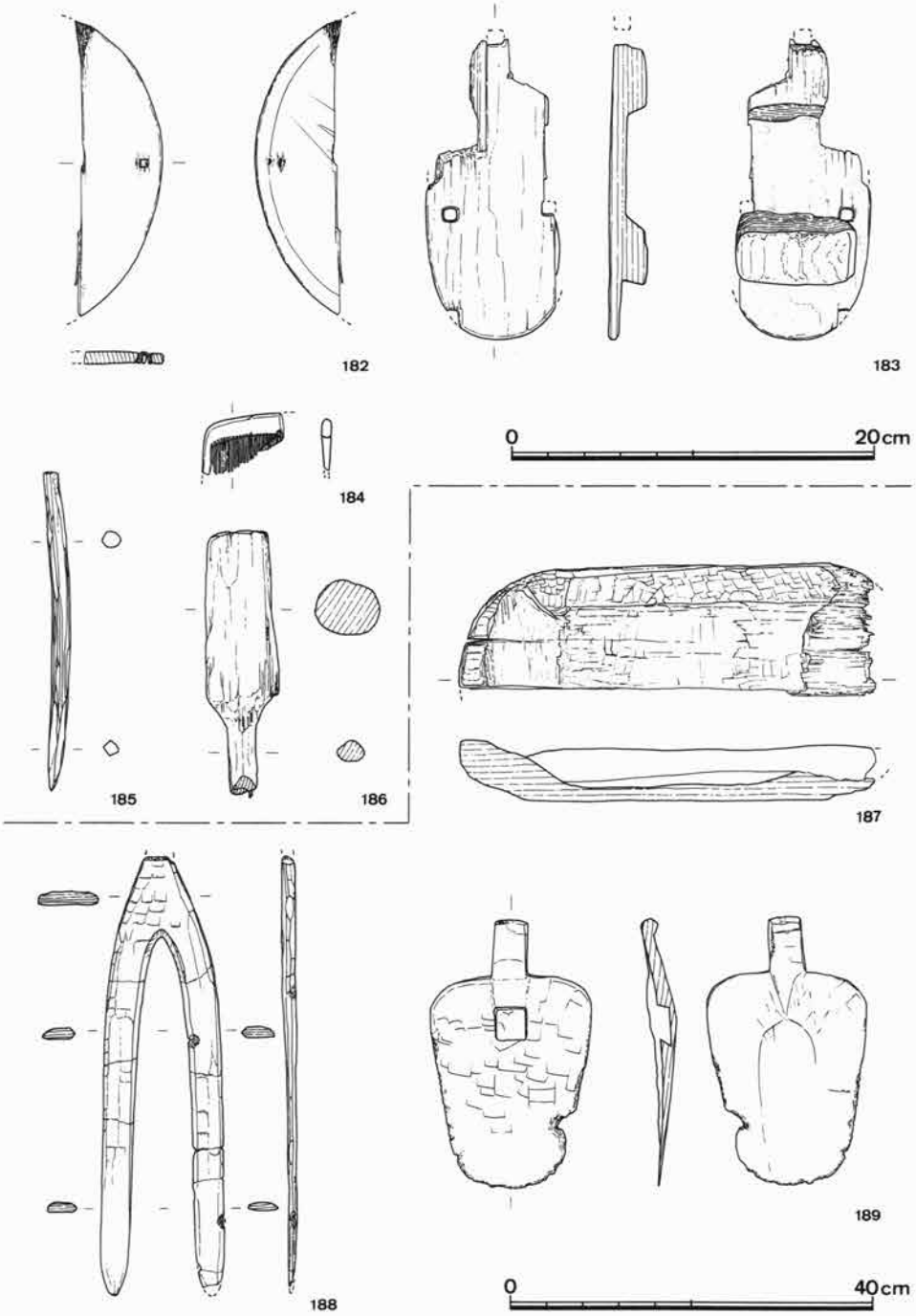


第22図　出土遺物実測図(12)

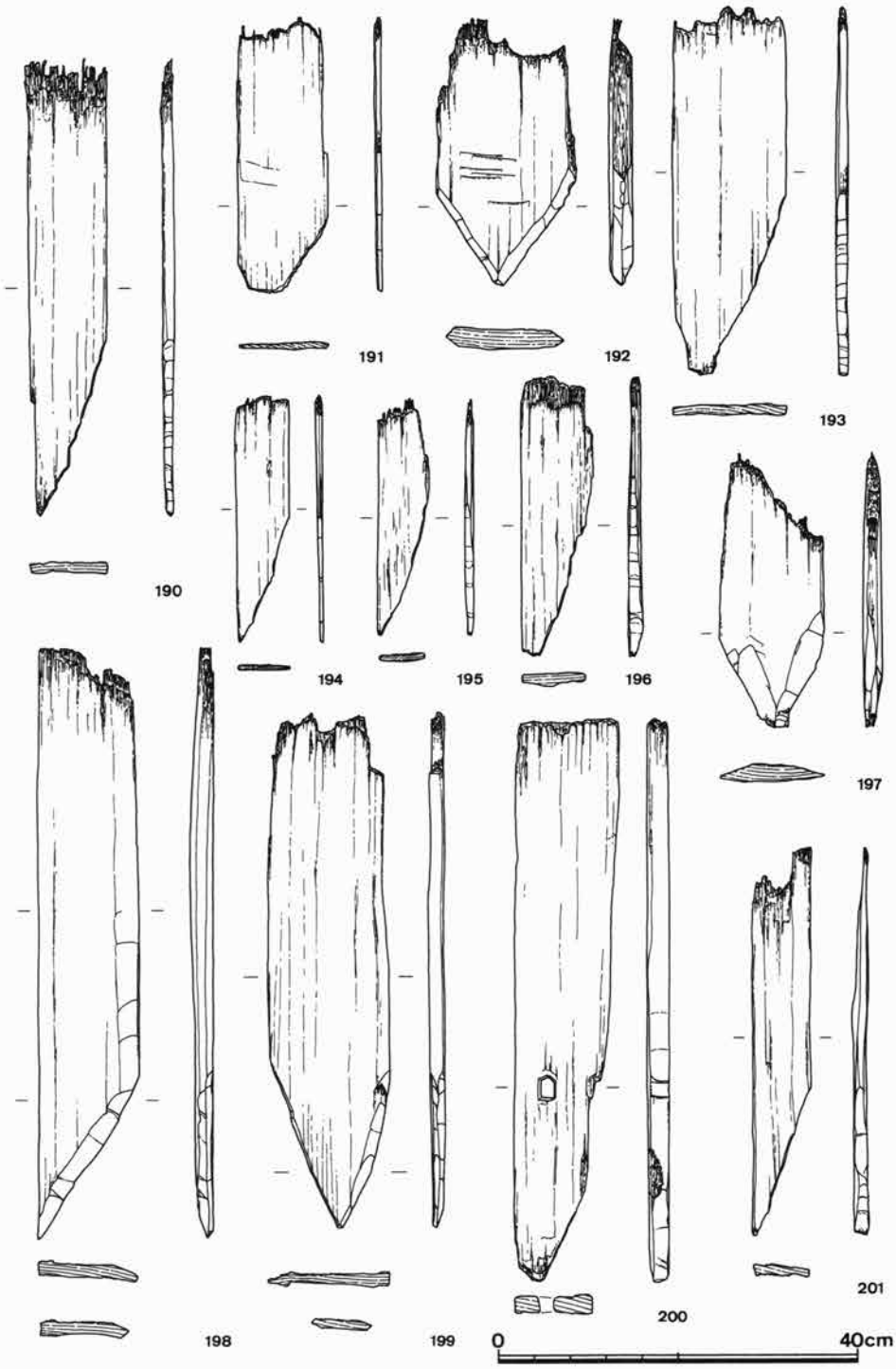
ナスビ形すき先

黒色粘質土の中には、削り出し突帯と貼り付け突帯との両方があり、第Ⅰ様式の中段階と新段階双方の様相を示している。また、沈線は削り出しによる段差の下に数条の沈線を施すものが多い。羽状文や口縁部・突帯状の刻み目などは貝殻によるものが多く、日本海側を代表する文様である。沈線については少条や多条のものがあるが、基本的には少条の方が多いようである。したがって、ＳＤ201の下層の黒色粘質土層は第Ⅰ様式の中段階～新段階の中で収まり、中段階に相当するものがやや多い。包含層出土のものには第Ⅲ様式に相当するものが若干あり、一時期人が居住した跡を認めることができるが、それ以降は奈良時代に属するものがあるのみである。なお、須恵器の中には181のように墨書されたものがある。

木製品については、188は黒崎　直氏分類(注6)の組合せすきＣ、または又ぐわＣに相当する。身の形状がナスビの縦断面形に似ているので、「ナスビ形着柄すき」とも呼ばれる。柄のほとんどが欠損しており、鋤か鍬かの判断はできない。189は、現在使用のスコップと同様で、前述の分類では組合せすきＤに相当する。　（伊野近富）



第23図　出土遺物実測図(13)



第24図　出土遺物実測図(14)

石器については、コンテナ(遺物整理ケース)で約10箱分あるが、完成品の石器は非常に少なく、楔形石器や点状打面、裁断面をもつその削片が主体を占めている。楔形石器の資料は抽出して掲載した。

打製石器の材料として用いられる石材は、近畿中央部では二上山(奈良県)を中心に産出するサヌカイトが主体として用いられるが、本調査区内では、サヌカイト・玄武岩・流紋岩・凝灰岩・黒曜石・玉髄・瑪瑙といった多用な石材が用いられている。サヌカイトは成品にのみほぼ使用が限られ、石材の主体な位置を占めない。玉髄・玄武岩などの京都の北部地域で産出すると考えられる石材が主体を占める。

なお、石材名は風化が深く白色を呈する丹後地域でよく見られるものを玄武岩、緑色で風化が深く縞状の模様が見られるものを凝灰岩、石英質で緑色や赤褐色のものを玉髄、透明感があり乳白色を呈するものを瑪瑙とここでは名付けた。

1は、良質の(二上山産？)のサヌカイトを素材とする削器である。用いられた剝片は、自然面を打面にし作出された縦に長い剝片である。主要剝離面には大きくバルバスカが残り、打瘤の発達は認められない。刃部は、左右両側に主要剝離面及び背面からの加打によって作出されている。刃部の剝離痕が端部側の折れ面に切られていることから、破損品であることがわかる。

2は、玄武岩製の楔形石器である。剝片の上下に対向する剝離痕が認められ、片側辺には裁断面が認められる。黒色粘質土出土。3は、流紋岩を素材とした楔形石器である。用いられた剝片は角礫の平坦な自然面を打面として作出された横長剝片である。4は、黒曜石製の楔形石器の削片である。片側辺には裁断面が認められる。黒曜石はガラス質で黒色を呈し、隠岐産のものと想定できる。5は、流紋岩製の楔形石器である。素材となった剝片は角礫から剝離された横長の分厚い剝片である。背面中央に残る剝離面は、風化の度合いが他のものと異なることから、角礫の原礫面と想定できる。6は、質の悪い緑色の玉髄を用いた楔形石器の削片である。点状打面を持ち、下端部に折れ面が認められる。黒色粘質土層出土。7は、玄武岩を素材とした楔形石器である。対向する剝離痕の打点及び打面縁のツブレはほぼ全周をめぐる。表裏の広い平坦面には敲打痕が見られ、敲石として転用されたことが推測できる。黒色粘質土層出土。8は、凝灰岩製の楔形石器である。上下に対向する剝離痕と、裁断面を持つ。9は、玄武岩を素材とする楔形石器である。上下にツブレ及び対向する剝離痕が認められる。素材剝片には大きなバルバスカが残る。10は、珪質頁岩製の楔形石器である。剝離痕の末端が大きくステップ状の形状を示す。

11は、円礫の瑪瑙を両極技法によって、分割したものである。本調査区内では、瑪瑙の同様の剝片や未加工の円礫が出土している。円礫の状態で遺跡に持ち込まれたものと考え

られる。玉作りに関連した遺物が全く出土しないことから、打製石器製作の一石材として扱われていた可能性が高い。

12は、玉髄製の石核である。打面は、剝離面によって構成されている。石核下端がツブレと剝離が認められることから、硬いものに石核を固定し、剝片の剝離が行われたと考えられる。石核の剝離面でステップ状の形状が顕著なことから、廃棄されたものと想定できる。

13は、緑色の風化の進んだ凝灰岩製の石ノミである。石器の側面には縞状の濃淡が認められ、縞が石器の長軸方向に平行する。石材が、縞に沿って割れやすい性質を持っているものと思われる。全体的にていねいに作られているが、研磨による擦痕は認められない。

14は、緑色の風化の進んだ凝灰岩製の扁平片刃石斧の頭部である。全面が研磨されており、素材面は認められない。13と同様にていねいな作りである。暗黒灰色粘質土出土。

15は、緑灰色の粘板岩と考えられる石材を用いた石庖丁の破損品である。穿孔は、両面から行われている。節理によって、２つに破損した状態で個別に検出した。暗黒灰色粘質土層出土。

16は、緑色の凝灰岩を素材とした石斧の未成品と考えられる。荒割りの後、側辺が剝離によって整形されている。刃部を作ると考えられる、図面下端部は平坦面をなし未加工である。なお、全く研磨された形跡は認められない。黒灰色粘質土層出土。17は、流紋岩製の石斧の未成品と考えられる。表裏面には、研磨面が認められる。両側は、研磨の後、加打によって整形加工が行われている。刃部側と考えられる部分は、折れて欠損している。頭部は丸く整形されている。18も石斧の未成品である。石材不明。両側辺は、加打による剝離によって整形されている。刃部側及び頭部は平坦で未加工で、区別がつかない。全体的に摩滅を受けている。

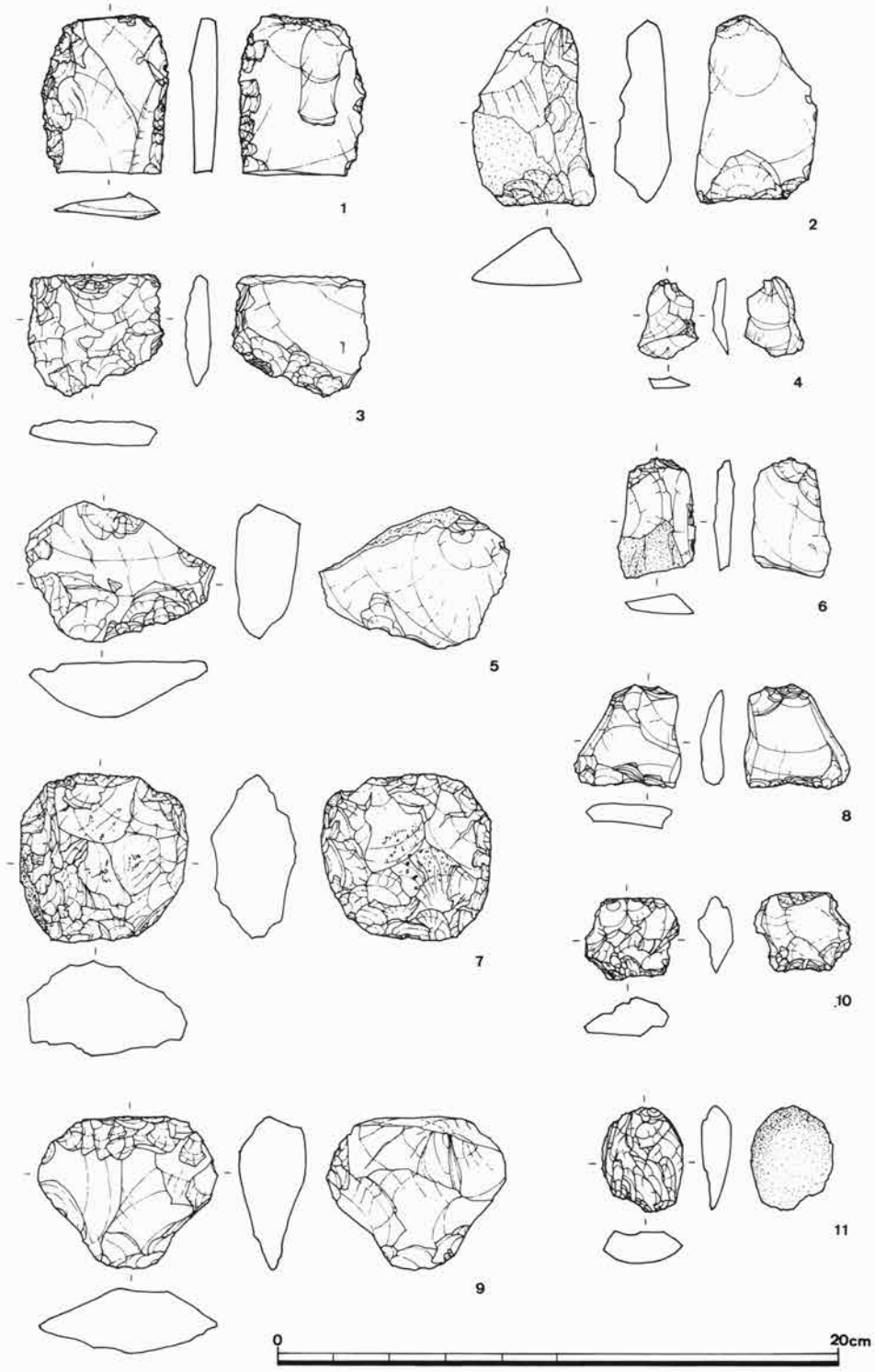
19は、玉髄と考えられる円礫を用いた敲石である。稜及び自然面には、爪で押したような打痕が顕著に認められる。

20は、粗粒の砂岩を用いた凹み石である。本来は砥石として用いられており、三面に研磨面を持つ。本品は大形であることから、台石のような用途に用いられたものと想定できる。黒色粘質土出土。21は、粗粒の砂岩を用いた凹み石である。黒色粘質土層出土。

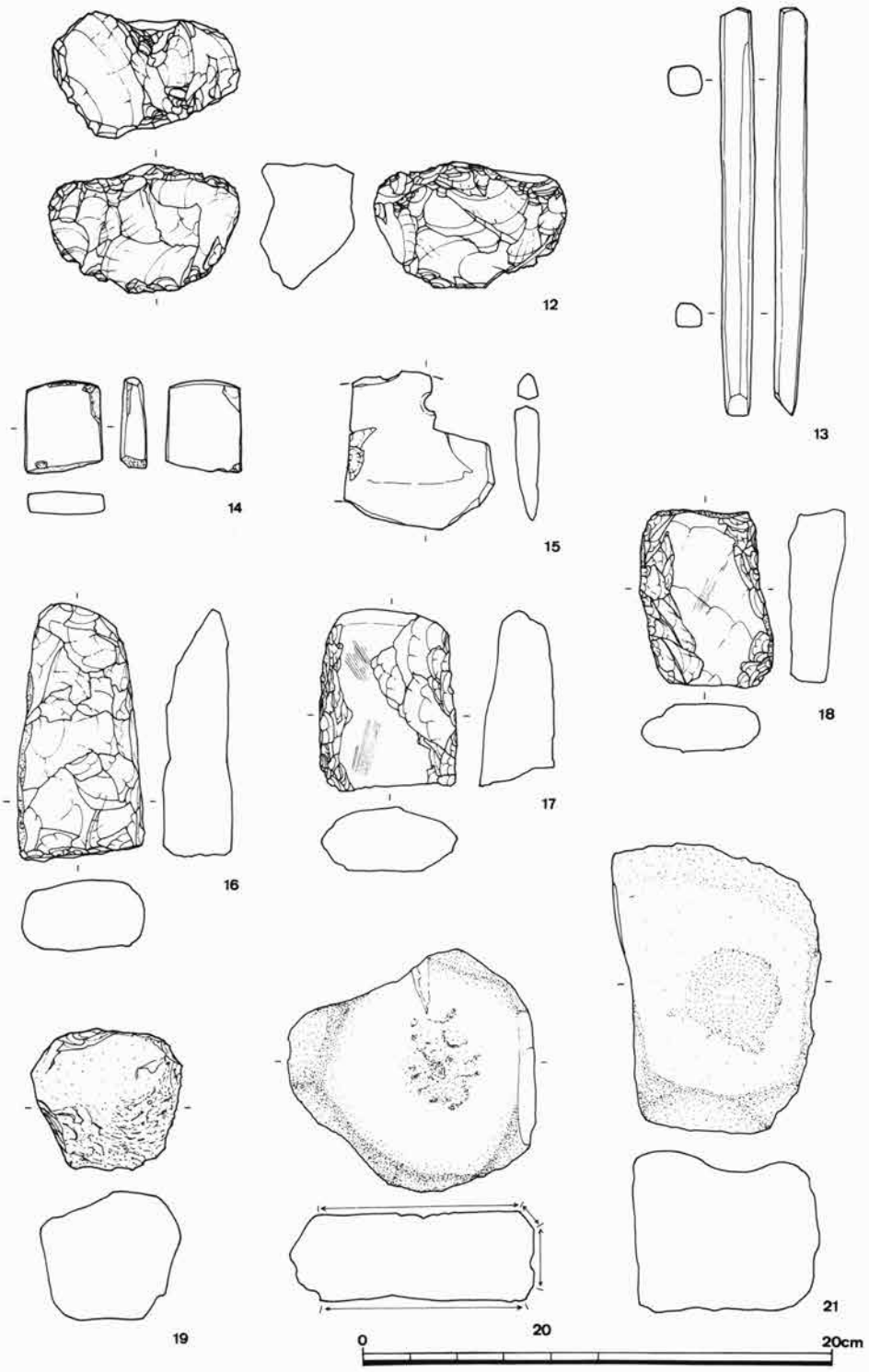
調査区内は、粘質土を主体とする堆積層であるが、円摩度の進んだ円礫やその破砕品が多く出土している。使用の痕跡が認められるものはほとんどないが、遺跡外から人為的にもたらされたと考えられる。

また、出土層の明示していないものは、上層の包含層出土の遺物である。

（中川和哉）



第25図　出土石器実測図(1)



第26図　出土石器実測図(2)

5．まとめ

蔵ヶ崎遺跡の発掘調査は、2か年とも秋から冬にかけて実施された。激しい湧水に悩まされたが、以下の点で重要な成果があった。

まず、弥生時代に関しては、土器からいえば、第Ⅰ様式中～新段階に相当する資料が多数出土したことがあげられる。ここにいう中段階は、佐原　眞氏が設定したものの援用で、「区分文様として段を用いるほか、削りだし突帯が出現した段階」とし、新段階は「貼付突帯があらわれ、ヘラ描沈線文が多条化し、区分文様が帯条文様に変質した段階」とする。(注7) この分類によれば、両方に相当する。また、森岡秀人氏の分類では第Ⅰ様式を4つに細分しており、Ⅰ－2様式は「基本的には削出突帯第Ⅱ種少条を主体とし、同多条も存在するとし、貼付突帯少条が出現」すると捉えている。また、Ⅰ－3様式が「無頸壺の出現、逆く字状口縁甕の出現」と捉えている。これを援用すれば、Ⅰ－2様式(井藤暁子氏編年案(注8)のⅠ－C段階、佐原　眞氏の中段階後半に相当)を主体とし、一部Ⅰ－3様式にかかるということになろうか。層位的にいえば矢板列もこの時期に伴う。

丹後においては第Ⅰ様式中～新段階に相当する資料は豊富ではなく、基準資料として利用されることを願う。

これに伴う遺構は不明確で、結局自然流路と、耕作土と考えられる黒色粘質土が広がっていたことが確認された。この層から多量のイネのプラント・オパールが確認され、水田の具体的な構造等は不明ながらも、第Ⅰ様式に相当する水田の存在を確認できた。この土層に重複するＳＤ201～203から出土した遺物によれば、第Ⅲ～Ⅳ様式に相当するものがあり、この頃に埋没したらしい。

木製品については、ナスビ形鋤鍬先が良好に遺存している。石製品については、朝鮮半島製との見方がある石ノミが出土した。これもほぼ完形で良好な資料である。

奈良時代に関しては、洪水層に覆われた水田面を検出した。土盛りの畦畔によって区画されており、4枚分が確認できるが、いずれの区画もトレンチ外に広がっており、1区画の大きさが判明するものはなかった。

出土遺物では墨書土器が出土し、一般的な集落ではない様相が知られる。また、木製品では馬形があることから、水に関する祭りが行われた可能性が高い。

以上のように、弥生時代については前期の水田や出土遺物が豊富にあり、京都北部における当該期の資料が飛躍的に増えた。また、奈良時代については、一般的な集落ではない状況があり、今後近隣に官衙等の存在を考えねばならなくなった。

2か年にわたり、極寒の中、調査に参加していただいた方にお礼を申し上げる。

（伊野近富・森　　正）

付表１　出土遺物観察表

番号	種類	器形	口径	調整など	出土遺構	焼成	色調
1	弥生	壺	7cm	器高10.5cm。	Ⅲ区、黒粘		
2	弥生	円盤	6	厚さ1.1cm。底部の転用。外周は打ち欠いて成形。1～2mm大の白色砂・灰色砂含む。	ＳＤ101	良	暗褐色
3	弥生	壺		段は削り出し。	ＳＤ101		
4	弥生	壺		貼り付け突帯。刻み目は弱いタッチ。胎質は疎でスカスカとした感じ。１mm大の石英目立つ。	ＳＤ101		淡褐色
5	弥生	壺		貼り付け突帯。刻み目は弱いタッチ。胎土は1～2mm大の白色砂･灰色砂含む(以下胎土Ａと呼称)。	ＳＤ101	良	黄褐色
6	弥生	底部	底径10.4	体部はハケ目。	ＳＤ101		暗褐色
7	弥生	底部	8.4	外面ハケ目。内面ミガキ。胎土Ａ。	ＳＤ101	良	暗褐色
8	弥生	底部	10.4	外面ユビオサエ。	ＳＤ101	良	淡褐色
9	弥生	底部	6.4	外面ハケ目。内面ナデか。1～3mm大の白色砂目立つ。	ＳＤ101	良	淡褐色
10	弥生	底部	6.4	2～3mm大の白色砂(丸い)含む。底部一部黒斑。	ＳＤ101	良	淡褐色
11	弥生	壺	22.2	頸部に４条のヘラ描き沈線。	Ⅲ区、黒粘	良	明褐色
12	弥生	壺		外面の段は削り出し。ハケ目の後ミガキ。内面ヨコナデの後ナデ。胎土Ａ。	ＳＤ101	良	淡褐色
13	弥生	壺	27.6	３条の沈線。外面ミガキ。内面上部ユビオサエ。下部はハケ目。胎土Ａ。	ＳＤ101	良	暗褐色
14	弥生	壺	22	貼り付け突帯欠損。外面上半ヘラによる羽状文。同下半は粗いミガキ。内面ミガキ。胎土Ａ。	ＳＤ101	良	黒色
15	弥生	甕	27.8	口縁端部外面刻み目。体部上半粗いハケ目内面ナデ。	ＳＤ101	良	暗褐色
16	弥生	甕	33.6	外面細かいハケ目。内面ヨコハケ後ていねいなナデ。胎土Ａ。	ＳＤ101	良	暗褐色
17	土師器	杯	9.5	内面ナデ。内面朱が付着。１mm大の白色砂含む。	ＳＲ201	良	茶褐色
18	須恵器	蓋	11.4	回転ナデ。	ＳＲ201	良	青灰色
19	須恵器	蓋	17.5	天井部回転ヘラケズリ。口縁部外面と内面回転ナデ。内面に墨書(読解不能)。	ＳＲ201 Ⅱ区、下層	良	暗灰色
20	土師器		20.4	内面ナデ。暗文あり。外面ミガキ。内外面朱が付着。１mm以下の石英・赤色粒含む。	ＳＲ201		暗褐色
21	須恵器		12.4	器高3.5cm。回転ナデ。底部ヘラ切り。外底面に墨書。口縁部端部内面に油煤付着。			暗灰色
22	土師器	蓋か		ナデ。底部もしくは天井部はケズリ。その部分に墨書。胎土は密。	包含層		暗褐色
23	土師器	杯		外面ミガキ。暗褐色。内底面見込みにラセン状暗文。体部内面に放射状暗文。１mm大の赤色粒含む。			暗褐色
24	土師器	甕	15.7	内面ナデ。外面タテハケ。口縁部内面暗褐色、煤付着。	ＳＲ201		淡褐色

25	木製品	馬形		２片(頭部と胴部)が接合。尾などは欠損。目らしき刻み痕あり。厚さ6mm・長さ17.5cm平板に刃物で成形。	暗黒灰色粘Ｉ区		
26	木製品	槍状		柄の部分は先端部に加工痕あり。長さ14.2cm・幅3.5cm。	包含層		
27	木製品	不明		ケズリにより成形(加工痕あり)。中央に円孔。長さ12.6cm・円頭部幅7.1cm・厚さ2.4cm。	ＳＤ203南６区		
28	木製品	棒状		縦方向のケズリで成形。先端は尖らせる。長さ15.4cm・幅８mm。	ＳＤ203南４区上面		
29	木製品	棒状		先端は尖らせる。長さ14.6cm・厚さ6mm。	暗黒灰５Ｗ区		
30	木製品	棒状		一端は欠損。長さ6.8cm以上・厚さ5mm。	暗黒灰５Ｗ区		
31	土製品	土錘		胎土はやや粗、1mm前後の砂粒を多少含む。全長4.4cm・最大胴径2.9cm。	ＳＤ203南２区	やや軟	淡黒灰色
32	弥生	壺	10.6	体部外面ヨコハケ。同内面ヘラケズリ。口縁端部摩滅。1～2mm大の長石含む。他とは違う雰囲気。	ＳＤ203南３区黒粘	良	黒褐色
33	弥生	壺	24	内面ミガキ。胎土やや粗。1～4mmの砂粒を多少含む。外面調整不明。	ＳＤ203南２区	やや軟	淡乳色
34	弥生	底部	10	外底面端に黒斑あり。外面は粗いタテハケの後ナデ。胎土は2mm大の白色砂(やや角張る)、灰色砂含む。	ＳＤ203南２区黒粘	良	淡褐色
35	弥生	甕	23.7	口縁部ナデ。頸部下に１条の沈線。その下に粗いハケ目。1～2mm大の黄色砂(やや角張る)含む。外面煤付着。	ＳＤ203南３Ｉ区	良	暗褐色
36	弥生	壺		内外面とも平滑(ミガキ)。２条の貼り付け突帯あり。その上にヘラによる刻み目。	ＳＤ203南２区黒粘	良	淡褐色
37	弥生	壺		内外面ともていねいなナデ。体部中央に１条の貼り付け突帯あり。その上にヘラ様の刻み目。体部上半に貝殻腹縁による刻み目１mm大の長石少し含む。	ＳＤ203南３区黒粘	良	淡褐色
38	弥生	甕		内面に粗いハケ目。外面ナデ、煤付着。１～２mm大の角張る白色砂(石英目立つ)多い	ＳＤ203南４区砂礫	良	淡褐色
39	弥生	壺	21.2	内面ミガキ。外面調整不明。１条以上の突帯あり。その上に刻み目。胎土は1～2mm大の灰白色、白色砂含む。	ＳＤ203南４区砂礫	良	明褐色
40	弥生	壺	19.2	内外面ともミガキ。口縁端部外面に刻み目	ＳＤ203南４区	良	黒色
41	弥生	壺		外面ミガキ。体部下部にケズリか。体部中央に２条の貼り付け突帯、その上にヘラ様で刻み目。体部上半中位に１条の貼り付け突帯。その上にヘラ様で刻み目。この突帯間に貝殻腹縁による刻み目。更に突帯をつなぐ形で縦位の２条沈線が弱く施されている。２か所確認。1～3mm大の白色砂・灰色砂含む。	ＳＤ203南４区砂礫７区黒粘	良	黒色

42	弥生	壺		内面ハケ目(5条／cm)。外面上部には3条以上の貼り付け突帯、その上に貝殻腹縁による刻み目。突帯の下方には貝殻腹縁による羽状文の刻み目。1～2mm大の白色砂多数含む。	SD203南4区	良	外面褐色、内面黒褐色
43	弥生	壺		内外面ともていねいなナデ。体部上半に2条の貼り付け突帯。上位の突帯には貝殻腹縁による刻み目あり、下位の突帯には竹管様の刺突文あり。1～2mm大の白色砂含む。	SD203南4区砂礫		明褐色
44	弥生	底部	10.2	内外面ともていねいなナデ(ミガキか)。底部外面の下端に近いところからハケ目を上方に施した痕跡あり。その後ナデ。2～3mm大の石英(角張る)多数含む。	SD203南4区黒粘		淡褐色
45	弥生	壺		内外面にミガキ(内面粗いハケ目のちミガキ)。肩部外面に3条の沈線。沈線とその上方との境は、削り出しによる段差あり。1～2mm大の白色砂含む。外面下半黒斑。	SD203南4区砂礫	良	茶褐色
46	弥生	壺		内面ヨコハケ。外面タテハケ。頸部4条の沈線(ヘラ描き)。2mm大の白色砂(石英)含む。外面下部黒斑。	SD203南黒粘	良	明褐色
47	弥生	壺		体部外面上半に5条の沈線。沈線とその上方との境は、削り出しによる段差あり。外面ミガキ、内面ハケ目。1mm大の白色砂含む。	SD203南黒粘	良	淡褐色
48	弥生	壺		外面粗いタテハケの後、ヨコナデか。体部外面上半に4条以上の沈線。沈線の下方には逆三角形の刺突文が沈線に沿って施される。外面煤付着。1mm大の石英含む。	SD203南黒粘	良	暗褐色
49	弥生	壺		内外面ともミガキ様に見えるが粗いヨコハケか。貼り付け突帯1条以上。その上に刻み目。胎土A(少し丸い砂)。	SD203南黒粘	良	淡褐色
50	弥生	壺		体部外面ヘラによる斜格子状の刻み目あり内面剝離。胎土A。	SD203南5E、黒粘	良	暗褐色
51	弥生	壺		外面ミガキ。肩部に3条の突帯文。突帯の上下は削り出している。突帯の下方はヘラ様工具による羽状の文様、右端には縦方向に2条の沈線あり。2～3mm大の白色砂・灰色砂含む。	SD203南5E、黒粘	良	淡褐色
52	弥生	壺		内面調整不明瞭。体部外面中位に4条のヘラ描き沈線。沈線とその上方との境は削り出し成形。沈線部以外ミガキ。2～3mm大の白色砂・灰色砂含む。黒雲母若干あり。	SD203南5E、黒粘	良	淡褐色
53	弥生	壺		内面横方向のミガキ。外面は体部中位に貼り付け突帯2条を施し、その上に貝殻腹縁による刻み目をする。突帯の上方にも貝殻腹縁による刻み目を羽状に施す。	SD203南5E、黒粘砂礫	良	黒色
54	弥生	甕		体部外面中位に3条のヘラ描き沈線を施すその間に貝殻腹縁による列点文を施す。全	SD203南5E、黒粘	良	淡褐色

				体にハケ目。2～3mm大の角張る石英を多く含む。外面下部に黒斑あり。			
55	弥生	壺		内面ハケ目。外面ミガキ。体部外面中位に2条の貼り付け突帯。その上に刻み目。2～3mm大の白色砂・灰色砂を含む。	SD203南5E、黒粘	良	黒色
56	弥生	壺		内面調整不明瞭。外面はヘラによる羽状の刻み目あり。1～3mm大の白色砂・灰色砂含む。	SD203南6区下	良	暗褐色
57	弥生	無頸壺	5.3	内面はていねいなナデ。口縁部近くはユビオサエ。外面は調整不明。透し穴は外から内へ施す。1～2mm大の白色砂・灰色砂含む	SD203南6区下	良	褐色
58	弥生	壺	15.2	外面タテハケ。頸部は削り出しによる段差あり。内面ミガキ。胎土A。	SD203南6区下	良	乳褐色
59	弥生	甕	20.6	口縁端部外面に刻み目。頸部より2cm下に弱いタッチの沈線1条あり。その間はミガキ。2mm大の角張る灰白色砂･白色砂含む。	SD203南6区下	軟	淡褐色
60	弥生	壺	18.6	内外面摩滅のため調整不明。胎土A。	SD203南6区下	軟	淡褐色
61	弥生	壺		頸部内面ミガキかていねいなナデ。頸部外面はタテハケ。体部上半はハケ目の後ナデ1～2mm大の白色砂・灰色砂含む。	SD203南6区下	良	淡褐色
62	弥生	壺		内外面ていねいなナデ。体部外面中位に2条の貼り付け突帯文あり。その上に貝殻腹縁による刻み目。その上方に貝殻腹縁による羽状文あり。それを画する形で縦位に3条の沈線あり。1～2mm大の角張る白色・灰色砂含む。	SD203南6区下	良	明褐色
63	弥生	甕		内面ハケ目。外面に2条ずつの沈線、計4条あり。その間と上方に貝殻腹縁による刺突文あり。1～2mm大の白色砂・灰色砂含む	SD203南6区下	良	淡褐色
64	弥生	甕		内面にハケ目。外面はハケ後ナデ。体部上半に4条以上のヘラ描き沈線を施す。その間に刺突文あり。胎土A。	SD203南6区下	良	淡褐色
65	弥生	鉢	12.4	内面に縦方向のミガキ。底部近くはケズリ外面は縦方向のミガキ。口縁部はナデ。外底面黒斑。胎土A。器高9cm。	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
66	弥生	壺		外面は粗いハケ目。口縁端部に2条の突帯を施し、その上に刻み目をする。1mm大のやや丸い白色砂目立つ。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
67	弥生	壺	11.6	内面ミガキ。頸部には粘土紐のつぎめ痕あり。それより下方はケズリか。外面ハケ目左から右へ施す。頸部は5条のヘラ描き沈線。2～3mm大の白色砂含む。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
68	弥生	甕	16	内面ユビオサエ。外面ていねいなナデ。口縁端部外面に菱形の刻み目を施す。そこから2cm下に1条の沈線を施す。1mm大の白色砂含む。	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
69	弥生	甕	17.3	内面ヨコハケ。外面はていねいなナデ。口	SD203南	良	黒褐色

				縁端部外面に菱形の刻み目を施す。	7区、黒粘		
70	弥生	甕	13.4	内外面ナデ。口縁端部外面に刻み目を施す頸部下1cmに弱いタッチで1条の沈線を施す。胎質はザラザラとしており、1～2mm大の丸い白色砂を含む。	SD203南7区、黒粘	軟	暗灰褐色
71	弥生	壺		内面ミガキ。頸部外面に2条の貼り付け突帯を施す。その上に刻み目あり。上方には横方向の粗いハケ目の後、細かいタテハケを施す。下方は細かいハケ目の後ミガキ。1mm以下の白色砂・灰色砂含む。	SD203南7区、黒粘	良	淡赤褐色
72	弥生	壺	16.9	内外面摩滅のため調整不明。口縁端部は2条の突帯を有する。突帯間はヘラによる沈線。1～2mm大の白色砂(少し黄色)含む。	SD203南7区、黒粘	やや軟	淡乳褐色
73	弥生	壺		外面は貼り付けによる渦巻き文。その上に刻み目を施す。内外面ともていねいなナデ	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
74	弥生	壺		外面ミガキ。体部中位に3条の貼り付け突帯を施す。突帯の一部分に刻み目を施す。上方に1条の貼り付け突帯を縦位に施す。その上に刻み目を施す。内面は粗いハケ目	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
75	弥生	壺		外面ミガキ。体部中位に4条の貼り付け突帯を施す。突帯は下に足れ下がったような状態。突帯の上には刻み目を施す。2mm大の白色砂含む。内面調整不明瞭。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
76	弥生	壺		外面調整不明瞭。体部中位に1条の貼り付け突帯を施す。その上に刻み目を施す。内面はハケ目の後ていねいなナデ。2mm大の白色砂含む。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
77	弥生	壺		体部中位に2条以上の貼り付け突帯文を施す。その上に刻み目を施す。突帯より上方の体部外面には貝殻腹縁による羽状文あり内面にはハケ目あり。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
78	弥生	甕	28.7	口縁端部外面に刻み目を施す。口縁部下2cmほどから4条の沈線を施す。内外面とも粗いハケ目。2mm大の白色砂含む。	SD203南7区、黒粘	良	淡褐色
79	弥生	甕	26.6	口縁部下2cmほどで、竹管による2条の沈線を施す。その間に直径4mmの竹管文を施す。口縁部はヨコナデ、その下はタテハケ内面は不明瞭。胎土A。	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
80	弥生	壺		体部外面上半に5条の沈線を施す。同中位にも2条以上の沈線を施す。内外面ともていねいなナデ。	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
81	弥生	甕	25	口縁端部外面に粗い刻み目を施す。口縁部下2cmほどに鋭い沈線を2条以上施す。この周辺にはヨコハケ。胎土は2mm大の石英など多く含む。	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
82	弥生	把手		内外面ともていねいなナデを施す。胎土A	SD203南7区、黒粘	良	暗褐色
83	弥生	甕	33.6	体部外面上半に2条の沈線を施す。その下	SD203南	良	淡褐色

				に刺突文を施す。その間に粗いヨコハケを施す。胎土は2～3mm大の石英や赤いチャートあり。	7区、黒粘		
84	弥生	壺		体部外面に4条以上のヘラによる沈線を施す。その下に線刻あり。内面ミガキ。外面半分黒斑。2mm大のやや角張る白色・灰色砂含む。	SD203南7区、暗灰色	良	黄褐色
85	弥生	蓋	12.6	端部外周に2重の竹管文を施す。外面に黒斑あり。胎土には1mm大の白色砂含む。	SD203南7区、黒色砂層	良	灰褐色
86	弥生	蓋	10.7	頂部中央に直径4mmの円孔1つを施す。外面外周には粗いヨコハケ。内周はケズリ。内面外周は粗いヨコハケ。内周は未調整。2mm以下の白色砂含む。	7E、杭列付近、暗黒灰色	良	暗褐色
87	弥生	甕	17.6	口縁部は少し凹凸がある。外面タテハケ。内面未調整。口縁端部外面に粗い刻み目を施す。外面煤付着。胎質は77と同じ。2～3mm大の丸い灰色粒や赤色粒含む。	7E、暗黒灰色	やや軟	淡灰褐色
88	弥生	甕	19.8	口縁部はヨコナデ。口縁部下2cmほどにヘラによる2条の沈線を施す。胎土A。	7E、杭列付近、暗黒灰色	やや軟	暗褐色
89	弥生	壺	11.4	頸部外面にタテ方向のミガキ。口縁端部内面に刻み目。やや内側に円形浮文を施す。頸部内面はハケ目の後、ていねいなナデ。胎土A。90と同一。	7E、暗黒灰色	良	淡褐色
91	弥生	壺		頸部外面に2条の貼り付け突帯を施す。1mm大の丸味を帯びる赤色粒や灰色粒を含む内外面とも摩滅激しい。胎質は軟質で、他とは全然違う。	7E、暗黒灰色	軟	淡褐色
92	弥生	甕	35.2	口縁端部外面に刻み目を施す。口縁部下3cmほどで2条の沈線(狭く、 あまり強くない)を施す。1mm大の白色砂、チャート片など含む。外面に斜め方向のハケ目施す。	7E、暗黒灰色	軟	淡褐色
93	弥生	甕		体部外面上半に2条以上のヘラによる沈線を施す。その間に竹管文を施す。1mm大の白色砂点々と含む。	7E、暗黒灰色	やや軟	淡褐色
94	弥生	甕		体部外面上半に4条のヘラによる沈線文を施す。その間に3列の刺突文を施す。施文具不明。外面はナデ。内面はハケ目。胎土A。	7E、暗黒灰色	良	暗褐色
95	弥生	壺		体部外面上半にケズリによる段差あり。これはヘラ様の工具を縦方向に当てて削ったもので、2cm弱の幅が確認できる。つまりこの段差はヘラ様工具を横方向に動かして施したものではない。胎土A。内外面とも鉄分付着。	7E、暗黒灰色	良	淡褐色
96	弥生	壺		体部外面上半に貝殻による5条の沈線を施す。内外面ともミガキ。1mm大の白色砂、	7E、杭列付近、暗黒	良	淡褐色

				黒雲母を少し含む。	灰色		
97	弥生	壺		体部外面中位に２条以上の貼り付け突帯文を施す。その上に小規模でていねいな刻み目を施す。外面にミガキ。内面にハケ目の後ていねいなナデを施す。胎土Ａ。	７Ｅ、杭列付近、暗黒灰色	良	淡褐色
98	弥生	壺		体部外面上半に一周する段差を施す。いわゆる削り出しによる段差。その直下に一条の沈線文を施し、更に下に10条ほどの縦位の沈線を施す。その下に横位の沈線を施すこれらの沈線は貝殻で施す。胎土Ａ。	ＳＤ202	良	淡褐色
99	弥生	壺		体部外面にドーナツ状の貼り付け文を施しその上にレンズ状の竹管文を施す。１㎜大のやや角張る白色砂・灰色砂含む。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	良	暗褐色
100	弥生	壺		底部近くユビオサエ。内底面ケズリ。体部内面下半タタキか粗いハケのちナデ。胎土Ａ。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	良	暗褐色
101	弥生	壺		頸部に５条以上の凹線を施す。その下に１条の貼り付け突帯文を施し、その上に粗い刻み目を施す。胎土Ａ。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	良	灰白色
102	弥生	壺		頸部に３条の削り出し突帯を施す。突帯より上はタテハケ。内面はケズリ。胎質は軟質でスカスカとした感じ。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	やや軟	黄白色
103	弥生	壺		体部外面上半にケズリによる段差あり。内外面とも横方向のミガキ。２㎜大の白色砂・灰色砂含む。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	良	灰褐色 暗褐色
104	弥生	壺		内外面ともミガキ。胎土は103と同じ。	５Ｅ、排水溝、黒色砂礫	良	淡褐色
105	弥生	蓋	11.6	内外面ともミガキ。胎土Ａ。外面に黒斑あり。	５区、黒粘	良	淡褐色
106	弥生	壺		体部外面に横方向のヘラ描き沈線を５条以上施す。また、縦位に３条のヘラ描き沈線を施す。これらに区画された範囲に細かくヘラによる羽状文を施す。胎土Ａ。	５区、黒粘	良	淡褐色 内面は黒褐色
107	弥生	壺		体部外面に渦巻状の貼り付け突帯を施す。突帯の上面には一部刻み目らしきものあり２～３㎜大の石英含む。	６Ｅ、黒灰色粘	良	淡褐色
108	弥生	壺		体部外面に３条以上の横位の沈線を施す。その間に竹管文を施す。その下に、貝殻腹縁と思われる羽状文を施す。２㎜大の角張る白色砂目立つ。	６Ｅ、黒灰色粘	良	淡褐色
109	弥生	壺		体部外面上部に３条の横位の沈線を施す。その上下に竹管文を施す。但し竹管文は上の輪郭が少し突出したか所があり、あるいは巻貝の一部を打ち欠いたもので施文したかもしれない。竹管文の下に２条の横位の沈線文を施す。胎土Ａ。	５Ｅ、黒粘	良	暗褐色
110	弥生	壺		体部外面上部に斜め方向のヘラによる沈線	６Ｅ、排水	良	灰褐色

				を施す。斜線は左・右・左と方向を違えている。その下に3条のヘラによる沈線を施す。体部内面ていねいなナデかミガキ。胎土A。	溝、黒粘		
111	弥生	甕		口縁端部外面にはヘラによる細かい刻み目を施す。体部外面に横位の4条の沈線を施す。その上下にハケ目を施す。外面に煤付着。胎土A。	6E、黒灰色粘	良	暗褐色
112	弥生	甕		体部外面上半に2条の横位の沈線を施す。その間に2列の竹管文を施す。内面ていねいなナデ。胎土A。	6E、黒灰色粘	良	暗褐色
113	弥生	甕	20	口縁端部外面に1条の沈線あり。この下3cmほどはタテハケ。その下に1条の沈線を施す。更に下に斜め方向のハケ目を施す。胎土A。	6E、黒灰色粘	良	淡褐色
114	弥生	甕	20.5	口縁端部外面にヘラによる刻み目を施す。この下2cmほどに横位の1条の沈線を施す。その上下に斜め方向のハケ目を施す。外面に煤付着。胎土A。	6E、黒灰色粘	良	暗褐色
115	弥生	甕	22.2	口縁端部外面にヘラによる刻み目を施す。この下2cmほどに横位に2条の沈線を施すその間に細かな刺突文を施す。1mm大の白色砂・灰色砂を含む。胎質ザラつく。	6E、黒粘砂層	良	明褐色
116	弥生	甕	19.5	口縁端部外面に断面三角形状の貼り付け突帯を施す。その上端に刻み目を施す。1～2mm大の角張る白色砂を含む。	6W、黒灰色粘	良	暗褐色
117	弥生	甕	39.5	口縁端部外面に刻み目を施す。貝殻を使用か。口縁部周辺はナデ。内面下半はハケ目胎土A。	6E、黒灰色粘	良	淡褐色
118	弥生	壺		体部外面上部には貝殻腹縁による弧状の沈線を施す。その下に2条の横位の沈線を施す。その下に斜め方向のミガキかヘラナデを施す。1mm大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
119	弥生	壺		体部外面上半には貝殻による横位に3条の沈線を施す。その上に区画する形で、縦位に3条の沈線を施す。その横には羽状文を施す。2mm大の白色砂含む。胎質はザラつく。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
120	弥生	壺		頸部外面中央に、1条の貼り付け突帯を施す。突帯の上には、貝殻による刻み目を施す。内外面ともミガキ。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	灰褐色
121	弥生	壺		頸部外面中央に2条の貼り付け突帯文を施す。但し、本来は1条の突帯で、その中央部に施したため2条となったと思われる。その上に刻み目を施す。内面上半ミガキ、同下半と外面ハケ目。2mm大の白色砂・灰色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
122	弥生	甕		体部外面上半には2条ずつで横位の沈線を	Ⅲ区、黒灰	良	淡褐色

				施す。その間に斜め方向の刺突文を施す。下半はハケ目。	褐色粘		
123	弥生	甕		体部外面に横位で３条のヘラによる沈線を施す。その間に２列の竹管文を施す。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	灰褐色
124	弥生	甕		体部外面に横位で４条以上の沈線を施す。その間に４列の刺突文を施す。その上はハケ目。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
125	弥生	壺		体部外面に横位で２条の沈線を施す。その下に２列の刺突文を施し、更に下に２条ほどの沈線あり。1～3㎜大の白色砂・灰白砂含む。上方はハケ目。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
126	弥生	甕		体部外面中位に２条ずつの横位でヘラ描き沈線文を施す。その間に刺突文を施す。他の外面と内面はナデ。１㎜大の白色砂を含む。一部頸部まで遺存。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒褐色
127	弥生	壺		体部外面に貼り付け突帯を施す。その上面に３条の沈線を施す。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
128	弥生	甕		体部外面に横位で５条の沈線を施す。上２条はヘラ、下３条は貝殻によるものか。上から２条目から沈線の間に斜め方向の刻み目を施し、５条以下の部分は羽状文としている。いずれも貝殻によるもの。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
129	弥生	甕		体部外面に横位で２条のヘラ描き沈線を施す。その下に斜めに４条の沈線を２か所施す。２㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
130	弥生	壺		頸部外面に５条の沈線を施す。その下方は削り出して段差を設ける。外面ハケ目。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
131	弥生	壺		体部外面上半は削り出しによる突帯を有する。中に３条の沈線を施したため４条の突帯となっている。１㎜大の白色砂含む。胎質はザラつく。外面煤付着。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
132	弥生	壺		体部外面上半に貝殻による３列の羽状文を施す。その上方は突帯文が剝離したかもしれない。外面鉄分付着か。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
133	弥生	壺		頸部外面下半はミガキもしくはていねいなナデ。その下に、２条の貼り付け突帯を施す。この上面に貝殻による刻み目を施す。その下には３列の羽状文、更に２条ずつ合計４条の横位の沈線を施し、その下に４列以上の羽状文を施す。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
134	弥生	壺		体部外面中位に、１条の貼り付け突帯を施す。その上面には、貝殻による刻み目を施す。上方には横位で３列の羽状文を施す。内面にはタテハケを施す。胎土A。断面には粘土紐のつなぎ目が見える。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒褐色
135	弥生	壺		体部外面中位に、１条の貼り付け突帯を施す。その上面に細かな刻み目を施す。突帯	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒色、内面淡

				下方はミガキ。内面はハケ目のちナデ。2㎜大の白色砂を含む。			褐色
136	弥生	壺		体部外面中位に、2条の貼り付け突帯を施す。その上面に細かな刻み目を施す。突帯の上方には2列以上の羽状文を施す。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒灰色
137	弥生	把手		頸部下に把手を貼り付ける。内面はハケ目か。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
138	弥生	甕	11.3	体部外面にミガキ。内面はユビオサエ。1㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒褐色
139	弥生	蓋		外面はミガキ。内面は不明瞭。円孔が2つあり。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黄褐色
140	土製	錘		外形は手づくね。1㎜大の白色砂を若干含む。胎質はスカスカとした感じ。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黄白色
141	弥生	甕		体部外面に8条以上の沈線を施す。胎土A	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒褐色
142	弥生	甕		頸部外面下半はナデ。更に下は3条の横位の沈線を施す。その間に1列ずつの刺突文を施す。内面上半ユビオサエ、下半はハケ胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
143	土製	円盤		土器片を再加工。外周は打ち欠いて成形。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
144	弥生	甕	9.4	内外面とも調整不明瞭。1～2㎜大の白色砂目立つ。胎質ザラつく。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黒褐色
145	弥生	壺	14.8	内外面ともナデ。頸部外面に3条の沈線を施す。1㎜大の白色砂若干含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
146	弥生	壺	20.5	外面ミガキ。頸部に2条以上の沈線を施す口縁部内面ナデか。頸部内面ハケ目。2㎜大の石英多数含む。胎質はスカスカした感じ。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	明褐色
147	弥生	甕	16.2	口縁端部外面に貼り付け突帯を施す。その上面に刻み目(菱形状)を施す。頸部下はヨコナデ。更に下は3条のヘラ描き沈線を施す。外面に煤付着。内面はハケ目及びユビオサエ。2㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	茶褐色
148	弥生	甕	18	頸部外面下には横位で1条の沈線を施す。口縁部外面ナデ。内面にハケ目。胎土A。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
149	弥生	甕	19.1	口縁端部外面に刻み目を施す。頸部外面下に2条の沈線を施す。その下方は粗いナデ外面に煤付着。2㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
150	弥生	甕	22.9	口縁端部外面に浅い刻み目を施す。頸部外面ナデ。体部外面上半に7条以上の沈線を施す。口縁部内面はナデ。体部内面はユビオサエ。1～2㎜大の白色砂・灰色砂・朱色砂を含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
151	弥生	甕		頸部外面下に2条の弱いタッチの沈線を施す。その間に竹管文あり。胎質はスカスカとした感じ。1～2㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	明褐色
152	弥生	甕	25.7	口縁端部外面に刻み目を施す。口縁部ヨコ	Ⅲ区、黒灰	良	暗褐色

				ナデ。体部上半に３条の沈線を施す。外面に煤付着。	褐色粘		
153	弥生	甕		体部外面上半には横位で３条のヘラ描き沈線を施す。沈線の上方はナデ。下方はハケ目。内面はナデか。１㎜大の白色砂・灰色砂を含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗茶褐色
154	弥生	甕	38.1	口縁部ヨコナデ。頸部外面下に横位で２条の沈線を施す。その下方に刺突文を施す。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
155	弥生	甕	40.7	口縁部外面ナデ。頸部外面はハケ目。更に下は２条以上のヘラ描き沈線を施す。内面にハケ目。外面煤付着。１㎜大の白色砂含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
156	弥生	甕		内外面ともていねいなナデ。外面に弱い貼り付け突帯を施す。胎土Ａ。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	黄褐色
157	弥生	甕	21.4	口縁端部外面に断面「Ｖ」字状の鋭い刻み目を施す。頸部周辺内外面ともハケ目。頸部外面下に１条以上の沈線を施す。外面煤付着。2㎜大の白色砂を含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
158	弥生	壺	26.9	内外面ともナデ。口縁部に透かし穴１孔あり。胎土Ａ。上下逆で蓋かもしれない。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
159	弥生	甕	23.1	口縁端部外面に刻み目を施す。頸部下は粗いヨコハケ。胎土Ａ。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
160	弥生	甕	12	内外面とも調整不明。胎土はザラつく。１㎜大の白色砂・灰色砂多数含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
161	弥生	甕	36	口縁部ナデ。体部外面は粗いハケ目。内面はナデ。頸部外面にユビオサエ痕あり。胎土Ａ。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	淡褐色
162	土製	円板	5.2	体部片の転用。外周は打ち欠いて成形。１～2㎜大の白色砂・灰色砂を含む。	Ⅲ区、黒灰褐色粘	良	暗褐色
163	弥生	壺	10.7	口縁部外面はナデ。頸部ハケ目残る。口縁部内面はミガキ。胎土はザラザラで灰様のもの多数含む。２㎜大の白色砂含む。	ＳＤ203南７区黒色	良	淡褐色
164	弥生	壺		外面はていねいなナデ。口縁部は波状と思われる。下方には４条以上の沈線あり。	ＳＤ203南７区黒色	良	淡褐色
165	弥生	底部		外面摩滅。内面はていねいなナデ。２㎜大の白色砂を多く含む。	ＳＤ203南黒色	良	淡褐色
166	弥生	甕		体部外面に４条の沈線を施す。これに囲まれた上下２列に刺突文を施す。全面に斜め方向のハケ目を施す。2㎜大の白色砂含む	ＳＤ203南黒色	良	灰褐色
167	弥生	底部		外面は摩滅のため調整不明瞭。内面は縦方向のケズリか。内底面は刺突状況がうかがえる。2㎜大の白色砂を含む。	ＳＤ203南黒色	良	外面下半赤褐色
168	弥生	壺		体部外面中位に断面三角形で２条の貼り付け突帯を施す。その上面に刻み目を施す。外面はていねいなナデ。1～2㎜大の白色砂を含む。	ＳＤ203南黒色	良	黒色
169	弥生	壺	12.2	内外面ミガキ。口縁端部付近に透かし穴１孔あり。胎土はザラザラとした感じ。1～2	ＳＤ203南	良	黄褐色

				mm大の白色砂・灰色砂含む。			
170	須恵器	蓋		内外面回転ナデ。胎土精良。天井部に墨書あり。	６Ｅ区、黒灰色粘	堅緻	灰白色
171	弥生	壺	25.4	口縁端部外面に3条の凹線(擬凹線)を施し、その上に６個１組の円形浮文を12か所に設ける。頸部外面上半はタテハケ。中位から下半にかけては４条の凹線、逆に見れば４条の突帯を施す。これはヨコナデによって成形。体部上半はヨコハケ。口縁端部内面に波状文(７条／1.1cm)を施し、 その内側に櫛状工具による刺突文を２列に施す。頸部はハケ目。1～2mm大の白色砂を含む。頸部外面下半から体部外面上半まで、部分的に朱色。	７Ｅ区、黒色砂層 Ⅲ区、暗黒灰色	良	暗褐色
172	弥生	壺	20.5	口縁端部外面に１条の沈線を施す。口縁部に１か所透かし穴あり。頸部外面に１条の貼り付け突帯を施す。その中央に沈線を施しているので、突帯は２つの小突帯に分かれている。その上面に刻み目を施す。体部外面上半に２条以上の沈線を施す。1～3mm大の白色砂含む。	Ｉ区、灰黒色細砂上面	良	暗褐色
173	弥生	甕	25.8	口縁部外面及び頸部外面はナデ。体部外面上半は粗いハケ目。外面に煤付着。口縁部内面にはヨコハケ。体部内面は斜め方向のハケ目。1mm大の灰色砂含む。	ＳＤ203南２区	良	暗褐色
174	弥生	壺		体部上半に横位の沈線を５条施し、その間に斜め方向のヘラ描き沈線を施す。	包含層	良	淡褐色
175	弥生	壺		体部上半に横位の沈線を11条以上施す。その間の８か所に斜め方向の貝殻状用具によって沈線を施す。	包含層	良	淡褐色
176	弥生	壺		体部上半に横位の沈線を２条施し、その下の沈線から縦位に３条の沈線を施す。この四角に区画された部分に２条ずつの沈線で横位の「Ｖ」字状を形づくる。沈線は貝殻状用具で施す。	包含層	良	淡褐色
177	弥生	壺		体部上半に横位で２条の貼り付け突帯を施し、その上面に刻み目を施す。これから下に縦位の沈線を４条施す。この方格に区画された内の左側には羽状の沈線を横位に施し、右側には縦位のそれを施す。沈線は貝殻施文。	包含層	良	淡褐色
178	弥生	壺		体部上半に横位で２条の沈線を施す。それから下に縦位で２条の沈線を施し、この方格に区画された内の両側には５条ずつの沈線で構成された木の葉状文様を施す。	包含層	良	淡褐色
179	弥生	壺		体部上半に横位で２条の沈線を施し、その間に刺突文を施す。これらのすぐ上には削り出しによる段差を設ける。やや下方には	包含層	良	淡褐色

				横位で１条の貼り付け突帯を施し、その上面に刻み目を施す。これらの下方に縦位で４条の沈線を施し、この方格に区画された内の両側に横位の羽状文を施す。左側は弱いタッチである。			
180	須恵器	杯	9.8	内外面とも回転作用により調整。高台は貼り付け。	ＳＲ101	良	青灰色
181	須恵器	杯	12	内外面とも回転作用により調整。高台は貼り付け。外底面に墨書を施す。	ＳＲ101	良	青灰色
182	木製品	円盤	16.4以上	内外面とも調整。１か所に２つの穴をあけて止め具をつける。底板か。	ＳＲ101下層		暗褐色
183	木製品	下駄		つま先部分ほとんど欠損。現存長16.6cm。歯の部分は削り出して成形。	ＳＲ101下層		暗褐色
184	木製品	櫛		木目の方向不明。櫛目は細かい。先端部欠損。	ＳＲ101下層		暗褐色
185	木製品	棒状		ほぼ完存。先端部は削って尖らせる。全長17.7cm･直径1.1cm。また、他の部分も縦方向に削って成形。	ＳＲ101下層		暗褐色
186	木製品	槌状		全面に削って成形。本体は直径3.8～3cm。楕円形。柄の部分は1.5～1.2cmのやや歪な楕円形。全長14.7cm。	ＳＲ101下層		暗褐色
187	木製品	槽状		全面にノミ状工具による削り痕あり。現存長46cm・現存幅13.6cm。全長の一端と、幅の一端がともに欠損。内面は刳り抜いて丸く成形。	ＳＲ101下層		暗褐色
188	木製品	鍬先		全面にノミ状工具による削り痕あり。柄の部分を欠損。断面形はレンズ状。先端部は尖らせる。外形はナスビ形を呈する。現存長48.8cm・幅13.2cm・厚さ1.4cm。	ＳＤ101下層		暗褐色
189	木製品	鋤先		全面にノミ状工具による削り痕あり。ほぼ完存。柄とは組み合わせて使用したと思われ、柄穴あり。刃先は若干凹凸があり、使用痕かもしれない。全長29.6cm、柄に近い部分の幅17.6cm。内面は削りによってくぼませる。厚さ1.6cm。	ＳＤ203下層		暗褐色
190	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。上部は摩滅現存長50.8cm・幅8.8cm・厚さ1.6cm。	矢板列１下層		暗褐色
191	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。但し、最下端は欠損のためか尖らない。上部は摩滅。現存長29.6cm・幅10cm・厚さ0.4cm。	矢板列１下層		暗褐色
192	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、「Ｖ」字状に成形。現存長29.2cm・幅15.2cm・厚さ2.8cm。 上部は摩滅。	矢板列１下層		暗褐色
193	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。現存長41.2	矢板列１下層		暗褐色

				cm・幅12.8cm・厚さ1.6cm。上部は摩滅。			
194	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。現存長26cm・幅6cm・厚さ0.8cm。上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色
195	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。現存長24cm・幅5.6cm・厚さ1.2cm。上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色
196	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。現存長30.8cm・幅8cm・厚さ1.6cm。上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色
197	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、「V」字状に成形。現存長26cm・幅11.6cm・厚さ2cm。上部は摩滅。 木材の端に近いらしく(断面の木目でも確認)、面は丸味を帯びる。	矢板列1下層		暗褐色
198	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。現存長66cm・幅11.2cm・厚さ2.4cm。上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色
199	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、「V」字状に尖らせる現存長56cm・幅13.6cm・厚さ2cm。 上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色
200	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。全長62.4cm・幅11.6cm・厚さ2.4cm。 両端とも少し丸味を帯びるが、ほぼ完存と思われる。下部には、1.6cm程度の四角い穴が2つあいており、建築部材転用材と思われる。	矢板列1下層		暗褐色
201	木製品	矢板		全面にノミ状工具による削り痕あり。特に下部は斜めに削り、尖らせる。全長39.6cm・幅6.4cm・厚さ1.6cm。上部は摩滅。	矢板列1下層		暗褐色

※遺物は、ＳＤ203南側に存在する浅い溜り状遺構から出土した。特に、その東半部ＳＤ201～203の交差する付近において集中して出土した。また、黒灰褐色粘質土と黒色粘質土出土のものがあるが、これら包含層出土のものについては、必ずしも厳密な層位的取り上げを行ったとは言えない。

付　載

京都府、蔵ヶ崎遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

Ⅰ．はじめに

蔵ヶ崎遺跡では、前年度の調査において奈良時代の遺物包含層や弥生時代前期の溝跡などが検出されており、今年度の調査地内に当時の水田跡が埋蔵されている可能性が考えられていた。

この調査は、発掘調査に先立ち、プラント・オパール分析を用いて埋蔵水田跡の探査を試みたものである。

Ⅱ．試料

1991年10月14～15日に現地調査を行った。調査地点は、およそ10m間隔で設定されたNo.1～No.5の５地点である。試料は、長さ1.5mのボーリング棒を用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。

調査区の土層は、１層～９層に分層された(図１)。このうち、１層は旧耕作土、２ａ層は黄褐色土(攪乱気味)、２ｂ層は青灰色土、３層は黒色シルト質土、４層は奈良時代以降の洪水砂(上部は茶褐色、下部は緑色)、５層は黒色土(奈良時代の遺物包含層)であり、これらの土層については地点間での対応関係が確かめられた。

６層以下については土層の堆積状況が比較的不安定であり、地点間での土層の対比は困難であった。このため、６層以下の層名は各地点において層相の変化ごとに付けたものであり、地点間の対応関係を示すものではない。なお、弥生時代前期とされる暗黒色土層は、No.2地点では７層、No.3及びNo.4地点では６層、No.5地点では６層下部に対比されるものと考えられる。

Ⅲ．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1)試料土の絶乾(105℃・24時間)，仮比重測定

(2)試料土約1gを秤量，ガラスビーズ添加(直径約40μm，約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(3)電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)超音波による分散(300W・42KHz・10分間)

(5)沈底法による微粒子(20μm以下)除去，乾燥

(6)封入剤(オイキット)中に分散，プレパラート作成

(7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重(仮比重は1.0と仮定する)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ・タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原，1987)。

Ⅳ．分析結果

プラント・オパール分析の結果を図2～図5に示す。なお、稲作跡の検証及び探査が主目的であるため、同定及び定量は、イネ・ヨシ属・タケ亜科・ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)・キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。

Ⅴ．考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各層準ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1)奈良時代の遺物包含層

奈良時代の遺物包含層とされる５層(黒色土)は、調査を行ったNo.1からNo.5のすべての地点で認められた。同層は洪水によると見られる砂層(４層)によって厚く覆われている。

分析の結果、５層から採取されたすべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、No.2～No.5の各地点では、プラント・オパール密度が10,000個／g前後と非常に高い値であり、それぞれ明瞭なピークが認められた。したがって、これらの地点で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。No.1地点では密度が2,200個／gと比較的低い値である。しかし、直上の４層(下部)ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同地点もしくはその付近で稲作が行われていた可能性が考えられる。

以上のことから、５層の時期(奈良時代)には調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

(2)弥生時代前期の暗黒色土層

弥生時代前期とされる暗黒色土層は、No.2～No.5の各地点で認められた。同層準は、No.2地点では７層、No.3及びNo.4地点では６層、No.5地点では６層下部に対比される。

分析の結果、これらのすべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、No.3地点とNo.5地点では密度が10,000個／g以上と非常に高い値であり、それぞれ明瞭なピークが認められた。したがって、これらの地点で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。No.4地点でも密度が4,400個／gと比較的高い値であることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。No.2地点では密度が2,100個／gとやや低い値である。しかし、直上の６層(砂層)ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同地点もしくはその付近で稲作が行われていた可能性が考えられる。

以上のことから、同層準の時期(弥生時代前期)には調査区の比較的広い範囲(No.3～No.5地点周辺)で稲作が行われていたものと推定される。

(3)その他の層について

１層(旧耕作土)についてはNo.1地点のみで試料が採取された。分析の結果、同層からはイネのプラント・オパールが20,000個／g以上と非常に高い密度で検出された。これは調査地点の現況が水田であったことと符合している。

２層～４層についてはNo.1～No.5の各地点で試料が採取された。分析の結果、２層(２ａ、２ｂ層)ではすべての地点からイネのプラント・オパールがおよそ10,000個／g以上と非常に高い密度で検出された。したがって、これらの各地点で稲作が行われていた可能性

は極めて高いと考えられる。

3層でもすべての地点でイネのプラント・オパールがおよそ5,000個／g以上と高い密度で検出された。したがって、これらの各地点で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

4層上部ではNo.3地点を除く各地点でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、No.1地点及びNo.4地点では密度が5,000個／g以上と高い値であり、それぞれ明瞭なピークが認められた。したがって、これらの地点で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の地点では密度が2,000個／g未満と低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層からの混入の危険性も否定できない。4層の中～下部ではイネのプラント・オパールはほとんど検出されなかった。

なお、弥生時代前期とされる暗黒色土層よりも下層では、イネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。

Ⅵ．まとめ

以上のように、弥生時代前期とされる暗黒色土層では調査区の比較的広い範囲(No.3～No.5地点周辺)において、また奈良時代の遺物包含層(5層)では調査区のほぼ全域において、水田跡が埋蔵されている可能性が高いと判断された。

また、2層及び3層についても、調査区のほぼ全域で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，第10集，281－298．

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，9:15-29．

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡(夜臼式)水田及び群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(0.sativaL.)生産総量の推定－．考古学と自然科学，12:29-41．

藤原宏志・杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17:73-85．

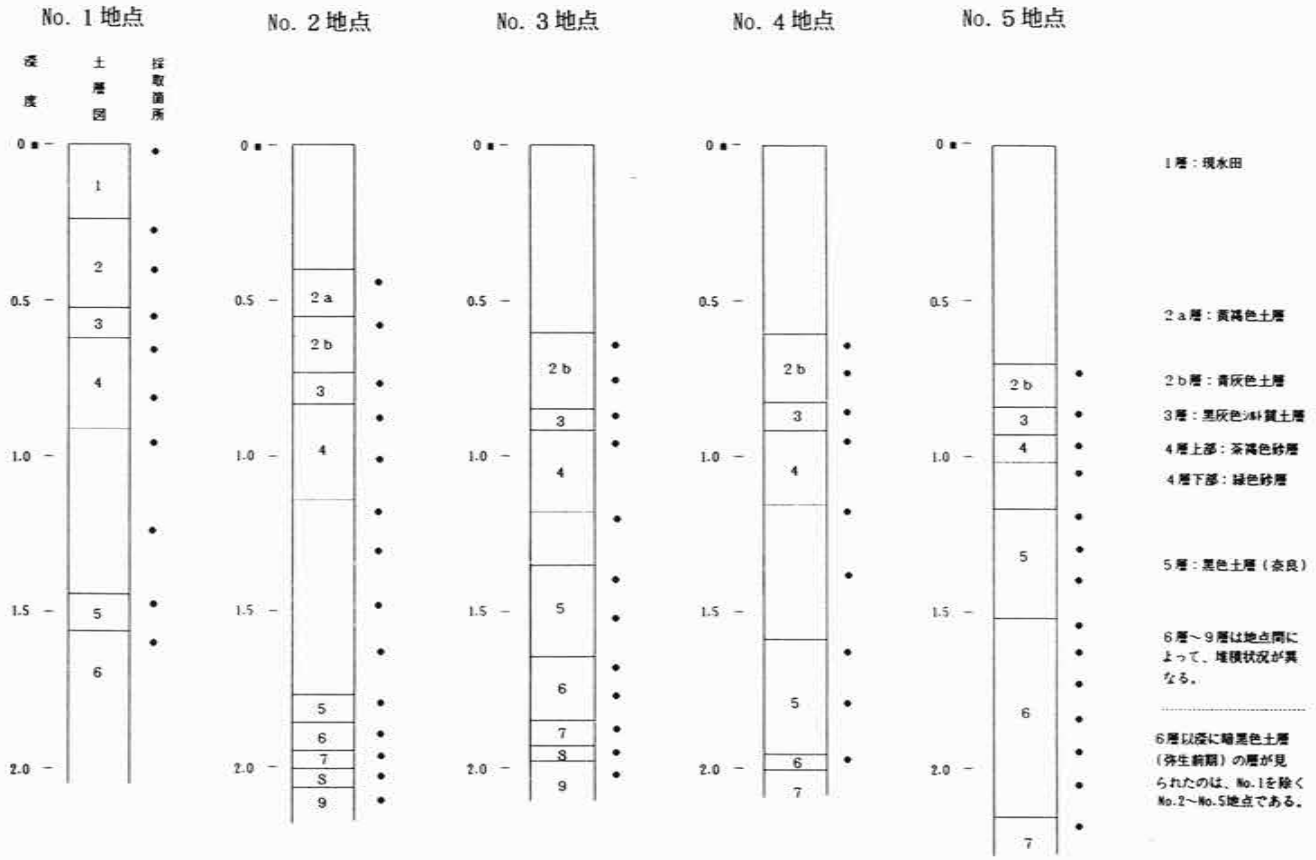

No. 1 地点
No. 2 地点
No. 3 地点
No. 4 地点
No. 5 地点
深度
土層図
採取箇所
0.0
0.5
1.0
1.5
2.0
1層：現水田
2a層：黄褐色土層
2b層：青灰色土層
3層：黒灰色シルト質土層
4層上部：茶褐色砂層
4層下部：緑色砂層
5層：黒色土層（奈良）
6層～9層は地点間によって、堆積状況が異なる。
6層以深に暗黒色土層（弥生前期）の層が見られたのは、No.1を除くNo.2～No.5地点である。

図1　土層柱状図

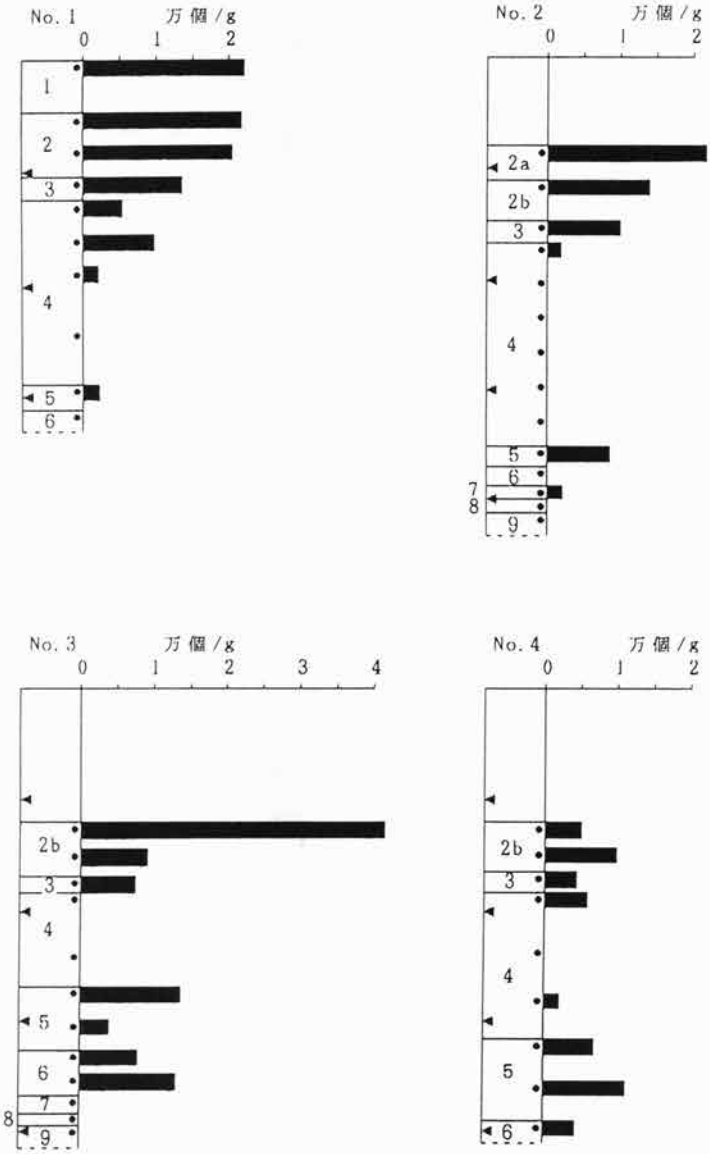
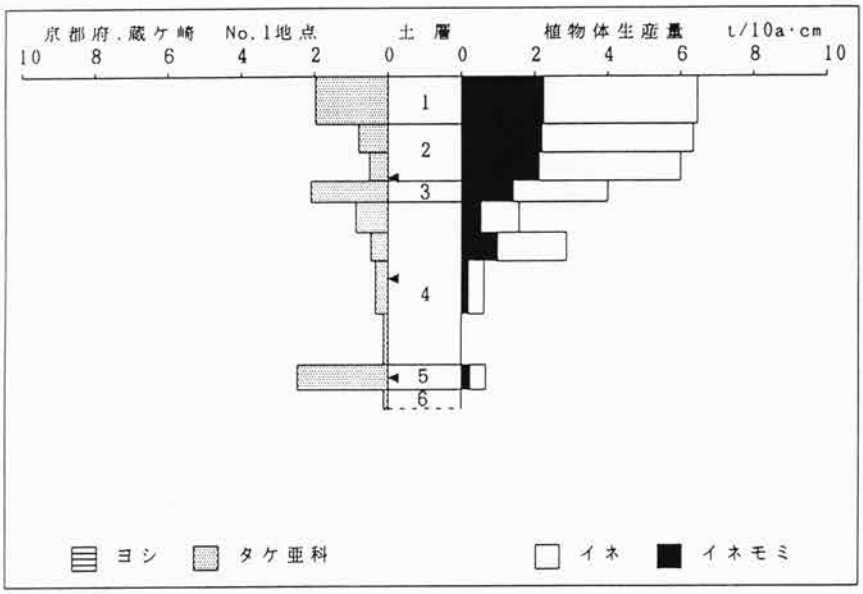


図2　イネのプラント・オパールの検出状況
（注）◀印は50cmごとのスケール　　●印は分析試料の採取箇所



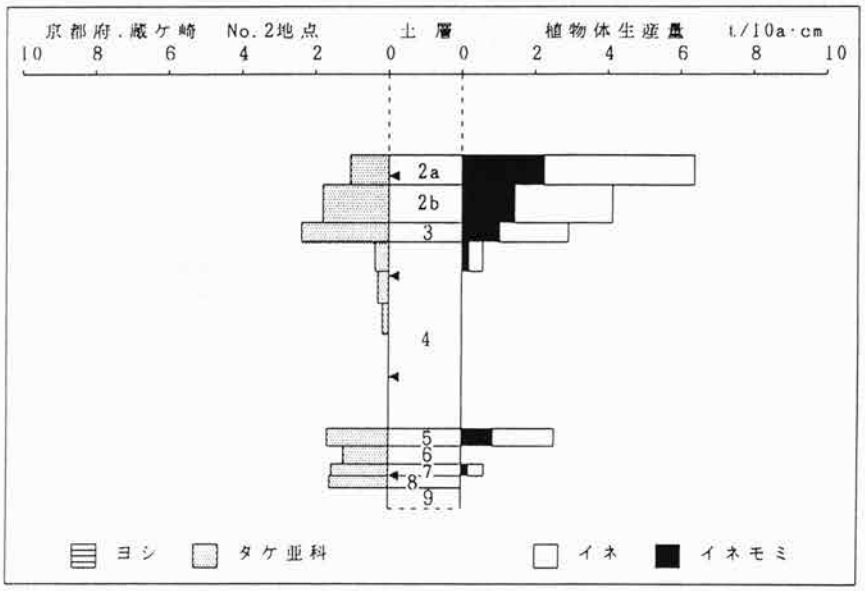
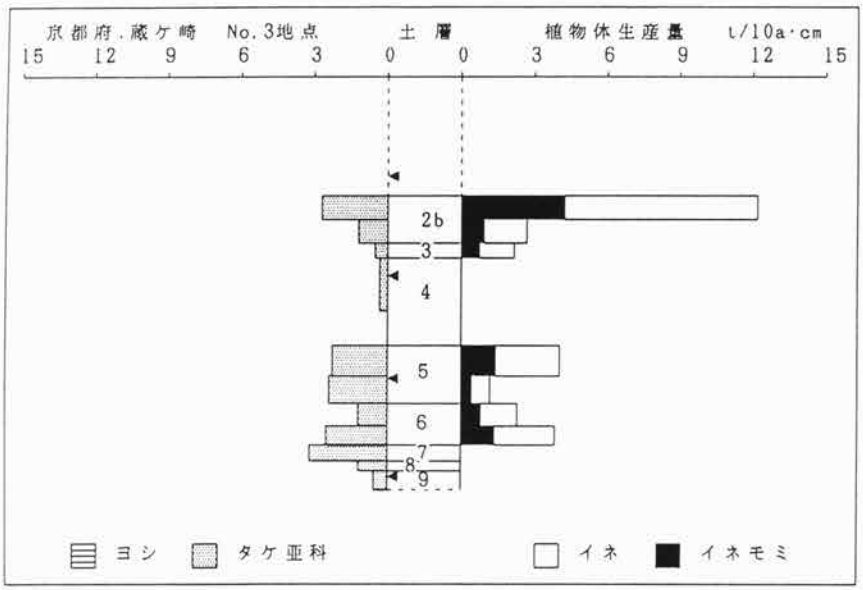


図3　おもな植物の推定生産量と変遷(1)
(注) ◀印は50cmごとのスケール



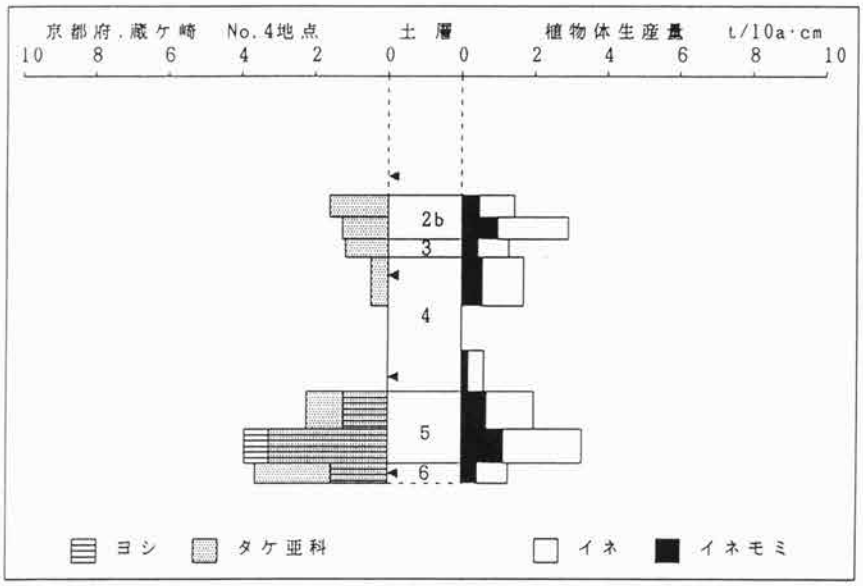


図4　おもな植物の推定生産量と変遷(2)
(注) ◀印は50cmごとのスケール

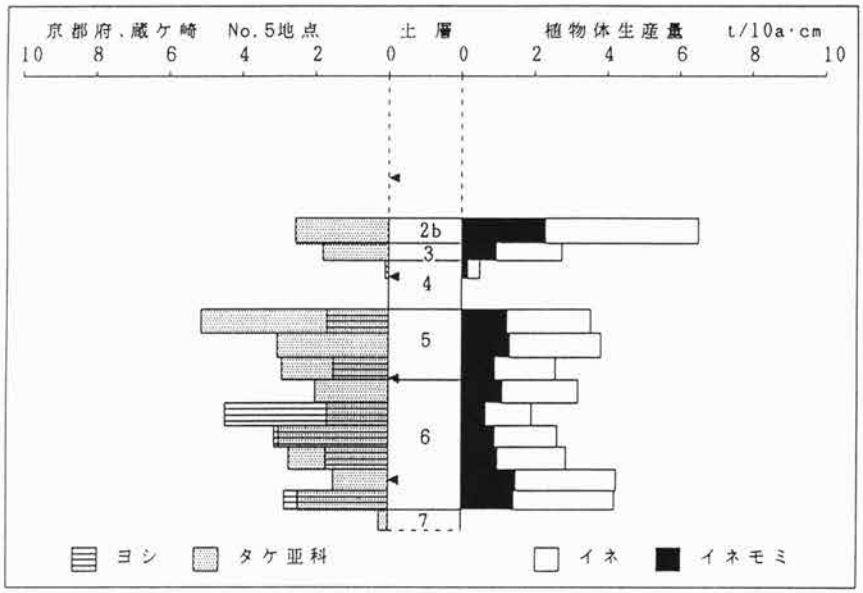


図5　おもな植物の推定生産量と変遷(3)
(注) ◀印は50cmごとのスケール

(2) 下 岡 古 墳

1．調査経過

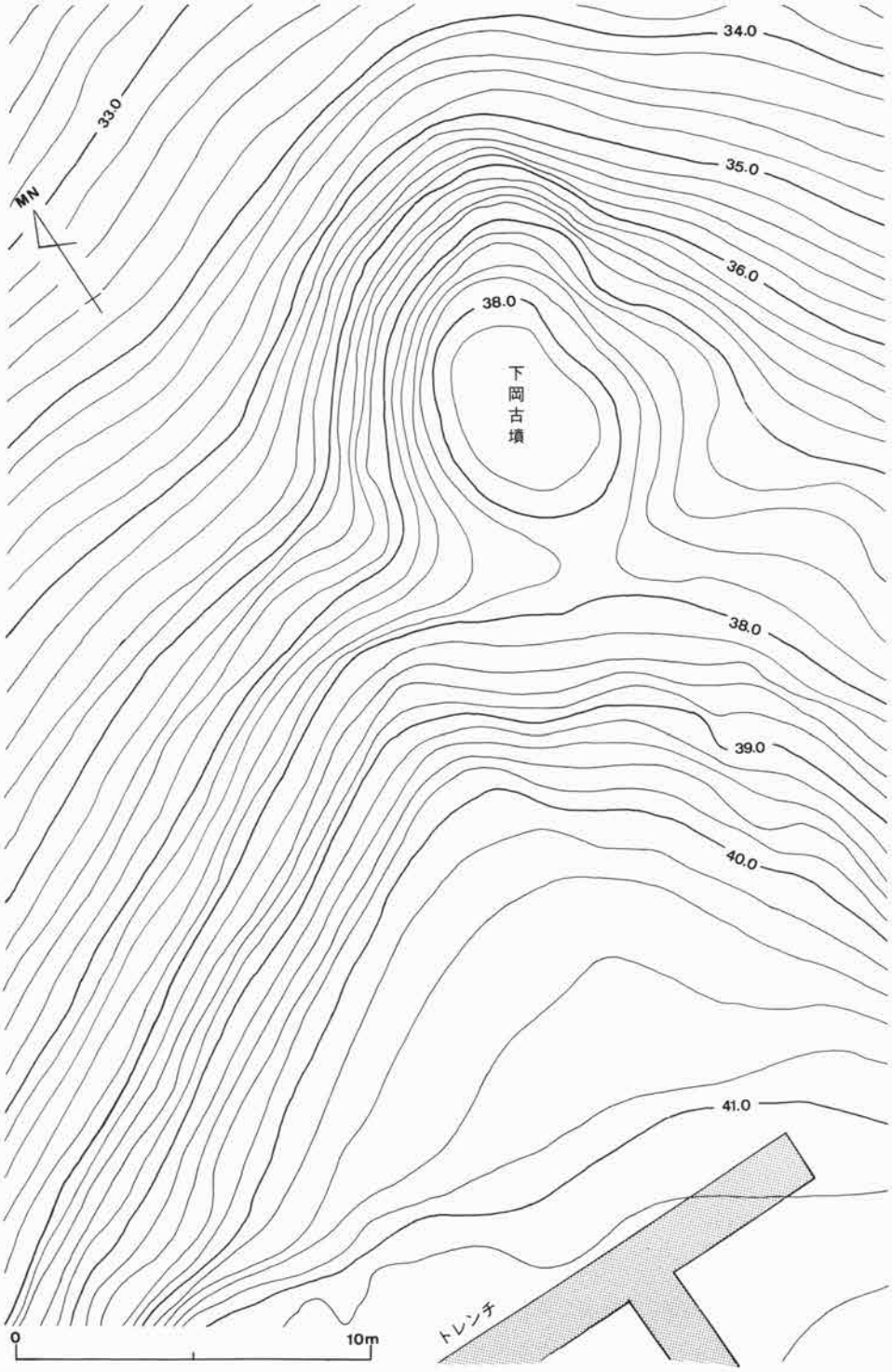
下岡古墳は、野田川右岸で、加悦谷の沖積平野部に小高く張り出した丘陵先端部に築かれている(第27・28図)。標高は最も高いところ(南西側丘陵平坦部)はおよそ42mを測るが、下岡古墳の墳頂部は約38.2mである。今回の調査は、下岡古墳1基の発掘調査と、南西側の丘陵平坦部の試掘調査である。南西側は、過去のほ場整備の影響で、周辺の田地と同じく平坦に削られているようすが観察された。したがって、調査の重点は置かず、幅1mのトレンチを長く縦横に入れて遺構・遺物の検出に努めた。ここは、調査前から20～50cm大の山石がところどころでブロック状に集積していることから、中世墓の存在を予想した(ちょうど東側の丘陵部に広く中世の山城である比丘尼城が存在している)。石の集積するところはトレンチの幅を広くして掘削していった。図示していないが、当地の土層堆積状況は、4層(第Ⅰ～Ⅳ層)に分けられる(後述する古墳の土層とは異なるため、Ⅰ～Ⅳのローマ数字とした)。層位は、表土の有機質土(第Ⅰ層)の下は、約15cmの暗褐色土(第Ⅱ層)で、さらに約10～20cmの明褐色粘質土(第Ⅲ層)が続く。そしてこれより下は黄褐色砂礫層

第27図　調査地位置図(1/50,000)

第28図　調査地周辺遺跡分布図
（『加悦町の古墳』より）

（第Ⅳ層）の地山となる。これら第Ⅱ層・第Ⅲ層は東ほど厚く堆積し、西の平野部側にいくほど薄くなる。出土遺物としては、第Ⅱ層中から時期不明の土器片が2点出土したのみである。二次的に被熱したような土器片で、非常に固く焼きしまっている。周辺を慎重に精査したが、顕著な遺構は検出されなかった。また、集石か所についても、表土層より下には掘り込みらしい遺構や、遺物を検出することはできなかった。ごく新しい時代に、表土面に投棄された集石と思われる。周辺の測量と土層観察を行い、当地の調査は終了した。

下岡古墳の調査では、まず調査前の現状を把握するため、平板測量図を作成した（第29図）。これをみると、標高37～38m付近に、丘陵部の切断された状況、すなわち周溝部分が存在している状況を観察することができた。おそらく、この部分をカットして生じた土砂を、北側に盛り上げ墳丘封土としていると判断した。これだけの土砂を盛り土としているなら、かなり封土のある腰高な古墳と考えられた。また、古墳の東側はすぐに



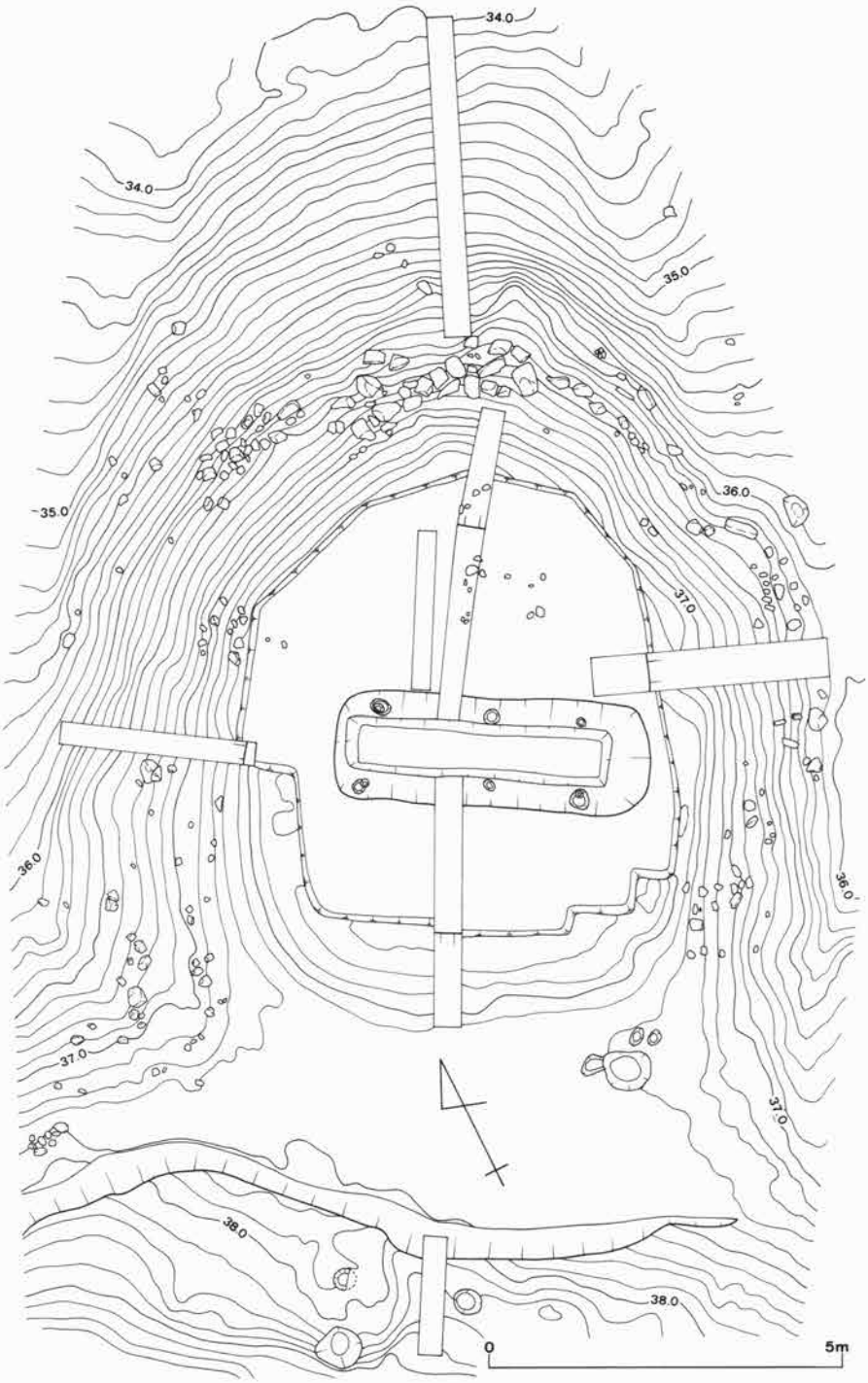
第29図　調査地地形測量図(数字はmを表す。)

谷部に向かっての急斜面となっているが、西側から北西側にかけての斜面は墳丘ラインが比較的よく残っている。加悦町平野部からの見栄えを強く意識したものと言える。

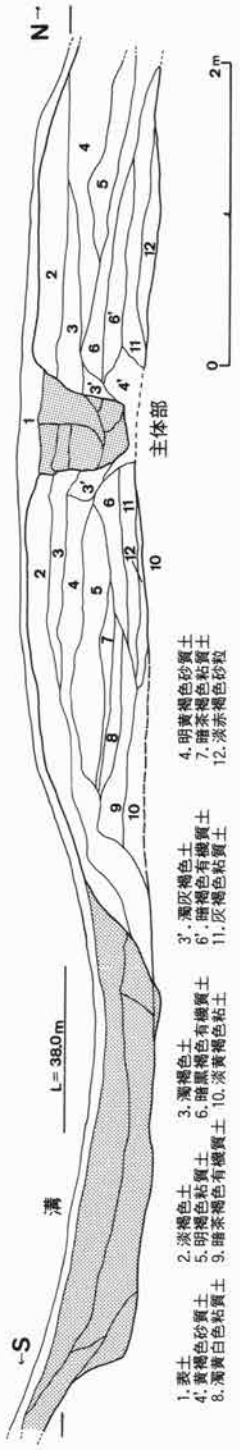
以上の周縁部や墳丘全体部の表面からは、遺物の出土はみられず、結果的に西～北西側斜面に存在した葺石なども、この段階ではまったくわからなかった。掘削は、墳頂部から逆「L」字形の畦を残して四分法で始めた。表土下約20cmで、淡黄褐色の盛り土層を切り込んでいる褐色土の落ち込みを確認した。平面では溝状になることから、棺の腐朽に伴ってその上に落ち込んだもので、これを手がかりに主体部の位置を確認しようとした。慎重に約35cmほど表土から掘り進めた時、暗黒褐色有機質土(第6層)の層が広がり始めた。ここから、チャートや安山岩製の石器類が出土した。これらの点数は、32点を数え、器種の内訳は石鏃5点・石錐1点・楔形石器1点・剝片25点である。石器は特にまとまって集中するところはなく、墳丘の盛り土の1つである暗黒褐色有機質土中に疎らに包含されていたものと言える。なお、上の第5層からも水晶製の敲石1点が出土した。

面的にさらに掘り進むと、表土下約75cmで褐色土の落ち込みの底を確認し、その下から暗褐色粘質土の筋を2条検出した。1本の筋の厚さは約5cmを測り、明瞭である。木棺の痕跡と考え、実測の終了した畦を切り崩しつつ、全体形の検出作業に入った。その結果、東西を主軸とする幅0.5m・長さ約3.3mの木棺痕跡(主体部)が判明し、棺の両小口部と考えられるところに河原石が組まれていた。この段階で、表土下約80cmを測り、周辺において黄褐色砂礫の地山面が露出してきた。さらに、主体部の長軸ライン両側に沿い小さな杭痕跡を3基ずつ対照的に検出した。そして墓壙の掘形はこの杭跡を含んだ外側に見出された。全体を清掃して写真撮影をした後、主体部の掘削にはいった。脂肪酸分析用に埋土をセクション中から採取した後、主体部内の土はすべて土嚢袋に入れて持ち帰り、水洗選別を行ったりした。主体部は、掘形の形状から組合式箱形木棺となった。当初小口おさえの用途であると考えていた両端の河原石は、レベル的にかなり上面に存在し、主体部内にはほとんど入ってこないことがわかった。棺の蓋材の上にのせていたものかもしれず、その機能については判然としなかった。主体部内の遺物は、頭部側と考えられる東端付近から土師器杯1点、胸部付近からコバルトブルー色を主とするガラス製小玉が25点及び琥珀製小玉1点が出土した。もう1点、石製模造品がある(なお、主体部埋土の水洗選別によりガラス製小玉を11点とりあげ、総数は36点になった。)。

墳丘については、葺石が墳丘北西側に主として残っており、急斜面であることから、航空撮影による図化作業で実測図を作成した(第30図)。なお、墳丘の断ち割りを行い、盛り土の崩落を防止するため土石混合になっていることを確認した。周溝部の掘削は、断面を観察しつつ、南側丘陵部からの切り離しがよくわかるように行ったが、主体部が予想以上



第30図　下岡古墳墳丘地形図



第31図　墳丘断面図（溝～墳頂部）

に深く盛り土されていたため、結果的に地山ラインを追求する形となり、実際より浅くなった。また、ここからの遺物は土師器と思われる土器片が１点のみである。なお、南側丘陵部の斜面を、古墳周濠に向って掘り進めた結果、周濠の外側ライン近くで３基の柱穴痕を確認した(第30図)。何らかの遺構に伴うものと考えるが、規格をもって並んでおらず、実態については判然としなかった。

２．層　序

ここでは、墳丘の盛り土の層序を中心に報告したい。

まず、第31図に示した主な層を列記すると、第１層：暗褐色有機質土(表土)．第２層：淡褐色土(３～４cm大の礫を少量含む)．第３層：濁暗褐色土．第４層：明淡黄褐色砂質土(灰色粘土塊及び３～５cm大の礫を少量含む)．第５層：濁明褐色粘質土．第６層：暗黒褐色有機質土(石器包含)．第７層：暗茶褐色粘質土(石器少量含む)．第８層：明黄白色粘質土(粘土塊を多く含み、乾燥するとクラックが入りブロック状になる)．第９層：暗茶褐色土(石器少量含む)．第10層：淡黄色粘土(地山)．第11層：暗黄色粘質土．第12層：淡赤褐色砂礫となる。主体部検出層は、第11層でほぼ地山(第10層)直上と言える。地表下約80cmを測る。

第６・７・９層は、暗茶褐色系の有機質土で植物遺存体を多く含んでいると思われる。時期は不明ながら石鏃などの石器や剝片を包含しており、近隣に集落などの遺跡が広がっていたと考えられる。盛り土として使われ、有機分が分解されていないことから、盛り土作業の行われた季節や時間的経過の長短を考える上で興味深いものと言える。

第５層中からは、水晶製の敲石が１点出土した。

第12層の淡赤褐色砂粒層は、混入物の少ない粒の揃った砂粒で、墓壙内の埋土である。主体部上部の落ち込みは、暗灰色土となる。この落ち込みに接する層も連続して落ち込み、３層→３'層、４層→４'層というようにズレを生じる。

3．墳　丘

下岡古墳の墳丘は、丘陵先端部に造られていた。墳丘を区画する溝は、墳丘南側で認められ、長さ８ｍ分・幅4.2ｍ・深さ40cmを測る。溝のはじまりが、墳丘裾部としての傾斜変遷点となる。一方、反対側(北斜面)における墳丘裾ラインは明確な変遷点をもたず、葺石の下端ラインぐらいがおそらく意識された裾になると考えられる。墳丘は、地山まで断面を「Ｌ」字状に削り出し、谷側の北側に土砂をまわして平坦面を広くし、主体部を設けるところも地山まで削り出して平坦にしている。したがって、この段階では、溝の底と主体部検出面のレベル差は、わずか10～20cmしかない。そして盛り土を次々にしていくが、墳丘斜面の盛り土は、拳大くらいの山石を多量に混ぜて、急斜面ながら崩落しにくい盛り土としている。葺石は、墳丘の約半周をめぐり北側斜面に断続的に施されている。平野部からの眺めを意識していることは明瞭で、北側斜面中央部には、特に大きな石材を用いている。葺石はある程度の角度をつけて、列石状になっているところもある。

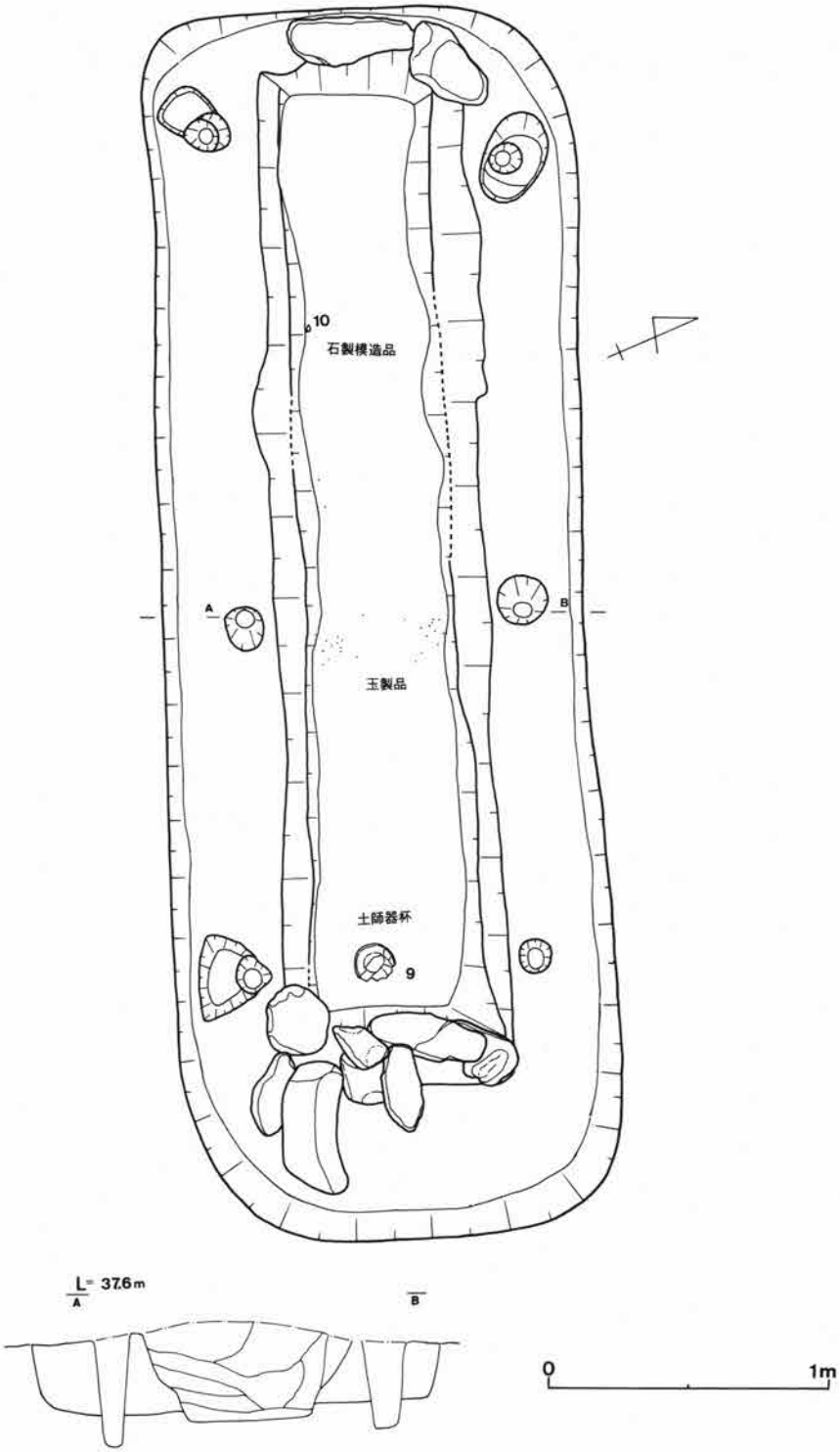
以上、墳丘を区画する溝の断面にあらわれた基底部と、墳丘北斜面の葺石の下端部から復原すると、直径約12ｍ・高さ約２ｍの円墳になる。

4．主体部

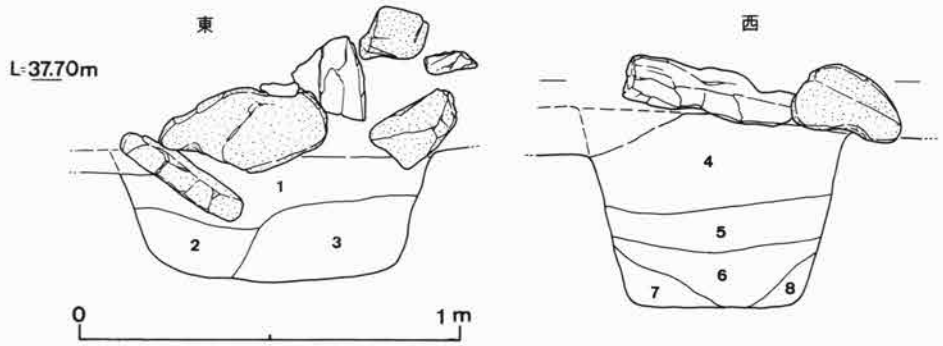
まず、最も外側の墓壙の大きさは、縦4.2ｍ・幅1.4ｍを測る。墓壙の掘形は、丸味をもった逆台形である。内側に組合式箱形木棺を組み入れた痕跡があり、縦約3.3ｍ・幅0.5ｍを測る。深さは35cmを測り、掘形の断面形はほぼ逆台形を呈する。棺の掘形の肩部に、河原石を組んでおり、東側に８石、西側に２石認められる(第33図)。先述のように、木棺の小口を押さえるためのものとは言えず、棺の蓋を押さえたものか、何らかの目印としたものか判断しがたい。東側の方が西側に比べてレベル的にやや高いこと、出土遺物の分布状況、石組みの状況などから、東側が遺骸の頭部になると判断した。

組合式箱形木棺を組み、遺骸を安置し、副葬品として土師器杯１点・ガラス製小玉30数点・石製模造品１点を入れた。土師器杯は、完形品で、口縁部を上にして、頭部上方に置かれていた。ガラス小玉は、首飾りとして胸部あたりに添えられたものと考える。

棺内を整えた後に蓋をし、墓壙内との間に混入物の少ない淡赤褐色砂質土及び粘質土を入れて固定させている。その後、この墓壙と棺の間に杭を打ち込んでいる。地山面からの打ち込みに比べて杭の打ち込みは容易であったと思われる。杭の長軸に沿って両端と中間に３基ずつの計６基検出した。杭の直径は、大きいもので18cmを測るが、およそ15cm前後である。打ち込まれた深さはまちまちであるが、中間部でみると約50cmを測り、かなり深く打ち込まれている(第32図)。



第32図　主体部実測図(1)



第33図　主体部実測図(2)

1.暗黄褐色粘質土　2.黄褐色粘質土　3.黄褐色粘質土(粘性弱)　4.明黄褐色粘質土
5.褐色粘質土　6.灰褐色粘質土　7.暗黄褐色粘質土　8.黄褐色土

これらの杭は、本格的な盛り土作業が開始されるまで立てられたままである。すなわち、墳丘の築成に臨み、これらの杭は抜きとられたと見られる。

5．出土遺物

出土遺物の量は少ない。盛り土中から出土した石器と土器、主体部中からの土師器杯、ガラス製小玉・琥珀製小玉・石製模造品がすべてである。

イ．盛り土中の遺物(第34図)

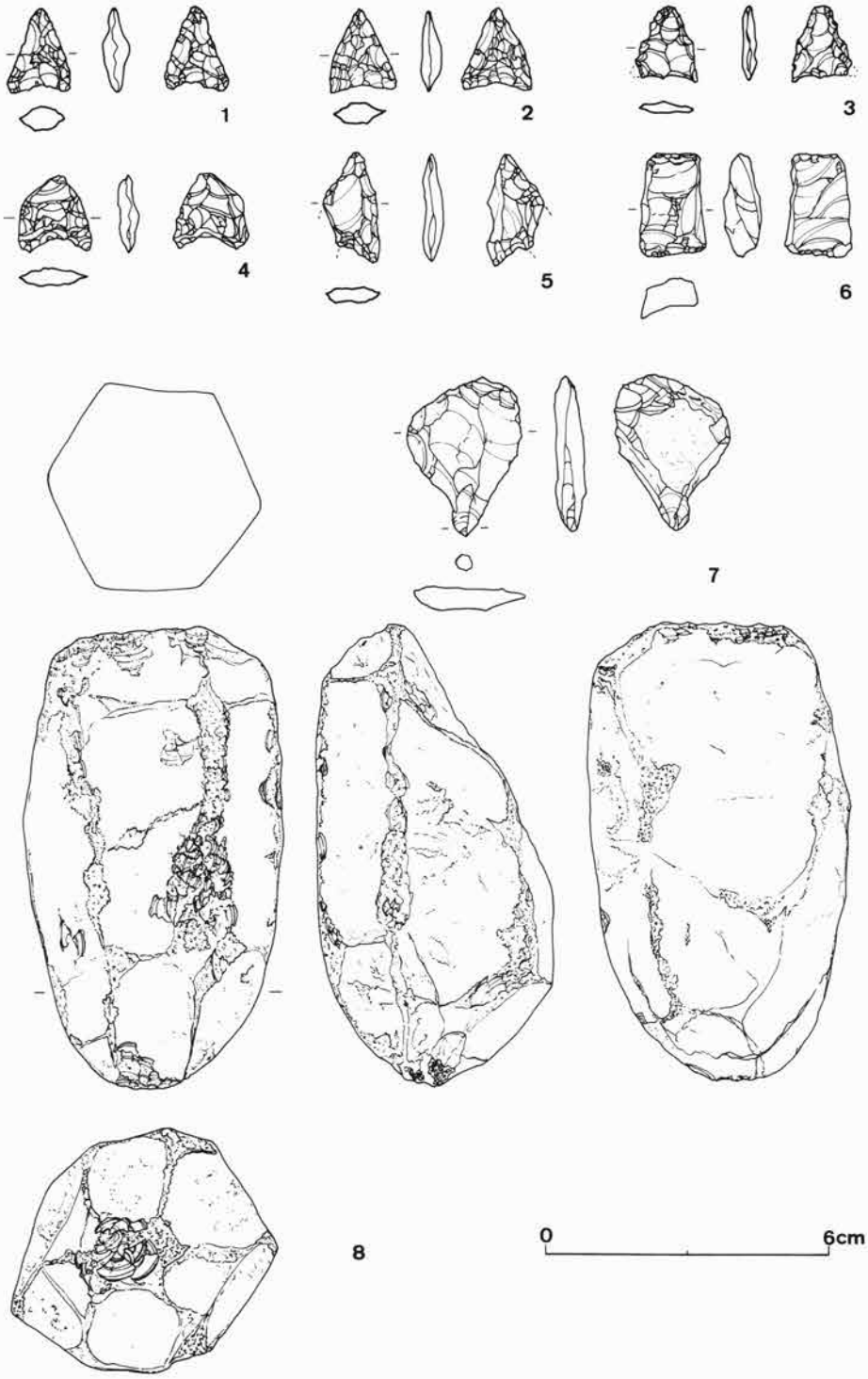
石器は、石鏃5点・石錐1点・楔形石器1点・槌石1点、それに剝片25点を加え、合計33点出土した。

石鏃(1～5)は、凹基鏃で小形のものである。3は、中間部にくびれをもつものである。長さ・幅・厚さの平均値(完存部分で計測)は、それぞれ1.8cm・1.4cm・0.4cmを測る。石材は、1・3～5がチャートで、2のみ安山岩製である。

石錐(7)は、片側側面を破損しているが、長さ3.5cm・幅2.4cm・厚さ0.6cmを測る。縦方向に細かな樋状の剝離を施して細く作り上げた先端のほかは、粗い剝離により調整されている。チャートを石材としている。

楔形石器(6)は、両先端部に細かな階段状剝離をとどめ、右側縁部に上からの裁断面を持つ。左上端の放射状裂痕は、先端部の階段状剝離より後の剝離で生じたものである。長さ2.1cm・幅1.4cm・厚さ0.7cmを測り、黒色のチャートを石材とする。

敲石(8)は、長さ10cm・幅5.5cm・厚さ5cmを測る。六角形の結晶をこのまま留める片側先端部は、激しい打撃による剝離痕や潰れ痕が認められる。また、各部の稜線上も激しい敲打により潰れている。全体に白く濁った「くもり水晶」を石材とする。



第34図　出土遺物実測図(1)

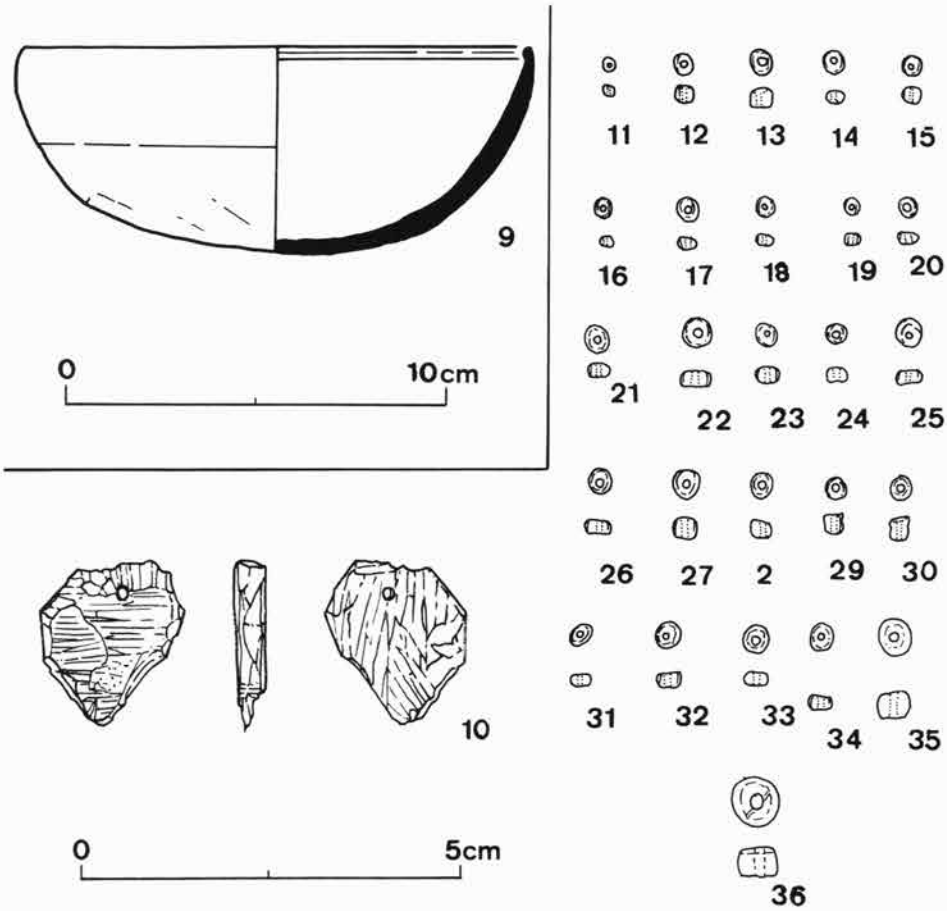
剝片はすべて黒っぽいチャートを石材にしている。片面加工のものばかりである。

土器の出土も見られたが、細片のため時期は不明である。

ロ．主体部内の遺物(第35図)

土師器杯は、滑らかに弧を描いて内湾する全体形をもち、口縁部径13.4cm・器高5.4cmを測る(9)。口縁部は内湾し、その端部は細かく絞り込まれつつ丸く収められる。調整は、内面をていねいなナデにより仕上げ、外面下半はケズリが施されている。磨耗もすすんでいるが、全体に胎土は粗く、焼成もしっかりしていない。

ガラス製小玉(11～35)は、棺内埋土の水洗選別により取り上げたものを含め、合計36点出土した。大きく2つの群に分けられるようで、直径が1.5～3㎜までの極めて小さなもの(Ⅰ群)と、部分的に稜をもち、直径が3～5㎜のやや大きなもの(Ⅱ群)がある。端部に折り取られたような剝離の認められるものが多い。いずれのグループの小玉も、色調は濃い青色のコバルトブルーのもの、スカイブルーのものを含み、Ⅱ群中に1点エメラルドグ



第35図　出土遺物実測図(2)

付表２　玉類一覧表(水洗選別資料を除く)

No.	種類	色	径	長さ	孔径	タイプ	備考	No.	種類	色	径	長さ	孔径	タイプ	備考
11	ガラス小玉	SB	1.5	1.7	0.4	Ⅰ		24	ガラス小玉	CB	3	2	0.7	Ⅱ	
12	ガラス小玉	CB	2.4	2.5	0.8	Ⅰ		25	ガラス小玉	CB	3.6	2	1.1	Ⅱ	
13	ガラス小玉	CB	3	2.4	1	Ⅰ	片割	26	ガラス小玉	CB	2.7	1.9	1	Ⅱ	
14	ガラス小玉	CB	2.5	1.8	0.6	Ⅰ	片割	27	ガラス小玉	CB	3.7	2.3	1.2	Ⅱ	
15	ガラス小玉	CB	2.1	2	0.4	Ⅰ		28	ガラス小玉	CB	2.7	2.5	1	Ⅱ	
16	ガラス小玉	CB	2.6	1.2	0.6	Ⅰ		29	ガラス小玉	CB	2.9	2.7	1.1	Ⅱ	片割
17	ガラス小玉	CB	2.8	1.5	0.8	Ⅰ		30	ガラス小玉	CB	3	3.3	1	Ⅱ	
18	ガラス小玉	SB	2.2	1.1	0.9	Ⅰ		31	ガラス小玉	CB	2.5	1.3	2.7	Ⅱ	片割
19	ガラス小玉	SB	2.1	1.6	0.5	Ⅰ		32	ガラス小玉	CB	3.2	2	1.2	Ⅱ	
20	ガラス小玉	CB	2.6	1.8	1	Ⅰ		33	ガラス小玉	SB	3.5	1.7	1	Ⅱ	
21	ガラス小玉	CB	3.1	2.8	1.1	Ⅱ	気泡	34	ガラス小玉	YG	3.9	2	1	Ⅱ	縞
22	ガラス小玉	EG	3	2	1.1	Ⅱ	気泡	35	ガラス小玉	YG	5	3.8	1.5	Ⅱ	縞
23	ガラス小玉	CB	3	2.1	0.5	Ⅱ		36	琥珀小玉	RB	6.4	3.8	1.7	―	

1.備考(片割：片側に折ったような剝離あり。　縞：縞状に色の濃淡あり)
2.色(SB:スカイブルー　CB:コバルトブルー　EG:エメラルドグリーン　YG:黄緑色　RB:赤褐色)
3.数値はmm単位

リーンのものがある。さらにルーペを用いての肉眼的な観察であるが、気泡や、縦方向に縞状の色の違いなどの認められるものがある(付表２)。

琥珀製小玉(36)が１点出土した。直径6.4mm・長さ3.8mm・孔径1.7mmを測る。赤褐色を呈し、上端に平坦面を持ち、側面形は丸みを帯びる。

(黒坪一樹)

石製模造品(10)は、基部に１孔を開けた不整五角形で、先端を失した剣形と推定されるものである。１点ある。長さ2.4cm・幅1.9cm・厚さ4.5mmを測り、両面に擦痕がある。この擦痕は、金属器で調整したような鋭い研磨痕で、不規則に施される。穿孔は、径1.5mmで両面からなされる。石材は灰緑色の色調で、軟質の結晶片岩に属するものか。だが、風化が著しく全体が白粉を吹いたようになる。

(河野一隆)

６．まとめ

下岡古墳及び周辺部の調査で、周辺部における南西丘陵部からは顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。

下岡古墳については、いくつかの成果があった。丘陵尾根部を「L」字形にカットし、土砂を谷側斜面にもってきて平坦面を広くする。地山面まで削り込んだ上で、古墳のほぼ中心に当るところに墓壙(4.4m×1.6m)をほぼ東西を主軸にして掘る。組合式箱形木棺(3.3m×0.5m)を安置し、棺と墓壙のすき間を淡赤褐色の砂土で埋め、ここに杭を打ち込

む。杭は、長辺の両端及び中間部に片側３基ずつの計６基を検出した。また、これらの杭は、墳丘築造に伴う盛り土作業に臨んで、抜き取られたと考えられる。盛り土は、大きく８層に分けられ、第２層より下はいずれの層も厚さ10cm程度で、比較的小さな単位でていねいに施された感を受ける。

盛り土中からは、石器と少量の土器片のみで、古墳時代の遺物は皆無であった。主体部内からは、土師器杯１点、ガラス製小玉36点、琥珀製小玉１点、石製模造品１点が出土した。土師器杯は、遺骸の頭部付近に、玉類は胸部付近に副葬されたものと言える。これら遺物の出土状況、主体部両端のレベル差などから、東側を遺骸の頭部位とした。

墳丘は、南側にこれを区画する溝が設けられ、土石混合の盛り土をした後、北側斜面の一部には、葺石が施されていた。墳形は、円墳で、直径約12m・高さ約２mを測る。

下岡古墳の時期であるが、土師器杯の形態及びガラス製小玉とのセット関係、石製模造品の形態などから考えて、５世紀後半に比定されよう。

さらに、主体部の杭跡についてであるが、古墳の主体部周辺にこうした遺構の確認された例は極めて少ない。わずかに兵庫県神戸市の住吉東古墳（５世紀末、帆立貝式古墳[注9]）を考慮しうるにすぎない。住吉東古墳では、杭跡というよりむしろ柱穴痕であることや、柱穴と主体部の設営順序において差異がある。

ところで、葬送儀礼の中でも、人が死んで葬るまでの間、棺内に遺骸を納めて仮に安置する「殯」は、古くは『日本書紀』や『古事記』に記事として登場する。『古事記』では、仲哀天皇が九州の熊襲攻撃でなくなったことについて、「爾驚懼而、坐殯宮」とあり、『日本書紀』には、天雅彦が反矢によって死んだ説話（神代下第九段一書）の中に出てくる。さらに、『兵範記』・『中右記』・『日本霊異記』にも殯に関する記事は多い。このように文献史学や民俗学の分野では、かなり頻繁に論じられてきている[注10]。６世紀前半（安閑～宣化朝）以降は喪葬儀礼が殯宮で取り行われたが、それ以前は墳丘上で儀礼・祭祀がなされたとした和田　萃氏の論考もある[注11]。一方、考古学から殯の具体的な内容を考察するための資料は極めて少ないと言える。下岡古墳の主体部の杭跡が直ちに殯に関するものとは言えないが、今後こういった資料例が増加すれば、考古学からのアプローチも重要となろう。

最後に、今回出土した石製模造品について若干考察しておきたい。

先述したように、この種の剣形は、古墳の副葬品よりも、集落・祭祀遺跡からの検出例が多い。これは同じ石製祭器である有孔円盤にも当てはまる。さらに長野県神坂峠遺跡[注12]・同入山峠遺跡[注13]・福島県建鉾山遺跡[注14]などでは剣形の方向が提示された。その大要を以下に記す。まず、剣形の祖形が岡山県金蔵山古墳、群馬県藤岡市神田出土品（東京国立博物館蔵）にあるような鉄剣に類した石製剣へ求められるか否かは議論が分かれるが、遅くとも５世

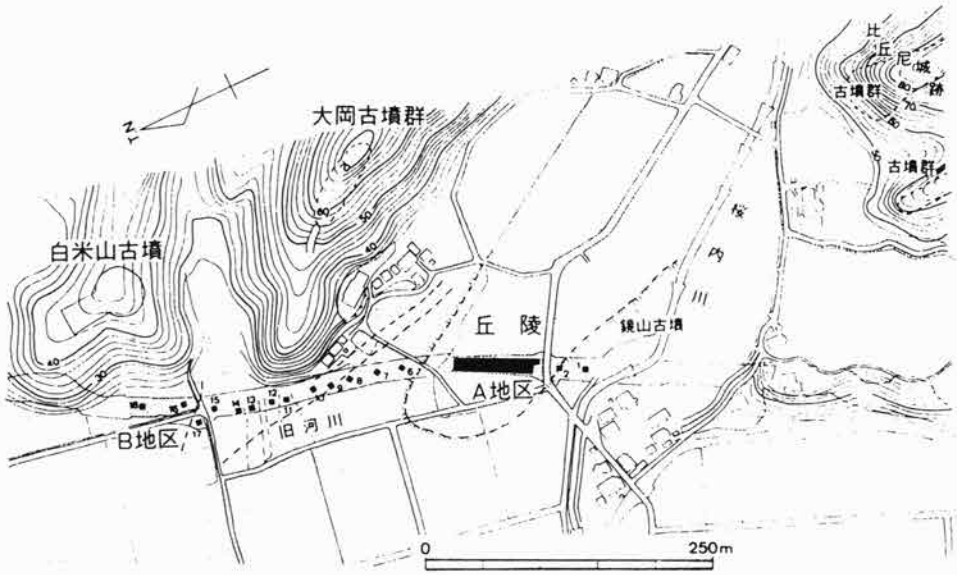
紀前半には祭祀遺跡出土品に系譜的に連続するものが出現している。奈良県布留遺跡・千葉県丁字山遺跡[注15]などの例が該当し、それらは刃部に鎬をもち、把を表現した写実性を留めるものであった。ところが5世紀後半になると、偏平で鎬を持たず、時には2孔を持つものもある。また、少量精製品から多量粗製品への移行は、その他の石製模造品の変遷観に一致する。下岡古墳例は、形態的な特徴から見て、他の遺物群との年代上の齟齬を見出せず、5世紀後半代の製作と見て大過ない。

ところが問題は、古墳副葬例が希少な剣形が下岡古墳内では棺内に収められていることにある。ただし、剣形の副葬例は大阪府カトンボ山古墳などがあり、皆無ではない[注16]。だが、古墳に副葬された石製模造品は刀子・斧・鎌の3点セットが主流である。そこで、石製模造品について、集落・祭祀遺跡に多い有孔円盤・剣形をB類、古墳に多い刀子・斧・鎌をA類と分けて、簡単な検討を加える。かつて、白石太一郎氏は、A・B両類が共伴して副葬される例の少ないことをもって、古墳の被葬者に対する祭祀と集落や祭祀遺跡で執行された神に対する祭祀とは、本来的に別個のものだとする見解を示した。つまり、両者は祭祀の対象及び目的を異にするという訳である。しかしながら、寺沢知子氏が指摘したように、B類の副葬はA類の副葬時期からあまり隔たらない時期に開始され、古墳と集落あるいは祭祀遺跡とを対立的に捉えることは、再考すべきだろう。とりわけ、加悦谷では作山1号墳でA類(刀柄形石製品〔砂岩製〕1点)がみられ[注17]、下岡古墳でB類が存在することは、同一地域の古墳祭祀として一括にはできない複雑性を示唆する。したがって、石製模造品のA・Bの副葬には、古墳祭祀の中で使い分ける、儀式上の意味があったはずと考える。そこで、下岡古墳で棺側に検出されている柱穴が注意される。これが文献で言う殯と内容的に合致するかはともかく、墳丘上の儀式でB類が使用されたことは疑いない。ところが、その一方で殯の実証例としてしばしば引用される千葉県東寺山石神2号墳[注18]ではA類を使用しているが、墳丘での埋葬儀礼以前に石製模造品が使用された確かな例でもある。つまり、石神2号墳では割竹形木棺内に2点の石枕があって、石製模造品自体にも型式差が認められるから、埋葬儀式におけるA類の副葬には施設内への収納以上の意味を見いだすことはできない[注19]。杉山晋作氏によると、A類である石製刀子は埋葬以前の儀式に使用されたと考えられるから[注20]、A類とB類の古墳祭祀における副葬方法の差には、儀式の手順の相違に由来したのではないかという想定が導き出されるのである。同じく、殯屋遺構が検出された兵庫県住吉東古墳でも、隣接した住居跡から剣形が検出されている[注21]ことは、この想定を支持する。したがって、石製模造品として一括されているとはいえ、A類とB類の差は、B類の方がより被葬者に対する祭祀(たまよび、たましずめ、あるいはけがれを払う)としての性格を強く出していると結論づけることができよう。　　(黒坪一樹・河野一隆)

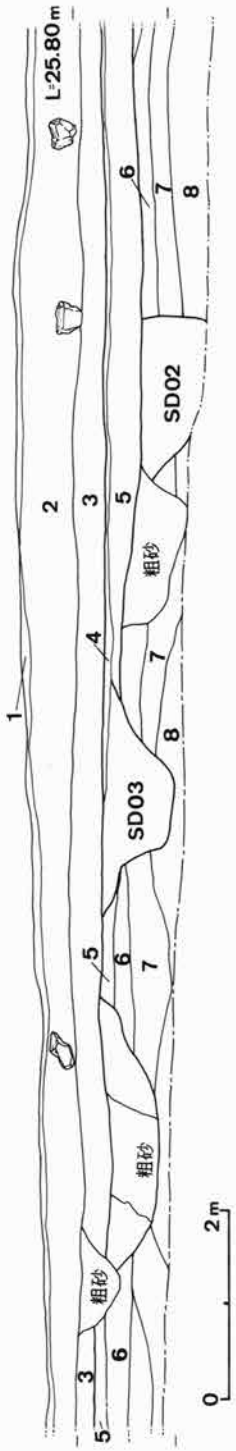
（3）桜 内 遺 跡

1．調査経過

桜内遺跡は、野田川右岸の河岸段丘上に立地し、鏡山古墳の南側を流れる現在の桜内川との合流付近一帯に広がっている。平成元年度の試掘調査[注22]によると、調査地の旧地形はすでにほ場整備が行われており、微地形から遺構の分布を調べることができなかった。したがって、試掘時に遺構・遺物の検出状況が顕著に見られたA地点に調査トレンチ（東西8～10m・南北70m）を設定して、重機掘削に入った。当調査地は、試掘調査から見ると、北端部は谷状の落ち込みを形成し、南半部は桜内川の氾濫原となるため、遺構の検出は、中間部からのみと考えられた。掘り進むと、トレンチ南側は氾濫原らしく多量の粗礫と砂粒の面が、暗緑色の水田還元面直下（第1遺構面）で露見した。部分的にオーバーフローしたような暗黒褐色粘質土の広がりを検出したが、顕著な遺構は存在しなかった。中間部から北半部にかけては、黒褐色粘質土を埋土とする中世の溝・土坑・井戸が次々に検出された。これら中世の遺構は、第2遺構面から掘り込まれていた。さらにもう1面、トレンチ北端部で、弥生時代後期の溝を掘り込んだ第3遺構面を検出した。トレンチ北端部は単に谷状の自然地形ではなく、人工的な溝がかかっていた。その他、弥生時代の柱穴痕らしき



第36図　調査地周辺地形図



第37図　トレンチ西壁断面図（粗砂は攪乱溝か？）

ものや、丹後震災の跡と見られる噴砂跡をトレンチ中間部から検出した。4m間隔の地区割杭をトレンチ中央に縦断するように設定し、遺構の実測や遺物の取り上げもこれらの杭を基準にした。遺構実測・写真撮影の後、埋め戻しを行い、作業を終了した。

2．層　位

トレンチ内の土層堆積は、第1～第3遺構面それぞれから掘り込まれた遺構によって複雑になっているが、基本的な層位は、トレンチ西壁を例にとると、およそ8層に分けて説明することができる。

第1層：表土

第2層：暗灰色細砂質土及び暗灰褐色粘質土

第3層：濁緑色粘質土(水田床土)

第4層：黄緑色粘質土(粗砂混じり)

第5層：灰褐色粘質土(白色細砂混じり)

第6層：黒褐色粘質土

第7層：青緑色細砂土(鉄斑含む)

第8層：明灰色粗砂

これらの層のうち、第1～第2層は、ほ場整備工事の際に攪乱された層で、新しい廃棄物を含む層である。第3と第4層は、近現代の水田層で、第3層が床土、第4層が水田層下の還元層でほ場整備以前の旧表土(第1遺構面)となろう。重機掘削は、この第3層まで除去するようにした。

第5層は、第2遺構面の検出層である。平安時代の黒色土器の椀や土師器皿などが多く出土した。溝(SD03)は本層から切り込んでいる。

第6層は、上の第5層とよく似た層であるが、よく観察すると、白色細砂の含有量が第5層に比べて著しく少ない。この第6層上面から溝(SD02)が掘り込まれている。また柱穴痕を多く検出したのもこの層からである。時期は第5層と同じ頃と思われ、平安時代末から鎌倉時代初頭となる。

第７層は、第３遺構面を形成する。弥生時代後期の溝（ＳＤ01）はこの層を掘り込む。第８層は、弥生時代後期以前の洪水層であろう。遺物の出土はなかった。

３．検出遺構

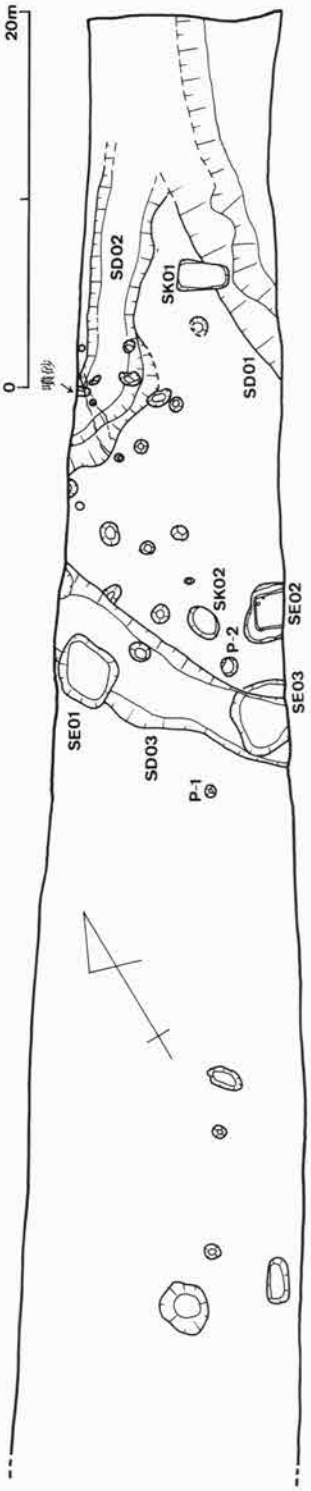
遺構は、溝４本（ＳＤ01～04）、井戸跡３基（ＳＥ01～03）、土坑２基（ＳＫ01～02）、柱穴痕25基、噴砂跡集中か所１か所である（第38図）。

溝（ＳＤ01）は、トレンチの短辺を斜めに走り、長さ5.6m・幅2.5m・深さ30cmを測る。埋土は、大きく２層に分かれ、上層は暗茶褐色極細砂、下層は黒褐色粘土である。鎌倉時代から弥生時代後期までの土器が出土し、特に弥生時代後期のものが多い。溝内を横切って５～６本の杭が並び、これらは「しがらみ」のような機能をもった施設であったと想定される。

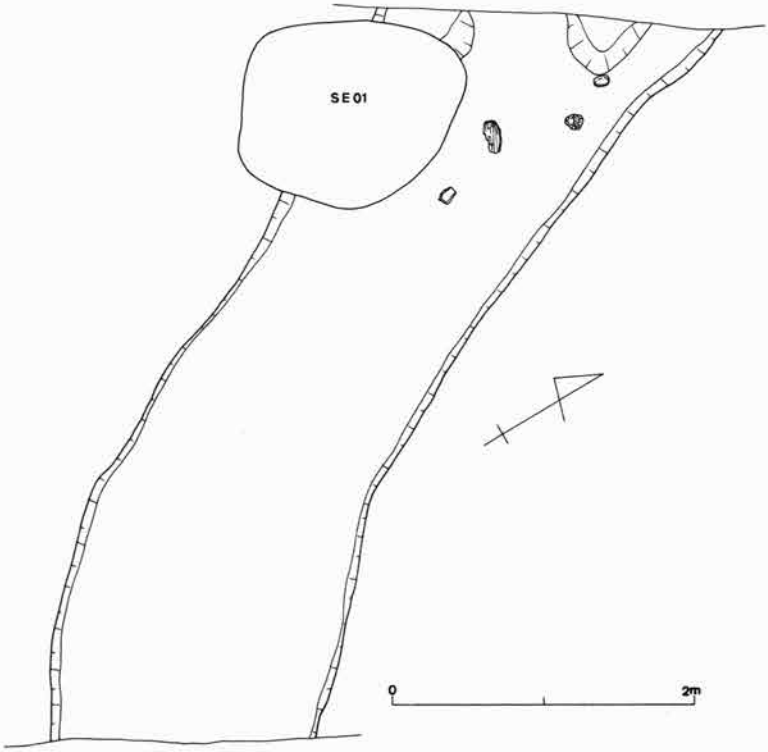
溝（ＳＤ02）は、トレンチ長辺に並行する南北溝である。長さ5.2m・幅2.4m・深さ30cmの規模である。黒褐色粘質土の埋土に須恵器を含み、おそらく中世溝であろう。また、埋土最上面に褐色粘質土が残っている部分に、1927年の丹後地震によると思われる噴砂跡があった。

溝（ＳＤ03）は、トレンチ短形方向に斜走する溝で、長さ5.7m・幅1.6m・深さ60cmを測る（第39図）。底面から黒褐色の椀と皿（丹後系）・土師器・木製品などを検出し、底の洪水砂中から縄文土器片が出土しているが、主に12世紀から13世紀に年代を特定できる。

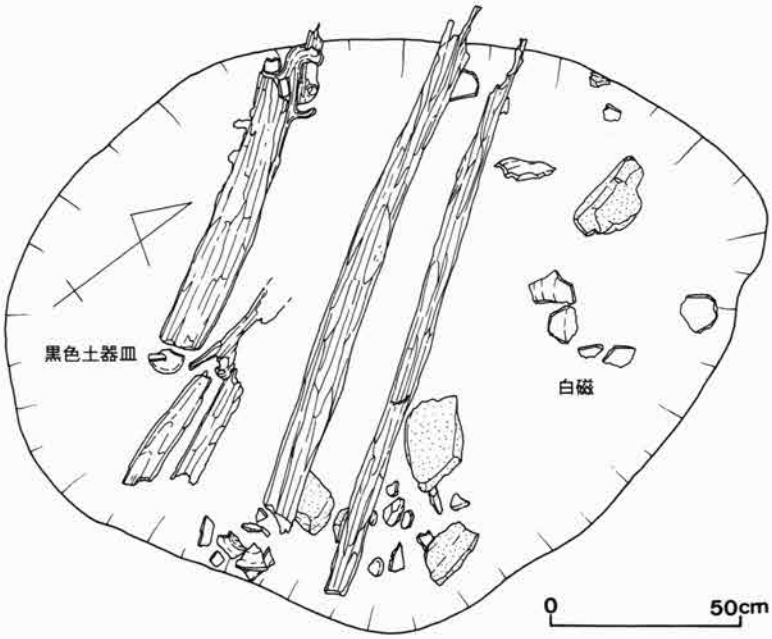
井戸跡（ＳＥ01）は、円形で、溝（ＳＤ03）を切り込んでいる。長辺２m・短辺1.6m・深さ40cmを測る（第40・41図）。埋土は黒褐色極細砂である。上面から黒色土器の椀と皿・白磁・土師器皿・木製品などが投げ込まれていた。これらは井戸の廃絶時に意識的に投棄されたものと判断できる。さらに下層から底にかけて



第38図　遺構平面図

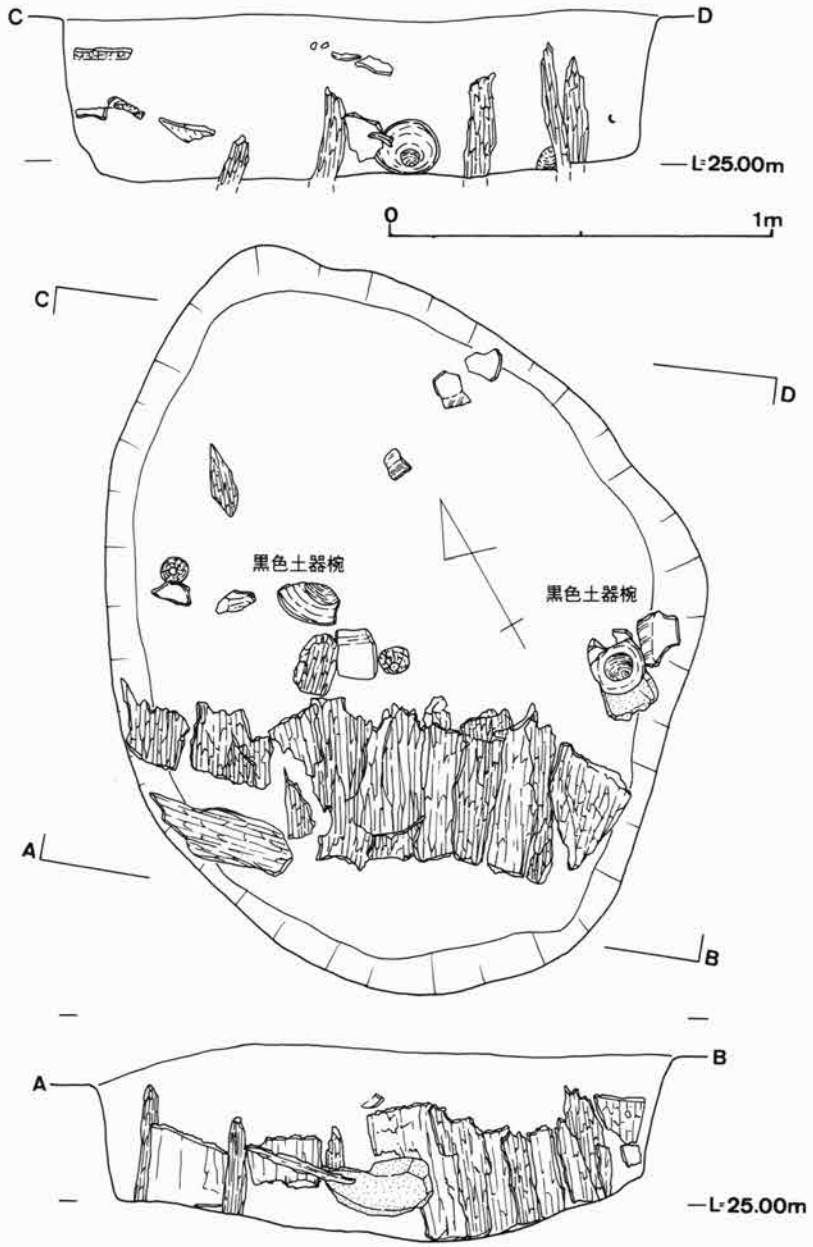


第39図　溝（ＳＤ03）平面図

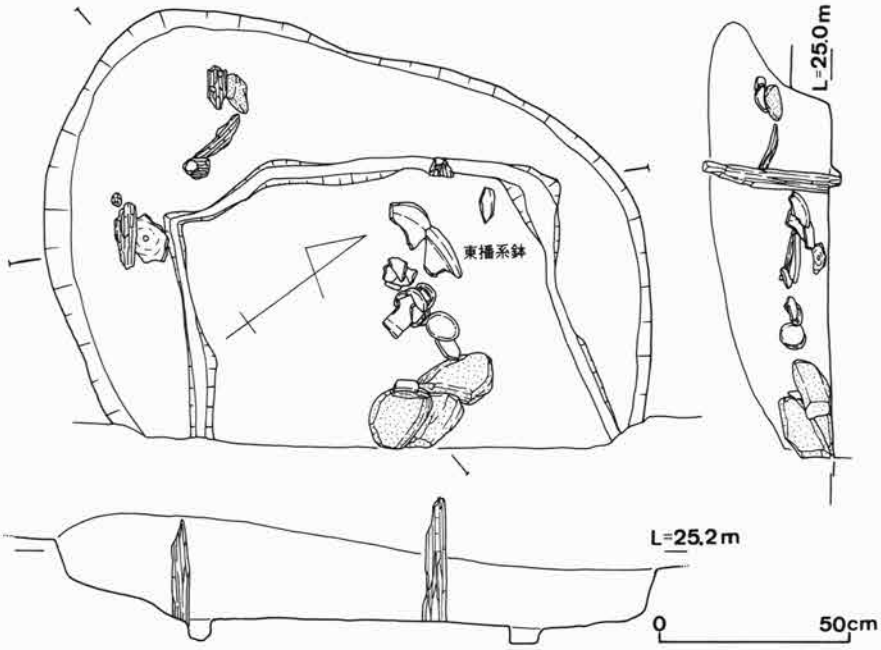


第40図　井戸（ＳＥ01）上層平面図

は、土圧で内側に倒れ込んだ数枚の縦板で組まれた井戸枠の一部を検出した。下層中からも、黒色土器の椀と皿・土師器皿が出土し、さらに瓦器の皿が1点出土した。瓦器皿と黒色土器類の共伴する確実な例となった。検出された3本の杭や上層の木材は、井戸枠の隅などを構成するものであろう。



第41図　井戸(ＳＥ01)下層平・断面図

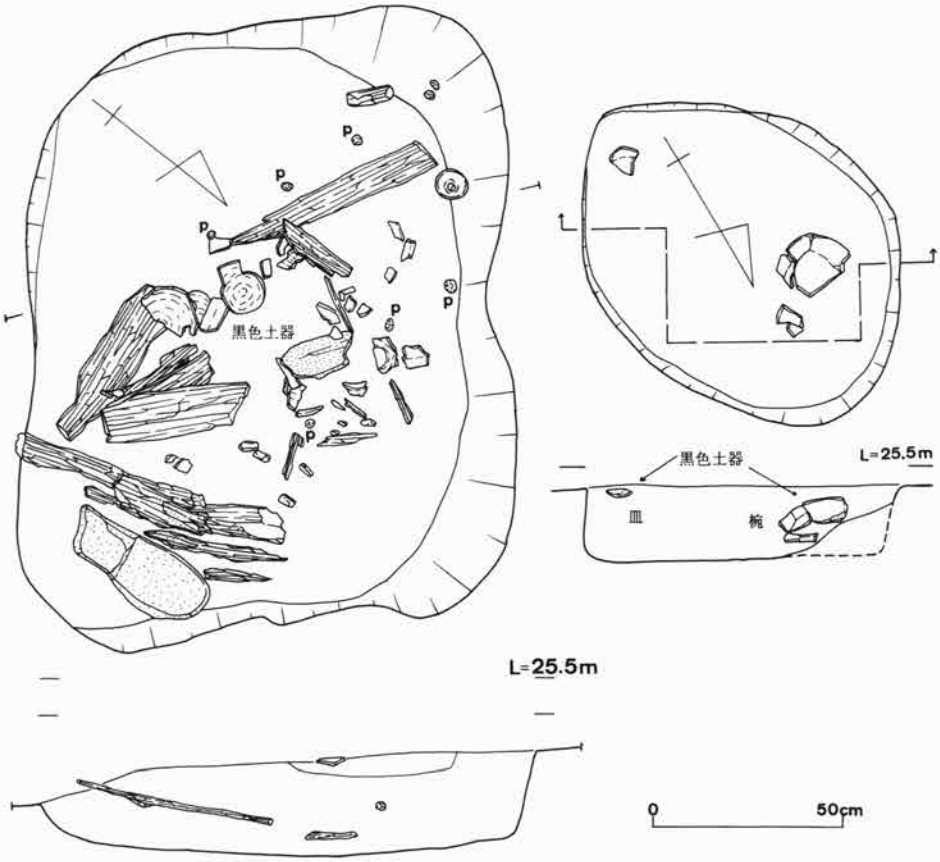


第42図　井戸（ＳＥ02）平・断面図

井戸跡（ＳＥ02）は、長辺1.6m・短辺1.1m分・深さ20cmのやや楕円形を呈する（第42図）。底から黒色土器・同皿・東播系須恵器鉢１点・土師器皿が出土した。これらの内、土師器皿は４枚が重なった状態であり、祭祀を執行したあとで投棄したことを推測させる。したがって、これらの土器群は極めて一括性が高いと判断した。これら以外には、不明木製品（腐朽した井戸側板片か？）・桃核数点が出土している。当初は土坑としていたが、以上の状況からみて、井戸跡と判断し、出土した土器群は井戸祭祀に伴うものとした。なお、約20cmという深さは、仮に第２遺構面から掘り込まれていたとしても約40～50cmにすぎない。積極的な証拠はないが、溜め井のような機能も想定できよう。

井戸跡（ＳＥ03）は、長辺1.6m・短辺1.3mを測る隅丸長方形の土坑で、上面を溝（ＳＤ03）によって削平されているが、現存する深さは25cmを測る（第43図左）。ここからは、黒色土器の椀・同皿・瓦器椀１点・白磁椀１点・木製品（農具・箸）各１点・桃核数点・栃の実１点が出土した。遺物の出土状況からみて、これも井戸跡と判断した。特に、丹後地方では希少な瓦器椀が出土し、ここでも黒色土器類との共伴が確認された。

土坑（ＳＫ02）は、長辺１m・短辺80cm・深さ20cmのやや楕円形を呈する小土坑である（第43図右）。上面が斜めに削平され、南西側がやや浅くなっている。土坑側面に沿って、黒色土器の椀と皿が１点ずつ出土した。完形品ではない。隣接する井戸跡（ＳＥ02・03）と時間的に近く、何らかの関係を持つものと言える。



第43図　井戸(ＳＥ03)・土坑(ＳＫ02)平・断面図(Ｐは桃核)

柱穴痕は、総計25基あるが、攪乱や自然木痕などと区別し得ない小土坑も多い。掘立柱建物跡などの抽出はかなわなかった。柱穴痕(Ｐ１)からは、弥生時代後期の高杯(脚柱部)、柱穴痕(Ｐ２)からは、須恵器の甕(体部)の大きな破片が出土した(第38図)。

噴砂痕は、第２遺構面から検出した(第38図)。激しい地震により地下水と混じり合って液状化した砂が、圧力によって上層に噴き上る。ここでは平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面上を走る筋のようなひび割れとして認められる。長さ約４ｍ分・最大幅約１cmを測る。東側のトレンチ深掘り断面をみると、下層(第８層)の砂粒が上層(第６・７層)の細砂土・粘質土をつき破って上昇している。砂粒は上位ほど粒子が細かくなっている。

(黒坪一樹・河野一隆)

４．出土遺物

出土遺物には大きくみて、第２・第３遺構面で検出された遺構中からのもの、各々の遺

構面間の包含層中から出土したものがある。ここでは、①第３遺構面から掘り込まれた溝（ＳＤ01）中の遺物及び包含層中ながら特徴的な遺物、②第２遺構面の溝・井戸・土坑中の遺物について報告したい。①を古墳時代以前、②を平安～鎌倉時代とする。

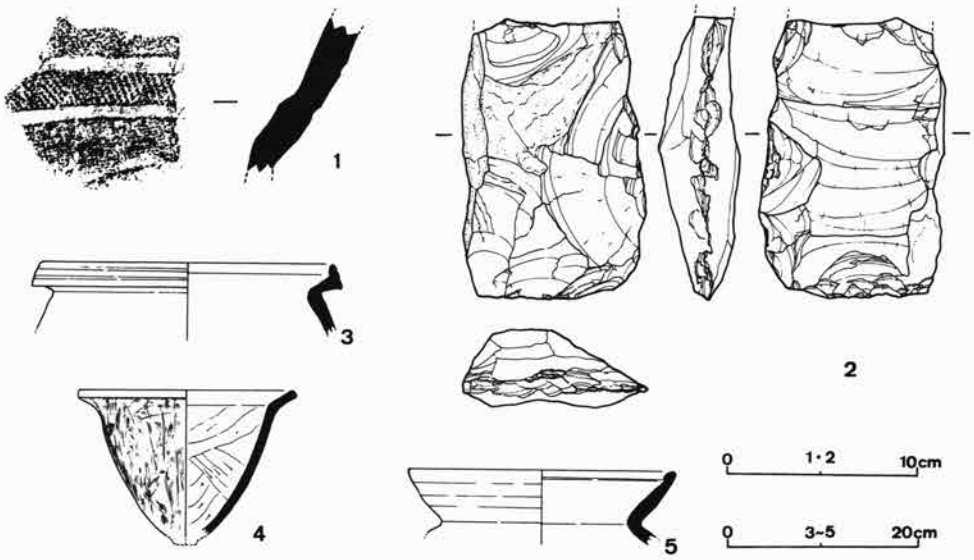
①古墳時代以前の遺物（第44図）

１は、縄文時代後期の深鉢形土器である。暗褐色の粗い胎土を持つ。口縁部から長い体部にかかる部分と思われる。深い２条の凹線の間に縄文を施すものである。溝（ＳＤ03）の最下層である黒色粘土と砂層の互層から出土した。２は、縄文時代の打製石斧の破損品である。残存長14.8cm･幅9.4cm･厚さ4.2cmを測る。３は、弥生時代後期の甕形土器の口縁部である。トレンチ北側の第２遺構面より下層で出土した。擬凹線を施した口縁部は、径30.5cmを測る。４は、弥生時代後期の鉢形土器である。体部に細かなハケ目調整が施される。口径22.8cm。５は、布留式併行期の甕形土器の口縁部である。口縁端部は明瞭な折り返しをもち、口径27.6cmを測る。３～５は、溝（ＳＤ01）から出土した。溝（ＳＤ01）からは、このように古墳時代前半期の遺物も出土したが、量的には弥生時代後期のものが多い。

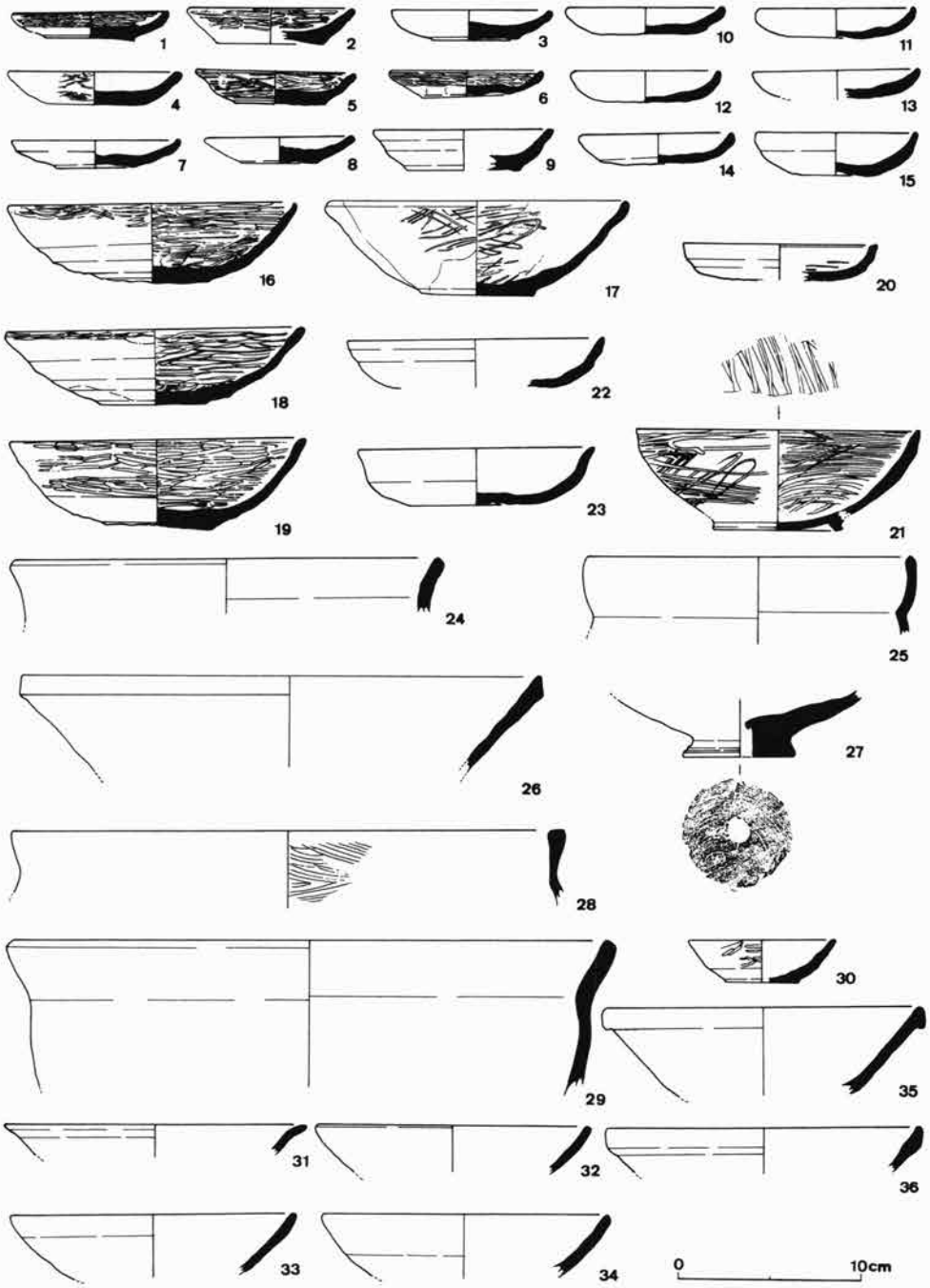
（黒坪一樹）

②平安～鎌倉時代の遺物

この時期に属する遺物は、黒色土器椀・皿・杯、瓦器椀・皿、土師器杯・皿・鍋、須恵器鉢、白磁椀・皿がある。整理箱で８箱分出土した。今回図示したのは遺構出土分のみである。ＳＤ03出土は１、ＳＥ01出土は２・３・５・８・９・19・20・29・30・32・34～36、



第44図　出土遺物実測図(1)



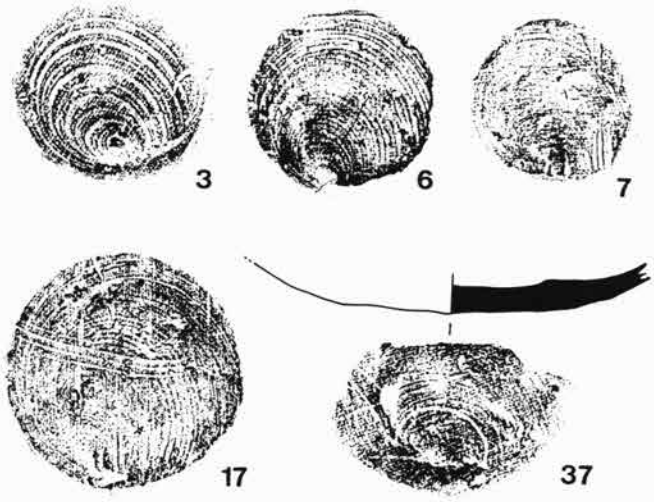
第45図　出土遺物実測図(2)

ＳＥ03出土は４・16・18・21・24・31・33、ＳＫ02出土は７・17、ＳＥ02出土は６・10～15・22・23・25～28である。色調は淡褐色以外のものを抽出して表記する。

１は黒色土器皿(両黒)で、内面と外面の上半に密なミガキを施している。底部は回転糸切りである。２は黒色土器皿(両黒)で、内面と外面の上半に密なミガキを施している。口径は8.8cm、底部は回転糸切りである。３は土師器皿で、内外面ともナデを施す。底部は回転糸切りで、色調は茶褐色である。４は黒色土器皿(両黒)で、内面はナデで、外面は密なミガキを施している。底部は回転糸切りである。５は黒色土器皿(両黒)で、内外面とも密なミガキを施している。底部は回転糸切りである。６は黒色土器皿(両黒)で、内面と外面上半に密なミガキを施している。底部は回転糸切りである。７は黒色土器皿(両黒)で、内面と外面上半に密なミガキを施している。底部は回転糸切りである。８は土師器皿で、内外面ともナデを施す。底部は回転糸切りである。他に比べて外形はでこぼこしており、緩やかな回転作用を利用して調整したことがわかる。９は黒色土器皿(両黒)で、調整は不明である。10は土師器皿で、内外面ともナデを施す。11は土師器皿で、内外面ともナデを施す。口径は8.4cmであるが、外形は歪んでいる。12は土師器皿で、内外面ともナデを施している。13は土師器皿で、内面と外面上半にナデを施す。14は土師器皿で、内面と外面上半にナデを施している。15は土師器皿で、内面と外面上半にナデを施す。10～15の土師器皿に共通する特徴は、口縁部に２段のヨコナデを施す点と、外底面中央付近を１か所押し上げてくぼみを作る点にある。口径は8.2～8.6cm程度で、器高1.7～2.3cmである。

16は黒色土器椀(内黒)で、内面と口縁部外面とに密なミガキを施している。外面中位から下半はナデを施している。底部は回転糸切りである。体部と底部との境はほとんど不明瞭な平高台である。17は黒色土器椀(内黒)で、内面と外面上半にミガキを施している。外面下半はナデで調整している。底部は回転糸切りである。18は黒色土器椀(内黒)で、内面と口縁部外面にミガキを施している。体部外面はナデで調整している。底部は回転糸切りである。19は黒色土器椀(内黒)で、内面と外面上半に密なミガキを施している。口径は15.9cmで、器高は4.9cmである。ミガキのない外面はナデで調整している。底部は回転糸切りである。底部と体部との境はほとんど不明瞭で、水平に切り離さずやや斜めになっている。これらの黒色土器椀に共通する特徴は密なミガキを施している点で、体部内面は横方向に、内底面は一方向に施す。胎土は淡茶褐色で、若干の砂粒を含んでいるが小片である。また、金色に光る雲母を少量含んでいる。底部と体部との境はほとんど不明瞭ではあるが、最終型式のように完全に不明瞭となるわけではない。

20は瓦器皿で、内外面とも黒色である。調整は不明瞭であるが、内面は横方向のミガキを施し、外面には若干のミガキを施しているらしい。口縁部は二段ナデを施した痕跡が明



第46図　出土遺物実測図(3)

瞭にわかる。21は瓦器椀で、内外面とも黒色である。内面には横方向の密なミガキを施し、内底面には一方向のミガキを施している。外面は底部近くまでミガキを施している。高台は貼り付けである。いわゆる「丹波型」に属する。口径は15.2cm、器高は接点がないため推定ではあるが5.5cmである。22は土師器皿である。口縁部外面と内面にはナデを施し、外面下半と底部は不調整である。口縁部のナデは横ナデで二段に施している。口径14cmで、器高は2.8cmである。23は土師器皿である。口縁部と内面にナデを施している。特に口縁部は強く一段ナデを施している。口径12.7cm・器高3cmで、他に比べて深身であり、口縁部が強く一段ナデを施したため外反しているのも相違する。24・25・28・29は同様の土師器鍋である。図化した製品は小片のためプロポーションを把握するのは難しいが、基本的には29のようになると思われる。外面は、全面に煤が付着しており、調整は不明である。口縁部内面はヨコハケを施している。色調は茶褐色である。26は須恵器鉢である。内外面とも回転作用を利用したナデを施している。口縁部は若干銀色に変色し、他は青灰色である。胎土はザラついたもので、いわゆる東播系の魚住産と思われる。27は土師器杯で、内外面とも横ナデを施す。底部は回転糸切りで切り離している。底部は1cmほどの円盤状高台で、中央部に直径、1.2～1.4cmの円孔をあけている。色調は淡茶褐色で、胎土はやや粗である。30は黒色土器杯(両黒)で、内面と外面の底部付近までミガキを施している。底部付近はナデで、底部は回転糸切りである。口径7.8cmで、器高2.5cmである。体部中位で屈折しており、口縁部周辺は強い一段ナデを施したことがわかる。31は白磁椀である。素地は粗製であるため、釉調は灰白色となっている。内面上半に何をイメージしたのか不明であるが、レリーフを施している。32は黒色土器椀(内黒)で、内外面ともナデを施す。33は黒色土器椀(内黒)で、内面はミガキで外面はナデを施す。34は土師器椀で、内外面ともナデを施している。35は白磁椀である。素地は粗製であるため、釉調は灰白色となっている。太宰府分類のⅣ類[(注23)]に相当し、中国南部産と思われる。口径17cmである。36も白磁椀

である。素地は35より白く、釉調は白色である。口縁部は玉縁状で、断面「く」の字状に肥厚している。37は土師器椀で、底部は回転糸切りである。他は摩滅のため不明瞭である。底部と体部との境は不明確である。

さて、以上のように個々の土器について説明したが、ここで編年についての把握をしておきたい。

黒色土器椀についてみると、ＳＥ01出土の19は、内面及び外面下半まで密なミガキを施している点と、平高台と体部の境が他に比べて明瞭な点から、今回出土した中でもっとも古い様相を示している。これに比べてＳＥ03出土の16・18は、内面及び口縁部外面に密なミガキを施しているが、ミガキの及ぶ範囲が省略されている点から、一型式新しい様相を示している。

土師器皿については、ＳＥ02出土の22は二段ナデであり、平安京の編年では12世紀中葉頃に比定される。23は一段ナデで、平安京の編年では新しい傾向であるが、深身であり平安京とは別系統と把握するべきで、編年の根拠にはならない。小皿は10～14が二段ナデであるが、22のように口縁端部を尖り気味にするのではなく、口縁端部をつまみ出して、やや丸味を付けたものである。このように口縁端部を尖り気味にせず、丸味もしくは隅丸台形気味にするのは新しい傾向である。

瓦器椀については、ＳＥ03出土の21は内面と外面下半までミガキを施しており、丹波の編年[注24]では12世紀中葉頃に比定される。ＳＥ01出土の皿は、口縁部を二段ナデで調整している点から12世紀中葉頃ととらえたい。

すなわち、今回出土した土器群は12世紀中葉頃を主体とし、それより一型式程度上下するもので構成されているといえよう。共伴した須恵器鉢や白磁椀の年代観も12世紀～13世紀の初め頃であり、上記の年代観と矛盾するものではない。従来、丹後では良好な中世遺物に恵まれず、黒色土器の編年案はいくつかあるものの、共伴関係が不明確で、安定した編年とはなっていなかった。それに対して、編年作業の進んだ丹波地域で出土する瓦器椀が発見されたことで、丹波の編年の利用が可能となった。また、土師器皿については平安京編年[注25]も援用できる特徴を有していたことから、２つの地域編年でクロスチェックできたことは幸いであった。

今後は、なぜ「丹波型」の瓦器椀が出土したものか、おそらく、これは丹波からの搬入品であると思われるが、この点について解明する必要がある。それは、瓦器椀が在地で消費されるもので、他地域に搬入されるものではないからである。

（伊野近富）

5．まとめ

今回の調査において、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物を検出した。調査地は、すでにほ場整備によって大きく削平を受けており、南北に長い調査区の南半では、桜内川の氾濫原に当たっていることもあって、顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。調査区の北半部からは、面的な削平が認められながらも、遺構群の残りは良好であった。北からみると、弥生時代後期の溝（ＳＤ01）、平安～鎌倉時代にかけての溝（ＳＤ02・03）・井戸跡（ＳＥ01～03）・土坑（ＳＫ01・02）、弥生時代の柱穴（Ｐ－１）などがある。

弥生時代後期の溝（ＳＤ01）は、調査区を斜めに走る幅の広い流路で、一部に杭を溝中に平行して打ち込み、人工的な処置の施された溝である。杭と杭の間隙を埋め、「しがらみ」状の遺構を形成していたと思われる。弥生時代後期の壺・鉢・高杯形土器のほか、古墳時代前半期の土器群（布留式併行期）の甕形土器などが出土している。

平安～鎌倉時代の井戸跡は３基（ＳＥ01～03）である。掘形は、ＳＥ01がほぼ円形、ＳＥ02は楕円形、ＳＥ03は隅丸方形である。井戸側材は、ＳＥ01で一部が検出され、ＳＥ02でそれとみられる板材が、ＳＥ03については板材をはめられていた部分の溝状痕跡が検出された。出土遺物については、いずれの井戸からも黒色土器の椀・皿、土師器皿が出土している。また、瓦器と黒色土器の共伴例として、ＳＥ01からは瓦器皿が、ＳＥ03からは瓦器椀がそれぞれ１点ずつ出土した。瓦器椀の形態は丹波型であるが、全体に楠葉型の影響も受けたものである。丹後地方における瓦器の出土例は、宮津市中野遺跡[注26]・峰山町古殿遺跡[注27]など、ごく少ない資料をあげうるにすぎない。今後も丹後地方における黒色土器の量的優勢は変わらないであろう。むしろ、黒色土器を日常的に使うこの地方の食器文化の中で、瓦器がどのような使われ方をしていたかに注意を払う必要があろう。今回の調査では、井戸が廃棄される際に、何らかの祭祀を行った形跡がある。井戸（ＳＥ02）中の土師器皿の重なり、桃核のまとまった出土状況などから、祭祀的なものを感じとることができる。このような遺構の中から瓦器の出土をみたことは、この地方では珍しいものである瓦器を日常的な食器としてではなく、極めて非日常的な祭祀用の器として使用した可能性が高い。黒色土器と瓦器の遺構内における共伴例は、この地方では初めてでもあり、今後の資料例の増加を待って慎重に検討すべき課題であろう。土器類の編年及び形態学的特徴については、出土遺物のところで述べている。

また、弥生時代後期から古墳時代前半期の溝（ＳＤ01）から出土した土器については、調査地の北側に近接する白米山古墳との関係で考えたい。白米山古墳を造営した人々の集落を求める上で、時期的にも近く、古墳に向かっていくこの遺構の存在は重要である。

さらに、噴砂については、1927年３月７日の北丹後地震に起因する可能性がある。北丹

後地震の噴砂としては、初めて遺跡内で検出されたことになる。[注28] 噴砂ではないが、大宮町の通り古墳群の3号墳[注29]で、北丹後地震による地滑りで主体部が分断され、ズレを生じた状態が検出されている。今後の丹後地方における発掘調査で、噴砂・断層などの北丹後地震に伴う現象例は増加するであろう。

（黒坪一樹）

おわりに

本概要報告は、蔵ヶ崎遺跡・下岡古墳・桜内遺跡の3か所にしぼったものである。まとめにもすでに書いたように、種々の成果がえられ、丹後半島の古代を考える上で重要な資料となった。

発掘調査のうち、蔵ヶ崎遺跡については、湧水が激しく、かつ期間が冬季にもかかわらず、作業に従事された方々の努力で、大きな成果がえられた。このような悪条件ではあるが、プラント・オパールを利用して分析した結果、かつて水田が存在したことがほぼ予想できたことは、今後いろいろな方法で遺跡を考える重要性を認識できた。また、木製品については、矢板を奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に見ていただき、1点はB.C.78年秋からB.C.77年初春までの間に伐採されたことと、他の1点はB.C.9年に伐採されたことが判明した。土器が純粋な単一層から出土したわけではなく、一括資料とはいえないが、年代観を考えるうえで参考資料となった。

下岡古墳については、京都教育大学の和田　萃教授から、殯の跡ではないかとのご教示をいただき、遺構の性格付けに関しておおきな指針となった。今後は、考古学の面からもこの問題にアプローチしていかなければならない。

桜内遺跡については、丹後の中世土器を編年する上で貴重な資料となった。また、井戸の祭祀を考える上でも資料がえられた。このように、丹後半島の中世考古学資料を増加させたことは、望外のことであった。

（伊野近富）

注1　調査に際し、京都府宮津土木事務所・加悦町教育委員会・京都府教育委員会など関係諸機関にご協力いただいた。また、佐藤晃一氏・和田　萃氏・寒川　旭氏・藤原宏志氏・甲元眞之氏には現地並びに本報告作成時にご指導いただいた。記して感謝の意を表したい。

なお、調査参加者は以下のとおりである（順不同・敬称略）。

小牧義雄・宮野勝行・市田操子・山上初野・土井正一・能勢　昇・野村幸代・杉本利一・斉藤優・中前幸子・永江章志・杉原美加・林田登之・山本弥生・田中喜一・森垣実夫・高橋志津

子・森岡梅子・保坂　亨・小椋博之・森　友美・羽生夕紀子・長岡深緒・松崎才枝・杉本守・香山利幸・小林一三・安田由美子・岩田典子・山崎とも子・鈴木美智子・岩本みどり・西原絵美子・安田直子・藤田千佐子・(社)宮津与謝広域シルバー人材センター

注2　佐藤晃一「須代遺跡第1次発掘調査概要」(『加悦町文化財調査概要』第7集　加悦町教育委員会)　1988

注3　宮崎大学藤原宏志氏の御協力を賜った。

注4　松本岩雄「出雲・隠岐地域」(『弥生土器の様式と編年』　木耳社)　1992

注5　正岡睦夫「備前地域」(注4文献と同じ)

注6　黒崎　直「農具」(『弥生文化の研究』　雄山閣)　1985

注7　佐原　眞「山城における弥生式文化の成立」『史林』50-5　1967

注8　井藤暁子「近畿」(『弥生土器』Ⅰ　ニュー・サイエンス社)　1983

注9　「2．住吉宮町遺跡(第9次調査)」(『地下に眠る神戸の歴史展Ⅶ－発掘調査速報展－』　神戸市教育委員会)　1989

注10　井之口章次編『葬送墓制研究集成』第二巻　喪葬儀礼　名著出版　1979

注11　和田　萃「殯の基礎的考察」『史林』52-5　1969

注12　大場磐雄・椙山林継ほか『神坂峠』　1969

注13　椙山林継『入山峠』　1973

注14　亀井正道『建鉾山』　1966

注15　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』2　1968

注16　森　浩一・宮川　渉『堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の調査』　1953

注17　作山1号墳の刀柄形模造品は、柄頭から柄元までの模造品で、他に類例がない。柄の作りは断面がほぼ卵形を呈し把握に適している。このような、一部をうつした石製刀子の類例としては、奈良県室宮山古墳に1点ある。なお、奈良県櫛山古墳の位牌形石製品もこのような刀柄形模造品と考えられる。

注18　沼沢　豊ほか『千葉市東寺山石神遺跡』　1977

注19　沼沢　豊「石神2号墳の諸問題」(『千葉市東寺山石神遺跡』(前掲))

注20　杉山晋作「石製刀子とその使途」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇)　1985

注21　『神戸市住吉東遺跡現地説明会資料』　神戸市教育委員会　1988.8.7

注22　岩松　保「2．国道176号バイパス関係遺跡(桜内遺跡)平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991

注23　横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

注24　伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究

センター）　1987

注25　伊野近富・藤井善布他「大内城跡」（『京都府遺跡調査報告書』第３冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1984

注26　中嶌陽太郎・杉原和雄・徳田　新他『中野遺跡第２次発掘調査概要』　宮津市教育委員会　1981

中嶌陽太郎『中野遺跡第３次発掘調査概要』　宮津市教育委員会　1982

中嶌陽太郎・中嶋利雄・徳田　新『中野遺跡第４次発掘調査概要』　宮津市教育委員会　1983

注27　平良泰久・奥村清一郎・青山　透他「3.古殿遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』　京都府教育委員会）　1978

注28　寒川　旭氏のご教示による。

注29　石崎善久「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)開発関係遺跡昭和62・63、平成３年度発掘調査概要　(3)通り古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第50冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

2. 定山遺跡第３次発掘調査概要

1. はじめに

定山遺跡は、京都府与謝郡岩滝町字弓木に所在する。定山遺跡は、ほ場整備に伴い、岩滝町教育委員会によって過去２次にわたる調査が実施されている[注1]。したがって、今回の調査は第３次調査となる。調査は、府営住宅石田団地建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け実施した。

現地は、荒れ地となっており、調査に際しては樹木伐採・下草伐採から開始した。また、今回の調査地は、第１次・第２次調査地より離れているため、グリッドによる試掘調査を実施し、遺構の遺存状況の良好な部分を中心に面的な調査を実施する方針を立てた。

試掘調査は、５月18日から開始し、４ｍ×４ｍのグリッドを計７か所設定した。その結果、調査対象地内の南半部分は、耕作土直下で地山になり、遺物も細片化したものが小量出土したのみであった。一方、北半部分は、完形個体を含む遺物が出土し、遺構の残存状況も良好であると判断された。

この試掘調査の状況を受け、重機を用い、北半部分に対し面的な掘削を開始した。その結果、上層では中世の土坑・テラス状の遺構・中世末期の溝などを検出し、下層からは竪穴式住居跡５棟・土坑・鍛冶炉など古墳時代後期を中心とする遺構群を検出することができた。さらに下層には弥生時代後期～古墳時代前期の包含層を確認したが、断ち割りの結果、遺構は存在しないことを確認し、調査は古墳時代後期の面で終了した。

遺跡の概要の把握できた８月７日には現地説明会を実施し、約70名の参加者を得ることができた。その後、最終的な図面の作成、空中撮影などを行い、８月27日、すべての機材を撤収し、現地調査を終了した。なお、調査面積は約1,000㎡となった。調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。

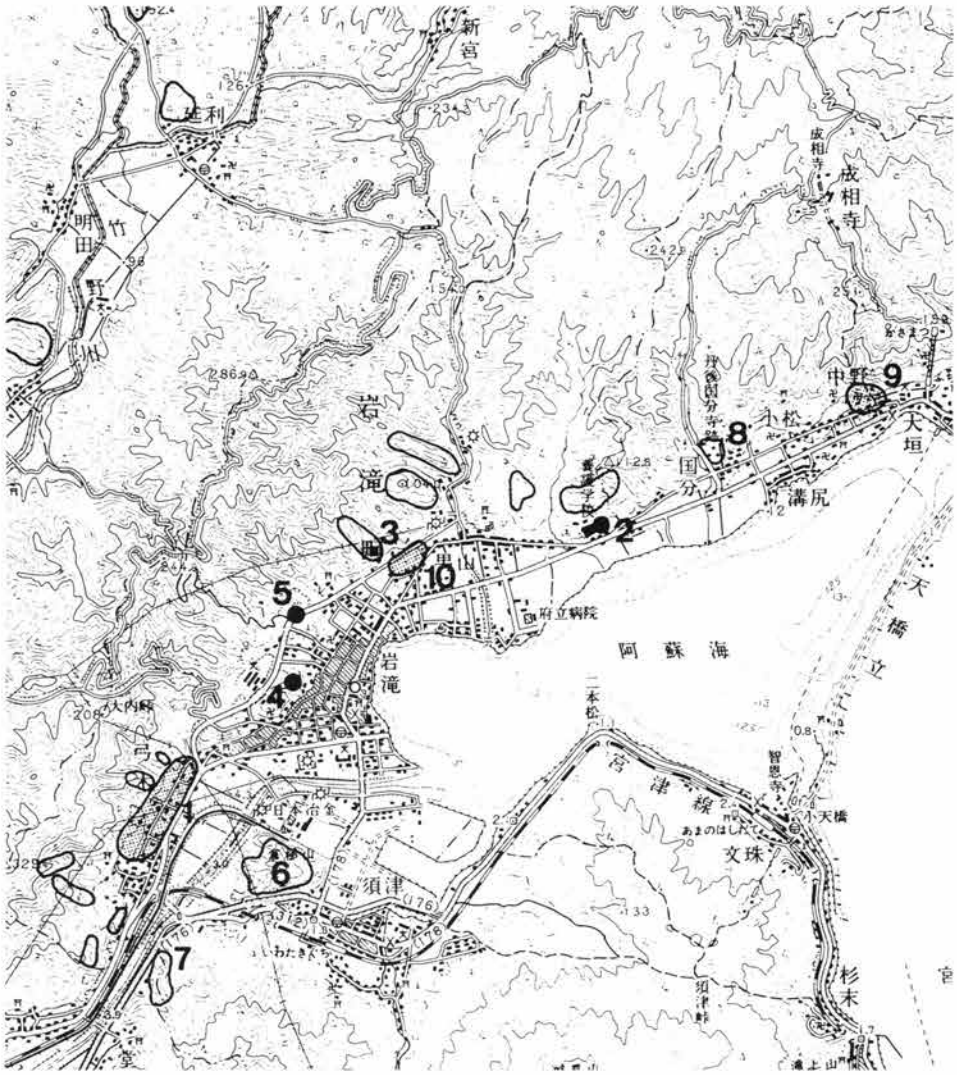
なお、現地調査に際しては、地元の方々をはじめ、作業員・調査補助員・整理員として参加していただいた[注2]。本概要報告の位置と環境・過去の調査については、京都教育大学学生保坂　亨が執筆し、その他は石崎善久が担当した。

なお、本概要報告で用いた標高は絶対高である。方位は、第49図のみ真北を示し、その他は磁北を記した。なお、磁北は真北に対し、0°29′59″西に振る。

（石崎善久）

2．位置と環境(第47図)

丹後と丹波の境をなす大江山山系に水源を発する野田川は、狭長な通称「加悦谷」と呼ばれる谷平野を形成し、特別名勝「天橋立」で画された内海、阿蘇海に流れ込む流域延長約16kmの河川である。現在の行政区分では、上流域は加悦町、中流域は野田川町、河口部左岸地域は岩滝町、右岸地域は宮津市にあたる。定山遺跡は、河口部左岸の低位段丘上に立地する。



第47図　調査地周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

1.定山遺跡　2.法皇寺古墳　3.千原２号墳　4.日内古墳　5.岩滝丸山古墳
6.倉梯山古墳群　7.霧ヶ鼻古墳群　8.丹後国分寺跡　9.中野遺跡　10.千原遺跡

野田川流域の主要な遺跡について概観する。この地域の古墳は上流域右岸を中心に展開し、前期末頃の大型前方後円墳である加悦町蛭子山１号墳の築造以降、作山古墳群・温江大塚古墳・加悦大塚古墳などの前期古墳、中期では鴫谷東古墳群・後野円山古墳群など、首長墓と考えられる古墳が、連綿と築造されている。また、前期古墳には丹後地域独自の丹後型円筒埴輪と呼ばれる、特殊な円筒埴輪が採用されている点が注意される。

河口部では、前･中期の古墳として右岸地域の岩滝法皇寺古墳、岩滝丸山古墳、日の内古墳、左岸地域の霧ケ鼻古墳群などが確認されている。法皇寺古墳は全長74mの前方後円墳であり、長持形石棺を内部主体とし、石枕・丹後型円筒埴輪を用いた埴輪棺などが出土した。岩滝丸山古墳は直径30mの中型円墳であり、組合式箱形石棺内から車馬神獣画像鏡・素環頭大刀・銅鏃などが出土した。日の内古墳は３基の木棺直葬が確認され、仿製獣形鏡･玉類･鉄剣などが出土した。霧ケ鼻古墳群は14基の小古墳により構成され、前期から後期にかけて造墓されている。このように河口部では中規模古墳を中心に築造されている。

後期になると、加悦谷にも横穴式石室が導入される。初期の横穴式石室として、６世紀中葉頃の加悦町入谷西Ａ－１号墳・宮津市倉梯山１号墳・野田川町霧ケ鼻古墳群など、竪穴系横口式石室に類似する石室が構築されている。その他、加悦町入谷古墳群・浪江古墳群・池田山古墳群・タニカベ古墳群・鞭谷古墳群・船山古墳群など、上流域右岸に横穴式石室を内部主体とする古墳群が数基～数十基単位で群を形成している。

河口部付近では横穴式石室の分布は比較的散漫であるが、岩滝町では大風呂古墳が調査されている。また、阿蘇海を見下ろす丘陵上に造られた千原２号墳は、墳形が２重の列石をもつ方墳であり、毛彫金銅馬具を副葬していた。その遺物から７世紀第２四半期頃に築造された終末期古墳として注目される。

これら、古墳時代前期～後期にかけての墳墓の状況がある程度把握可能なのに対し、古墳時代集落の様相には不明な点が多い。周知の遺跡として、岩滝町内では千原遺跡・定山遺跡などが知られている。定山遺跡については２次にわたる調査が実施されており、その内容については後述する。千原遺跡では古墳時代の遺物は確認されているが、遺構については不明である。

歴史時代で、注目されるのは阿蘇海周辺に丹後国分寺が造営される点である。国分寺周辺では瓦が出土する遺跡として、宮津市中野遺跡・岩滝町千原遺跡・今回調査の定山遺跡などが知られている。また、丹後国府も阿蘇海周辺に存在していたものと推定されており、阿蘇海周辺地域は奈良～平安時代に丹後地方における中心的な位置を占めていたものと考えられる。

（保坂　亨）

3．過去の調査(第48図)

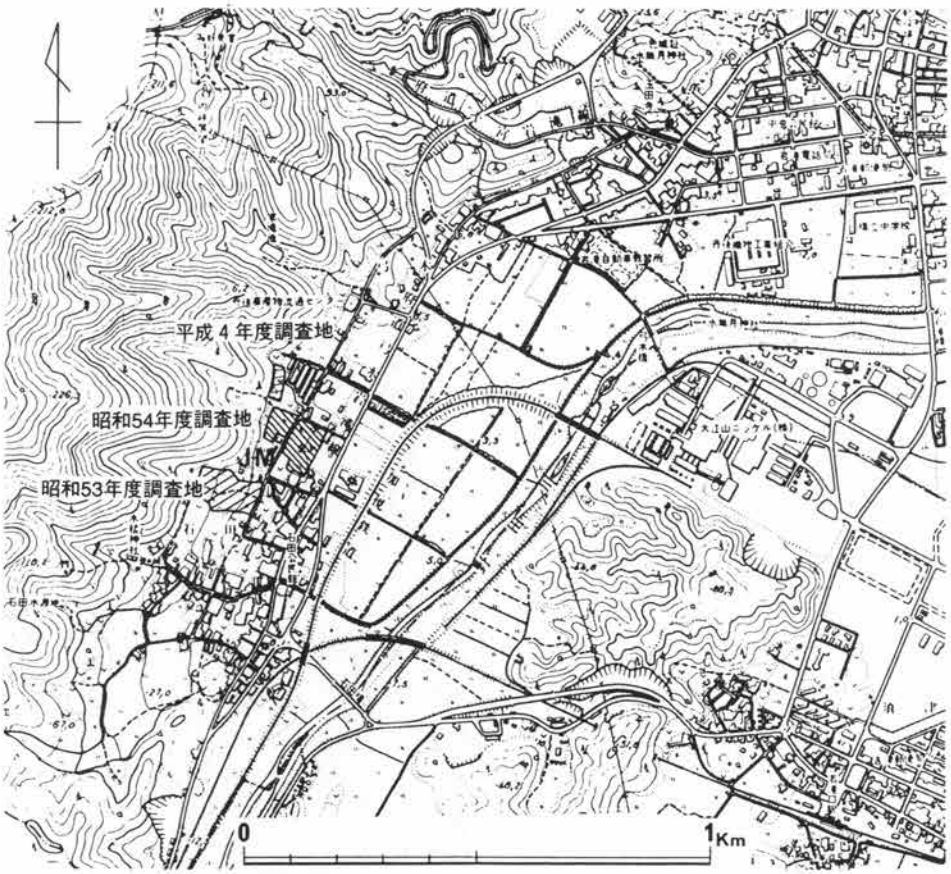
定山遺跡の所在地一帯では、昭和48年の民家建築工事の際や付近の畑などから土器片や石器などが出土しており、かなり広範囲に及ぶ集落跡である可能性が指摘されていた。昭和52年にこの地域で、弓木地区団体営ほ場整備事業が行われることになり、それに伴う発掘調査が、昭和53・54年度の２次にわたり岩滝町教育委員会により実施された。今回の調査とも密接な関連をもつため、ここでは第１次・第２次調査成果について概観する。

第１次調査では、竪穴式住居跡・井戸跡・杭列・水路跡・しがらみ・石垣などの遺構が検出され、土師器・須恵器・黒色土器などの土器類をはじめ、磨製石斧や打製石斧など石器類などが出土した。これらの出土遺物から、この地域が縄文時代・古墳時代・平安時代にわたる複合遺跡であることが確認された。竪穴式住居跡は限定されたトレンチの中に３基が切り合って検出されており、周辺にも多数存在するものと考えられる。住居跡の時期は、床面出土の遺物から、いずれも古墳時代後期に営まれたと考えられている。杭列は台地の傾斜に直交する方向で打たれており、ある時期の水田耕作に伴う畦畔の遺構と推測された。また、溝も各トレンチで検出されている。平安時代の遺構として、井戸・石垣などがある。井戸は曲物を用いたものと、石積みのものの２基が存在する。石垣は、「L」字状に曲がるものが検出され、屈曲部から漆器椀片・烏帽子・土製勾玉などが出土した。この石垣の性格について、祭祀関連遺構もしくは地方官人の邸宅との推測がなされている。

第２次調査は、第１次調査対象地のすぐ北で実施された。遺構としては井戸・溝などが検出されたが、なかでも大きな調査成果として、横穴式石室墳が検出されたことをあげることができる。赤花古墳と命名されたこの古墳は、大きく削平を受け、墳形・墳丘規模・外部施設の有無などについては明らかにできなかった。埋葬施設も基底部のみしか残存していなかったが、その検出状況や周辺に散在する石室部材などから、竪穴式石室と考えられた。現段階では近年、丹後地方で数多く検出されている竪穴系横口式石室に類する横穴式石室と考えることが妥当であろう。出土遺物には須恵器・玉類・金環などがある。なお、その後の分布調査により、さらに周辺に埋没している古墳の存在が確認されており、複数基からなる古墳群と考えることができる。平安時代の遺物として、人形や下駄などの木製品が多く出土したことを特筆することができる。人形の出土例は丹後半島ではほとんどなく、平安時代に中央との関連をもった遺跡として評価することができよう。

このような、第１次・第２次調査の成果から古墳時代後期においては、第１次調査地が中心的な居住域であり、第２次調査地が定山遺跡の墓域であったものと考えられている。

今回の調査対象地は第２次調査地の北側にあたることとなり、定山遺跡の墓域の北・遺跡の縁辺部を調査したこととなる(第48・49図)。　　(保坂　亨)



第48図　調査地位置図(注１より転載、一部加筆)

４．調　査　概　要

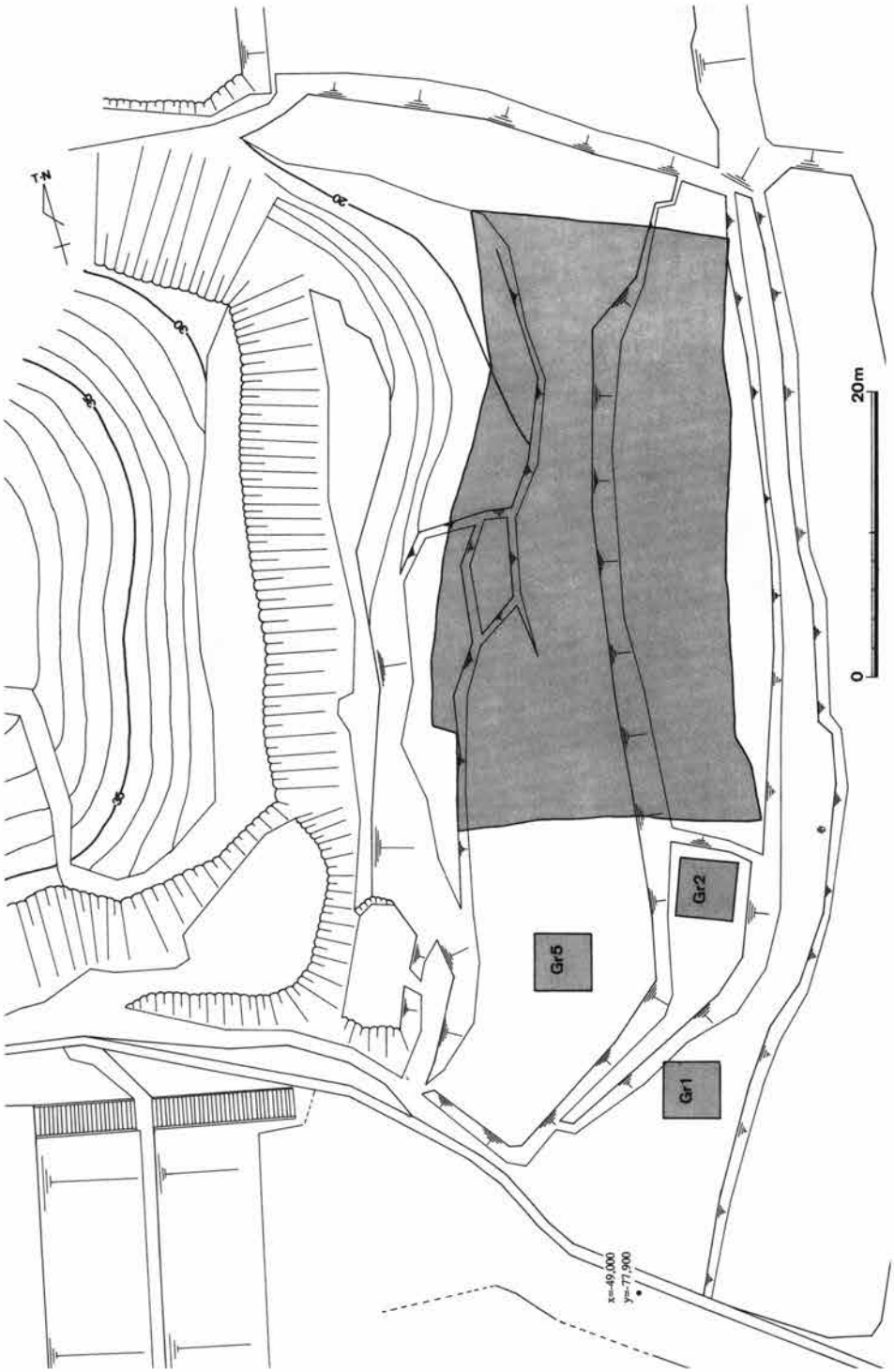
①基本的層序(第50図)

今回の調査地の、基本的な層序は第50図に示すとおりである。ここで図示したのは、調査地のほぼ中央の南北軸セクションである。試掘調査の段階で、表土－耕作土(もしくは客土)－床土－包含層という基本的な層序を確認したため、ここに図示したのは、床土を除去した後の土層断面図である。なお、このセクション中には、ＳＸ01・ＳＸ02の断面がかかっている。

土層は、基本的に７層に大別することが可能である。

第Ⅰ層は、ＳＸ01埋土である。黄褐色粘質土を基本的な埋土とする。土色の差異から第Ⅲ層と明確に分離できる。

第Ⅱ層は、暗灰褐色土層である。ほぼ、単一の土色・土質であり、奈良時代～中世頃の遺物を包含する。近世初頭の遺構は、この面をベースとしている。



第49図　グリッド及びトレンチ配置図

第Ⅲ層は、ＳＸ02埋土である。暗灰褐色土を基本的な埋土とし、炭・焼土粒などを多量に含む。炭の包含される量・焼土の包含される量によって５層に細分できるが、基本的に大きな差異はなく、短期間のうちに埋没したものと判断される。後述するＳＸ02から出土した遺物は、すべてこの第Ⅲ層から出土したものであって、多量の須恵器・土師器をはじめ、鉄滓・砥石などが出土している。また、ＳＸ02内の鍛冶炉は、この第Ⅲ層を除去した後に検出された。

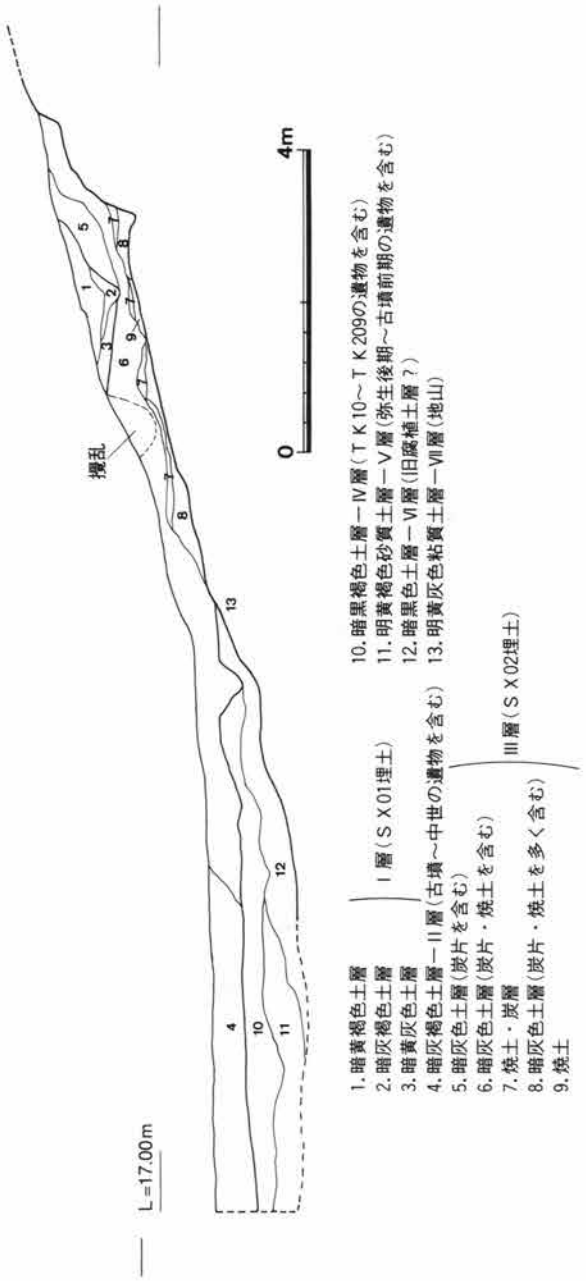
第Ⅳ層は暗黒褐色土層である。ほぼ、単一の土色・土質であり、ＴＫ10～ＴＫ209併行期と考えられる遺物を包含する。ＳＨ03～05はこの第Ⅳ層を切り込んでいる。

第Ⅴ層は暗黄褐色砂質土層である。ほぼ、単一の土色・土質であり、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる遺物を包含する。ＳＫ01は、この面をベースとしている。

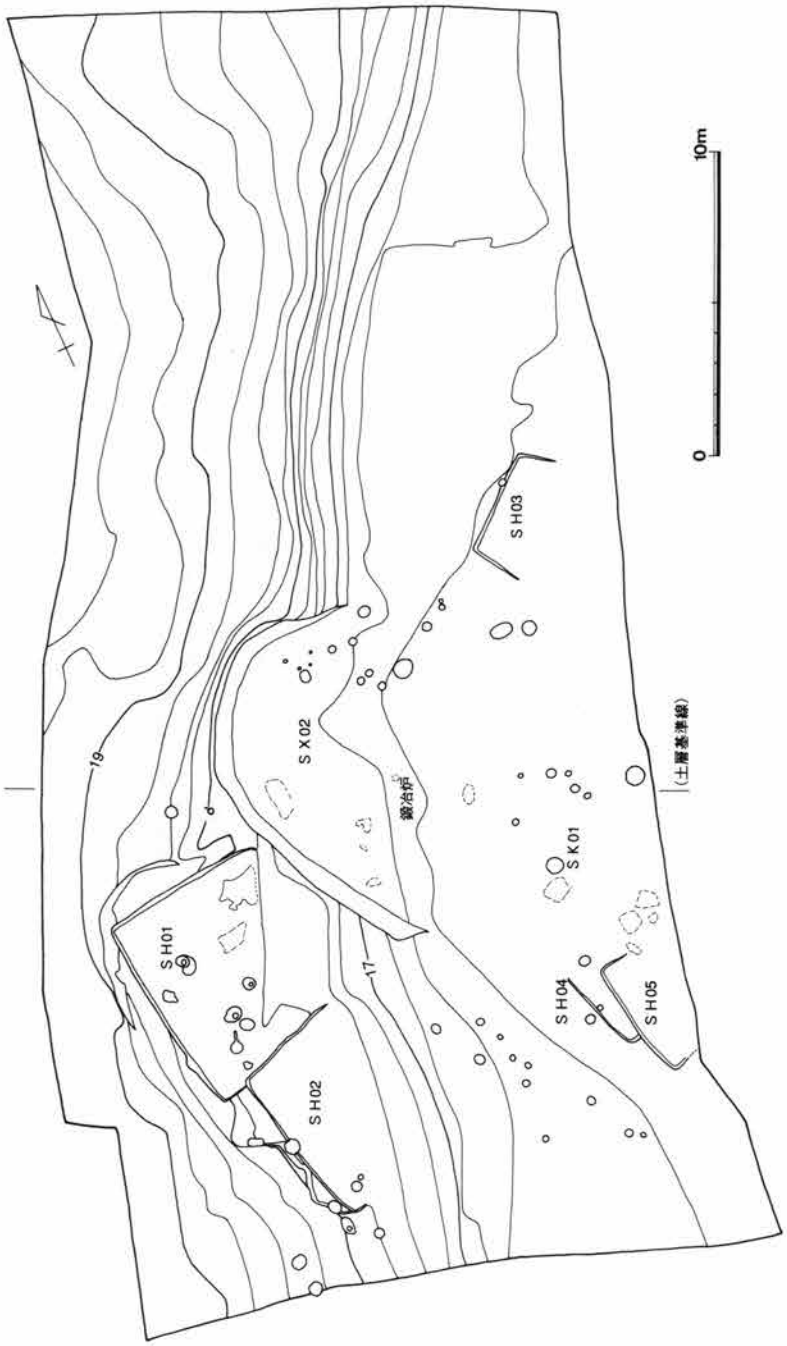
第Ⅵ層は暗黒色土層である。遺物の出土は認められず、弥生時代後期以前の腐植土層と考えることができる。

第Ⅶ層は明黄灰色粘質土層である。遺物の出土は認められず、地山と判断される。

以上が、トレンチ中央部分の土層堆積状況であるが、トレンチ西半部分



第50図　トレンチ土層断面図(1/100)



第51図　検出遺構配置図(1)　(古墳時代)

では床土直下が第Ⅶ層であり、トレンチ東半では、第Ⅲ層～第Ⅶ層がトレンチ中央部分と同様の状況で堆積していた。

②古墳時代の遺構・遺物

ア．検出遺構　古墳時代に属する遺構として竪穴式住居跡ＳＨ01～05、鍛冶炉跡及びそれに伴うと考えられる掘り込みＳＸ02がある。また、竪穴式住居跡ＳＨ03～05の掘り込まれていた第Ⅲ層の下層から検出された土坑ＳＫ01もこの項で概要を説明する(第51図)。

ＳＫ01(第52図)　調査地内の東、第Ⅳ層下層で検出された土坑である。掘り込みは第Ⅴ層から行われる。埋土は暗灰色土の単層である。土坑の平面はいびつな楕円形を呈し、長軸0.8m・短軸0.6m・深さ0.2mを測る。また、土坑の底部は平坦である。

土坑内からは土師器甕２個体・高杯脚１個体、須恵器杯蓋１個体・杯身１個体が出土した。これらの土器はいくつかの破片となっており、土坑内に投棄されたような状況であった。埋土の状況や、出土状況･接合関係から、ＳＫ01出土土器は一括性の高いものである。

出土遺物には須恵器・土師器がある(第53図)。１は、須恵器杯蓋である。細片ではあるが、復原口径13.0cmを測る。天井部との境の稜は、１条の沈線を施すことにより表現され、口縁端部は段をなす。天井部のヘラケズリはていねいである。

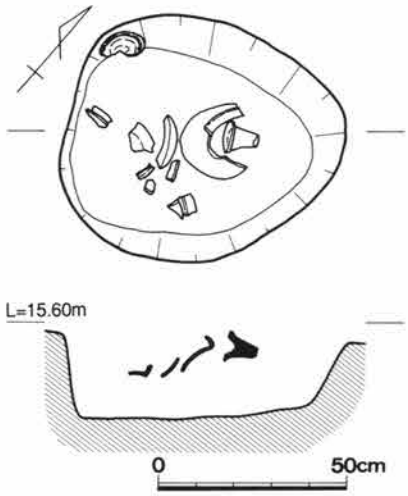
２は、須恵器杯身である。ほぼ完形品で、口径11.6cm・器高4.8cm・受け部径13.9cmを測る。立ち上がりは高く、口縁端部は段をなす。底部のヘラケズリはていねいである。

３・４は、土師器甕Ａである。短く外反する口縁部をもつ。３・４とも外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリである。３は復原口径13.1cm、４は復原口径15.0cmを測る。

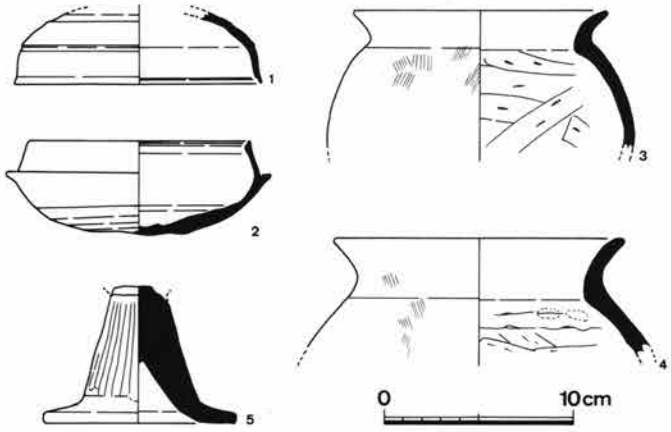
５は、土師器高杯である。脚部のみ遺存していた。中実の脚柱部から、水平方向に短く広がる脚端部を有する。外面は縦方向のヘラミガキを施す。内外面丹塗りである。

以上、ＳＫ01出土遺物は須恵器の形態から、ＴＫ10型式並行期と考える。

ＳＨ01(第54図)　調査地のほぼ中央、標高17.8m付近に立地する竪穴式住居跡である。平面は隅丸方形プランと考えるが、東辺はＳＸ01、南辺はＳＨ02に切られている。規模は、完存する西辺で6.7mと比較的大型の住居跡である。また、周壁溝を有するが完周するものではない。



第52図　ＳＫ01実測図



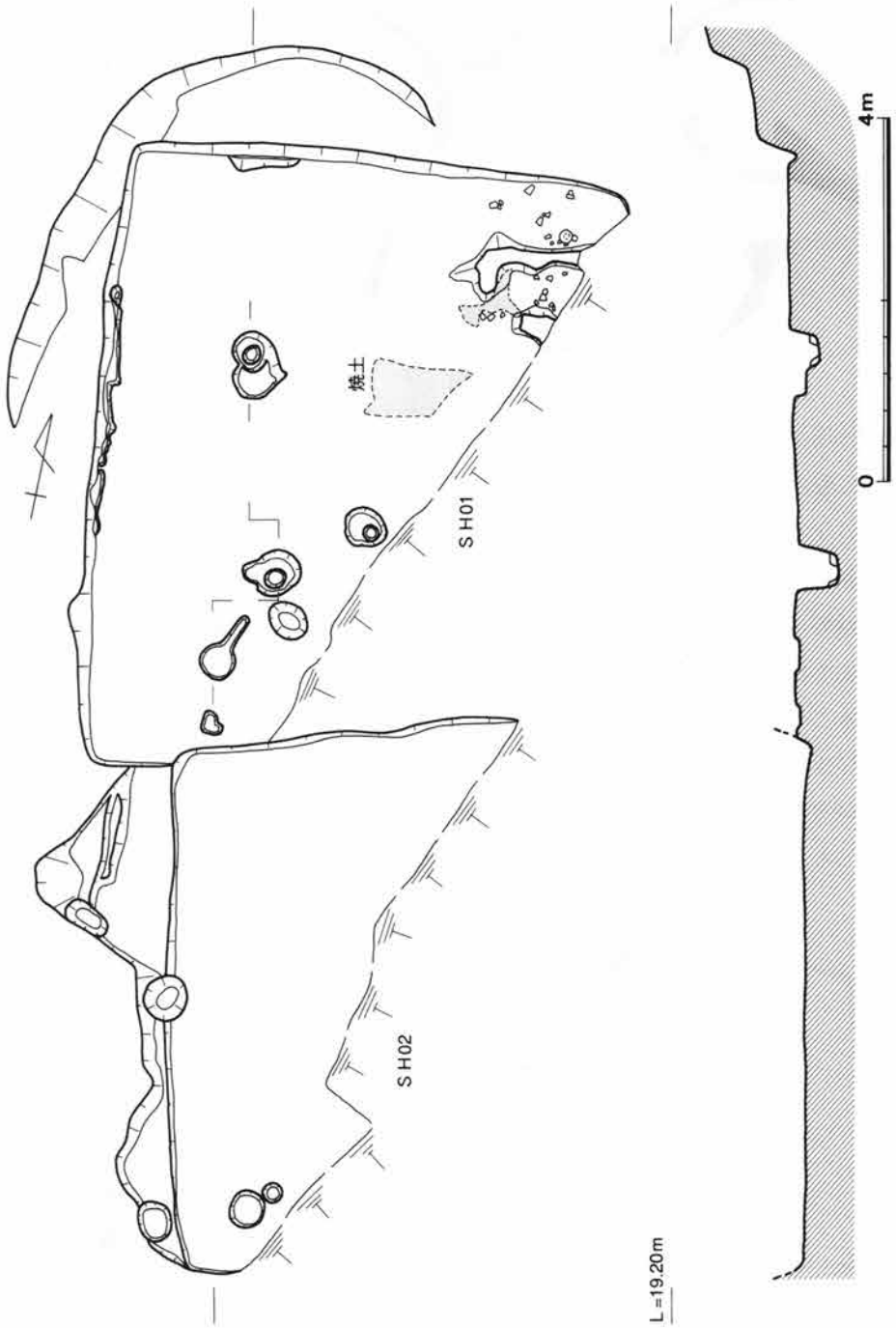
第53図　ＳＫ01出土土器実測図

主柱穴は２か所を確認した。直径0.5m、柱穴間の距離2.5mを測る。北東隅付近には作り付けの竈を有する。竈は、まず中央部に浅い掘り込みを設け、その週辺に暗黄褐色粘土を積み上げることにより構築されていた。煙道の構造については削平のため不明である。竈のほか、床面中央付近で焼土の広がりを確認した。遺物は、竈の周辺から土師器片・須恵器などが出土した。ＳＨ01出土遺物には、須恵器・土師器がある。細片化していたものが大部分であり、図示しえたものはわずかに５点に過ぎない(第55図)。６～９は、須恵器である。６は、杯蓋である。法量は口径12.8cm・器高3.6cmと小さく、天井部の調整も粗雑である。７は、杯身である。立ち上がりは短く、深手の作りである。外面には自然釉がかかっており、調整は不明瞭である。８は、短脚高杯の脚部である。９は、瓿の頸部である。ていねいな作りであり、外面にはカキメが施される。10は、土師器壺である。法量の小さなもので、短く直立する口縁部を有する。以上、ＳＨ01床面出土土器は、後述するＳＸ02出土土器と同時期、ＴＫ217古段階並行のものと考える。

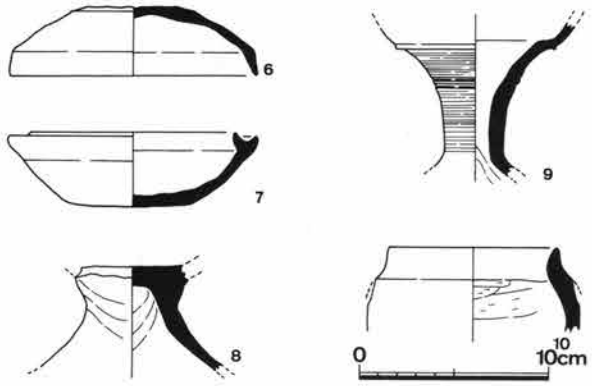
ＳＨ02(第54図)　ＳＨ02は、ＳＨ01の南に位置する竪穴式住居跡である。標高はＳＨ01と同様17.8m付近である。また、ＳＨ01の南辺を切ることから、ＳＨ01より後出する住居跡であることは確実である。平面は隅丸方形プランと考えるが、東辺はＳＸ01に切られている。規模は、完存する北辺で5.6mを測る。主柱穴については検出することはできず、炉・竈の存在についても明らかにすることはできなかった。床面からの出土遺物はなく、詳細な時期を決定することはできない。

ＳＨ03(第56図)　調査地の中央より、北側に位置する小型の竪穴式住居跡である。規模は、完存する北辺で3.5mを測る。主柱穴については検出することはできず、炉・竈の存在についても明らかにすることはできなかった。床面からの出土遺物はなく、詳細な時期を決定することはできない。

ＳＨ04(第57図)　調査地の南東に位置する竪穴式住居跡の一部と考えられる遺構である。周壁溝と思われる遺構を検出したのみであり、詳細については言及できない。溝は幅



第54図　ＳＨ01・02実測図

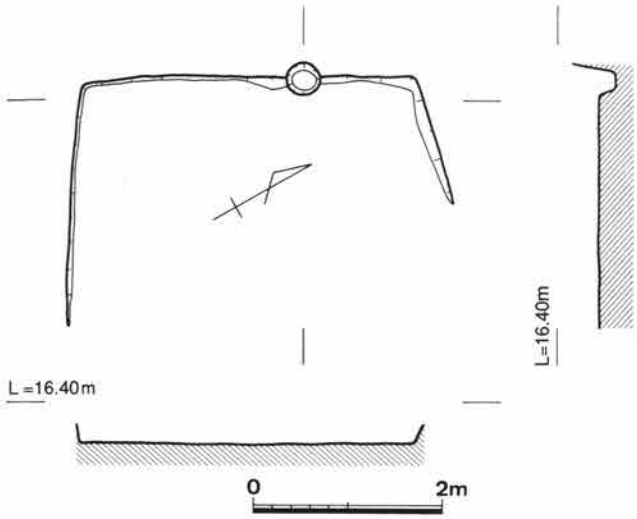


第55図　ＳＨ01床面出土土器実測図

0.4cm・長さ2.6cmを測る。溝に伴う遺物は存在せず、その時期については不明であるが、ＳＨ05に切られることより、ＳＨ05に先行することは確実である。

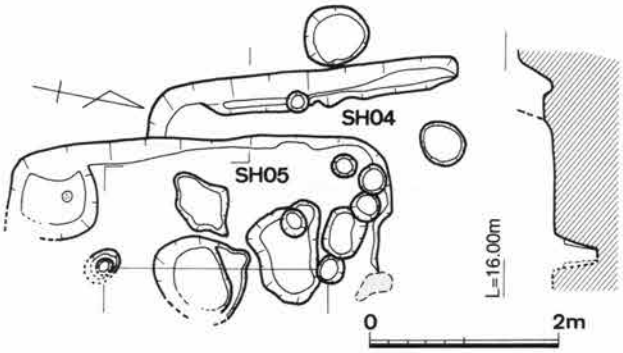
ＳＨ05(第57図)　ＳＨ05を切る竪穴式住居跡である。平面は隅丸方形プランと考えるが、東辺は調査地外のため詳細は不明である。規模は、完存する西辺で3.8mを測る。主柱穴については２か所を検出した。竈の存在については明確に検出することはできなかったが、北辺の焼土が竈あるいは炉になる可能性がある。また、南西隅にＳＨ05に伴うピットが存在し、ピット内埋土から土師器杯１点が出土した。ＳＨ05に確実に伴う遺物は、南西隅のピット内から出土した土師器杯Ａ１点のみである(第58図)。口径12.4cm・器高4.3cmを測り、内面には放射状暗文が施される。暗赤褐色の特徴的な胎土である。調整については外面の磨耗が著しく明確にすることはできない。後述するＳＸ02出土土師器杯にはこの土師器を模倣したと考えられる杯Ｂが存在することから、ＳＨ05はＳＸ02と同時期のものと考える。

ＳＸ02及び鍛冶炉(第59・60図)　ＳＨ01の下方、斜面部分に繰り込まれた半円状の掘り込みである。掘り込み面は第Ⅵ層、黒灰色土層である。規模は南北約10.8m・東西6.0mを測り、上方からの深さは約0.8mである。削平された部分を考慮すると、東西にさらに大きくなると考えられる。床面はわずかに傾斜し、高所側に竪穴式住居跡の周壁溝に類似した浅い溝がめぐる。埋土は第50図に示すように、ほぼ単一の暗灰色土であり、炭・焼土ブロックを多く含んでいる。埋土中から須恵器・土

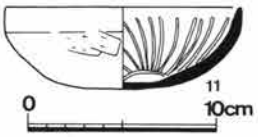


第56図　ＳＨ03実測図

師器・ミニチュア土器・砥石・鉄滓が出土している。これら出土遺物は整理箱にして40箱をかぞえる。完形個体・大破片を多く含むこと、埋土が単一層であること、土器が重なり合うような出土状況などから短期間に投棄・埋没したものと考える。鍛冶炉(第12図)はＳＸ02埋土下から検出された。炉は黄灰色粘土を長楕円に積み上げることにより築炉され、一端を円形に掘りくぼめ、炉本体としている。炉壁周辺は赤褐色に堅く焼け締まっている。粘土の貼られた範囲は短軸0.3m・長軸0.7mを測り、炉本体の規模は直径0.2m・深さ0.1mを測る。また北側はやや高まりを持つ。この鍛冶炉に関連する遺物には、ＳＸ02埋土出土の鉄製品・鉄滓・砥石が存在する。また、調査に際しては周辺の土砂の採集を行ったが、未洗浄である。



第57図　ＳＨ04・05実測図



第58図　ＳＨ05出土土器実測図

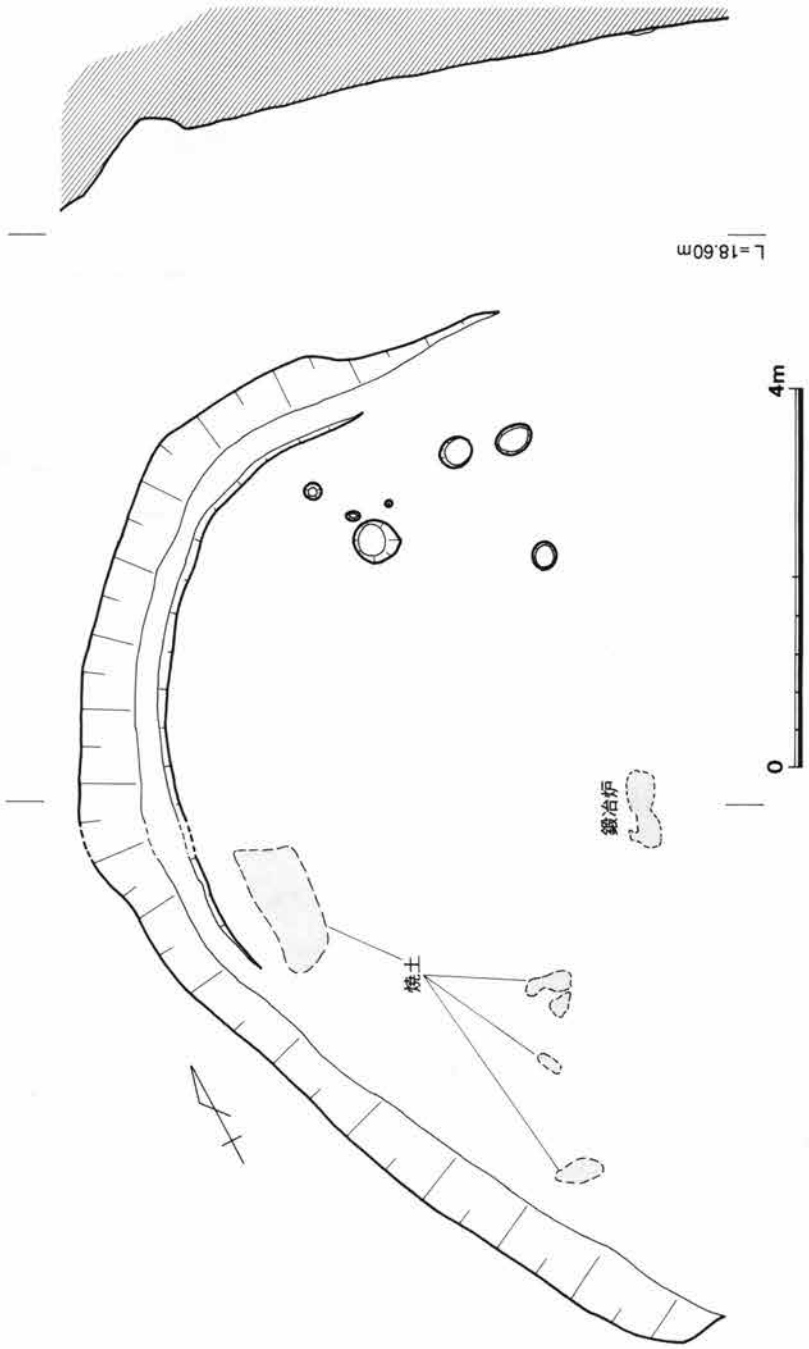
イ．出土遺物　ＳＸ02出土遺物には須恵器杯・杯蓋・高杯・椀・甕・壺・台付き壺・甕・短頸壺蓋・提瓶、土師器杯・甕・鍋・甑・竈・鉢・ミニチュア土器、鉄製品、砥石、鍛冶滓がある。これらの遺物は先に述べたように一括性の高いものと判断される。詳細は観察表に記したとおりであり、以下、各器種・器形ごとの概要を記す。なお、須恵器では、高杯・甕・壺類などの個体数が割合が比較的多い。

ａ．須恵器(第61～63図)

杯蓋　図示したのは９点である。口径が13～14cm前後のやや大形のもの(12～16)と、口径12cm前後のやや小形のもの(17～20)の２法量に分けることができる。12は、天井部にていねいなヘラケズリを施し、胎土・焼成とも極めてよい。その他のものは天井部の調整も、ヘラ切り後ナデを施すものが大部分であり、粗雑な作りである。

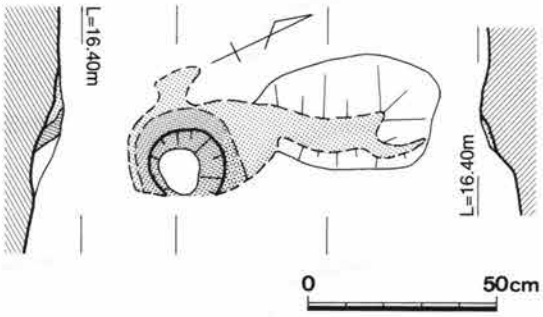
杯身　図示したのは９点である。口径10.2～12.4cmを測る。29は受け部径12.2cmの小法量のものである。立ち上がりは低く内傾する。21は、立ち上がりも高く、底部のヘラケズリもていねいであり、古い型式のものと考えられる。21・23を除いて、底部はいずれも、ヘラ切りの後粗いナデを施すのみの粗雑な造りである。

高杯　図示したのは７点である。無蓋高杯と有蓋高杯の２者が認められる。有蓋高杯30



第59図　ＳＸ02実測図

～33はすべて脚柱部を欠く。32は立ち上がりも高く、三方透かしをもつ点から古い型式のものと考えられる。その他は立ち上がりも低く内傾し、透かしも２方と考えられる。



第60図　鍛冶炉実測図

無蓋高杯には３タイプが認められる。34は、長脚二段透かしであり、杯部には２段の稜が認められる。35は、蓋を反転したような形態をとり、杯部底部との境に１条の沈線を施す。36は、有蓋高杯の立ち上がりを除いたような特異な形態をとる。

脚部には、底径の大きなものと小さなものが存在する。高杯のみでなく、壺・椀などの脚になる可能性も考えられる。

瓶　６点を図示した。細く長い頸部からラッパ状に大きく広がる口縁部をもつ。いずれも体部下半はヘラケズリを施す。43・44は、装飾性の高いものである。

蓋(48)　法量・形態からみて、短頸壺の蓋と考えられる。天井部外面にはカキメが施され、端部は段をなす。

壺類　脚付き短頸壺(47)・直口壺(49)・長頸壺(50・51)の３タイプが存在する。47は、体部中位に２状の沈線により画された文様帯をもつ装飾性の強いものである。

提瓶(52)　ボタン状の把手の表現を行う。体部外面には、カキメが施される。

椀　台付き椀(53)と脚付き椀(54)の２タイプがある。台付き椀(53)は底部との境に１条の沈線を施し、高台をもつ。その形態から金属器の影響を受けたものと考える。脚付き椀(54)は深手の椀に短い脚部が付く。

甕(55)　口径47cmを測る大形品である。

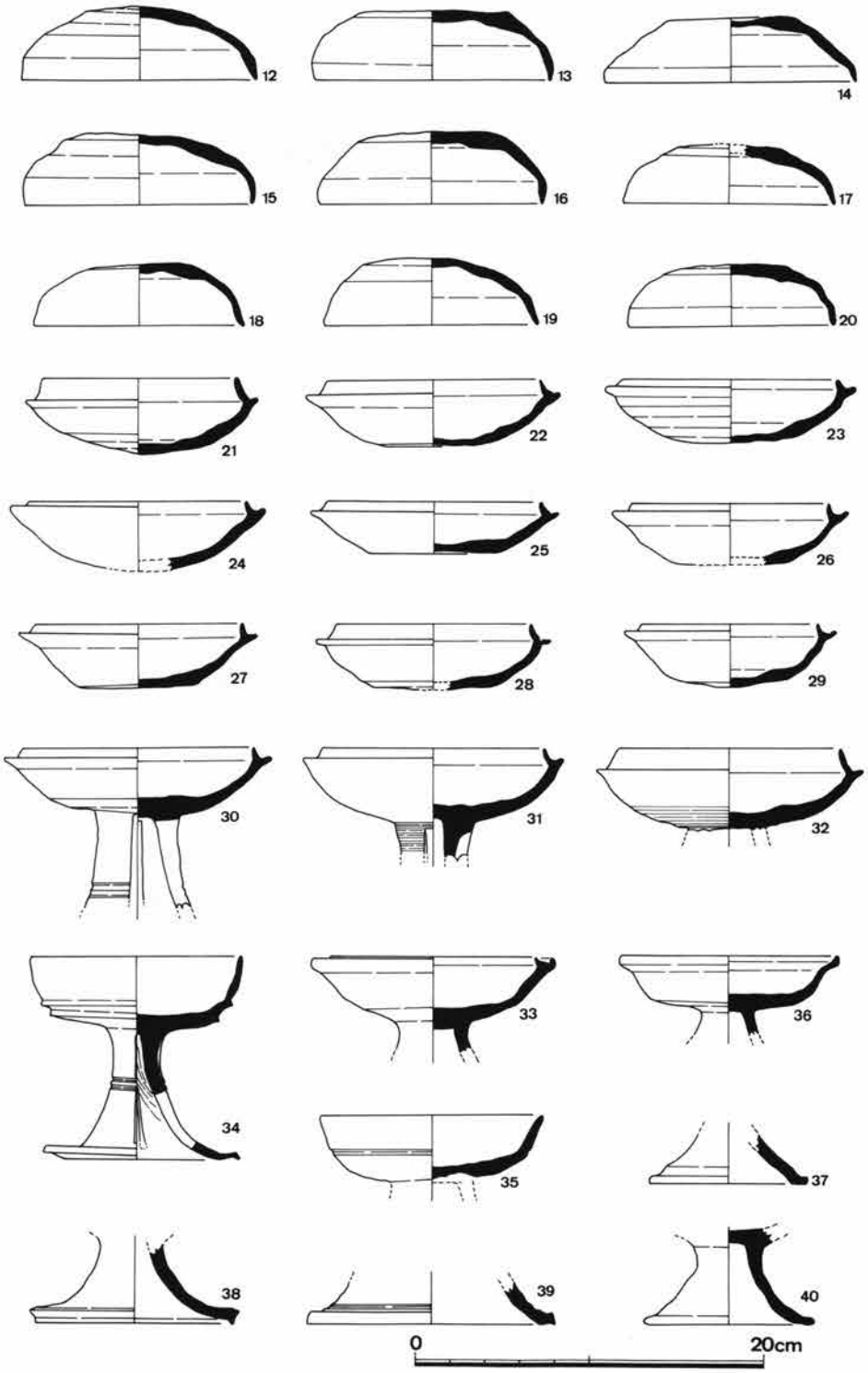
ｂ．土師器

杯　杯はその形態から４タイプに分類した。

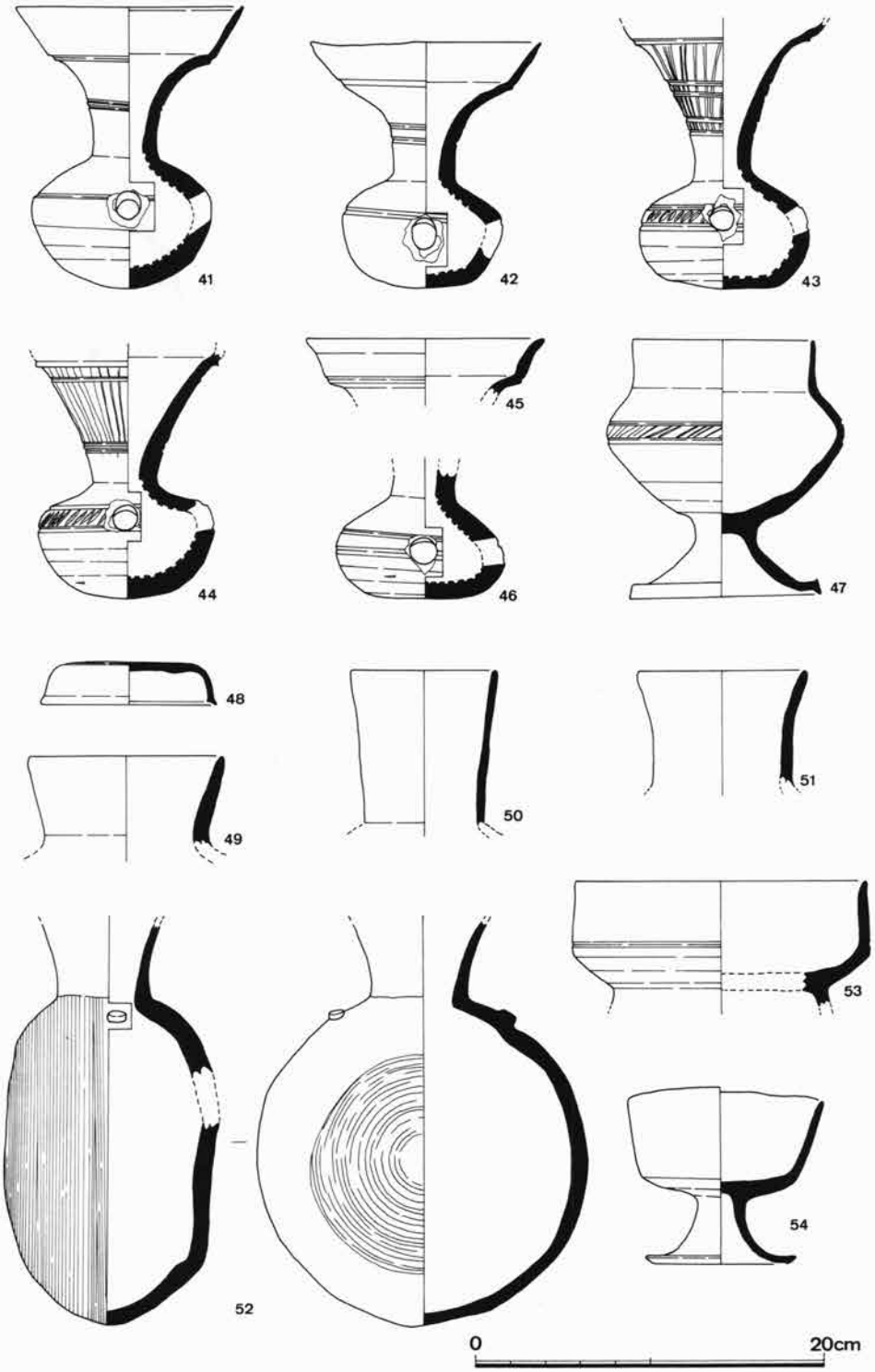
杯Ｂ(56～63)　丸底の杯である。調整の確認できるものはいずれも、外面は端部が横ナデ、体部がヘラケズリを施す。56・57は、胎土も精良であり、内面には稚拙ではあるが放射状暗文を施すなど、ＳＨ05で杯Ａとした暗文をもつ杯を模倣したものと考える。

杯Ｃ(64・65)　平底の杯である。

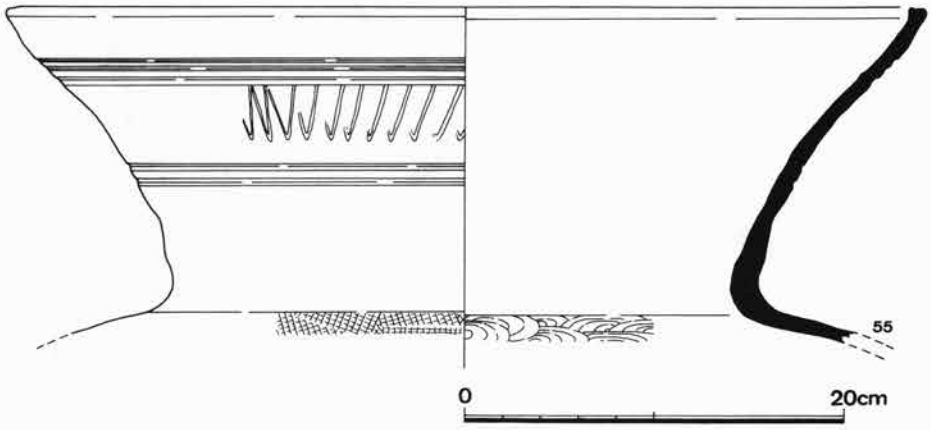
杯Ｄ(66)　暗文をもつ大形の杯である。端部は外方につまみだす。胎土は極めて精良で、暗橙褐色の特徴的な色調を示す。



第61図　ＳＸ02出土土器実測図(1)　須恵器(1)



第62図　ＳＸ02出土土器実測図(2)　須恵器(2)



第63図　ＳＸ02出土土器実測図(3)　須恵器(3)

杯Ｅ(67)　深手の杯である。端部は外方につまみ出す。

甕　甕は口縁部のみが残るものが大部分であり、全形を知ることのできる個体は存在しない。しかし、口縁部にも大破片が多く、法量・技法などについて観察するには十分な資料である。さらに細分することは可能ではあるが、今回は口縁形態・技法的な特色から大きく４タイプに分類することとした。

甕Ｂ　口縁部を強い横ナデにより、大きく拡張させた甕である。口縁部の細部の形態により、甕Ｂ１と甕Ｂ２の２タイプに分類する。

甕Ｂ1(68～82)　口縁部内面に強い横ナデにより生じた段をもつ甕である。段の形成される位置、段の数によりさらに細分化することができる。調整技法は、口縁部は強い横ナデ、体部内面はケズリ、外面は縦方向のハケを施すなど技法上に強い共通性を認めることができる。なお、後述する鍋に甕Ｂ１と同様の口縁をもつものが存在すること、ＳＸ02埋土中より牛角状把手が多く出土していることから鍋になるものも含んでいると考える。

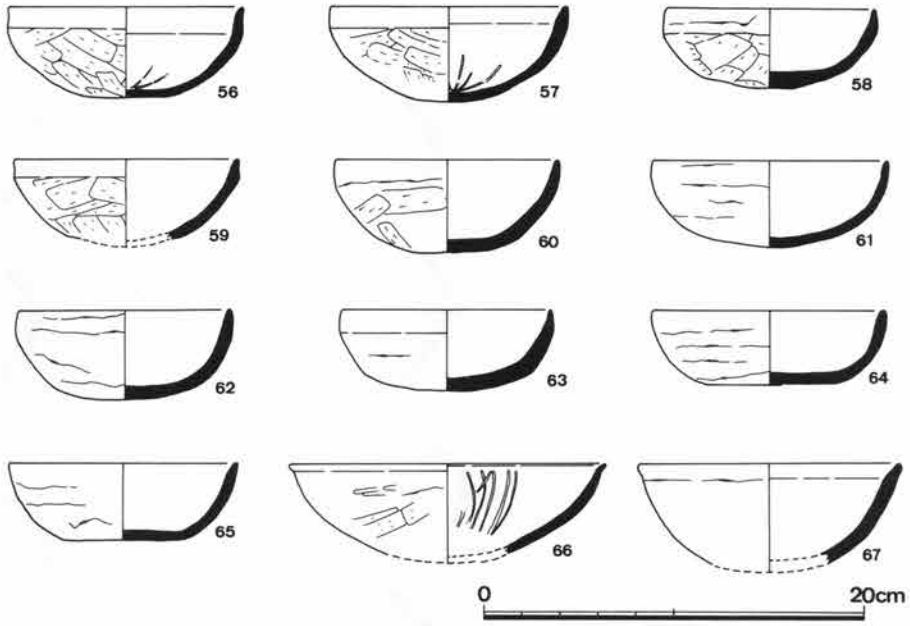
甕Ｂ2(83～90)　口縁部を強い横ナデにより拡張した甕である。甕Ｂ１のように内面に段を形成するものはない。技法的には口縁部は強い横ナデ、体部内面はケズリ、外面は縦方向のハケを施すなど甕Ｂ１と同様の技法を用いる。

甕Ｃ(91～95)　口縁部を横方向に外反ぎみにのばす甕である。

甕Ａ(96～98)　口縁は外反ぎみに短く立ち上がる。口径の小さいものしか存在しない。先述したＳＫ01出土の甕Ａの系譜を引くものと思われる。

直口壺(99)　直立ぎみの口縁をもつ壺である。

甑(100・101)　100はほぼ完形品に復原できた。口縁部はやや外反し、底部は円孔をな



第64図　ＳＸ02出土土器実測図(4)　土師器(1)

す。また、底部外面には、把手の下方に一対の穿孔がなされる。101は底部のみであるが、100と同様の形態をとる。

鉢(102・103)　101は、大形の椀状の形態をとる。鉢として分類したが、２次的な加熱を受けており、煮沸用具として使用されたと考えられる。102はやや外反する口縁をもつ。

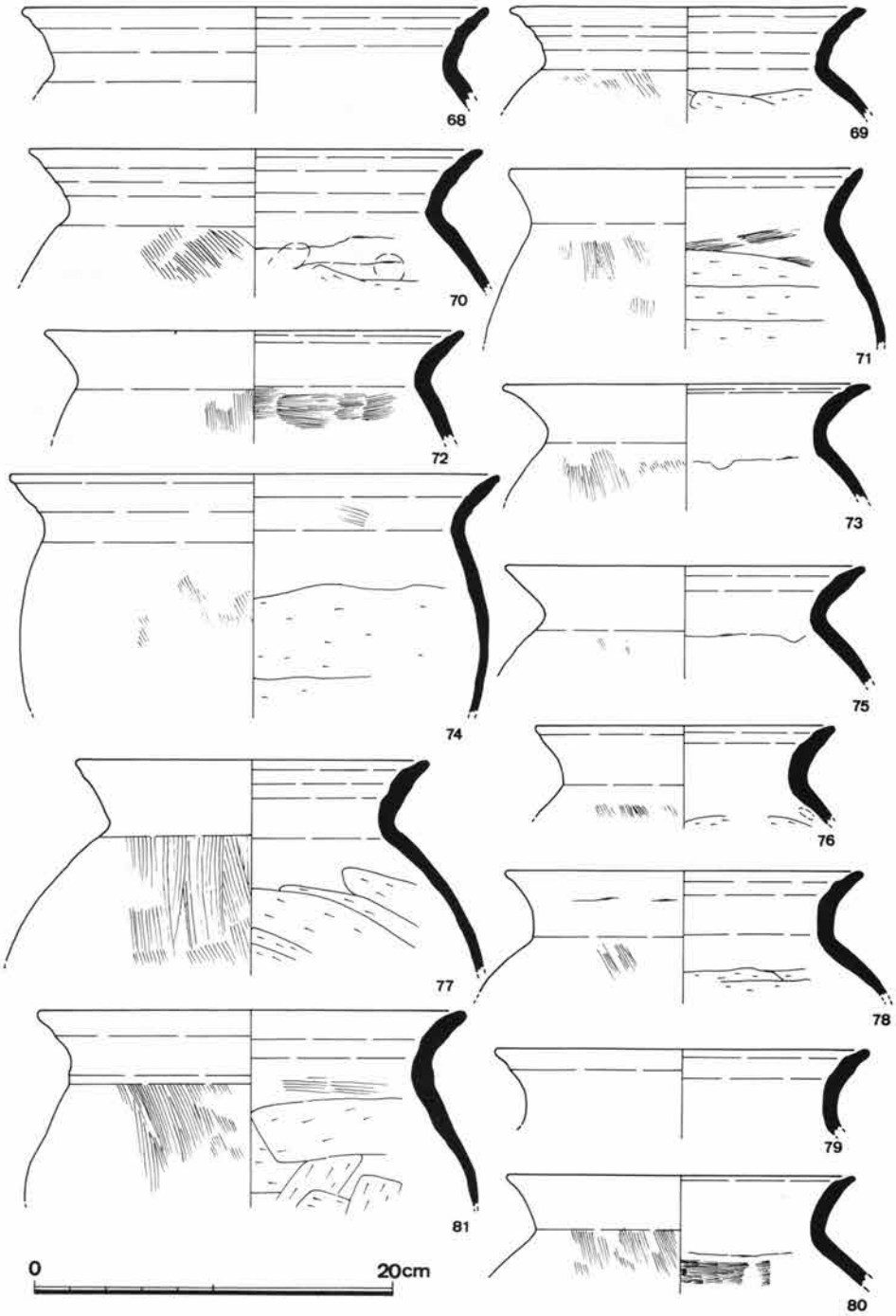
鍋(104)　牛角状の把手をもつ鍋である。口縁の形態や技法上の特色は甕Ｂ１と共通する。なお、ＳＸ02出土土師器には、牛角状の把手のみの破片が多く含まれていることから、先に述べた甕とした個体の中にも、鍋に分類されるものが混在しているものと考える。

ミニチュア土器(105・106)　２点出土した。いずれも手捏ねであり、杯のミニチュアと考えられる。胎土中には雲母を多く含む。

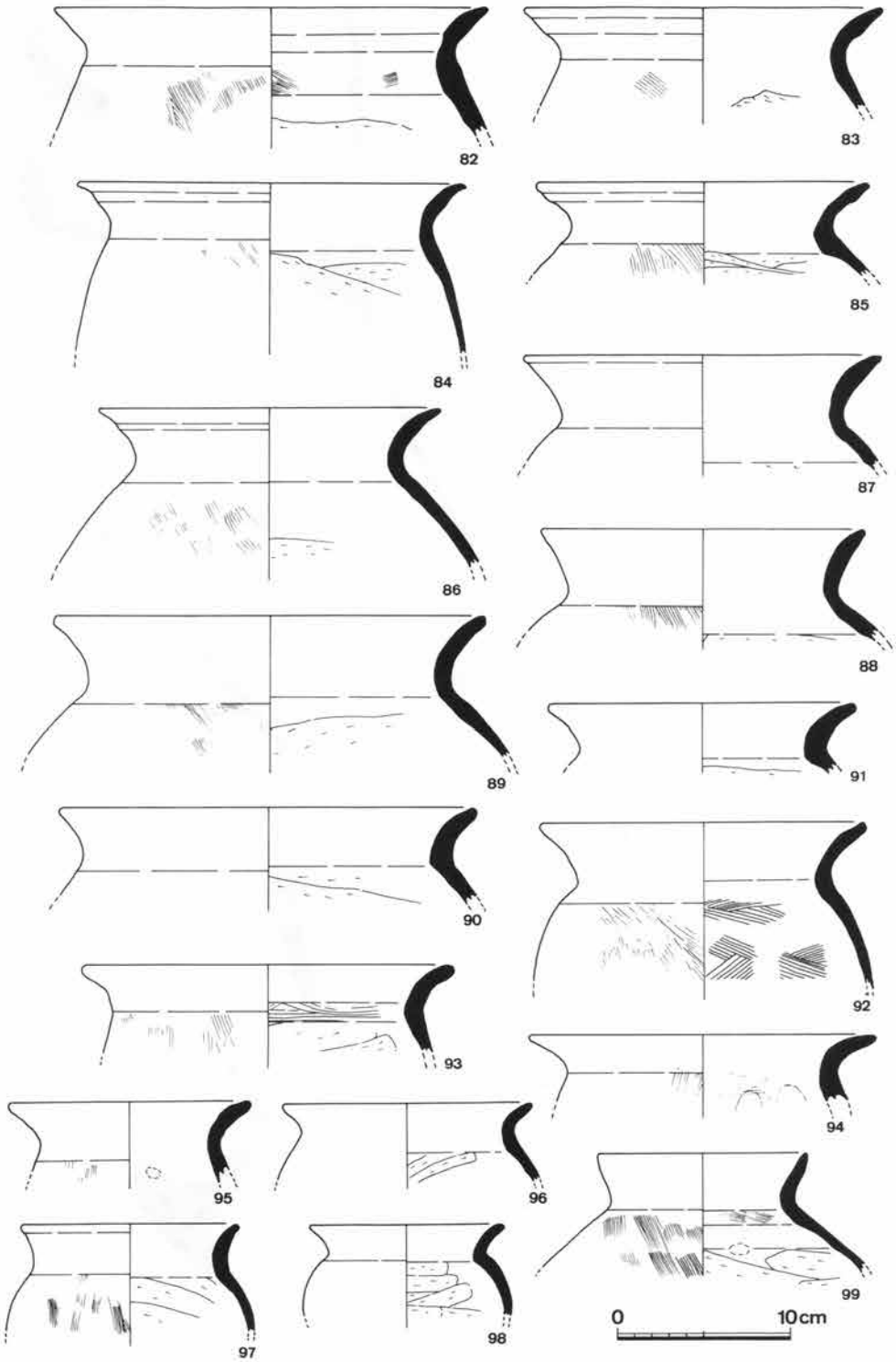
石製品(第68図107・109)　107は、小形の砥石である。長軸方向の４面ともに長軸方向の使用痕が認められる。長さ6.6cm・厚さ1.0cmを測る。石材はアプライトである。109は滑石製有孔円盤である。第Ⅲ層中でも鍛冶炉に近接して出土した。直径1.9cm・厚さ2.5mmを測り、中央部に２対の穿孔がなされる。

鉄製品(第72図116)　銛・ヤスもしくは針などの漁勞具と考えられる鉄製品である。先端には返りを有し、断面は楕円形を呈し、わずかに湾曲する。残存長は10.0cmである。

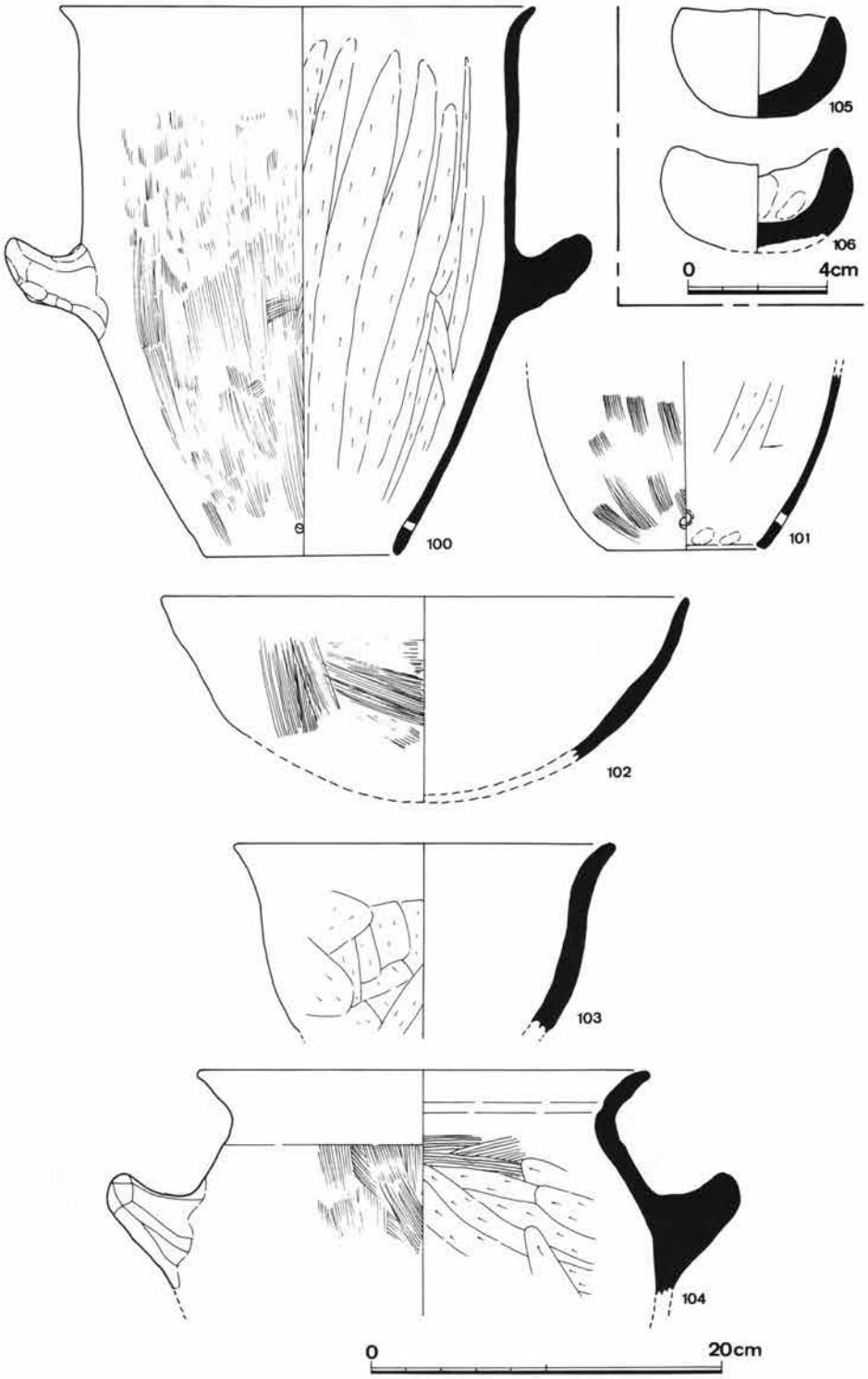
鉄滓　鍛練鍛冶滓である。詳細な分析結果などについては、第４次調査を予定しているので、後日改めて述べることとしたい。



第65図　ＳＸ02出土土器実測図(5)　土師器(2)



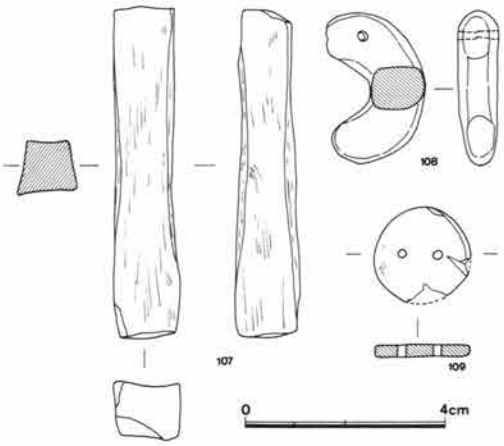
第66図　ＳＸ02出土土器実測図(6)　土師器(3)



第67図　ＳＸ02出土土器実測図(7)　土師器(4)

③古墳時代以降の遺構・遺物

上層から検出された遺構には、テラス状遺構ＳＸ01・土坑ＳＫ02・03・04・溝ＳＤ01がある。これらのほかに複数のピット群を検出したが、建物跡には復原しえなかった(第70図)。



第68図　定山遺跡出土石製品実測図

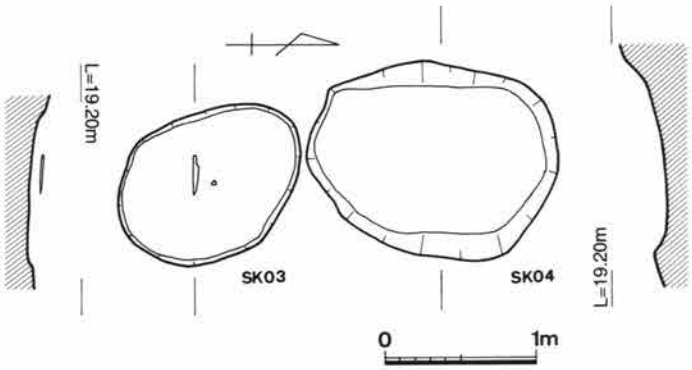
ＳＸ01(第70図)　調査地中央部の斜面部分で検出したテラス状の遺構である。東側はＳＤ01掘削時に削平されたものと推測される。高所側に幅0.9m・深さ0.1mを測る溝がめぐる。残存する規模は、東西3.5m・南北15mである。出土遺物には、黒色土器片がある。この遺構の性格については不明である。

ＳＫ02(第70図)　ＳＸ02を切る楕円形の土坑である。土坑内出土遺物には須恵器壺・杯、土師器甕片が出土した。出土遺物から奈良時代後半の年代を与えることができる。

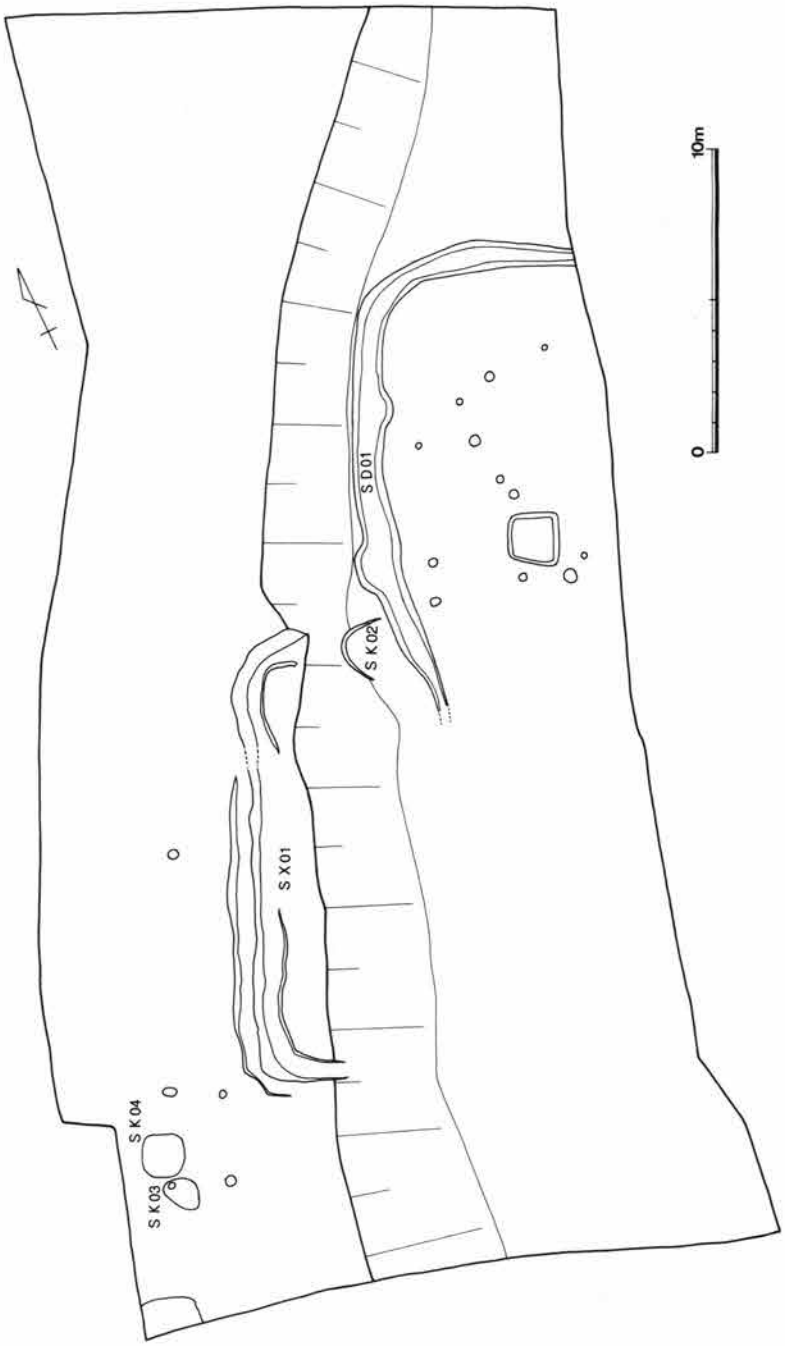
ＳＫ03(第69図)　調査地南西部分で検出された土坑である。平面はいびつな楕円形を呈し、規模は長軸1.3m・短軸1.0mを測る。土坑内からは短刀１口、土師器皿片が出土した。遺存状況が悪く、断面の観察も十分できなかったため、棺や木櫃の痕跡などは検出できなかったが、墓である可能性が高い。短刀(第72図115)は、茎の一部を欠くがほぼ完形品である。全長26cm・刃部長19.4cm・同幅2.2cmを測る。刃関を有し、茎には１本の目釘が認められる。鞘は遺存状況がよく、木質の鞘本体に、樹皮かと思われるものが巻かれている。土師器皿は、小形の皿であり、底部には糸切り痕が認められる。

ＳＫ04(第69図)

ＳＫ02に近接する土坑である。平面はいびつな楕円形で、規模は長軸1.7m・短軸1.3mを測る。出土遺物はなく、ＳＫ02同様、棺や木櫃の痕跡は確認できなかったが、墓である可能性を考えておく。



第69図　ＳＫ03・04実測図



第70図　検出遺構配置図(2)　（奈良時代～近世初頭）

ＳＤ01（第70図）　調査地北東部で検出された「Ｌ」字状にめぐる溝である。断面は緩い弧状を呈し、幅約1.2m・深さ約0.3mを測る。埋土は単一であり、埋土内からは土師器細片・火鉢などが出土している。中世末期～近世初頭頃のものと考えられる。この溝は、その形態からみて、屋敷などの区画・山側からの排水などを目的としたものと考えられる。また、調査前に確認された段は、この溝ＳＤ01掘削時に形成されたものと考えられる。

④包含層出土の遺物

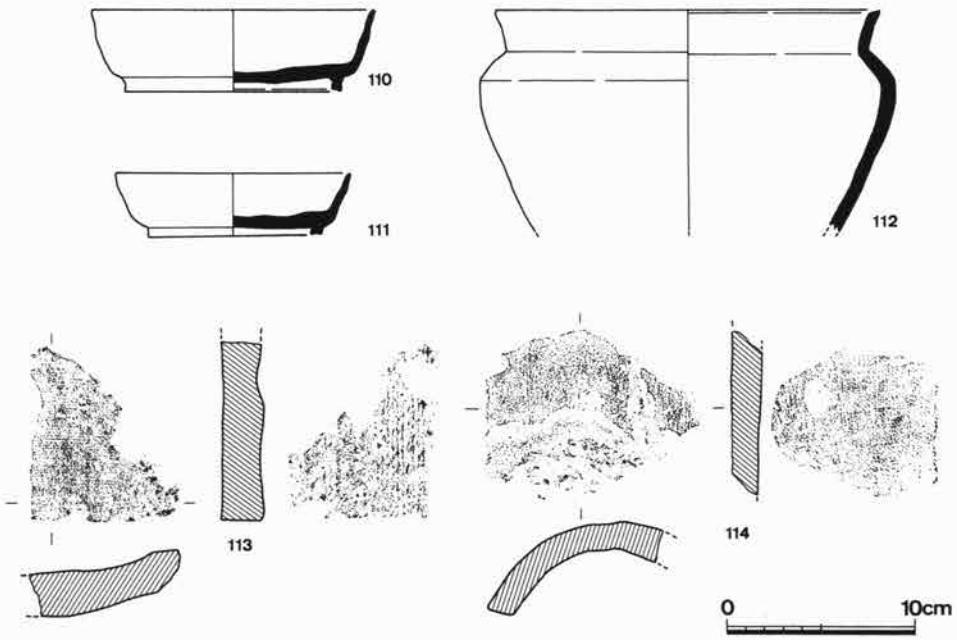
定山遺跡からは遺構に伴う遺物以外にも、包含層中から多量の遺物が出土している。ここでは、その中から主要なものについて述べる。

第Ⅱ層中の遺物（第71図）　110・111は、須恵器杯である。やや内傾する高台をもち、口縁端部は緩やかに外反する。また、高台端面は凹面をなす。110は口径14.6cm・器高4.2cm、111は口径12.3cm・器高3.3cmを測る。112は、肩の張るシャープなつくりの壺である。

113・114は、瓦である。113は平瓦であり、表面には布目が、裏面には縄目叩きが観察される。114は、小形の丸瓦であり、両面に布目が認められる。

金属器（第72図）　包含層から出土した金属器には、刀子・鉄鏃・不明鉄製品・銅椀などがある。第Ⅱ層中の遺物がほとんどであり、詳細な時期決定はできない。

117は、第Ⅳ層中から出土した鉄鏃である。頸部を欠くが、長頸腸抉柳葉鏃に分類され



第71図　第Ⅱ層出土遺物実測図

る。鏃身の断面は平造り、頸部断面は長方形を呈する。鏃身長6.0cmを測る。

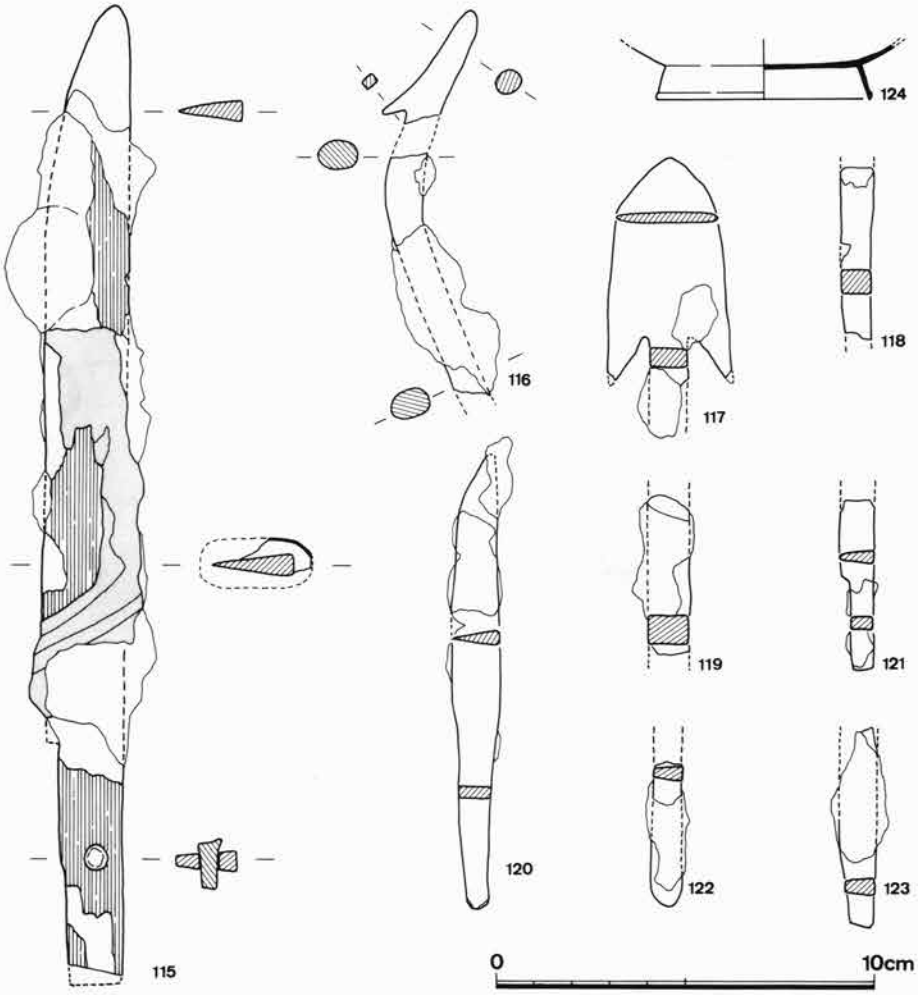
120は、第Ⅱ層中出土の刀子である。全長12.1cm・刃部長6.8cmを測る完形個体である。木質など刀装具の痕跡を示すものは遺存していない。

121～123は、第Ⅱ層中出土の刀子と考えられる個体である。いずれも細片化している。

118～119は、第Ⅱ層中出土の不明鉄製品である。断面方形の棒状を呈し、鉄鏃の頸部である可能性がある。

124は、第Ⅱ層中出土の銅椀である。高台の一部が遺存するのみで、全体の形状は不明である。高台端部はわずかに段をなし、底径5.8cmを測る。

石製品(第68図108)　108は第Ⅱ層出土の滑石製勾玉である。「C」字状に近いプロポーションで、長さ3.0cm・厚さ0.8cmを測る偏平なつくりである。穿孔は両面穿孔である。



第72図　定山遺跡出土金属器実測図

５．　ま　と　め

今回の調査成果について若干の整理と問題点の指摘を行いまとめとしたい。

ＳＸ02出土土器について　ＳＸ02出土土器は、先述のとおり一括性の高い土器群として認識される。蓋杯は、いずれも立ち上がりをもつ杯である。杯蓋法量10cm前後の小法量のものと、13cm前後の大法量のものの２種類、これに対応する杯身でも、受け部径14cm前後のものと、13.6cm前後のものの２者が認められる。これらは、型式的には大法量の一群→小法量の一群という変遷を考えることができる。技法上の特徴を見るならば、大法量の一群に、ていねいな回転ヘラケズリが認められるほかは、いずれもヘラ切りの後、未調整ないしは、粗雑なナデを施すという共通性を認めることができる。こういった底部ヘラ切り未調整の一群については山田邦和氏により、ＴＫ209型式並行期にまではさかのぼらないという指摘がなされている[注3]。また、集落出土土器であるという点を考慮するならば、古い型式の土器群を使用していたという状況を想定することは十分可能である。また、今回出土の須恵器には立ち上がりを持たない杯は含まない。立ち上がりのない杯は近隣の千原２号墳から毛彫り金銅装馬具に伴っての出土が知られているため[注4]、ＴＫ217新段階には出現しているものと考えることができる。したがって、今回出土の須恵器群は陶邑ＴＫ217古段階に並行するものと考える。

須恵器の器種構成をみると、蓋杯、有蓋高杯・無蓋高杯、**甕**、甕、壺、長頸壺、提瓶、台付椀など多様な構成である。このうち、**甕**、提瓶、壺などはＴＫ209型式として大過ないものである点が注目される。古い型式が残存する状況を読み取ることができる。一方、新しい構成要素として、長頸壺、スカシのない短脚高杯、台付き椀などの出現をあげることができる。台付椀は金属器を模倣したものと考えられる。

以上のように、ＳＸ02出土土器群の持つ様相は、新しい状況を示す中にも、古い要素を内包するということを示している。今回の、ＳＸ02出土土器を基準として、いままで、ＴＫ209併行期として報告されてきた丹後地方の土器群を再検討し、丹後地方での編年の基軸を組み立てていく必要があるものと考える。

土師器には、ＳＫ01出土のＴＫ10並行段階の一括土器群中にみられた甕Ａの系譜を引く土器のほかに、口縁部を強いナデ(おそらくはロクロ利用)により拡張した甕Ｂが主体的な土器群として存在する点が注目される。この甕Ｂについては口縁部に段を有するもの(甕Ｂ１)と有さないもの(甕Ｂ２)の２タイプが存在する。甕Ｂ１については口縁部の段の形状の違いでいくつかのバリエーションが存在する。この甕Ｂ１は、由良川流域を中心にＴＫ217併行期ぐらいに出現し、主体的土器群としての位置を占めていく。分布は主体的土器群として出土する集落として、綾部市綾中遺跡[注5]・青野遺跡[注6](ＴＫ217)、舞鶴市志高遺跡[注7]

（奈良時代）・桑飼上遺跡・福知山市石本遺跡[注8]（ＴＫ217）・大江町高川原遺跡[注9]・三河宮の下遺跡[注10]など、由良川流域にその中心をみることができる。そのほか、八木町池尻遺跡[注11]（奈良時代）・八木嶋遺跡・園部町町田遺跡など南丹地域、宮津市荒木野遺跡・加悦町須代遺跡[注12]など阿蘇海沿岸から但馬にかけての地域でも出土しているが、主体的な土器群としての位置づけはできず、極めて散発的に出土する状況を呈している。

また、この段階に従来見られなかった器形である甑・鍋・竈などが出現していることが注目される。鍋の口縁形態が甕Ｂ１と同様である点をみれば、甕Ｂ１に伴って煮沸用具のセットが導入されたものと考えられる。

杯では、畿内系杯を意図した、暗文を有する杯ＡがＳＨ05から出土している。暗赤褐色の胎土は極めて特徴的である。ＳＸ02出土の杯Ｂはこの杯Ａを模倣したものと考えられ、法量・技法などに共通性を認めることができる。

このように、定山遺跡ではＴＫ217古段階前後に土器様相が一変する。特に、土師器の構成において、由良川中流域に分布の中心をおく甕Ｂが主体になる点が注目される。このような現象は土師器生産・流通体制の変革や政治的な変革などに密接に関連するものと考えられ、今後の検討課題としたい。

定山遺跡の集落構造について　今回の調査地点では鍛冶生産に伴う遺構群を検出した。これらをもとに、集落の全体像を復原する。

まず、第１次調査地は定山遺跡の日常的な居住空間であると考えられる。極めて限定されたトレンチから複数の竪穴式住居跡が切り合って検出されたことからも、長期にわたる居住地であったことがうかがわれる。第２次調査地では横穴式石室を内部主体とする古墳が検出された。埋没古墳であり、複数基存在するようである。この地点は定山遺跡の墓域として認識することができる。今回の調査地は、居住空間から離れた地点にあたり、鍛冶生産の場であったと考えることができる。また、鍛冶遺構周辺から、ミニチュア土器や滑石製模造品などの祭具、高杯・**瓾**など日常的とは考えられない土器が多く出土していることは、鍛冶生産に対する祭祀が行われたものと考える。鉄生産・鍛冶関連の祭祀として、弥栄町遠所遺跡群でも炭窯の前提部域から、**瓾**・高杯・ミニチュア土器などが出土しており、定山遺跡の状況に極めて近いものである。ただし、鉄滓の出土量や鍛冶炉の数などからみて、遠所遺跡群のような大規模な鍛冶生産などは考えがたく、集落に付随する工房と考える。

このように定山遺跡は、日常的居住域・墓域・生産域がセットになった拠点的な集落であったと考える。今後、周辺の調査が進むに伴って丹後地方における拠点的な集落の実態を把握するための資料が蓄積されるものと期待される。

奈良時代の出土遺物について　奈良時代に属する遺物の中に瓦が存在することは、極めて貴重な資料を提供することとなった。野田川流域では、宮津市中野遺跡[注13]・同丹後国分寺跡[注14]・岩滝町千原遺跡[注15]などで瓦の出土が知られていた。今回の定山遺跡出土例は野田川流域で４例目となる。分布をみると、いずれも阿蘇海沿岸に存在しており、丹後国分寺あるいは丹後国府などと関連する遺跡であることが考えられる。今回、定山遺跡においても奈良時代の瓦が出土したことは周辺に国府・国分寺に関連する遺構が存在している可能性を示すものであり、今後、周辺の調査により、遺構の存在が明らかになる可能性がある。

（石崎善久）

付表３　ＳＸ02出土須恵器観察表

器形	法量	調整技法	備考	図
杯蓋	口径13.4 器高4.3	天井部外面－ヘラケズリ 天井部内面－不定方向ナデ	ロクロ時計回り	12
杯蓋	口径13.6 器高4.0	天井部外面－ヘラ切り後ナデ 天井部内面－不定方向ナデ	焼け歪み	13
杯蓋	口径14.4 器高3.8	天井部外面－ヘラケズリ 天井部内面－ナデ		14
杯蓋	口径13.0 器高4.0	天井部外面－ヘラ切り後ナデ 天井部内面－不定方向ナデ		15
杯蓋	口径12.6 器高4.1	天井部外面－ヘラ切り後ナデ 天井部内面－不定方向ナデ	焼け歪み著しい	16
杯蓋	口径12.0 器高3.4	天井部外面－ヘラ切り後ナデ 天井部内面－不明		17
杯蓋	口径12.0 器高4.6	天井部外面－ヘラケズリ 天井部内面－不定方向ナデ	ロクロ時計回り	18
杯蓋	口径12.2 器高3.9	天井部外面－ヘラ切り後ナデ 天井部内面－不定方向ナデ		19
杯蓋	口径11.8 器高3.7	天井部外面－ヘラ切り後ナデ ＋粗雑なヘラケズリ 天井部内面－不定方向ナデ		20
杯身	口径11.4 受け部径13.4 器高4.3	底部外面－ヘラケズリ 底部内面－不定方向ナデ		21
杯身	口径12.2 受け部径14.6 器高3.8	底部外面－ヘラ切り後ナデ 底部内面－不定方向ナデ		22
杯身	口径12.4 受け部径14.4 器高3.6	底部外面－ヘラケズリ 底部内面－不定方向ナデ	ロクロ反時計回り	23
杯身	口径10.4 受け部径14.8 器高4	底部外面－ヘラ切り後ナデ？ 底部内面－不定方向ナデ	焼成不良	24

杯身	口径12.2 受け部径14.2 器高3.0	底部外面－ヘラ切り後ナデ 底部内面－不定方向ナデ		25
杯身	口径11.4 受け部径13.6 器高3.5		自然釉付着 調整不明	26
杯身	口径11.9 受け部径13.8 器高3.7	底部外面－ヘラ切り後ナデ	焼成不良 磨耗著しい	27
杯身	口径11.2 受け部径13.6 器高3.8	底部外面－ヘラ切り後ナデ 底部内面－不定方向ナデ		28
杯身	口径10.2 受け部径12.2 器高3.6	底部外面－ヘラ切り後ナデ 底部内面－ナデ		29
高杯	口径13.5 受け部径15.6 杯部高4.0		有蓋 長脚二段２方透	30
高杯	口径12.8 受け部径15.0 杯部高4.3	底部外面－ヘラケズリ後ナデ 底部内面－不定方向ナデ 脚部外面－カキメ	有蓋 長脚二段２方透	31
高杯	口径12.8 受け部径4.5 杯部高4.5	底部外面－カキメ 底部内面－不定方向ナデ	有蓋 長脚二段３方透	32
高杯	口径12.0 杯部高4.3 器高11.6 脚径11.3	底部外面－ナデ 底部内面－不定方向ナデ 脚部－ナデ	無蓋 長脚二段２方透	33
高杯	口径11.6 受け部径14.2 杯部高4.1	底部外面－ナデ 底部内面－不定方向ナデ	有蓋 短脚	34
高杯	口径12.6 杯部高3.7	底部外面－ヘラケズリ 底部内面－不定方向ナデ	無蓋・長脚？ 焼成不良	35
高杯	口径12.4 杯部高3.2	底部外面－ヘラケズリ後ナデ 底部内面－不定方向ナデ	無蓋・短脚 ロクロ時計回り	36
脚	底径9.1	内外面－ナデ		37
脚	底径11.4	内外面－ナデ	端部は下方につまみ出す	38
脚	底径14.2	内外面－ナデ		39
脚	底径9.8	内外面－ナデ		40
壺	口径12.8 器高16.3 体部径9.4 孔径1.5	外面－口縁部～体部上半　ナデ 体部下半　ヘラケズリ 内面－ナデ	口縁部１条・頸部２条・体部１条の沈線 円孔部欠損	41

甕	口径13.0 器高14.2 体部径9.2 孔径1.4	外面－口縁部～体部上半　ナデ 体部下半　ヘラケズリ? 内面－ナデ	口縁部１条・頸部２条・体部１条の沈線 円孔部欠損 焼成やや不良 調整不明瞭	42
甕	体部径9.7 孔径1.5	外面－口縁部～体部上半　ナデ 体部下半　ヘラケズリ 内面－ナデ	口縁部１条・頸部４条・体部２条の沈線 ヘラ状工具による刺突文 頸部棒状工具による斜行文 円孔部欠損 ロクロ反時計回り	43
甕	体部径10.1 孔径1.4	外面－口縁部～体部上半　ナデ 体部下半　ヘラケズリ 内面－ナデ	口縁部１条・頸部３条・体部２条の沈線 櫛状工具による刺突文 頸部棒状工具による斜行文 円孔部欠損 ロクロ反時計回り	44
甕	口径13.4	内外面－ナデ	口縁部１条の沈線 自然釉	45
甕	体部径9.6 孔径1.6	外面－頸部～体部上半　ナデ 体部下半　ヘラケズリ	体部２条の沈線 ロクロ反時計回り	46
脚付短頸壺	口径9.4 体部径13.7 脚部径11.0 器高14.8	壺部内面－ナデ 底部　不定方向ナデ 外面－口縁部～体部中位　ナデ 体部下半　ヘラケズリ 脚部内外面－ナデ	体部中位に２条の沈線 ヘラ状工具による斜行文	47
蓋	口径10.0 器高2.5	天井部外面－カキメ 天井部内面－ナデ	短頸壺蓋・端部は段をなす ロクロ反時計回り	48
広口壺	口径11.0 頸長4.5	内外面－ナデ	焼け歪み	49
長頸壺	口径8.2 頸長8.7	内外面－ナデ		50
長頸壺	口径9.5 頸長6.5	内外面－ナデ		51
提瓶	体部径19.0	体部外面－ナデ後カキメ 体部内面－ナデ	把手はボタン状 外面自然釉	52
台付き椀	口径15.6 椀部高6.2	椀部外面－ナデ 底部－ヘラケズリ	体部と底部の境に１条の沈線	53
脚付き椀	口径11.0 器高10.1	内外面－ナデ	焼け歪み著しい	54
甕	口径47.0	口縁部－ナデ 体部外面－格子目タタキ 体部内面－青海波文タタキ	口縁は上段３条、下段２条の沈線により画された文様帯に１条の稚拙な波状文で加飾	55

付表4　ＳＸ02出土土師器観察表

器形	法量	調整技法	備考	図
杯B	口径12.4 器高4.8	外面－端部　ナデ 下半部　ケズリ 内面－ナデ 稚拙な放射状暗文	精良な胎土	56
杯B	口径12.4 器高5.0	56と同技法	精良な胎土	57
杯B	口径11.0 器高4.0	外面－端部　ナデ 下半部　ケズリ 内面－ナデ	端部に接合痕	58
杯B	口径12.0	58と同技法		59
杯B	口径11.6 器高5.0	58と同技法	口縁端部に接合痕 底部に「×」のヘラ記号	60
杯B	口径12.4 器高4.7	磨耗著しく不明	外面に接合痕	61
杯B	口径11.2 器高4.6	磨耗著しく不明	外面に接合痕	62
杯B	口径11.0 器高4.8	磨耗著しく不明	外面に接合痕	63
杯C	口径12.2 器高3.9	磨耗著しく不明	外面に接合痕 底部内面に放射状の工具痕？	64
杯C	口径12.2 器高4.2	磨耗著しく不明	外面に接合痕	65
杯D	口径16.6?	外面－端部　ナデ 下半部　ケズリ＋ミガキ 内面－ナデ＋放射状暗文	胎土精良 暗橙褐色	66
杯E	口径13.7	磨耗著しく不明	外面に接合痕 胎土やや粗	67
甕B1	口径25.7	口縁部－強い横ナデ	口縁内面に３条の段	68
甕B1	口径20.0	口縁部－強い横ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ケズリ	口縁内面に３条の段	69
甕B1	口径25.4	69と同技法	口縁内面に３条の段 体部内面に接合痕	70
甕B1	口径19.4	口縁部－強い横ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－横方向のハケ後ケズリ	端部内面に２条の段	71
甕B1	口径23.1	71と同技法	端部内面に２条の段	72
甕B1	口径20.0	口縁部－強い横ナデ 体部外面－縦方向のハケ	端部内面に１条の段 内面に接合痕	73
甕B1	口径27.4	口縁部－ハケ後強い横ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ケズリ	端部内面に１条の段	74
甕B1	口径19.6	口縁部－強い横ナデ 体部内面－ケズリ	端部内面に１条の段 内面に接合痕	75
甕B1	口径16.6	69と同技法	端部内面に１条の段	76
甕B1	口径19.4	69と同技法	端部内面に２条の段	77

甕Ｂ1	口径19.7	69と同技法	端部内面に２条の段	78
甕Ｂ1	口径20.5	口縁部－強い横ナデ	端部内面に２条の段	79
甕Ｂ1	口径19.2	71と同技法	端部内面に１条の段	80
甕Ｂ1	口径23.5	69と同技法	口縁部内面に１条の段	81
甕Ｂ1	口径25.2	71と同技法	口縁部内面に１条の段	82
甕Ｂ2	口径20.6	69と同技法	口縁外面波状	83
甕Ｂ2	口径21.8	69と同技法	口縁外面波状	84
甕Ｂ2	口径18.8	69と同技法	口縁外面波状	85
甕Ｂ2	口径19.8	69と同技法	口縁外面波状	86
甕Ｂ2	口径19.7	69と同技法		87
甕Ｂ2	口径18.3	69と同技法		88
甕Ｂ2	口径25.0	69と同技法		89
甕Ｂ2	口径24.3	口縁部－強い横ナデ 体部内面－ケズリ		90
甕Ｂ2	口径17.6	口縁部－強い横ナデ 体部内面－ケズリ		91
甕Ｃ	口径18.6	口縁部－ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－粗いハケ		92
甕Ｃ	口径21.0	口縁部－ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ハケ後ケズリ		93
甕Ｃ	口径20.2	口縁部－ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ハケ		94
甕Ｃ	口径13.6	口縁部－ナデ 体部外面－ハケ		95
甕Ａ	口径14.2	口縁部－ナデ 体部内面－ケズリ		96
甕Ａ	口径12.2	口縁部－ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ケズリ		97
甕Ａ	口径10.7	口縁部－ナデ 体部内面－ケズリ		98
壺	口径12.0	体部外面－縦方向のハケ 体部内面－ハケ後ケズリ		99
甑	口径27.0 器高31.6	口縁部－ナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－縦方向のケズリ	牛角状の把手 底部は径10.9cmの円孔 底部外面１対の円孔(径0.5cm)	100
甑		体部外面－縦方向のハケ 体部内面－縦方向のケズリ	底部は径9.0cmの円孔 底部外面１対の円孔(径0.7cm)	101
鉢Ａ	口径30.0	外面－ハケ 内面－ナデ	２次的な加熱・煤付着	102
鉢Ｂ	口径21.2	外面－ケズリ 内面－ナデ		103
鍋	口径25.2	口縁部－強いナデ 体部外面－縦方向のハケ 体部内面－横方向のハケ後ケズリ	口縁内面に１段 牛角状の把手	104

杯	口径4.3 器高3.1	手捏ね	ミニチュア土器 胎土中に雲母多く含む	105
杯	口径4.6 器高3.0	手捏ね	ミニチュア土器 胎土中に雲母多く含む	106

注１　堤圭三郎『定山遺跡発掘調査報告書』　岩滝町教育委員会　1979
　　堤圭三郎『定山遺跡発掘調査報告書』　岩滝町教育委員会　1980

注２　調査参加者は以下のとおり(順不同・敬称略)。
　　林田登之・保坂　亨・川崎悦代・高橋あかね・長野泰子・鈴木弥生・山科成子・山本紀子・谷聡子・野村幸代・森岡梅子・松浦初美・鈴木美智子・溝井麗子・能勢　昇・小牧義雄・田中喜一・土井正一・森垣実夫・大野利徳・大田富男・香山利幸・市田操子
　　また、現地調査及び本概要報告作成に関して、以下の方々からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表します。
　　白數真也・佐藤晃一・下川賢司・東　高史・細川康晴・森下　衛・岡田晃治・森　　正・肥後弘幸・中前幸子・杉原美加・羽生夕紀子

注３　山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』40-6　(財)古代學協會)　1988
　　また、最近では隣接する但馬地域でＴＫ209～ＴＫ217併行期の須恵器の位置づけに関して、以下の報告において、立ち上がりをもつ法量の大きな杯で、調整の粗雑な一群をＴＫ217併行期に置く案が示されている。
　　菱田哲郎ほか『鬼神谷窯跡発掘調査報告』　兵庫県城崎郡竹野町教育委員会　1990
　　谷本　進「西家の上古墳群」(『兵庫県八鹿町文化財調査報告書』第10集　八鹿町教育委員会)　1992

注４　岡田晃治ほか「千原古墳・弓木城跡」(『京都府岩滝町文化財調査報告』第６集　岩滝町教育委員会)　1984

注５　中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第９集　綾部市教育委員会)　1982

注６　中村孝行「青野遺跡第５次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第９集　綾部市教育委員会)　1982

注７　肥後弘幸「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注８　辻本和美「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第８冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注９　中谷雅治『高川原遺跡発掘調査報告書』　大江町教育委員会　1975

注10　竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第２冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注11　田代　弘「池尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1992

注12　佐藤晃一「須代遺跡Ⅰ－調査の概要－」(『加悦町文化財調査概要』７　加悦町教育委員会)　1988
　　佐藤晃一「須代遺跡Ⅲ」(『加悦町文化財調査報告』第17集　加悦町教育委員会)　1992

注13　中嶌陽太郎ほか「中野遺跡第４次発掘調査概要」(『宮津市文化財調査報告』第７集　宮津市教育委員会)　1983

注14　梅原末治「丹後国分僧寺」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第６冊　京都府)　1925

注15　岡田晃治・羽渕賢良「日の内古墳・千原遺跡第１次」(『京都府与謝郡岩滝町文化財調査報告』第７集　岩滝町教育委員会)　1984

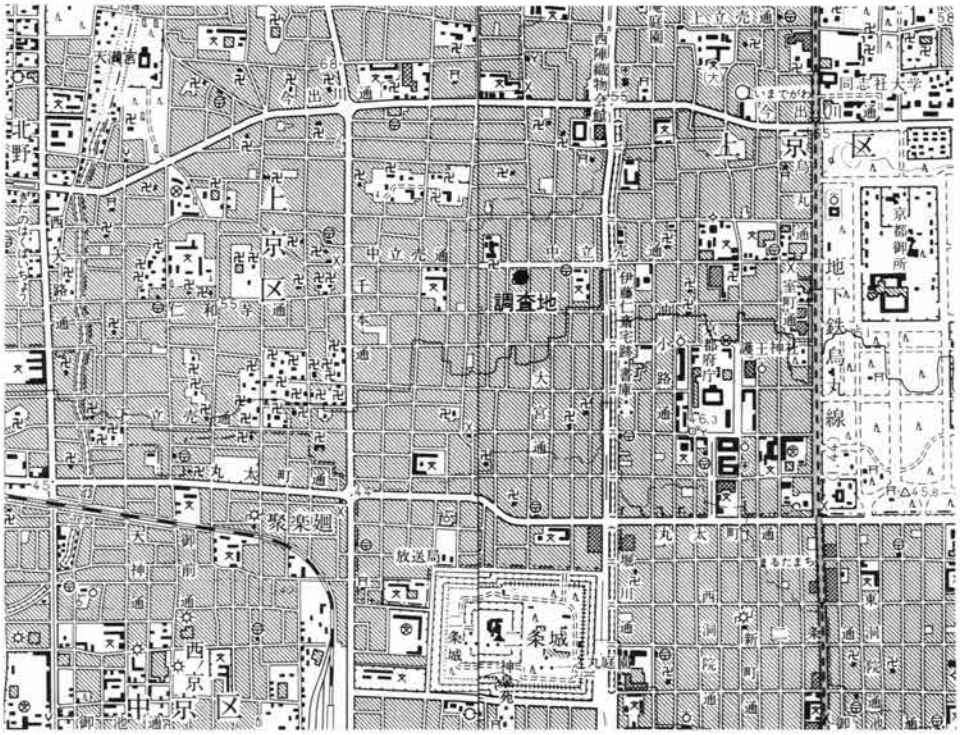
3．平安京跡(聚楽第跡)発掘調査概要

1．はじめに

平安京跡(聚楽第跡)の発掘調査は、京都西陣公共職業安定所改築に先立ち、京都府労働部の依頼を受けて実施したものである。調査期間は平成3年11月19日から平成4年2月28日までで、調査面積は約400㎡である。また、平成4年度には整理作業を行った。調査及び整理に要した費用は全額京都府が負担した。

2．位置と環境

調査地点は大宮通りと中立売通りの交差点の南西角地で、平安時代には平安宮北東部の内教坊と平安宮の東を限る築地、及び大宮大路の推定地にあたり、大宮大路西側溝などの遺構が検出されることが期待された。また、豊臣秀吉が内野に築いた聚楽第(じゅらくやしき)の一部にあたる可能性も考えられた。聚楽第の規模や位置については、江戸時代か

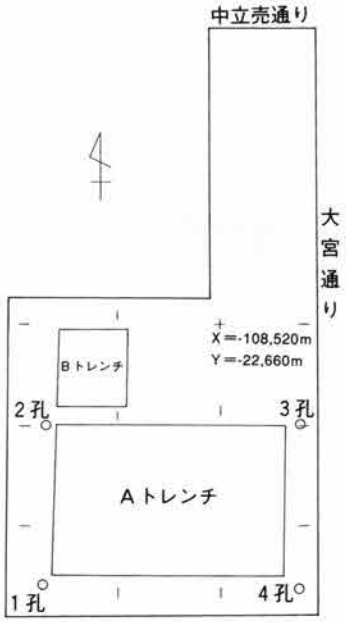


第73図　調査地位置図(1/25,000)

らすでに、北は一条、南は二条、東は堀川、西は内野(千本)とする説(『京羽二重織留』)、北は一条、南は丸太町、東は大宮、西は千本とする説(『山城名跡巡行志』)など、諸説があってはっきりしないが、調査地点がその一画にあたることはほぼ確実と思われた。

3．調査概要

調査地の土層は、現地表下約80cmまでは近現代の盛り土である。その下には、江戸時代に行われた整地による灰黄色礫混じり粘質土層が約20～60cm存在しているが、職安の旧庁舎の基礎による攪乱がこの整地層にまで達している部分が多かった。また、調査地の東端部は近代まで存在した河川によって大きく削平されていることが判明したため、江戸時代については北東部の調査を行わなかった。江戸時代の遺構の調査を進めていく過程で、下層には人為的な埋土と思われる礫層がかなり広範囲に厚く存在していることが判明した。聚楽第の東堀を大宮通りにあてる研究もあり(注1)、調査地がこの堀にあたる可能性も考えて、江戸時代の遺構の調査終了後、Ａトレンチの北壁に沿って重機による断ち割りを行った。この結果、人為的な埋土は西から東下がりに層状に堆積しており、多量の金箔瓦などが出土したため、この時点で聚楽第の東堀と断定した。断ち割りを現地表下約６ｍまで行っても堀の深ささえ判明しなかったが、それ以上の掘削は危険が大きかったため、Ａトレンチの四周で地山の深度と土層の堆積状況を確認する目的でボーリング調査を行った。ボーリング調査は、トレンチ西側の２孔については現地表から地山まで、トレンチ東側の２孔については現地表下５ｍから地山までの土壌資料をすべて採取して行うこととし、日本基礎技術株式会社大阪支店に委託した。また、堀の西肩が調査区西端に近くて櫓台などが存在する場合を想定して新たにＢトレンチを設定した。



第74図　調査区及びボーリング孔位置図(1/800)

①検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、整地層上面から掘り込まれた18世紀中頃及び19世紀の土坑３基と、漆喰を塗り込めた地下室及び聚楽第の東堀である。それ以前の遺構はすべて聚楽第の堀により削平されていた。

土坑１(ＳＫ101)

調査区南端西寄りで検出した。東西1.2m・南北1.7m以上を測る長方形の土坑である。検出面からの深さは約0.6mであるが、トレンチの南壁で観察すると深

さ約1.1mを測る。埋土は4層に分かれ、上層から、淡茶灰色粘質土、暗黄灰色礫混じり粘質土、暗灰色粘質土(灰を多く含む)、黒灰色シルトとなっている。完形品を含む土師器皿などが多量に出土したが、大半が最上層からの出土である。

土坑2(SK102)

東西1.2m・南北0.8mの東西に長い隅丸長方形の平面形を呈する。検出面からの深さは最大約0.3mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は炭を多く含んだ暗灰色粘質土、下層は暗茶褐色礫混じり粘質土である。伏見人形の竈、寛永通宝などが出土した。

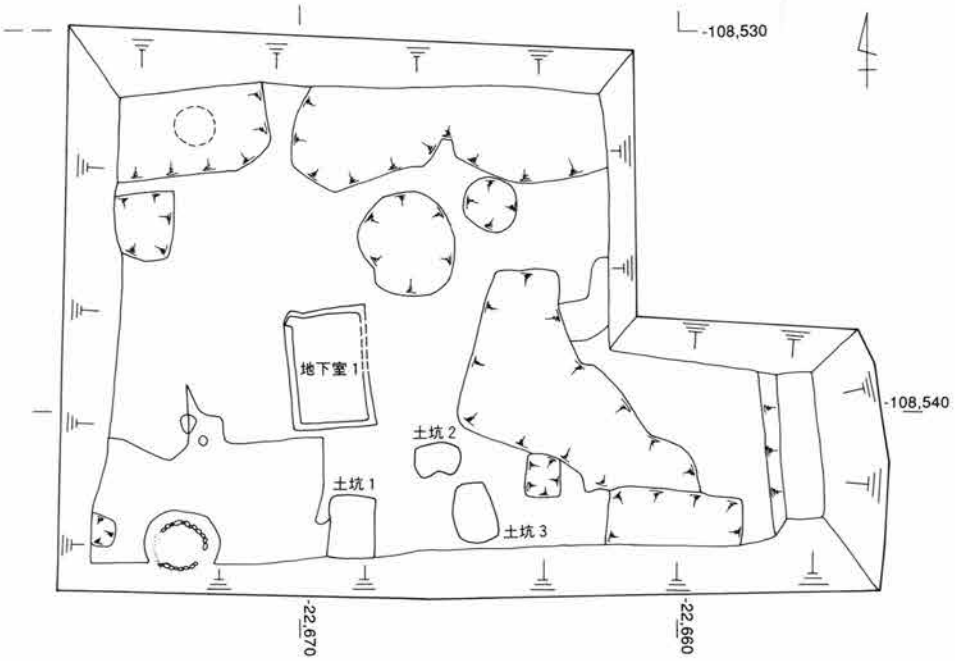
土坑3(SK103)

調査区南辺中央部で検出した南北1.6m・東西1.1mの土坑である。検出面からの深さは最大約0.4mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は灰混じりの灰黒色粘質土、下層は灰茶色礫混じり粘質土である。土坑中央部には、下層の上面に接して瓦質の火鉢が2個体整置されていた。この土坑から出土した他の遺物がすべて小破片であることや、火鉢の出土位置からみて、この土坑は火鉢を埋納するために設けられたものと思われる。

地下室1(SX101)

長方形プランを呈する漆喰の地下室である。施工時に漆喰を塗り込めながら内面が平滑になるように仕上げているため、漆喰の内面が平滑であるのに対し、外面は掘形の形状にあわせて凹凸が見られる。したがって、漆喰の厚さは一定せず、15～20cm前後を測る。内法で南北2.8m・東西1.8mを測り、深さは最大0.9mを確認した。埋土は3層に分かれており、上層から暗茶灰色粘質土、暗茶灰色礫混じり粘質土(漆喰片を多量に含む)、暗茶褐色礫混じり粘質土である。底面の東辺中央付近には楕円形の掘り込みがあり、その部分だけ漆喰が破壊されている。地下室内に水が溜まることを防ぐために廃絶時に開けられたものと思われる。

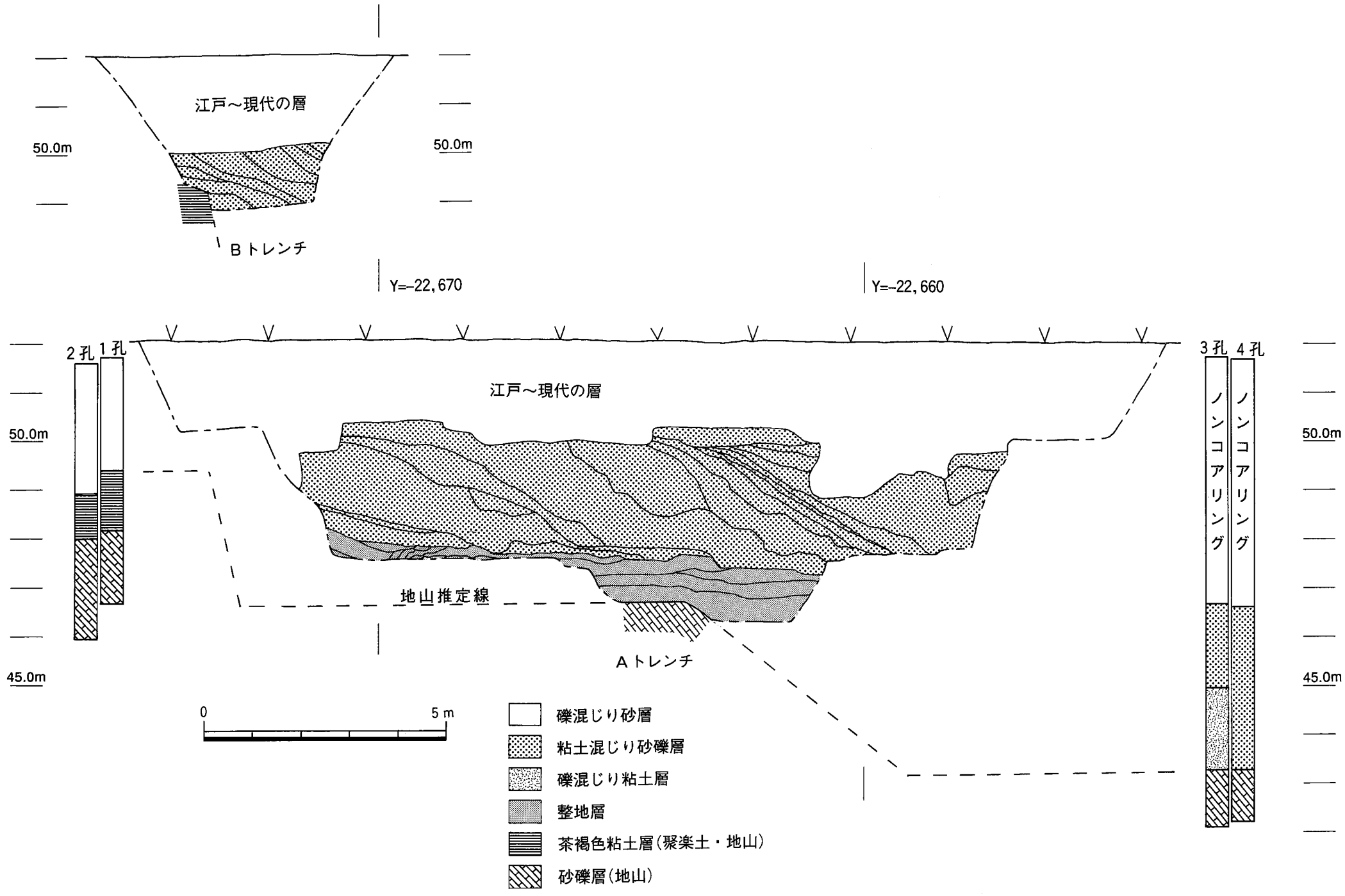
第75図　Aトレンチ南壁断面図　(1/100)



第76図　Aトレンチ平面図(江戸時代)

堀(聚楽第東堀)(第77図)

Aトレンチ北壁に沿う断ち割りによって、調査区のほぼ全体が聚楽第の堀にあたっていることが判明した。しかし、断ち割りの中央部付近(Y=-22,663.8m)の現地表下5.4mで東に向かって下がる地山の肩を検出したほかは、堀の規模などを考える手がかりを得ることができず、ボーリング調査を行った。Aトレンチ西側で行ったボーリング調査の結果、地表下2.3mで茶褐色粘土(聚楽土)を検出し、これが、Bトレンチの西端隅にわずかに認められた土層と同一であると判断されたため、この層が東に下がっていくY＝-22,673.5m付近に地山の肩が存在することが判明した。この時点では、これらの2つの肩と結んだ地山推定線が堀の掘形で、堀が二段掘りになっていると考えたが、現地表下4.5m前後から下に存在する堅く締まった水平な土層の理解に問題が残った。一方、Aトレンチ西側で行ったボーリング調査の結果によると、地表下約6.7mまでは粘土混じりの礫層が存在し、その下には1.7mの厚さで礫混じりの黒色粘土層が堆積し、現地表下8.4mで地山に達することが判明した(3孔)。礫層は断面で確認した人為的な埋土に対応し、黒色粘土層は滞水時の堀底堆積物であると思われるので、水堀として機能したのは、トレンチの東側部分のみであることがはっきりした。このことから、Y＝-22,661m付近から西側にある水平層の部分を犬走りと考え、この堅く締まった水平な層はこれに伴う整地層と考えるのが妥当



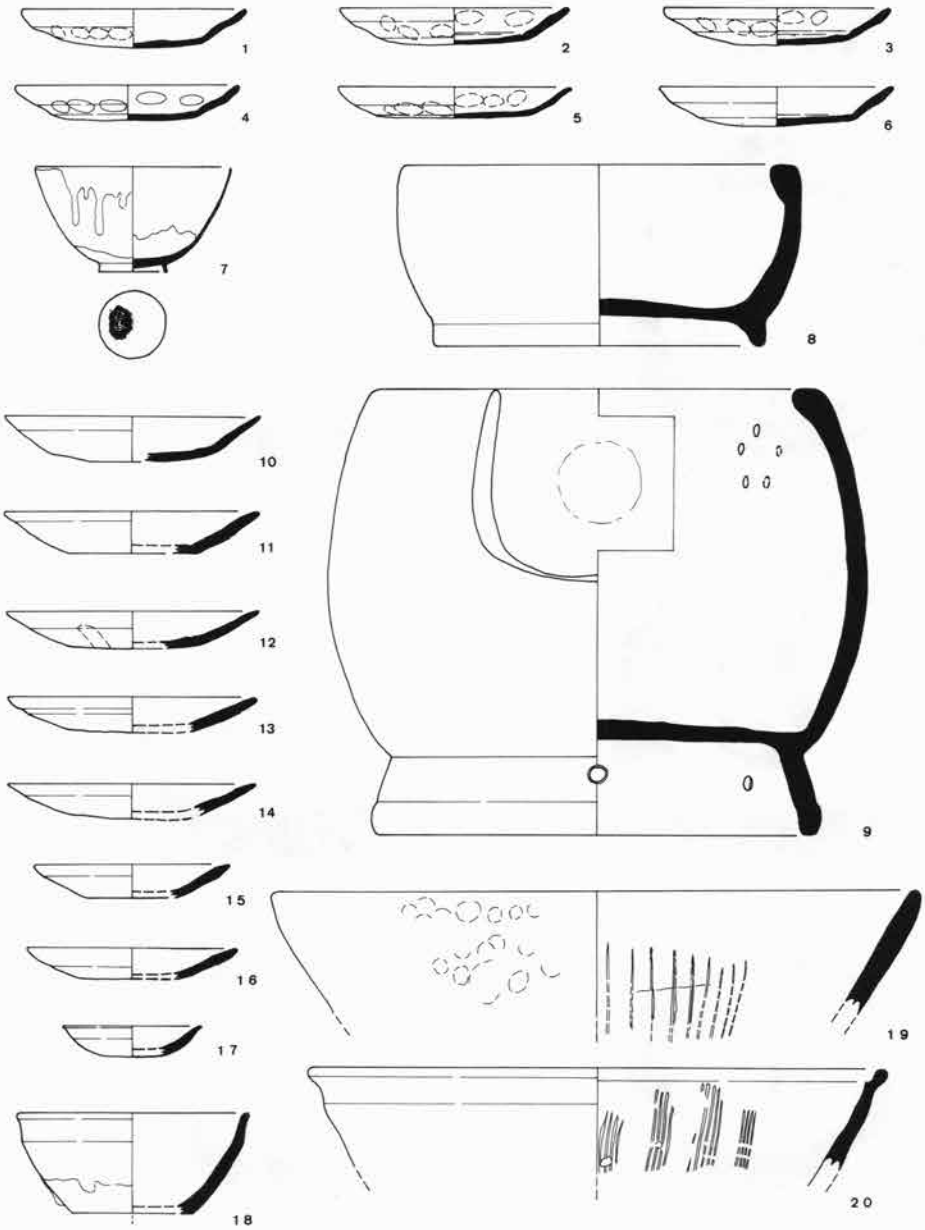
第77図　聚楽第跡東堀断面図及び地質柱状図

であると思われる。したがって、水堀の西肩は水平な整地層の存在を確認しているY＝-22,661m付近よりも東に想定される。

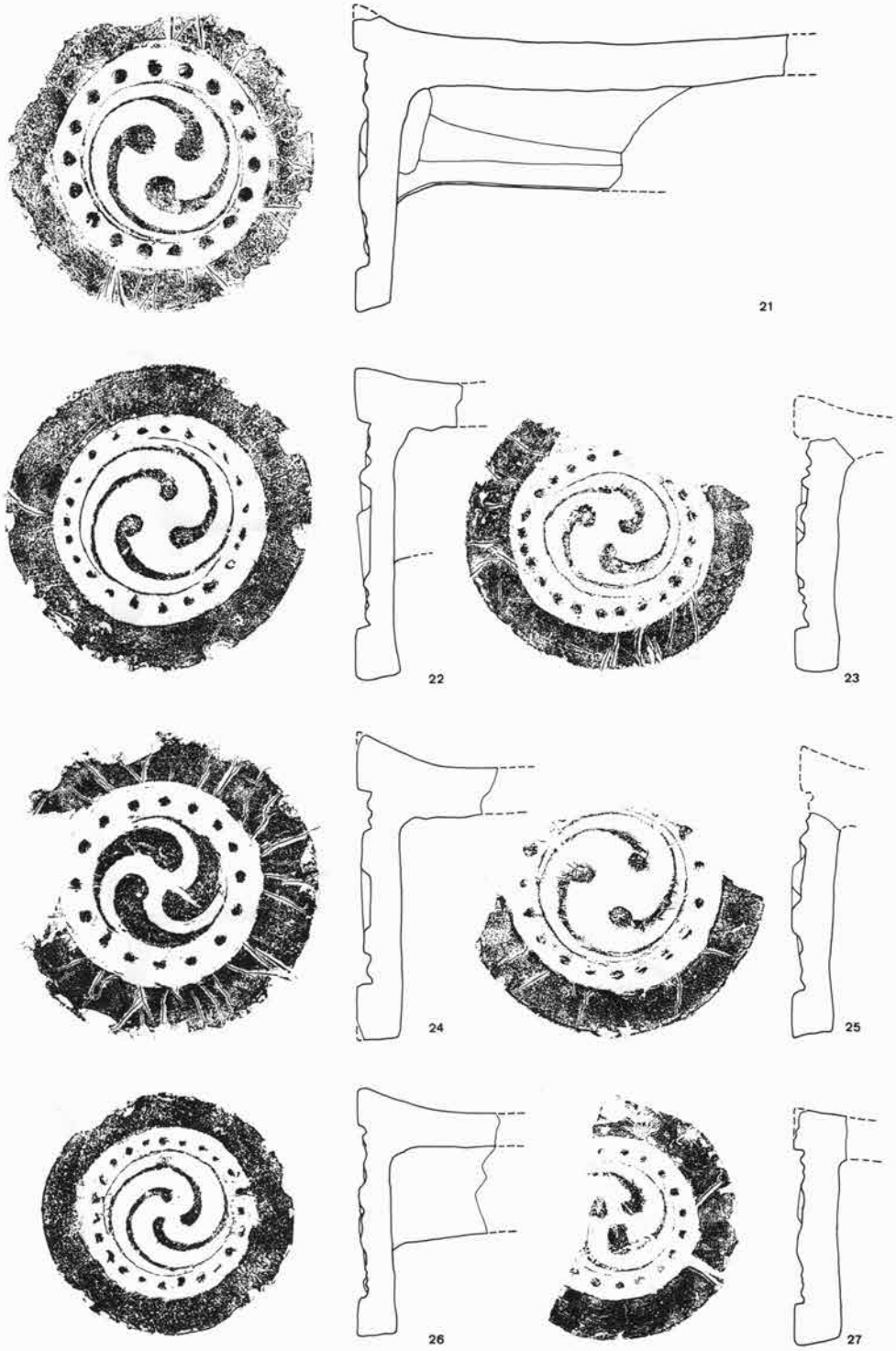
②出土遺物

土器類

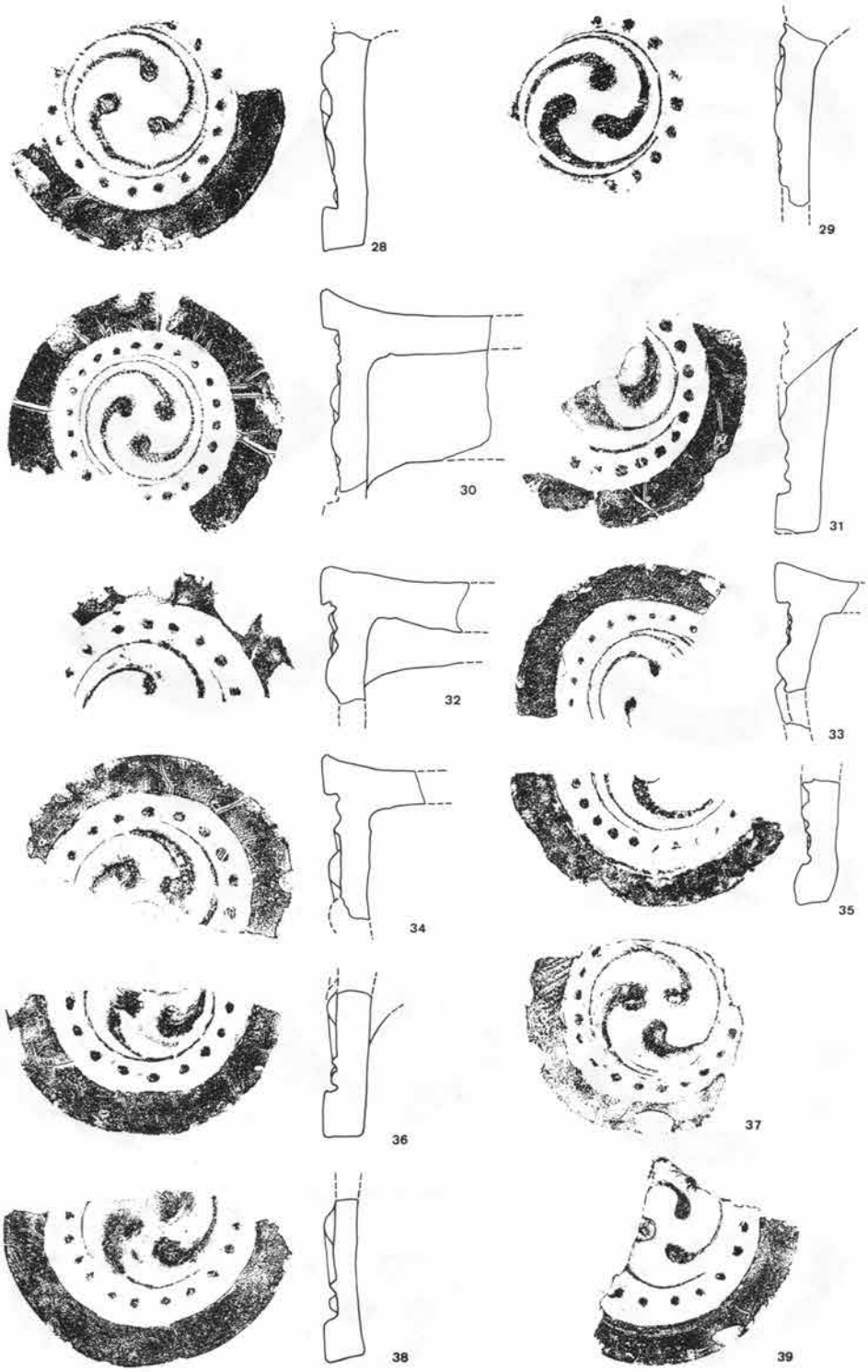
1～6は、土坑1出土の土師器皿である。口径11.7～12.1cmを測る。内面の立ち上がり



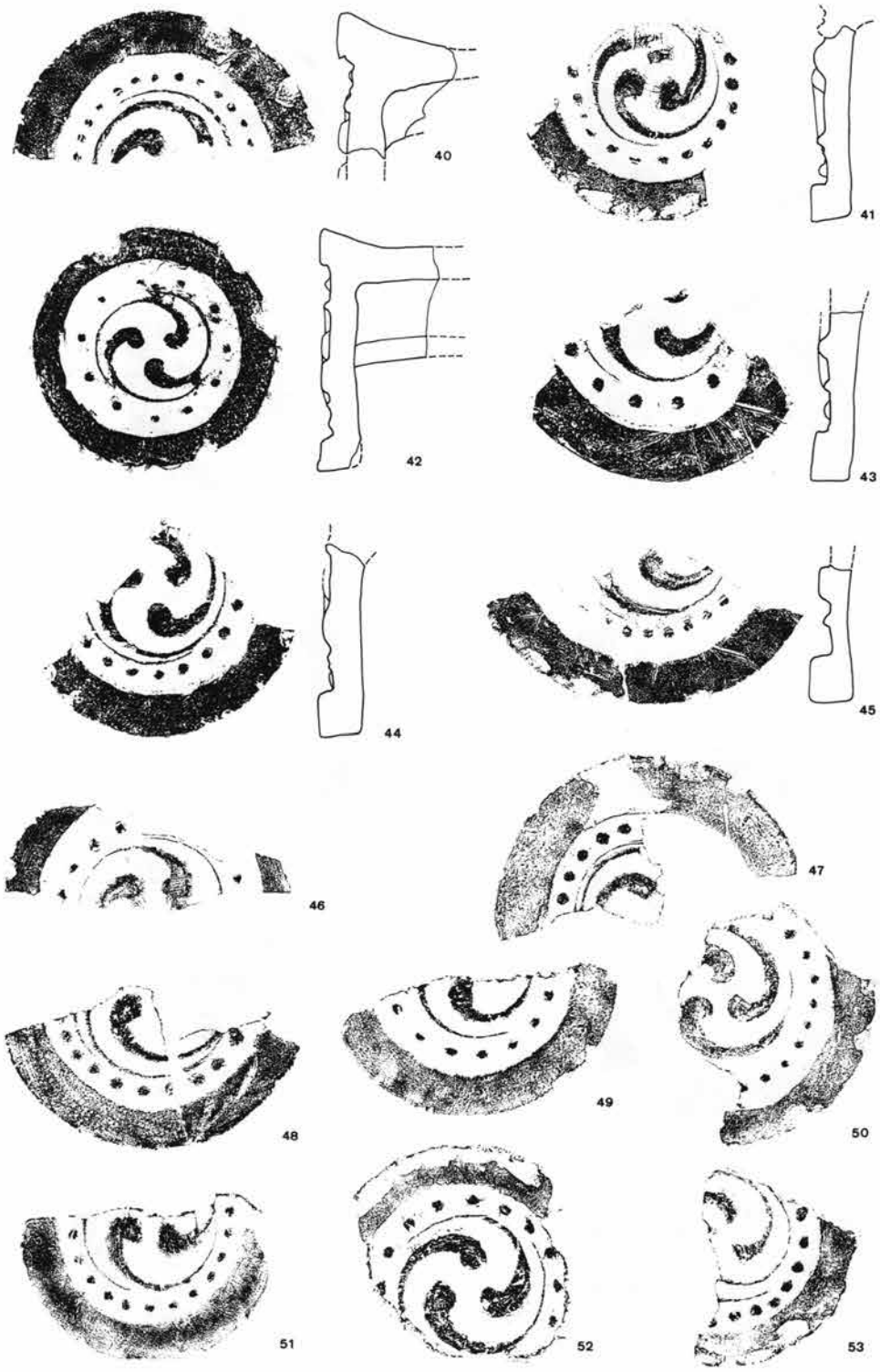
第78図　出土遺物実測図(1/4)



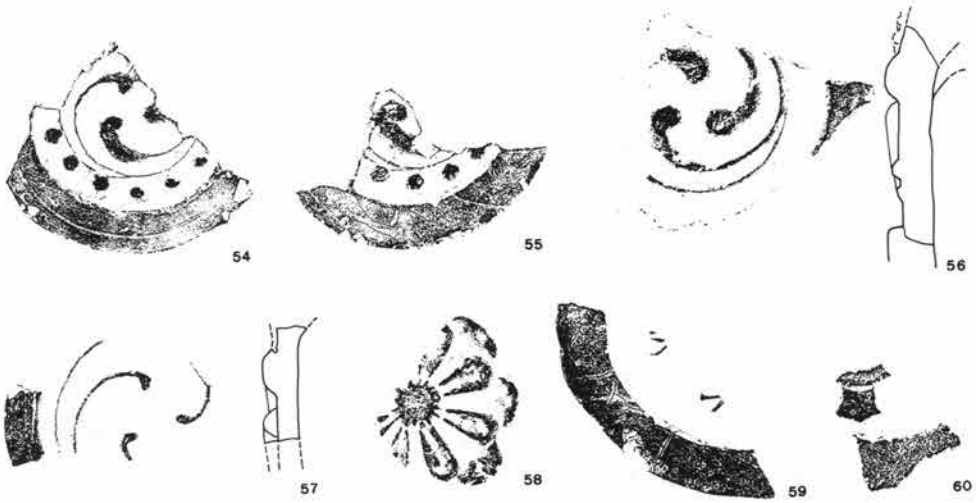
第79図　軒丸瓦実測図１(1/4)



第80図　軒丸瓦実測図2 (1/4)



第81図　軒丸瓦実測図３(1/4)



第82図　軒丸瓦実測図４(1/4)

部には幅２～３㎜ほどの凹線状の圏線がめぐる。１・４・５の口縁端部には燈明皿に使用されたときの煤が付着している。７は、地下室１から出土した京焼きの椀で、高台内に「仁清」の銘印が押されている。銘印は小判形の枠の上下が離れた幕形で、伝世品では石川県立美術館所蔵の国宝色絵雉香炉に押されたものに酷似している。ロクロの技術が巧みで、器壁が非常に薄く仕上げられており、仁清工房の技術の高さを現わしている。内面は透明釉、外面は鉄釉が掛けられている。８は、土師質焼成の火鉢である。地下室１から出土した。９は、土坑３に置かれていた瓦質焼成の火鉢である。寸胴形の体部に高い輪高台を持った器形で、体部の一部を口縁から「U」字形に切り込んでいる。高台には３か所に円孔が開けられ、高台端部は玉縁状に肥厚している。体部内面には五徳の役目を果たす突出部が貼り付けられていた痕跡が認められる。体部には空気取りの５つの小孔が梅鉢形に２か所に開けられている。10～20は、堀跡から出土した。10～17は、土師器皿である。18は、美濃焼の大窯後半期の天目茶椀である。19は丹波焼、20は信楽焼のすり鉢である。

軒丸瓦(第79～82図・付表５)

軒丸瓦の瓦当文様はほとんどが巴文である。巴の方向はすべて左巻きで、右巻きのものは見られない。笵の数が非常に多く、同笵の確認できたものは３種のみである(28・29、38・39、54・55)。全体的な傾向としては、珠文数が16個以上のものが大半で、珠文の密なものが多い。珠文の割り付けが整然と行われているものは少なく、中には二つの珠文が連結して瓢箪形になっているもの(22)があるなど、笵を作る際に珠文の割り付けを行っていないと思われるものの方が多い。また、巴文は、頭部と尾部の境が比較的はっきりしたものが多いが、珠文と同様にほとんどが整然とした割り付けを行っていないので、ひとつ

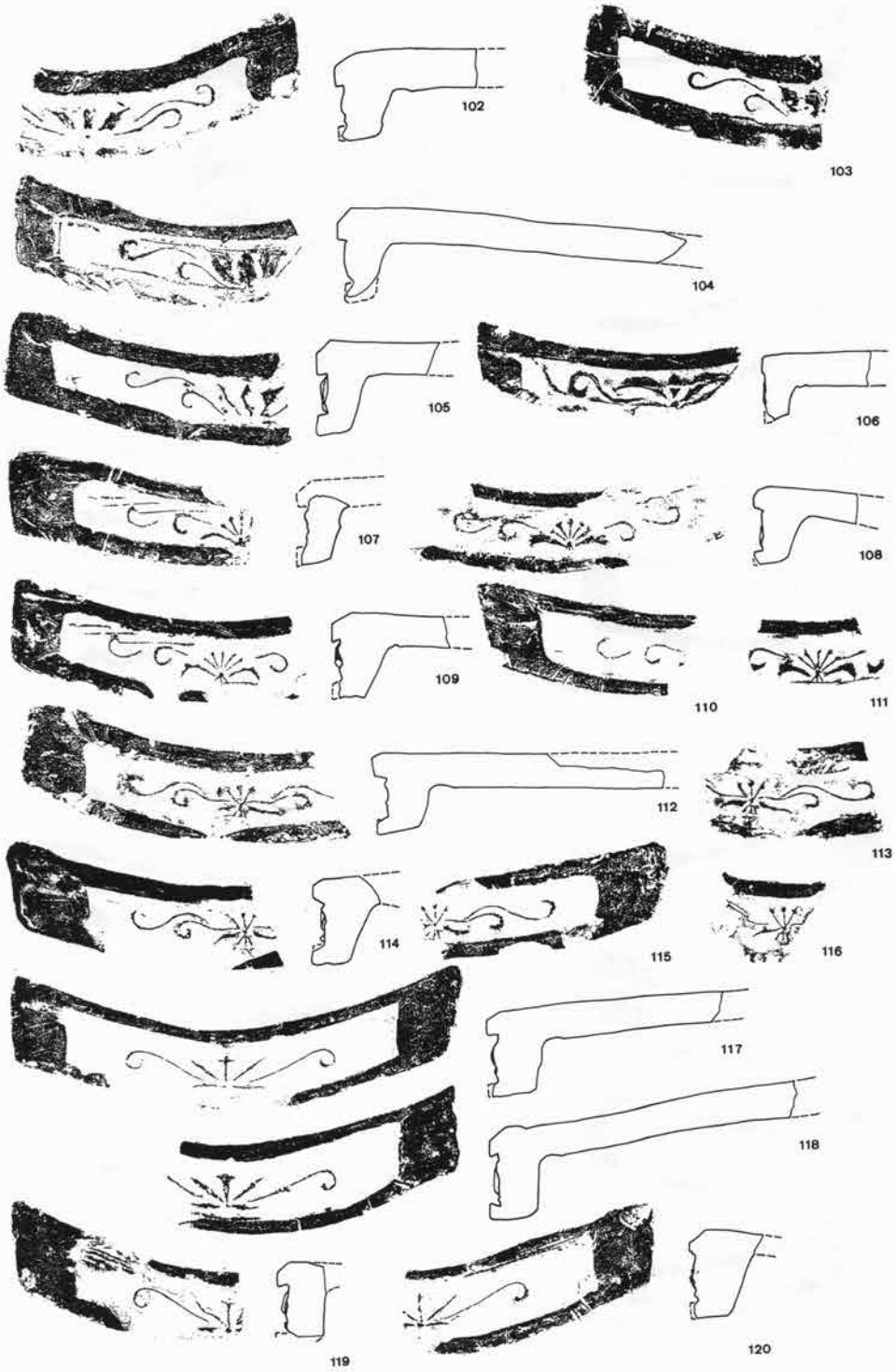
付表５　軒丸瓦計測表

番号	直径 (mm)	内区 巴区径 (mm)	内区 巴幅 (mm)	外区 内縁 珠文数(個)	外区 外縁 幅(mm)	外区 外縁 高さ(mm)	文様径 (mm)	備考
21	175	95	25	18	25	8	125	
22	180	95	22	23	29	8	122	
23	164	78	22	(24)	26	8	112	
24	174	77	23	16	30	8	114	無金か？
25	164	86	23	(18)	26	7	112	
26	144	75	13	23	21	4	102	
27	135	66	17	(19)	22	5	91	珠文は無金か？
28	163	85	23	(17)	25	8	113	
29	—	85	23	(17)	—	—	114	
30	149	74	18	(22)	23	8	103	
31	154	78	19?	(24)	23	7	108	珠文は無金か？
32	158	84	23	(20)	22	10	114	
33	164	75	21	(22)	23	8	118	
34	156	76	23	(18)	20	8	116	
35	160	68	—	(25)	22	8	116	珠文は無金か？
36	152	75	21	(17)	24	7	104	珠文は無金か？
37	151	78	22	(20)	21	10	109	珠文は無金か？
38	160	75	24	(21)	24	8	112	
39	160	74	24	(21)	24	8	112	
40	165	82	20	(26)	23	8	119	珠文は無金か？
41	149	72	22	(22)	20	9	109	珠文は無金か？
42	140	66	18	11	19	6	102	珠文は無金か？
43	178	92	16	(13)	27	—	124	
44	156	84	24	(19)	24	8	108	
45	175	76	18	(26)	23	13	129	珠文は無金か？
46	158	80	21	(18)	20	8	118	
47	176	90	27	(25)	30	10	116	珠文は無金か？
48	180	98	22	(22)	26	7	128	無金か？
49	164	77	22	(17)	25	8	114	
50	184	87	17	(25)	26	10	132	珠文は無金か？
51	148	81	24	(21)	22	9	104	珠文は無金か？
52	163	85	24	(17)	23	9	117	無金か？
53	156	78	17	(22)	22	8	112	珠文は無金か？
54	160	80	19	(16)	23	8	114	
55	160	80	19	(16)	24	7	112	
56	171	91	22	無	27	8	117	珠文なし
57	138	90	18	無	18	8	102	珠文なし
58	—	—	—	—	—	—	—	菊文
59	186	—	—	—	24	9	138	文字？
60	—	—	—	—	26	10	—	法輪文

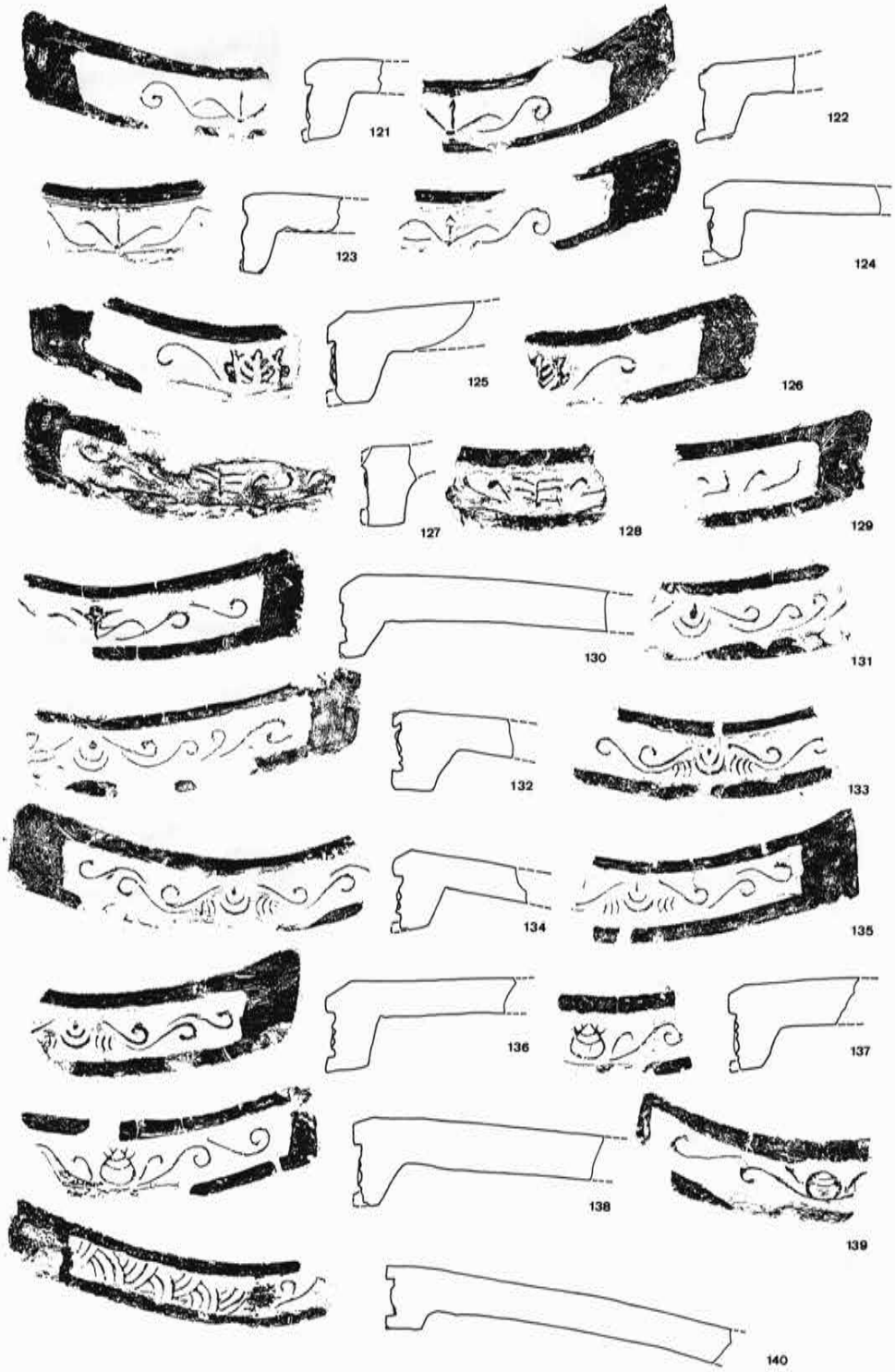
の笵で３つの巴の尾の長さがまちまちであったり、尾が隣の巴に接するものと離れているものがあるなど、文様として整っていないものが目立つ。巴文の以外のものは菊文(58)が２個体、文字かと思われるもの(59)が１個体、宝輪文(60)が１個体出土しているだけである。計測値については付表５にまとめた。24・48・52は、金箔瓦でない可能性があるが、

第83図　軒平瓦実測図1(1/4)

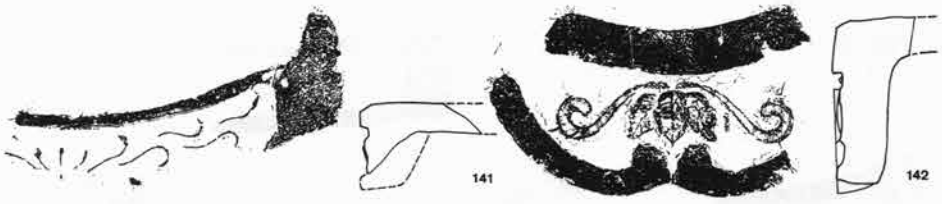
第84図　軒平瓦実測図２(1/4)



第85図　軒平瓦実測図3 (1/4)



第86図　軒平瓦実測図４（1/4）



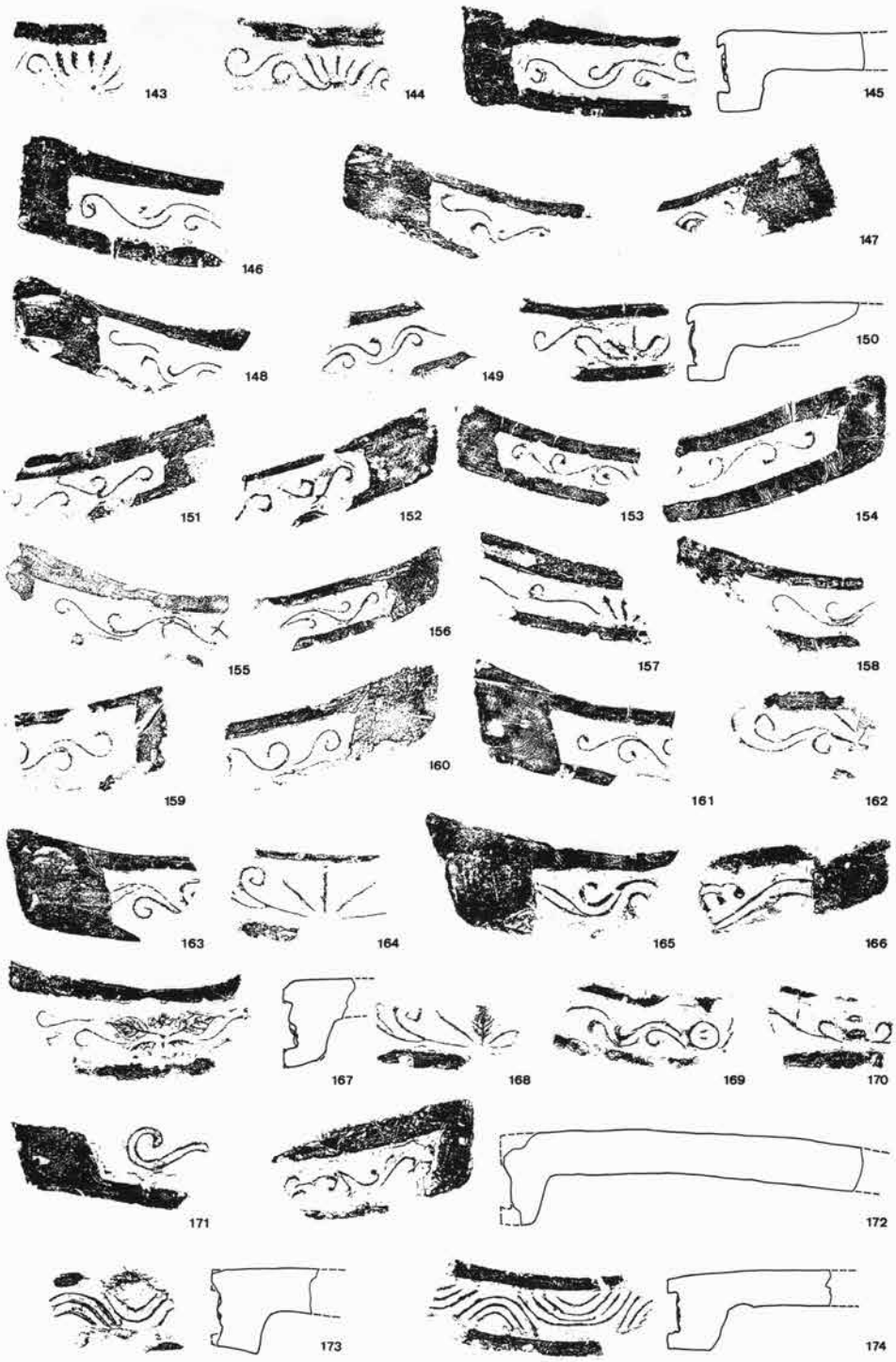
第87図　軒平瓦実測図５(1/4)

他はすべて金箔瓦である。

軒平瓦(第83～88図)

軒平瓦は、瓦当文様の中心飾り及び脇飾りの全容が判明するものだけで、41の型式が認められた。141・142以外はすべて金箔瓦である。

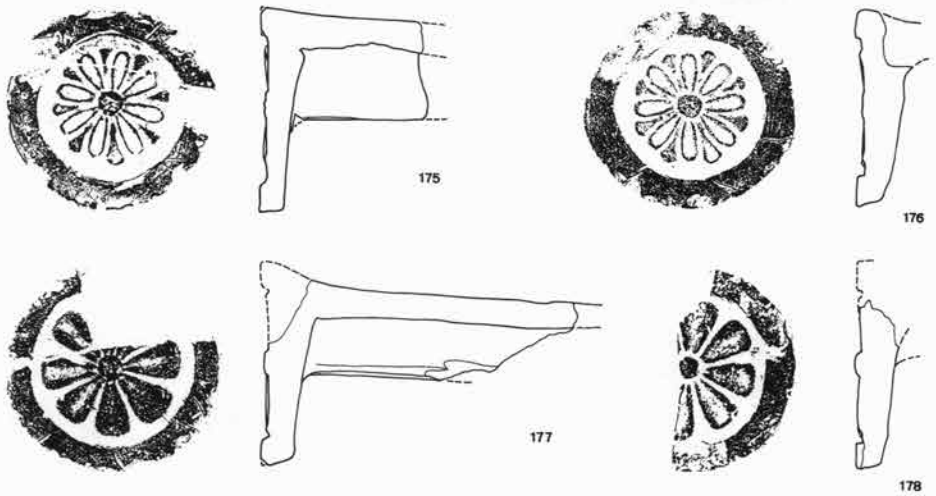
61～65は、中心飾りが五葉で、三反転する唐草を脇飾りとするものである。61・62は、同笵で、他に同笵が１点あるが、他は１個体ずつである。66・67は、61～65と同じ中心飾りで、脇飾りの唐草が二反転になったものである。68は、扁平化した五葉に二反転する唐草が付くもので、小振りな瓦である。70は、五葉に蕚が付いた中心飾りに三反転する唐草が付くもので、全体に端正な作りである。大津市坂本城に類例がある。69は、珠文と五葉の中心飾りに三反転する唐草が付くものである。72は、三葉の中心飾りに三反転半の唐草が付く。71・73・74は、同笵で中心飾りが三葉、脇飾りが三反転する唐草である。大坂城に類例がある。75～77は同笵で、大きく開く三葉に三反転する唐草の脇飾りが付くものであるが、２反転目の唐草が長大化し、中心寄りの唐草は矮小化して中心飾りの上にのっている。75は、平瓦の接続する角度が大きく異なる。78は中心飾りが三葉で、二反転半の脇飾りが付く。類例は滋賀県安土町安土城などにあるが、安土城出土瓦に比べると調整がきわめて雑である。79・80は大きく開く三葉を中心飾りとし、二反転する唐草の脇飾りを持つもので、武生市小丸城に類例がある。81～84は、剣菱状の三葉を中心飾りとし、三反転する唐草の脇飾りを持つ。82～84は同笵で、同笵は他に３点ある。85～89は、三葉を中心飾りとし、三反転する唐草の脇飾りを持つ。85と86・87、88と89は、それぞれ類似しているが、唐草の反転する方向が逆になっている。同笵は85タイプが計３点、86・87タイプが計４点、88タイプが計３点ある。90・91は同笵で、三葉の中心飾りと三反転する連続した唐草の脇飾りを持つものである。92～95は、三葉に蕚が付いた中心飾りに三反転する唐草の脇飾りを持つものである。同笵は計７点ある。96・97は同笵で、三葉の中心飾りと二反転半する唐草の脇飾りを持つ。98～105は、肉厚の三葉を中心飾りとし、二反転する脇飾りを持つものである。98～101は同笵で、他に同笵が２個体ある。また、103～105は同笵で、他に同笵が１個体ある。106は、肉厚で大きく外に開く三葉を中心飾りとし、一反転



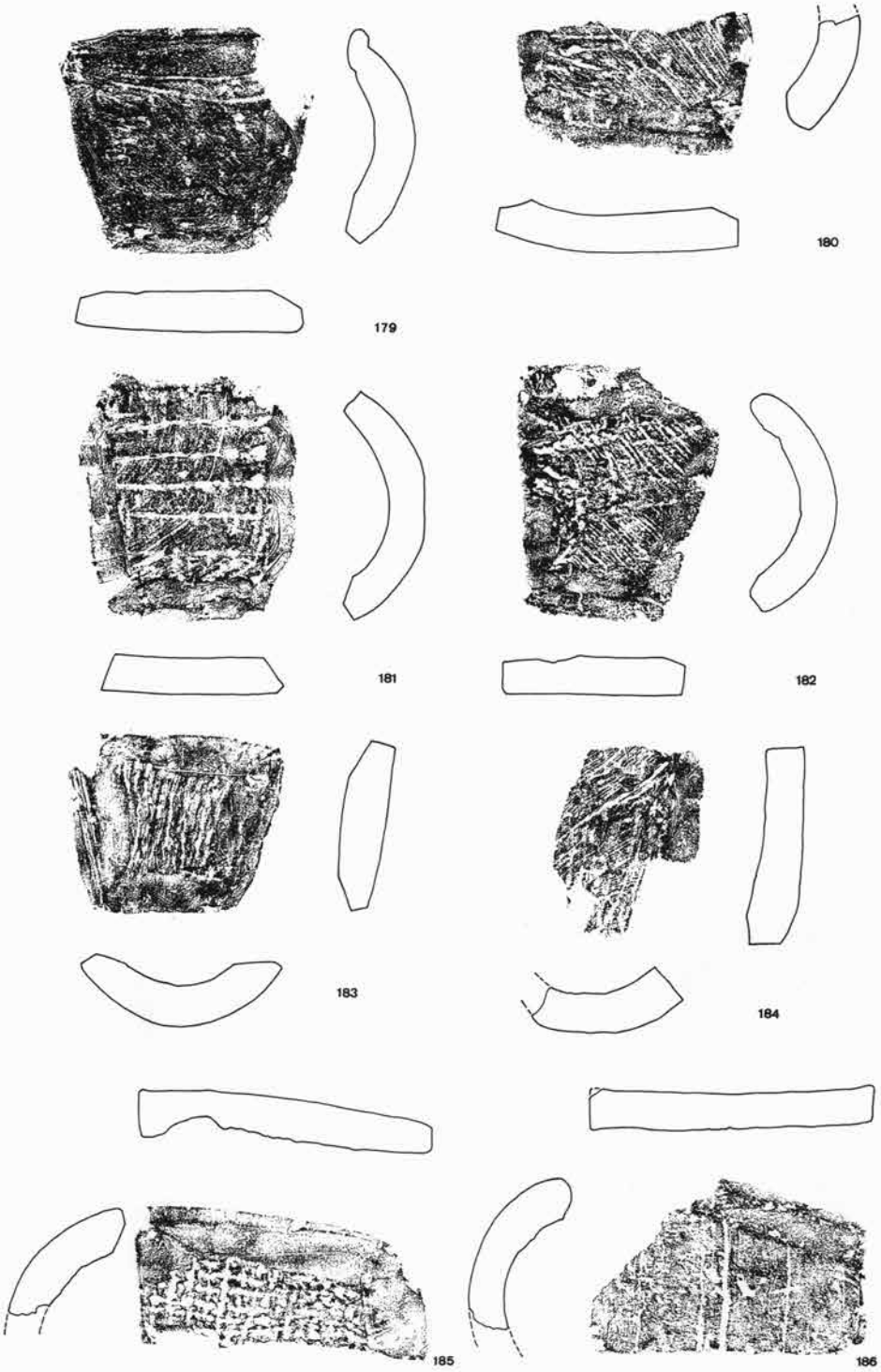
第88図　軒平瓦実測図6（1/4）

半の唐草を脇飾りとするものである。107～111は、五葉と萼の下に根のような短い文様が三本付いた中心飾りと二反転する唐草の脇飾りを持つ。同笵は計9点ある。112～116は、107～111に似たモチーフであるが、中心飾りの五葉が三葉になり、脇飾りが枝分かれする二反転の唐草になっている。同笵は計8点ある。117～120・121～124は、三葉の中心飾りと一反転する唐草を持つものである。前者(117～120)の文様が直線的であるのに対し、後者(121～124)は中心飾り、脇飾りとも丸みを帯びる。同笵は前者・後者ともに計8点ある。125・126は、桐の葉を中心飾りとし、一反転する唐草の脇飾りをもつ。同笵は計6点ある。127～129は、草文を中心飾りとし、脇飾りには非対称な唐草？を配する。全体に文様の彫りが浅い。同笵は計4点ある。130は、花文を中心飾りとし、二反転する唐草をもつ。132は、様式化した宝珠を中心飾りとし、四反転する唐草を脇飾りとするもので、同笵は計2点ある。133～136は同笵で、宝珠と波文を中心飾りとし、三反転する唐草の脇飾りを配する。同笵は他に1点ある。137～139類は、宝珠を中心飾りとする。脇飾りには子葉と二反転する唐草文を配する。137・138は同笵で、長岡京市勝龍寺城に類例がある。140は、瓦当の左半分に波状文を配する。同笵とは断定できないが、同文のものが他に1点ある。141は、三葉を中心飾りとし、五反転する唐草の脇飾りを持つ。1点のみで、掛瓦として作られている。金箔は貼られていない。142は、いわゆる滴水瓦である。桐の葉を中心飾りとし、脇飾りは一反転の唐草がレリーフ状に表現されている。金箔は貼られていない。

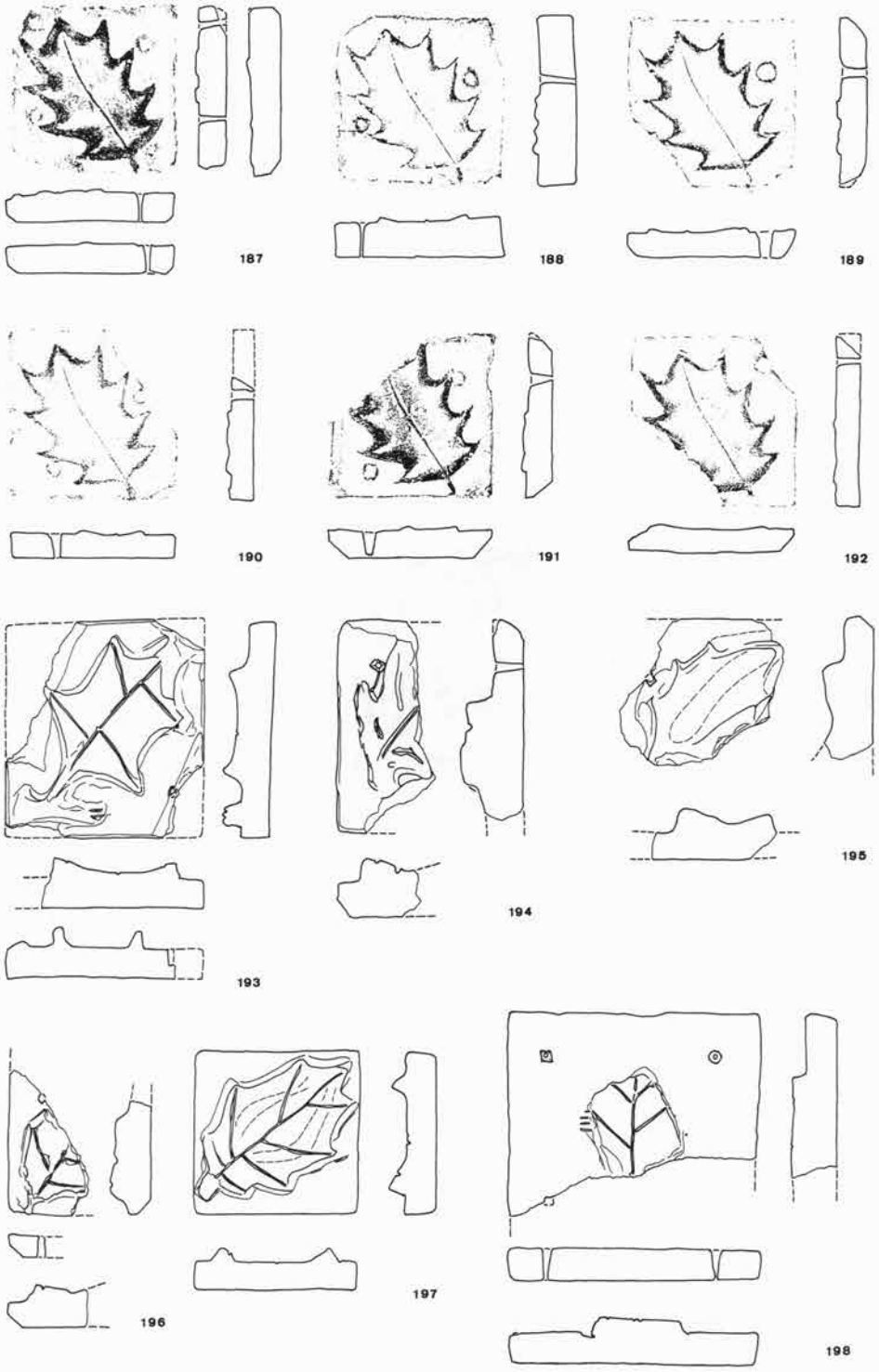
瓦当文様の全容が判明しないものは、第88図に掲げた。143・144は、61～68に類似するものである。172は山崎城に類例がある。



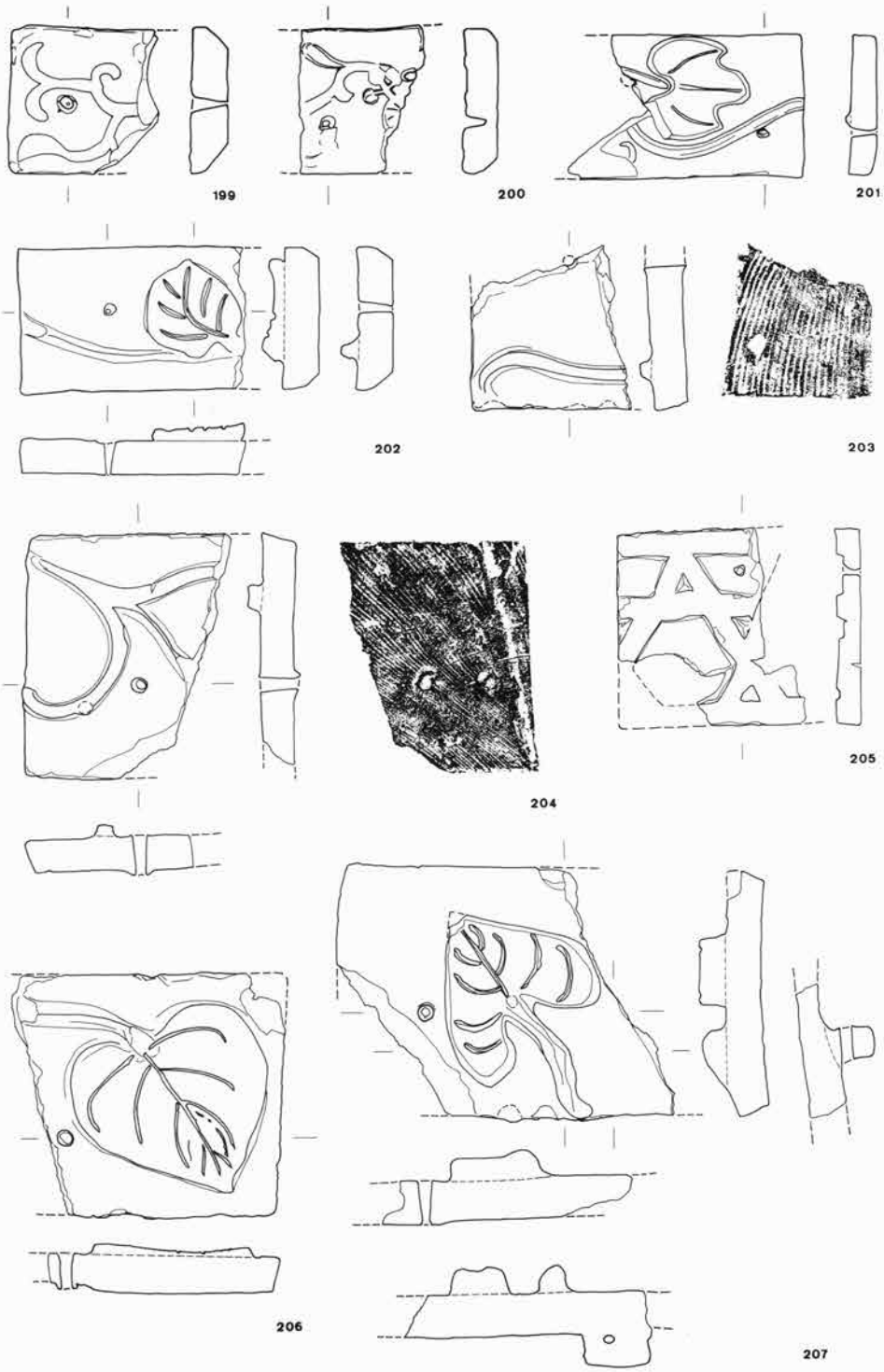
第89図　菊丸瓦実測図(1/4)



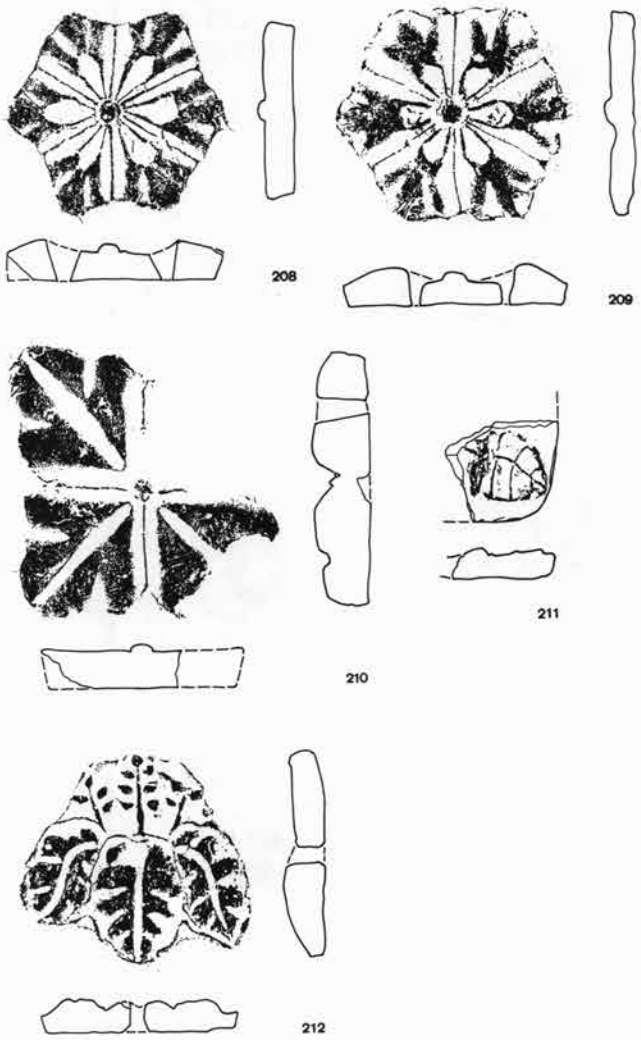
第90図　棟込瓦類実測図(1/4)



第91図　飾瓦実測図1(1/5)



第92図　飾瓦実測図２(1/5)



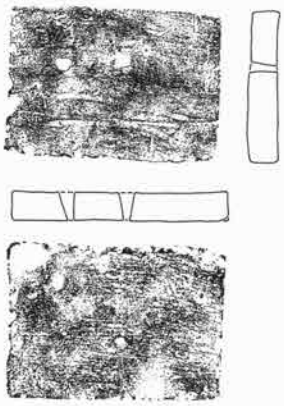
第93図　飾瓦実測図3(1/4)

棟込瓦類

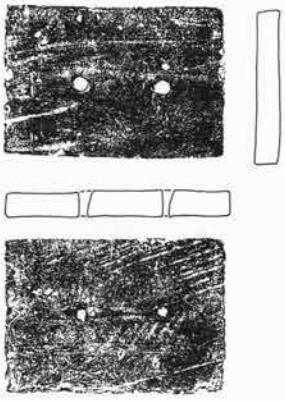
菊丸瓦は16弁と8弁の2つのタイプがある。175・176は16弁の菊花文で、177・178は8弁の菊花文である。同笵は前者が合計6点、後者が合計4点ある。すべて外線と文様部分に金箔が貼られている。面戸瓦としたものは大きく2タイプに分類した。いずれも丸瓦を切断して作っている。179・180は、平面形が横長の等脚台形状を呈するもので、面戸瓦にふさわしい形をしている。179は、長辺側の外面が小さく立ち上がっており、これと同じタイプは安土城本丸で採集されている。内面は四周に沿って面取りされている。181・182は、179・180に比べて幅が狭く、平面形が縦長の台形状を呈する。183・184は面戸瓦とは異なり、丸瓦を横断する方向の二辺が平行する。使用法は不明である。183は、内面の角を4周に沿い面取りするが、184は面取りを行わない。輪違瓦は2点出土した。185は、四周を面取りするのに対して、186は前後両端角の面取りが省略されている。ともに、前端面に金箔が貼られている。

飾瓦類

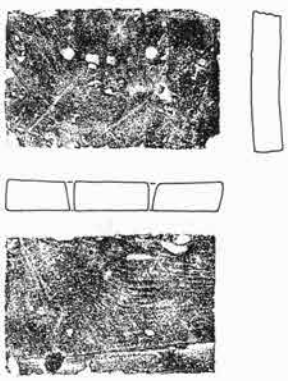
187～192は柊文の方形飾瓦である。表側全面に金箔が貼られている。すべて同笵であるが、釘穴のあけ方と裏面の面取りの仕方によって6種類に分類される。187は、釘穴が4つで裏面の四周に沿って面取りするもので、1個体のみ出土している。188は、釘穴が2



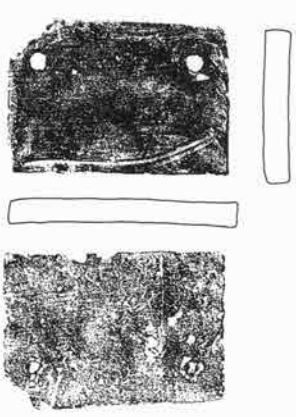
213



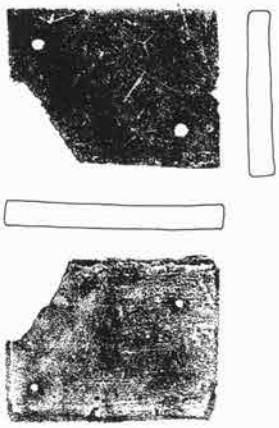
214



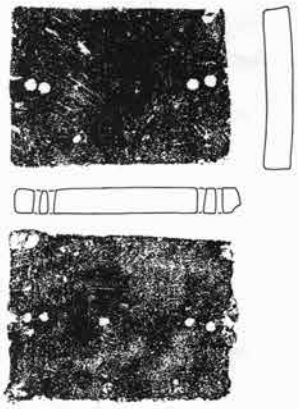
215



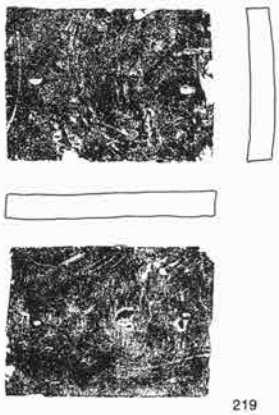
216



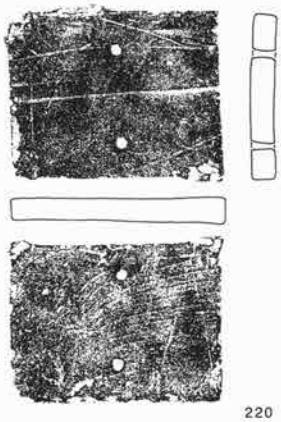
217



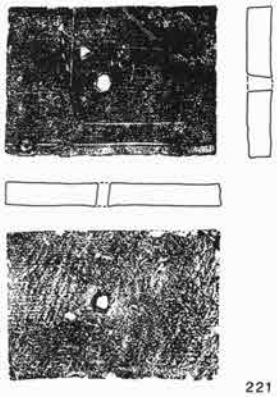
218



219

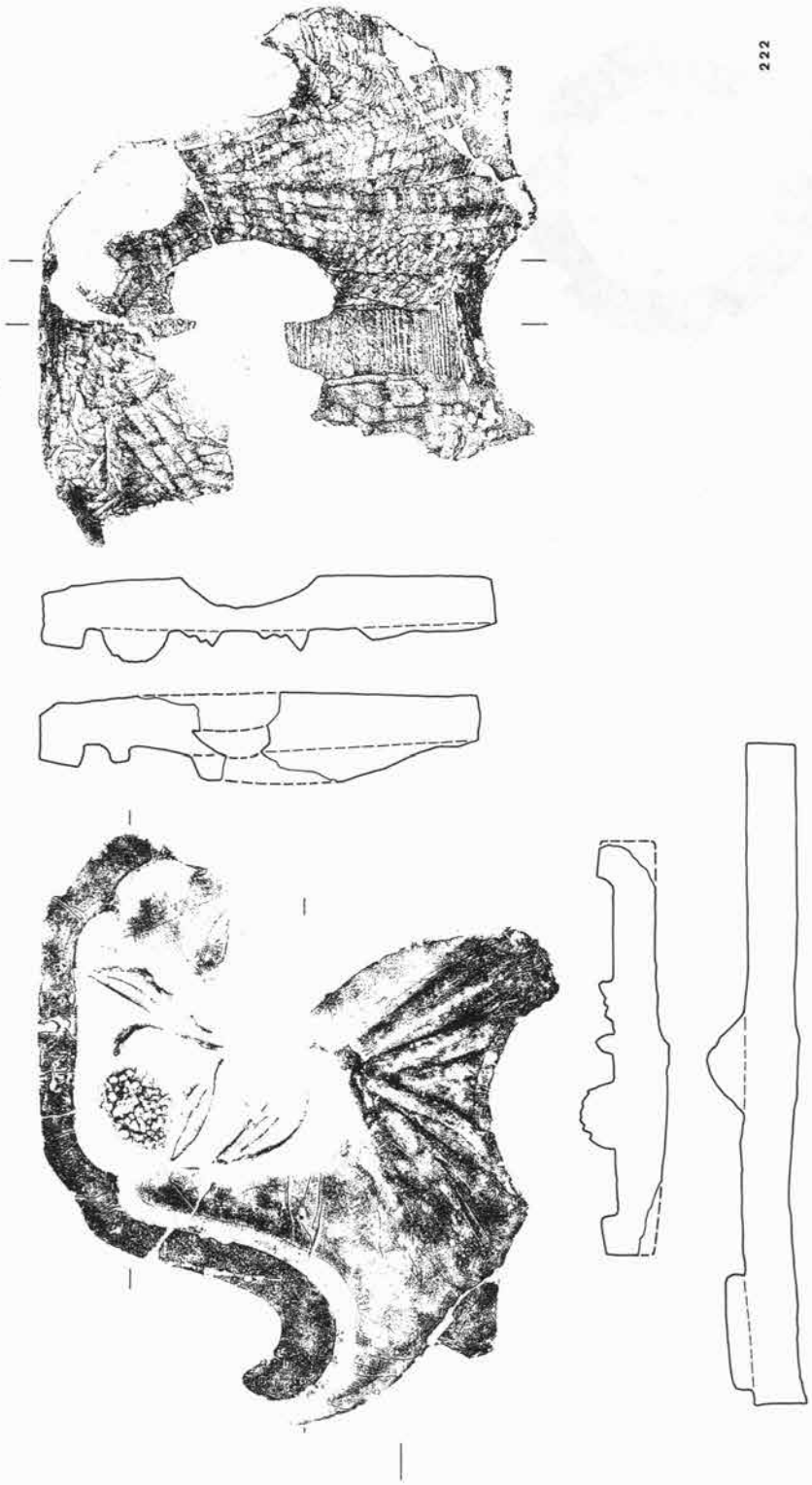


220

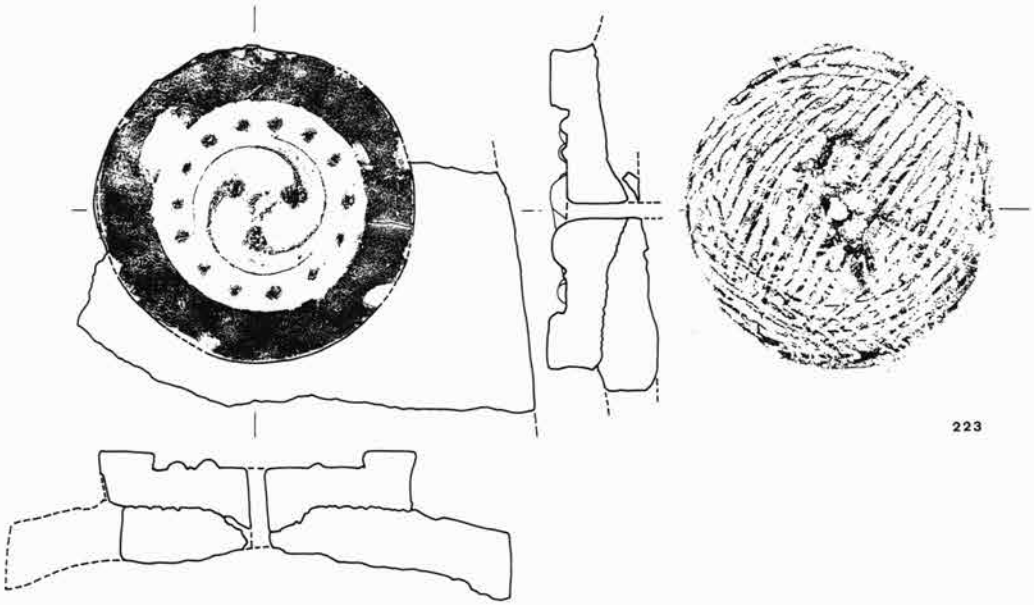


221

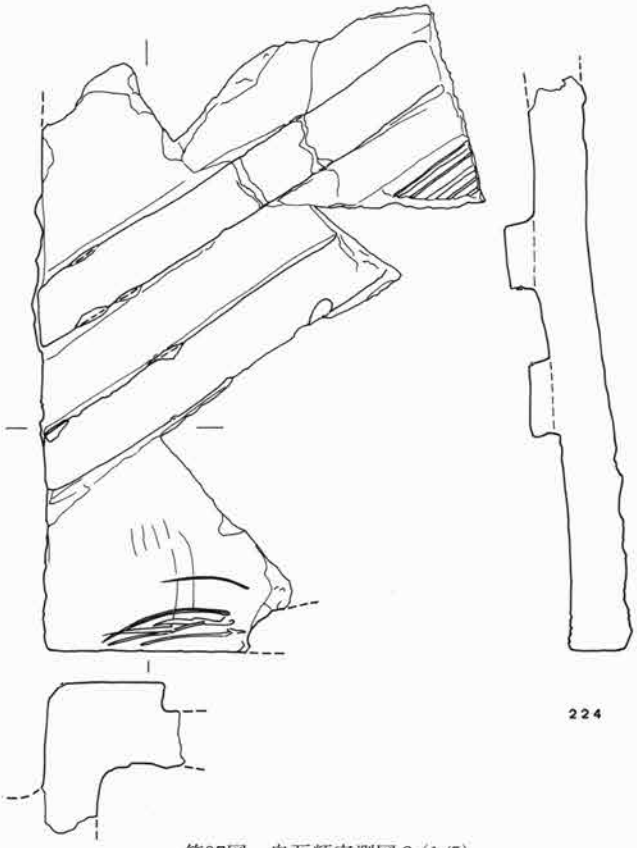
第94図　方形道具瓦実測図(1/6)



第95図　鬼瓦類実測図1（1/5）

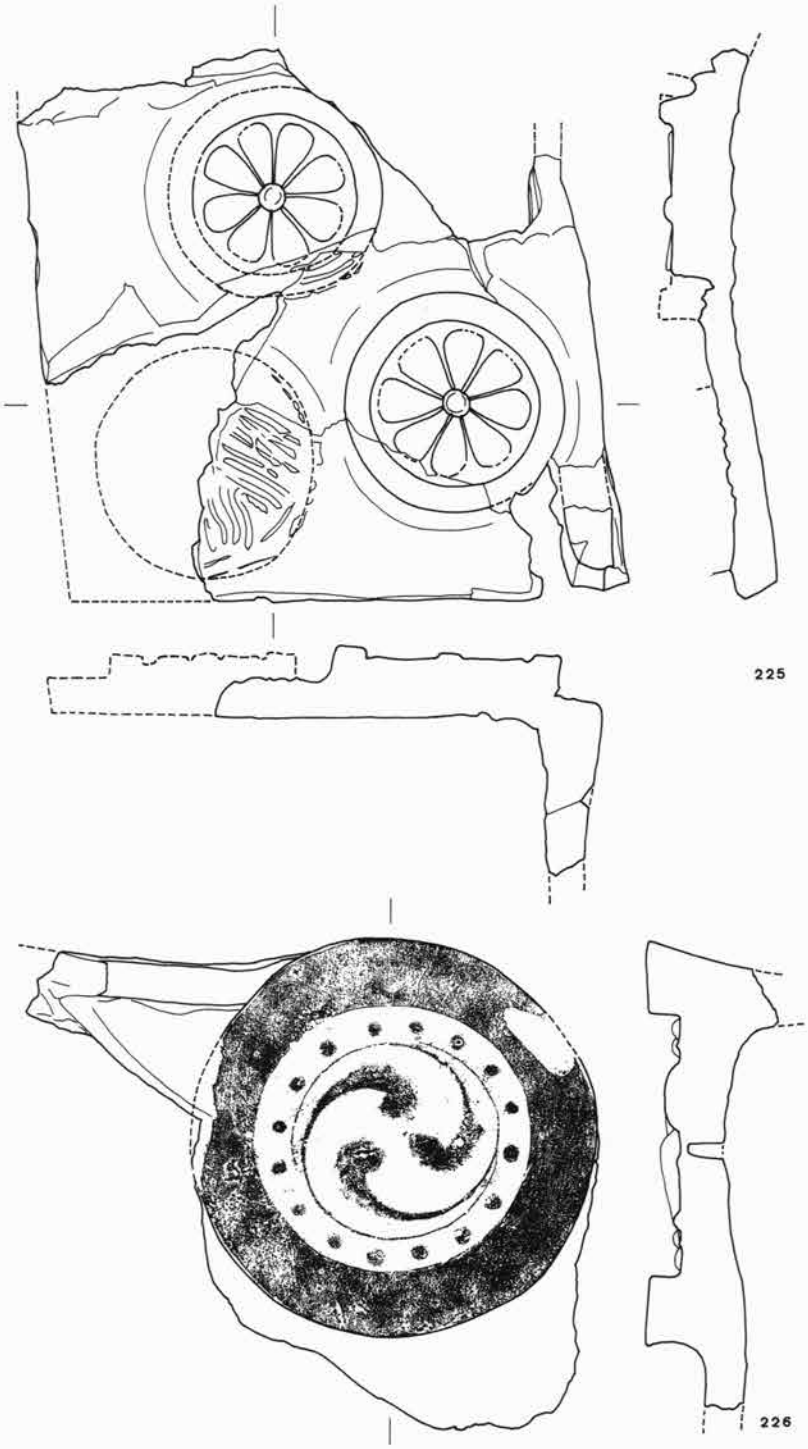


第96図　鬼瓦類実測図２(1/4)



第97図　鬼瓦類実測図３(1/5)

つで、面取りを施さないもので、３個体ある。189は、釘穴が２つで面取りを施すもので、３個体ある。190は釘穴が２つで面取りを行わないもので、３個体ある。191は、釘穴が２つで、面取りを施すものであるが、189とは釘穴の位置が少し異なり、１つは貫通していない。１個体のみ出土している。192は、釘穴が２つと思われ、裏面の一辺のみに面取りが施されている。１個体のみ出土している。このほか、これらと同笵で、分類不能のものが２個体ある。193～197も、柊文の方



第98図　鬼瓦類実測図4 (1/4)

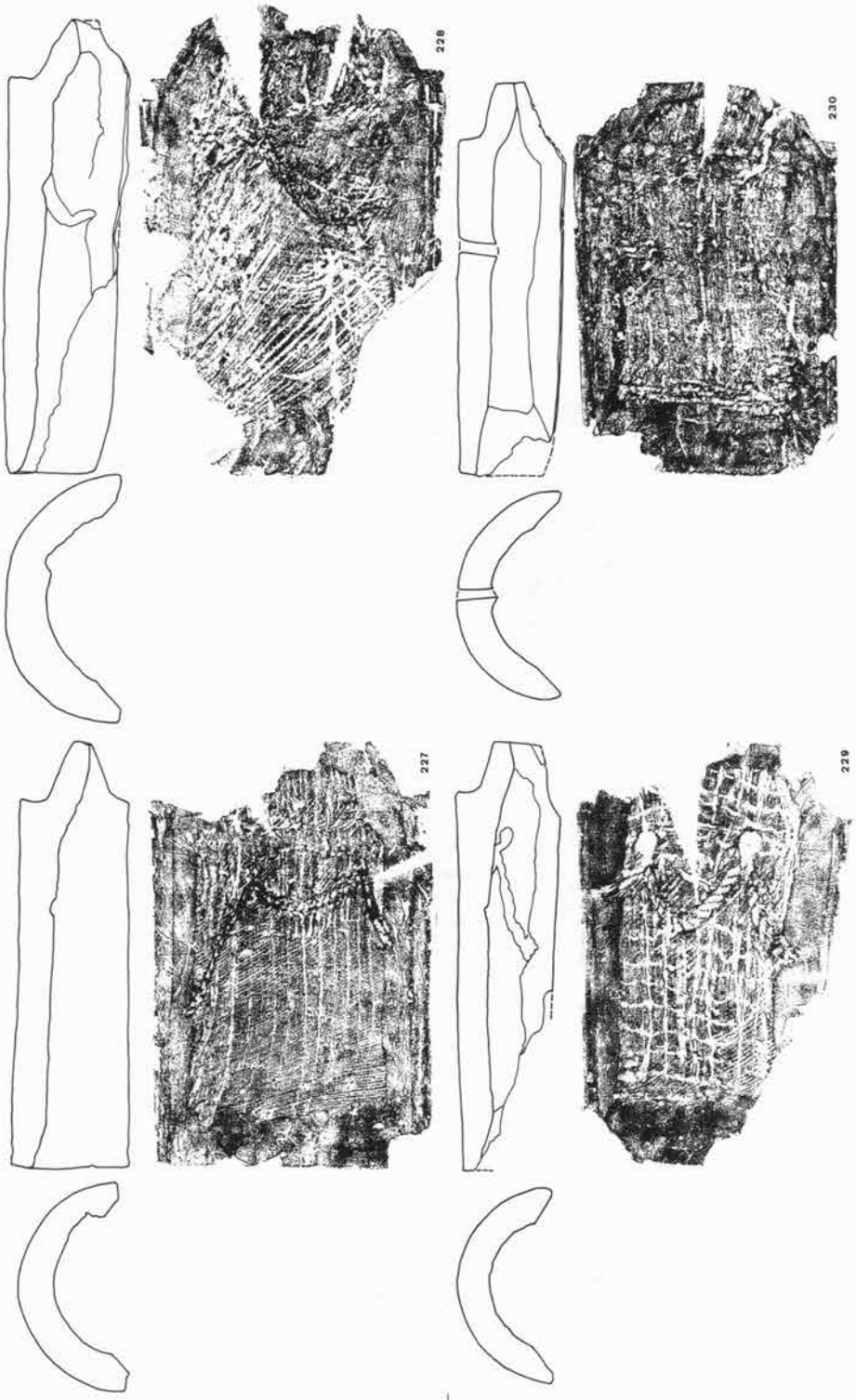
形飾瓦であるが、型押しではなく、粘土板に文様部分の粘土を貼りつけて成形しているものである。文様部分にのみ金箔が貼られている。これらは５つのタイプに分類することができ、各タイプ１個体ずつ掲げた。193は、ほぼ正方形の粘土板上に簡略化された葉と茎の部分を手慣れた調子で表現している。釘穴は２つと思われ、裏面の面取りは行わない。１個体のみ出土している。194は、葉の成形や葉脈の表現が稚拙なもので、同じタイプは合計３個体出土している。釘穴は２つと思われ、裏面角は面取りされている。195は194に類似するが、葉脈が表現されておらず、葉の中心に沿って強い指ナデの痕跡が見られる。195のタイプは合計２個体ある。197は釘穴がないタイル状のもので、裏面角の面取りも行わない。合計２個体出土している。198は一葉の文様を貼りつけた方形飾瓦である。釘穴の位置からみて、平面形はほぼ正方形になるものと思われる。199～202は、裏面の上下二辺の角を面取りし、釘穴を２つ持つ飾瓦で、この時期の京都ではさまざまな文様のものが出土している。横方向に展開する文様が表現されているので、何枚かを横に並べて木部に打ち付けて使用するものと思われる。199・200は型押しによるもの、201・202は、粘土を貼り付けて成形したものである。表側全面に金箔が貼られている。203･204･206･207は、方形飾瓦に含めたが、他の飾瓦とは異なり、裏面に鬼板類のようなコビキ痕跡を残している。いずれも１個体で完結する文様ではないので、数個体を組み合せて使用するものと思われる。文様部分には金箔が貼られている。207の裏面には穴の開いた突起があり、後ろから引っ張って固定できるようになっている。205は、斜格子文の飾瓦で、格子部分にのみ金箔が貼られている。208～210は、唐花文様の飾瓦である。型押しで成形され、外周も型に沿って削られている。同笵は208のタイプが計５個体、209が計４個体、210が計３個体ある。すべて表側全面に金箔が貼られている。211・212は、桐文飾瓦である。211のタイプは１個体、212のタイプは５個体出土している。

方形道具瓦

長方形の粘土板に１個から４個の穴をあけたもので、調整の精粗で表裏を判別することができる。穴はすべて表側から裏側に片面穿孔で焼成前にあけられている。穴のあけ方で９種類に分類できる。最も多いものは長軸の中心線上にほぼ均等に２孔をあける214のタイプで、合計15個体ある。このほかの各タイプの個体数は、213・217・219のタイプが各々計２個体、221のタイプが４個体で、他は各１個体のみである。すべて金箔は貼られていない。

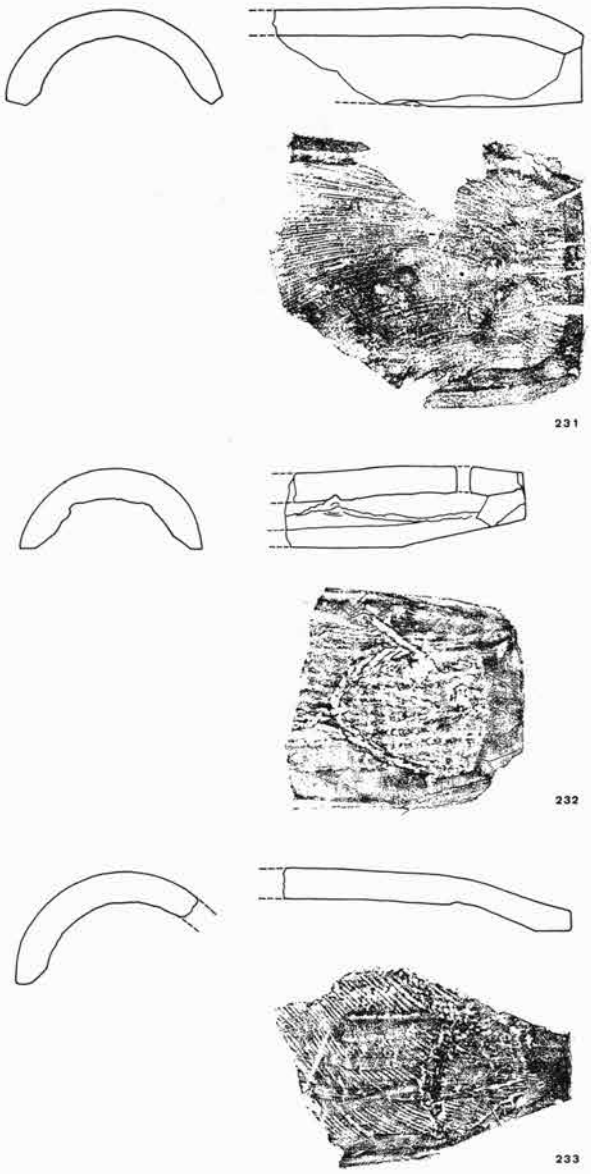
鬼瓦類

222は、鬼板である。文様部分と外縁部分に金箔が貼られている。外縁の金箔は一部側面にも及んでいる。裏面はコビキとケズリの痕跡がみられ、中央部には把手状のものが削



第99図　丸瓦実測図1 (1/5)

り残されている。223は、巴文が貼り付けられたもので、中央に釘穴があけられている。貼り付けた巴文がきれいに剝がれており、接合のための櫛描きが明瞭に観察できる。裏面は単位の大きなヘラケズリが見られる。金箔は貼られていない。224は、獅子口である。残存高で42.7cmを測る。綾筋部分はていねいな調整が行われている。裏面は不定方向に単位の大きなヘラケズリが施されている。金箔は貼られていない。225は、獅子口の左側面が比較的よく残った破片である。菊文が3つ貼られているものの、これらは菊丸瓦177・178と同笵である。内面にヘラケズリが施されている。金箔が貼られている。226は、獅子口の経の巻部分である。金箔は貼られていない。



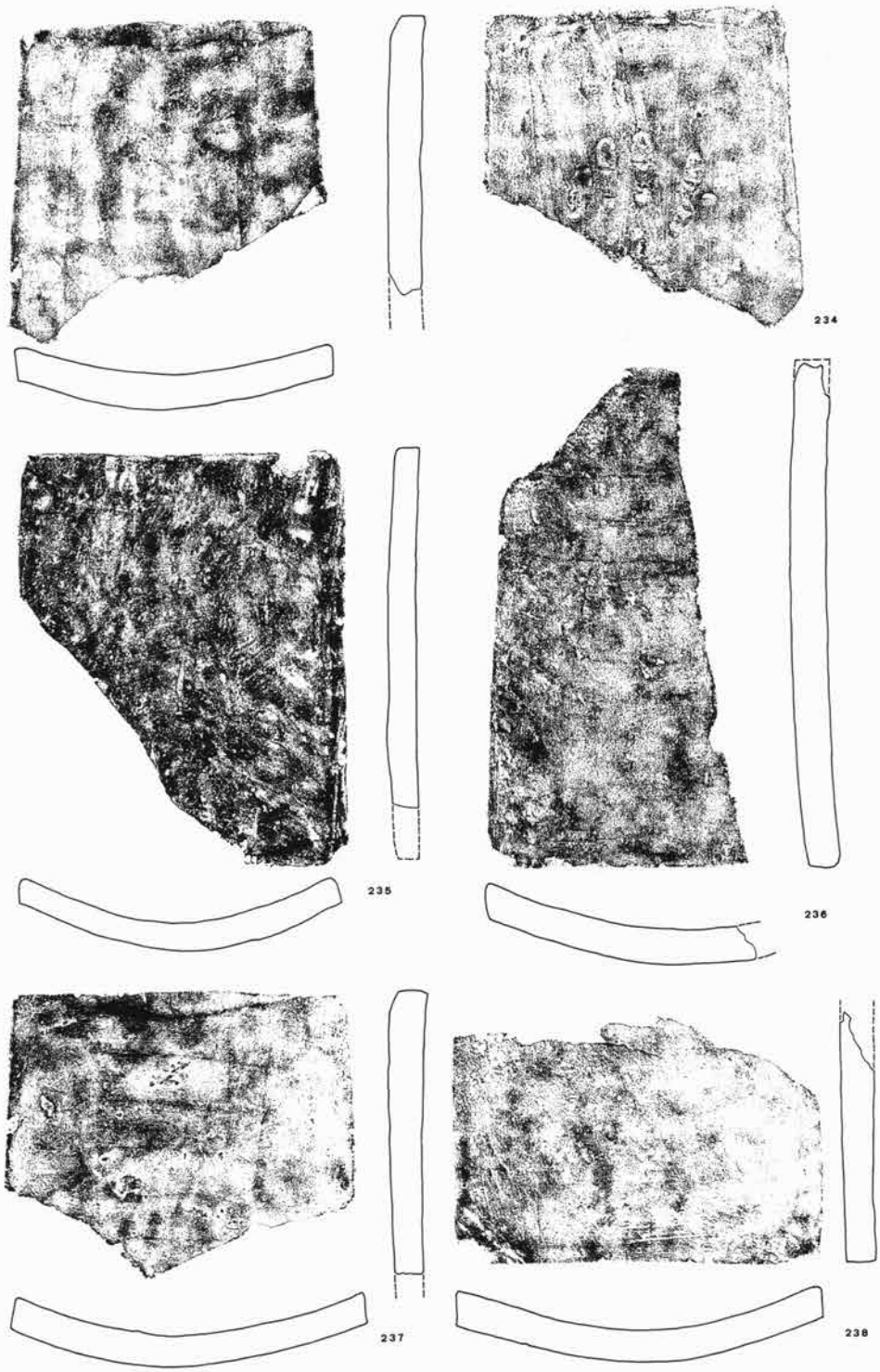
第100図　丸瓦実測図2 (1/5)

丸瓦

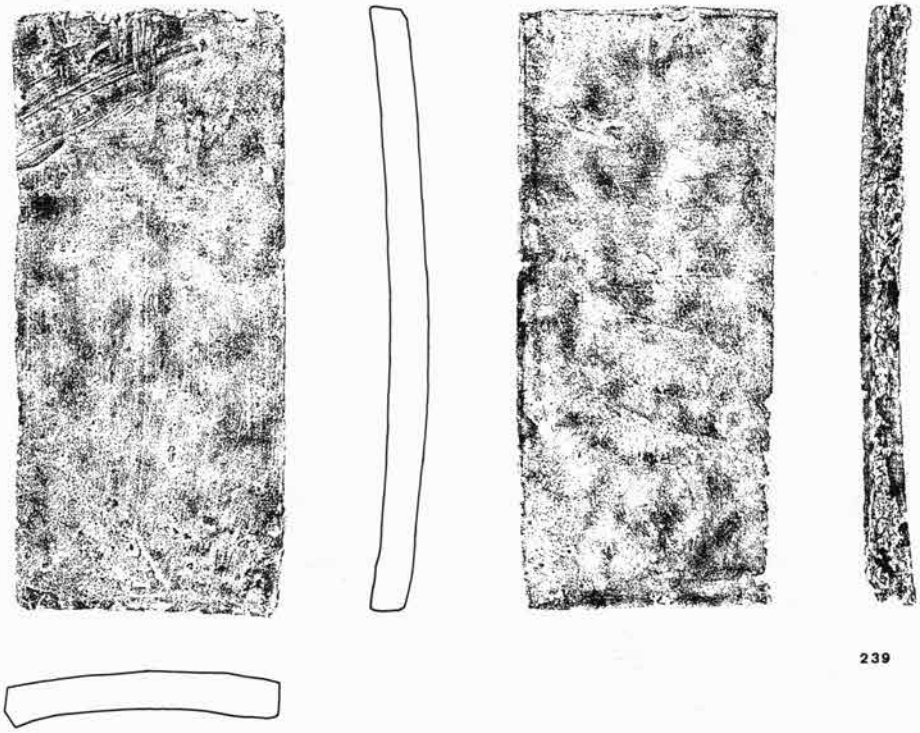
丸瓦はコンテナ数にして100箱分、総重量1084kg出土した。完形品は出土していない。丸瓦一枚当たりの重量は瓦の法量によって1.6kg程度から2.8kgを越えるものまであるが、平均は約2.0kgと推定され、これから求められる平瓦の枚数は約550枚となる。内面に見られるコビキ痕は大半がコビキAで、コビキBの可能性があると判断されるものの占める割合は重量で1.5%にすぎない。このほか、行基葺の丸瓦かと思われるものが少量みられるが、輪違瓦などの棟込瓦と区別のつかないものが多い(第100図)。

平瓦

平瓦はコンテナ数にして



第101図　平瓦実測図(1/5)



第102図　熨斗瓦実測図(1/4)

167箱分、総重量2112kg出土した。完形品は出土していない。平瓦一枚当たりの重量は瓦の法量によって1.7kg程度から4kgを越えるものまであるが、平均は約2.7kgと推定され、これから求められる平瓦の枚数は約780枚となる。235の凸面中央には掌の痕跡が明瞭に残っている。

熨斗瓦

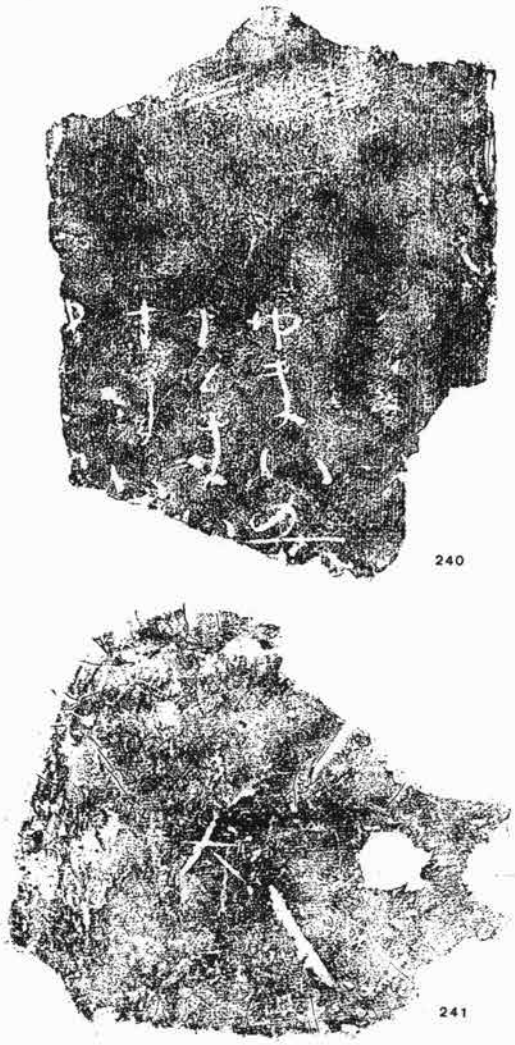
熨斗瓦はコンテナ数にして7箱分、総重量95kg出土している。このうち、完形品は1個体のみ出土している(239)。239は、平瓦を焼成前にヘラで2つに分割して作ったもので、1.765kgを測る。熨斗瓦一枚当たりの重量は、平瓦の半分として約1.35kgであり、これから求められる平瓦の枚数は約70枚となる。熨斗瓦の長側辺の一方にはすべて金箔が貼られている。

文字瓦

文字のヘラ書きされた瓦が2個体出土している。240は、平瓦の凹面に書かれたもので、「廿まい□・・」十まい・・」十まい・・」と書かれているようである。[注2] 瓦に工人がメモ書きを行ったものであろうか。241は、丸瓦外面の釘穴の横に「大」と書かれている。

4. まとめ

今回の調査成果の第一には聚楽第の東堀の位置を特定できたことが挙げられる。聚楽第については、これまで文献史学や歴史地理学などの研究においても不明な点が多く、また考古学的にはほとんど資料がなかった。今回、その確実な遺構が検出されたことは今後の聚楽第に関する研究に貴重な資料を提供するとともに、各分野からの研究を触発するものと思われる。聚楽第の堀の遺構としては1987年に京都市埋蔵文化財研究所が上京区一条通り智恵光院東入ル鏡石町における試掘調査(注3)で北堀の南肩ではないかと考えられる北側に落ちる肩を検出しているが、今回の調査によってその可能性は高まったといえるだろう。今後の大宮通りと一条通り付近における調査では、聚楽第の堀跡にあたっている可能性を考えて調査計画を立てれば、さらに堀の位置や規模が特定される成果が得られるものと思われる。その一方で、今回検出された堀の埋土を見れば、その大半を占める多量の礫を含む埋土がもともと付近の地山を構成していた礫層に由来することは明らかであり、堀を掘削したときに出た排土を聚楽第内部の盛り土整地に使用し、聚楽第破却時にこの盛り土整地層を再び削平して堀を埋めたものと考えられる。このことは堀がすべて東側から埋められていることとも矛盾しない。この想定が正しいとすると、聚楽第内部の建物の遺構などが残存している可能性は残念ながら少ないということになる。



第103図　文字瓦実測図(1/2)

次に、遺物の面では使用年代の確かな資料が得られたことが挙げられる。特に多量に出土した金箔瓦は出土状況からみても聚楽第内部の建物に使用されていたことが確実である。堀に捨てられた状態で出土したために本来のセット関係や使用建物の特定はできない

が、当時の畿内の瓦の博覧会とでも言うべき多種多様の資料を得ることができたことは今後の瓦の研究に多いに資することと思われる。　（森島康雄）

付　節　聚楽第跡出土金箔瓦の胎土分析について

今回の調査で出土した金箔瓦のうち軒丸瓦20個体と軒平瓦30個体について胎土分析を行った。分析は粉砕した資料を洗浄して粒径ごとに篩別したものを封入薄片資料にしたうえで重鉱物分析と重鉱物軽鉱物含有比分析を行うこととし、株式会社京都フィッション・トラックに委託した。重鉱物分析では通常分析対象とする1/8～1/16mmの粒径ではほとんど重鉱物が含まれないことから、1/16mm以下のシルトサイズの粒径での分析となった。しかし、シルトサイズでも１封入薄片資料（粒子数5000～10000個）について重鉱物粒子（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・ジルコン・アパタイト・イディングサイト・不透明（鉄）鉱物）の総数が200に満たないものが軒平瓦で23個体（77%）、軒丸瓦で18個体（90%）にも達した。このことは瓦の胎土に入念な水簸処理が施されていることを示している。重鉱物軽鉱物含有比分析では重鉱物、軽鉱物のほか火山ガラス・岩片・土粒子についても含有粒子数の計測を行った。分析結果の生データは当センターに保管している。分析結果と考古学的な分類との対応については資料数が十分とは言えないので今後の課題であるが、同笵の軒平瓦92と95や109と110などは分析結果も似通ったものになっている。しかし、同笵でも124と99のように少し異なったデータを示すものなどがあり、さらに検討が必要である。また、瓦の文様や成形技法、焼成などが他と全く異なる140は他の資料と最も離れたところにデータを示し、他の微量成分でもプラントオパールが唯一全く含まれていないなど、分析によっても異質なものであることがわかる。次に軒丸瓦と軒平瓦を比較するとその分析結果に違いのあることがうかがえる。含有粒子数の計測を行っていない他の微量成分でも軒丸瓦には電気石・ゆうれん石・ザクロ石といった特殊な重鉱物が含まれるものが多い（20個体中12個体）のに対して、軒平瓦では１個体にザクロ石が含まれるだけであるなどの違いがある。分析者はこれらの特殊な重鉱物を含む軒丸瓦の胎土に変成岩起源の粘土が使われている可能性を指摘している。ともあれ、軒丸瓦と軒平瓦に見られるこの違いが生産地の違いを示すものである可能性は否定できず、今後の分析資料の蓄積とそのような視点での考古学的な研究が必要である。

（森島康雄）

注１　櫻井成廣『豊臣秀吉の居城　聚楽第・伏見城編』　日本城郭資料館出版会　1971
注２　向日市文化資料館　清水みき氏の判読による。
注３　『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988

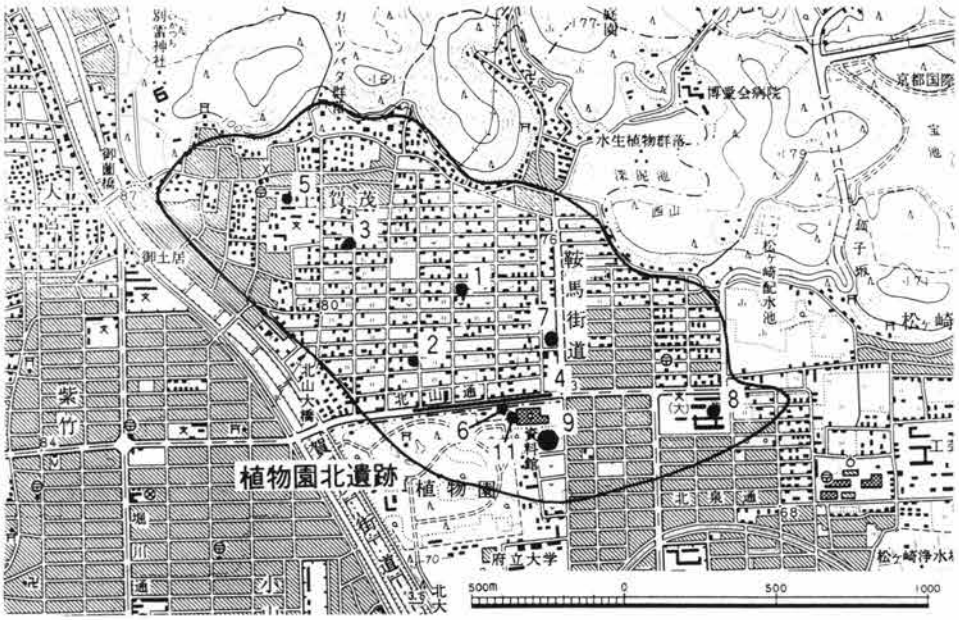
4．植物園北遺跡第11次発掘調査概要

1．はじめに

当調査は、京都府総合府民部によって計画された、「陶板名画の庭(仮称)」建設用地内における遺跡の発掘調査である。調査地は、京都市左京区下鴨半木町に所在し、北山通りに面した府立総合資料館の西隣りに位置する。調査地一帯は植物園北遺跡として周知されているところである。

植物園北遺跡は、京都盆地北辺部の賀茂川左岸の扇状地に位置し、遺跡範囲として周知された総面積はおよそ140haにものぼる。

植物園北遺跡は、過去に9件の発掘調査が実施されたほか、多数の立会調査によって遺跡の様相が次第に明らかになってきている。1次と2次調査では顕著な成果が得られていないが、3次調査では弥生時代後期の竪穴式住居跡2基・古墳時代前期の竪穴式住居跡2基・古墳時代後期の水路等を検出している。4次調査では、北山通りの中央分離帯部9か所から、縄文時代後期の甕棺墓、弥生～平安時代の土坑・柱穴等を検出している。5次調査では、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基と後期の竪穴式住居跡8基、鎌倉～室町時代の



第104図　調査地位置図(番号は調査次数に対応)

溝・井戸・土坑等を検出している。6次調査では、弥生～平安時代の遺物包含層と落ち込み等を検出している。7次調査では、古墳時代前期の竪穴式住居跡9基、平安時代の掘立柱建物跡4棟を検出している。8次調査では、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴式住居跡11基・土坑12基を検出している。9次調査では、縄文時代晩期の甕棺墓、古墳時代後期～奈良時代の竪穴式住居跡6基と土坑、奈良時代末～平安時代の掘立柱建物跡17棟が検出されている。このような過去の調査から、植物園北遺跡は縄文時代晩期～安土・桃山時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査地は4次・6次・9次調査地に近接し、関連の遺構・遺物の検出が予想された。

現地調査は、平成4年9月22日からトレンチによる試掘調査を開始し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、調査対象地の北部に遺構の分布が認められたが、南部は後世に大規模な攪乱を受けていることが明らかになった。この試掘成果をもとに関係機関と協議が行なわれ、攪乱を受けていない北部域で面的な発掘調査を実施することが決定された。本格的な発掘調査は、平成4年11月4日から平成5年2月10日の期間で実施した。調査対象地の敷地面積は約2,800㎡であり、このうち約920㎡の範囲で調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人と同調査員竹原一彦が担当し、本概要の執筆・編集は竹原が担当した。

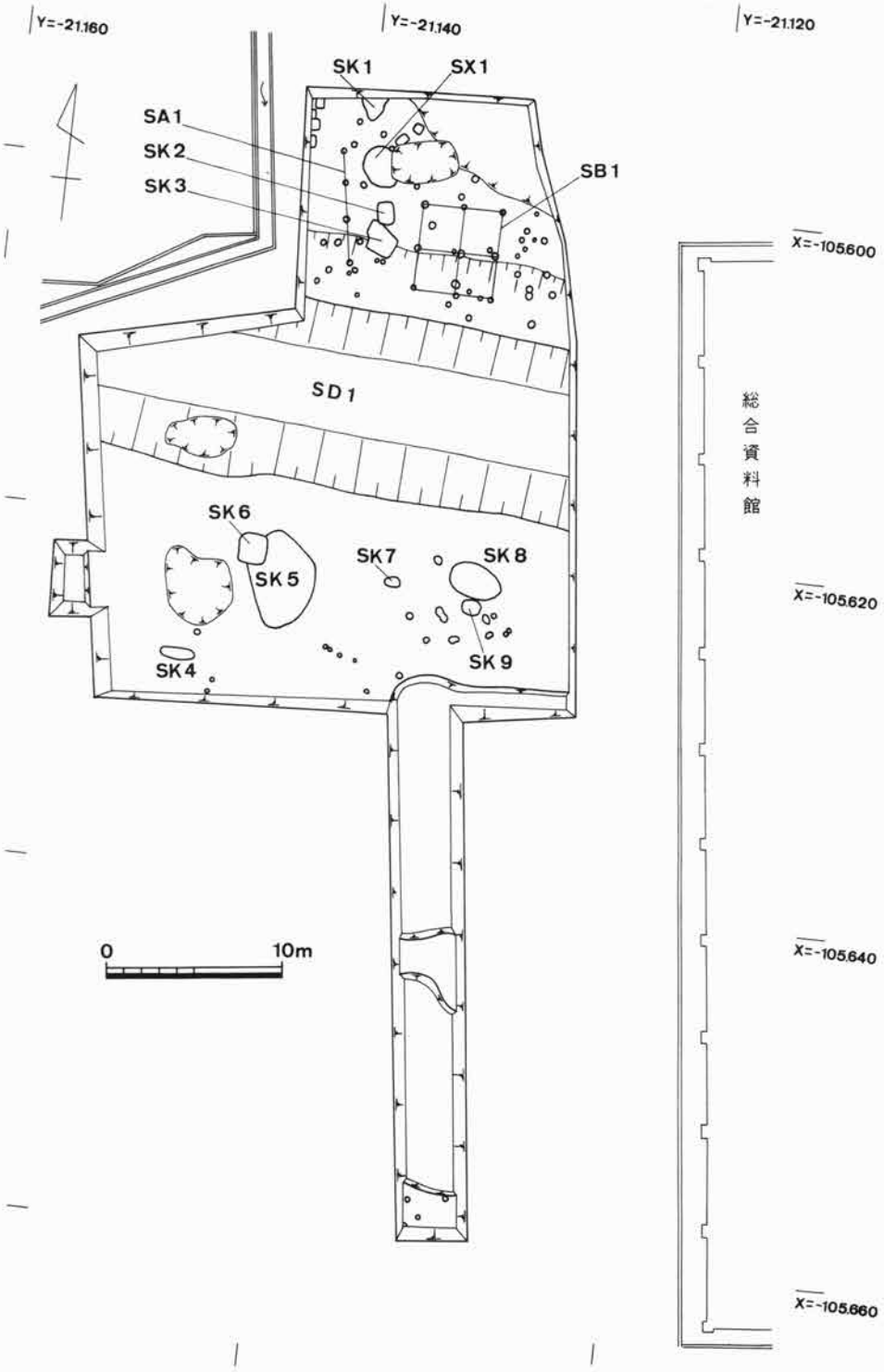
調査に際しては、京都市教育委員会をはじめとする関係諸機関から御指導・御協力を賜った。調査期間中は、高橋　潔氏・高　正龍氏・吉村正親氏(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、浪貝　毅氏(京都市埋蔵文化財調査センター)より多くの御教示をいただいた。記して深謝する次第である。

なお、発掘調査にかかる経費は、すべて京都府総合府民部が負担した。

2.　調　査　概　要

今回の調査では、調査地の北部と中央部以南で旧地形と現況が大きく異なることが明らかになった。調査地北部は盛り土・耕作土の厚みが10cm前後であるのに対して、中央部以南では90cm前後であった。北部域では耕作土下に遺物を包含する暗茶褐色粘質土(礫混入)が存在し、下層には黄灰色砂泥(無遺物)が広がる。遺物包含層は海抜約71.7m付近に位置し、20cm前後の厚みを測る。また、黄灰色砂泥層と暗茶褐色粘質土層間にはところどころに薄い砂礫の堆積が認められる。柱穴・土坑等の遺構は、この砂泥層及び砂礫層の上面から検出した。

中央部では遺物包含層を海抜約70.8～71.1mの間で検出した。遺物包含層は暗灰色粘質砂(礫混入)・暗褐色粘質砂の上下2層に分かれ、暗灰色粘質砂(礫混入)中にはローリング



第105図　調査地平面図

をうけた中世遺物が含まれる。下層の暗褐色粘質砂中には、古墳～平安時代の遺物が含まれている。拡張調査区の南部では、遺物包含層下に10cm前後の厚みをもつ黄褐色粘質土(無遺物)が認められ、さらに下層には褐色礫が厚く堆積している。検出遺構としては、暗灰色粘質砂層上面に近世の柱穴・溝が存在した。また、黄褐色粘質土層の上面でも柱穴・土坑等を検出した。

試掘トレンチ最南端部では遺物包含層が認められず、海抜70.9m付近で灰褐色砂礫層を検出した。この灰褐色砂礫層の上面から柱穴を検出した。

(1)検出遺構

今回の調査では、流路・建物跡・柱穴列・土坑・柱穴を検出している。建物等に伴ったとみられる柱穴は、北部の微高地上に多く分布する。

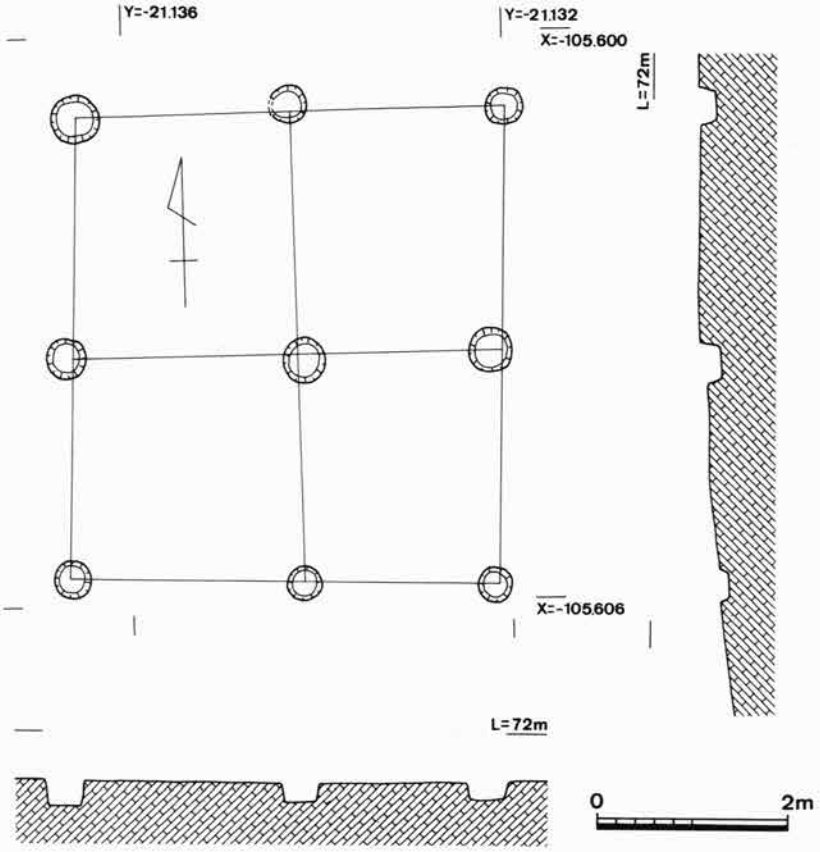
溝跡ＳＤ１　拡張区中央を西から東に緩やかに流れる水路跡である。溝の北岸は微高地となり、南岸部に対しおよそ＋90cmの比高差を測る。溝幅は10.5m前後であるのに対し、深さは40～50cmと浅い。溝の堆積土は黒褐色シルトであるが、中央部から東にかけて５～10cm大の円礫が含まれている。溝の西部では溝底付近に黒褐色シルト層が20cm程度堆積しているが、上層には暗茶褐色砂泥層が認められた。出土遺物としては、上層の暗茶褐色砂泥層から古墳時代前期の土師器、下層の黒褐色シルト層から磨製石斧が出土している。

建物跡ＳＢ１　北部の微高地上で検出した２間×２間の総柱の掘立柱建物跡である。柱穴掘形は円形を呈し、直径約40cm・深さ約20cmを測る。建物跡の規模は、柱穴心々間で東西約4.6m×南北約4.9mを測る。柱穴掘形の埋土は暗茶褐色粘質土であり、出土遺物は認められない。建物の方位はほぼ座標北に主軸を向けるが、西に約１°振っている。

柱穴列ＳＡ１　調査地北部、ＳＢ１の西で検出した南北方向の柱穴列であり、３間分を検出した。柱穴掘形は、形態・規模・埋土がＳＢ１の柱穴と同一であり、直径約40cm・深さ約20cmを測る。各柱穴の心々間隔は、北側より1.85m×2.1m×2.5mであり、等間隔での配列がみられない。主軸は座標北から西に約10°振っている。柱穴掘形に遺物は認められない。

土坑ＳＫ１～ＳＫ９　北部微高地上で３基(ＳＫ１～３)、溝ＳＤ１の南で６基(ＳＫ４～９)を検出した。土坑は、方形・楕円形・不定形に分かれ、比較的浅い深さの土坑が多い。また、各土坑から遺物の出土はみられない。

ＳＫ１は、周縁部から中央にかけて緩やかに傾斜し、中央部は検出面から15cmの深さを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。ＳＫ２・３は切り合い関係にあり、ＳＫ２がＳＫ３を切っている。ＳＫ２は、縦1.3m×横0.95m×深さ30cmを測る。ＳＫ３は、縦1.6m×横1.5m×深さ20cmを測る。両土坑は、ともに土坑壁が垂直に近い立ち上がりをもち、埋土



第106図　ＳＢ１実測図

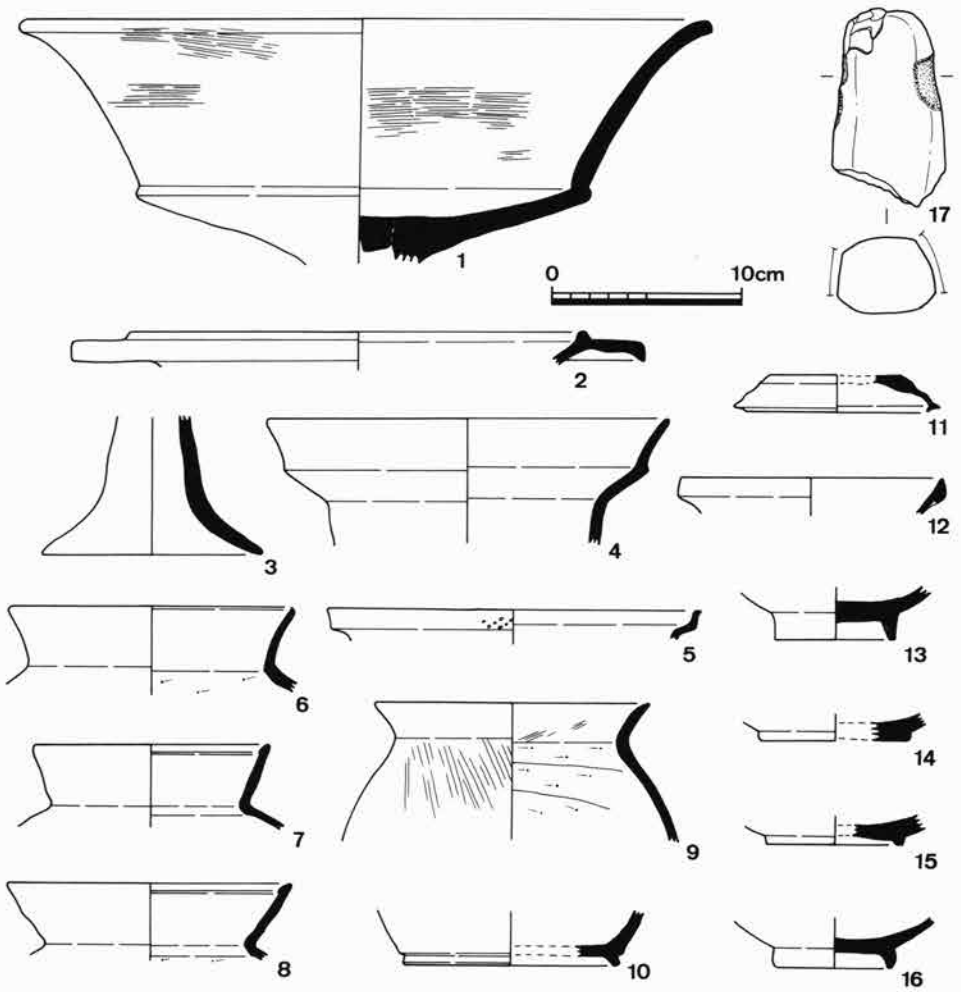
も灰色砂礫である。また、ＳＫ４は、平面が楕円形を呈し、船底状を呈する掘形をもつ。土坑は、縦1.9m×横1.1m×深さ30cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土であり、小さな焼土塊を少量含んでいる。ＳＫ５・６は切り合い関係にあり、ＳＫ６がＳＫ５を切っている。ＳＫ５は、東西3.8m×南北6.1m×深さ約40cmを測る。不定形な土坑掘形は三辺が直線的であるのに対し、一辺が弧状に張り出す。土坑底は、中央部が周縁部より緩やかにくぼむ。方形を呈するＳＫ６は、一辺が1.6m×深さ約30cmを測る。土坑壁はほぼ垂直に立ち上がり、溝底は平らである。土坑埋土は暗茶褐色粘質土であるが、ＳＫ５は６より暗い色調をもつ。また、ＳＫ６の埋土中には拳大の円礫を含んでいる。ＳＫ７は楕円形を呈する土坑である。縦1.4m×横0.6m×深さ30cmを測る。土坑埋土は灰色粘質土であった。ＳＫ８は、縦3.1m×横1.8m×深さ30cmを測る楕円形土坑である。土坑底は、周縁部から中央に向かって緩やかに下がる。埋土は黒褐色粘質土である。ＳＫ９は、縦1.1m×横0.8m×深さ30cmを測る方形土坑である。土坑底は平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

焼土坑ＳＸ１　北部微高地上で検出した焼壁をもつ土坑である。後世の攪乱で土坑東部

が壊されているが、平面形は円形で摺鉢状の掘形をもつ。土坑規模は直径2.3m×深さ約50cmを測る。土坑の底部と壁部は凹凸状に荒れており、底部と壁部の凸部に赤褐色の焼土が認められた。土坑埋土は、下部に暗黄灰色砂泥と崩落焼土塊、上部には砂礫の自然堆積が認められた。また、土坑底の一隅には少量の炭・灰が存在した。出土遺物は認められない。

(2)出土遺物

今回の調査で出土した遺物はわずかであり、整理コンテナに3箱であった。遺物のうちの大部分は土器類であり、そのほとんどが包含層からの出土である。土器類には弥生式土器・土師器・須恵器・緑釉・灰釉・白磁がみられる。また、土器類以外では磨製石斧の出土をみている。土器類は器表面が摩耗したものが多く、また実測可能なものもそう多くはない。ここでは、図化できた遺物について概説する。なお、高杯(3)・壺(4)・甕(5～9)はS



第107図　出土遺物実測図

Ｄ１上層、磨製石斧(17)はＳＤ１下層出土であり、他は包含層からの出土遺物である。

高杯(１～３)　１は、杯底部が擬口縁状の段をなし、口縁部は外上方に大きく外反する。口縁部の内外面はハケメ調整。胎土は精良で、色調は暗赤褐色である。口径は36.6cm・杯部内高は10.4cmを測る。ＳＤ１中央部南岸の包含層からの出土である。２は、水平口縁をもつ高杯である。下方に短く垂下する口縁端部は丸くおさめる。また、杯部と口縁部の境には凸帯がめぐる。色調は淡黄灰色で胎土はやや粗く、焼成も軟質である。口径は30.3cmである。３は、「ラッパ」状に大きく外反する脚部であり、胎土には砂粒が多く粗い。底径は11.8cmである。高杯１・３は布留式併行期、２は弥生第Ⅳ様式期に比定される。

壺(４)　布留式併行期の二重口縁壺である。口縁部は筒状の頸部から一旦大きく外反し、明瞭なアクセントをつけてさらに外上方に立ち上がる。淡黄灰色の色調をもつ胎土はやや粗く、焼成も軟質である。口径は21.2cmである。

甕(５～９)　５は、受け口状口縁の甕であり、口縁の上端には面を作り、端部は外方に短くつまみだす。口縁部外面には左下がりの列点文を施す。口径は19.8cmである。６は、単純口縁甕である。頸部は丸みをもち、口縁端部は上方につまみ上げる。体部内面は上端部までヘラケズリ。口径は15.2cmである。７・８は、口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がり、端部を内側に肥厚させる。体部内面のヘラケズリは頸部まで達しない。口径は、７が12.5cm、８は15.1cmである。９は、縦長の体部から口縁部が緩やかに外反する。口縁端部は尖りぎみにおさめる。体部外面は粗いハケメ調整、口縁部内面はやや細かいハケメ調整を行う。

杯(10)　須恵器の杯身である。底部外縁のやや内側に張り付け高台。胎土は精良で青灰色を呈する。

蓋(11)　須恵器の蓋である。天井部は水平に近く、口縁端部は内側に返りをもつ。口縁端部より返り部の先端が突出する。天井部の外面中央に宝珠つまみが付くタイプと考えられる。口径11cm・天井高1.9cmを測る。胎土は精良で青灰色を呈する。

白磁椀(12・13)　白磁は口縁部(12)と底部(13)が出土している。12の口縁部は玉縁状を呈する。胎土は精良で白濁した釉を施す。口径は13.8cmである。13は削り出し高台であり、高台の内側を除き全面に白濁した釉を施す。底径は6.4cmを測る。

緑釉(14・15)　14は、軟質焼成である。底部の高台は円盤状である。器面全体に施された緑釉は、ウグイス色を呈する。15は、硬質焼成である。底部には輪高台がつく。内外面と高台内面にウグイス色の緑釉を施す。

灰釉椀(16)　丸みをもつ椀部に貼り付けの輪高台をもつ。丸みの強い高台はやや内湾する。底部の高台内側には糸切り痕を残す。

磨製石斧(17)　太型蛤刃石斧とみられるが、刃部を欠いている。表面は平滑に仕上げられるが、基部の側面にはていねいな敲打による抉りが認められる。抉りは一方の側面に1か所、正対位置の側面に2か所存在する。石材は玢岩である。残存部では長さ10.6cm×最大幅6.0cm×厚さ4.2cmを測る。

3.　ま と め

本調査で検出した主要な遺構は、建物跡1棟・多数の柱穴・土坑・流路などである。出土遺物も少なく、遺構に伴う遺物もほとんど存在しないことから、多くの遺構の時期を特定できなかった。唯一、時期の特定をみた流路跡(ＳＤ１)は、上層に含まれる土器がほぼ庄内～布留式併行期に限定されることから、水路の埋没時期は古墳時代前期とみてよかろう。また、検出位置等の状況から、ＳＤ１は微高地に沿って東流すると考えられる。

微高地上で検出した建物跡(ＳＢ１)は、柱穴の配置状況から倉庫跡と考えられる。限られた範囲内ではあるが、微高地上には多数の柱穴跡が分布していることから、周辺域にはさらに数棟の建物が存在していたとみられる。

建物跡の時期に関しては、奈良末～平安時代に属する建物に伴う柱穴が方形掘形であることが、9次調査の成果から得られている。本調査で検出した柱穴の大多数が円形掘形であることは、9次調査の建物跡とは異なる時期の柱穴とみてよかろう。また、微高地上では古墳時代～平安時代の年代観をもつ遺物が出土していることから、ＳＢ１を含む多くの柱穴の年代は古墳時代とも考えられるが、現段階では確証が得られていない。

今後、周辺域での調査が進むことにより、今回検出の各遺構の性格が明らかになることを望むところである。

(竹原一彦)

<主要参考文献>

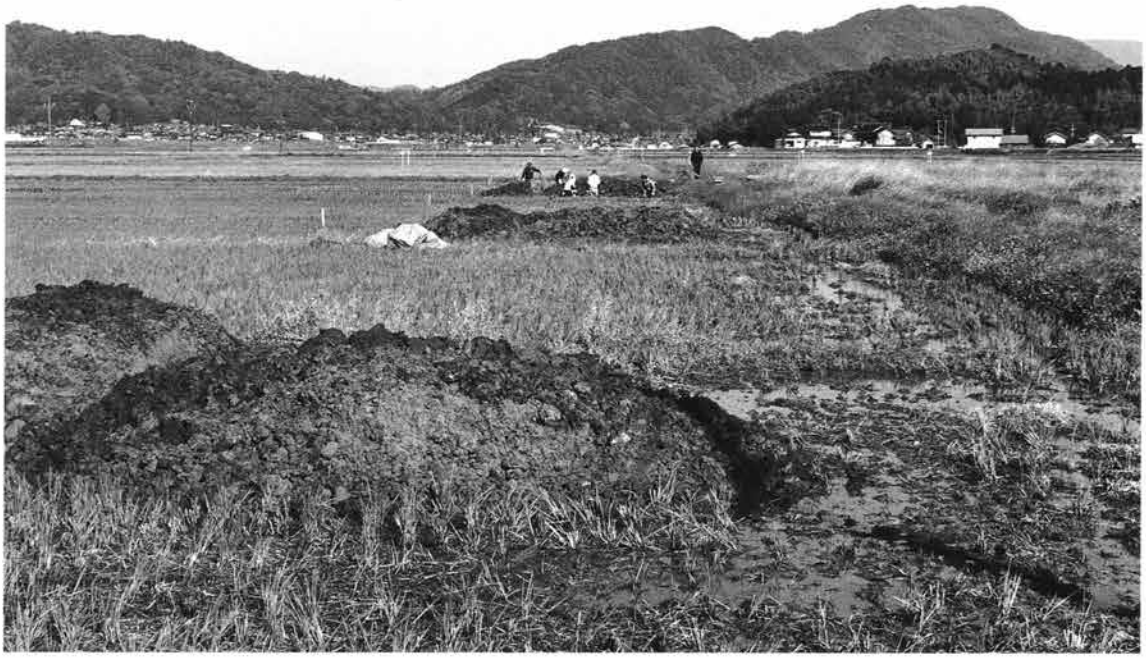
○辻　裕司・木下保明「植物園北遺跡3次調査」(『昭和59年度植物園北遺跡調査概報』　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1984

○長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告－植物園北遺跡－』　ノートルダム女子大学　1991

○峰　巍「植物園北遺跡の調査(9次)」(『第49回京都市考古資料館文化財講座資料』　京都市考古資料館)　1991

図　　版

図版第1　蔵ケ崎遺跡



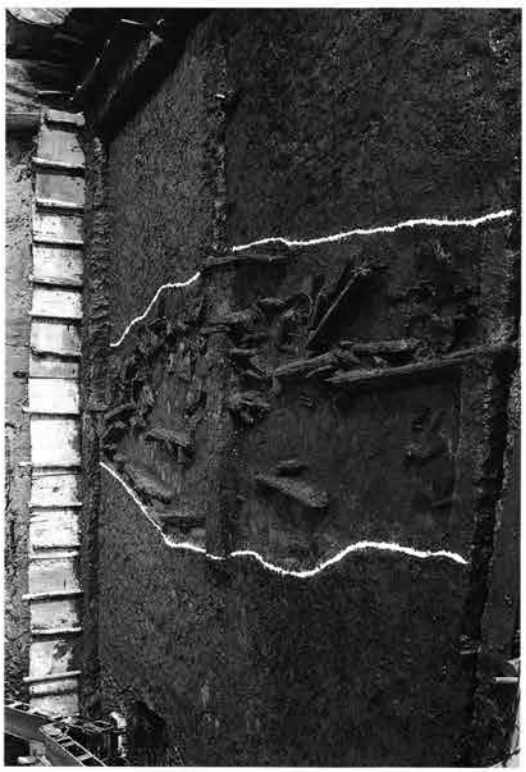
(1)　調査開始時風景（南から）

(2)　土坑（SK01）遺物出土状態（南から）

図版第2　蔵ケ崎遺跡

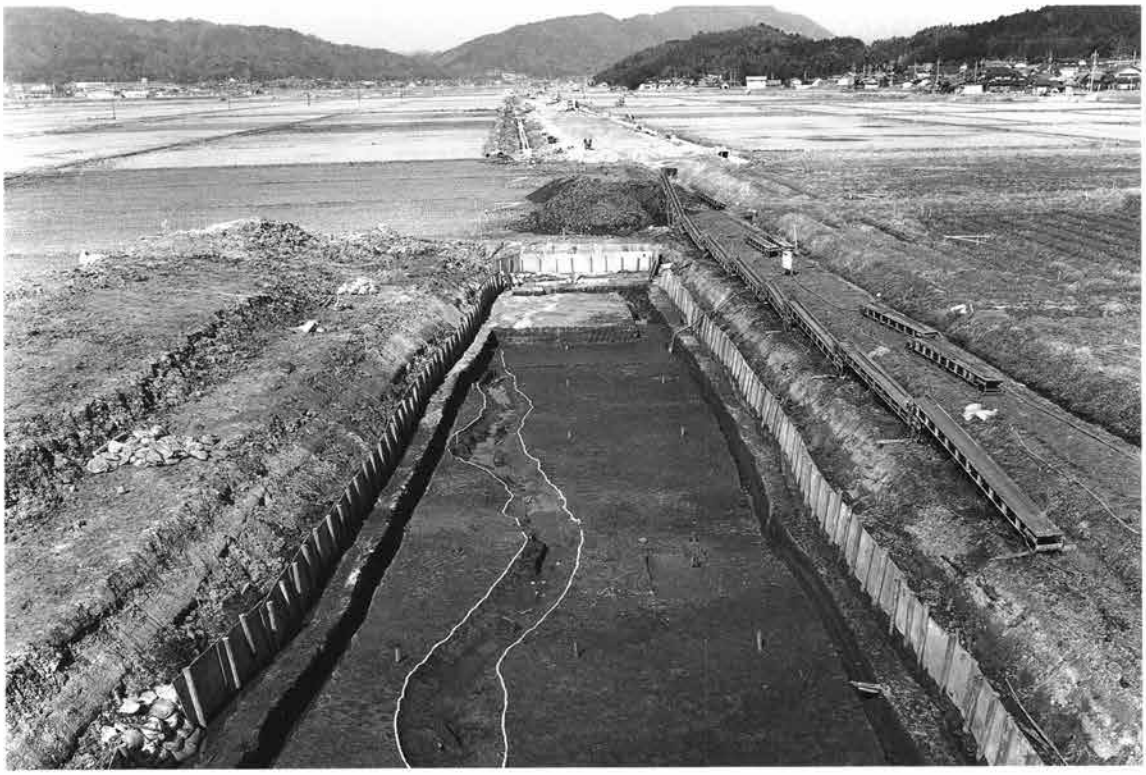
(1)　Bトレンチ上層水田面（北から）

(2)　水田畦畔（北から）



(3)　SR101（西から）

図版第3　蔵ケ崎遺跡



(1)　Aトレンチ弥生時代遺構（南から）

(2)　Bトレンチ弥生時代遺構（西から）

図版第4　蔵ケ崎遺跡

(1) 矢板列1（西から）

(2) 矢板列細部（西から）

(3) 矢板列細部（西から）

図版第5　蔵ケ崎遺跡

(1)　SD101断面と土層の状況（南から）

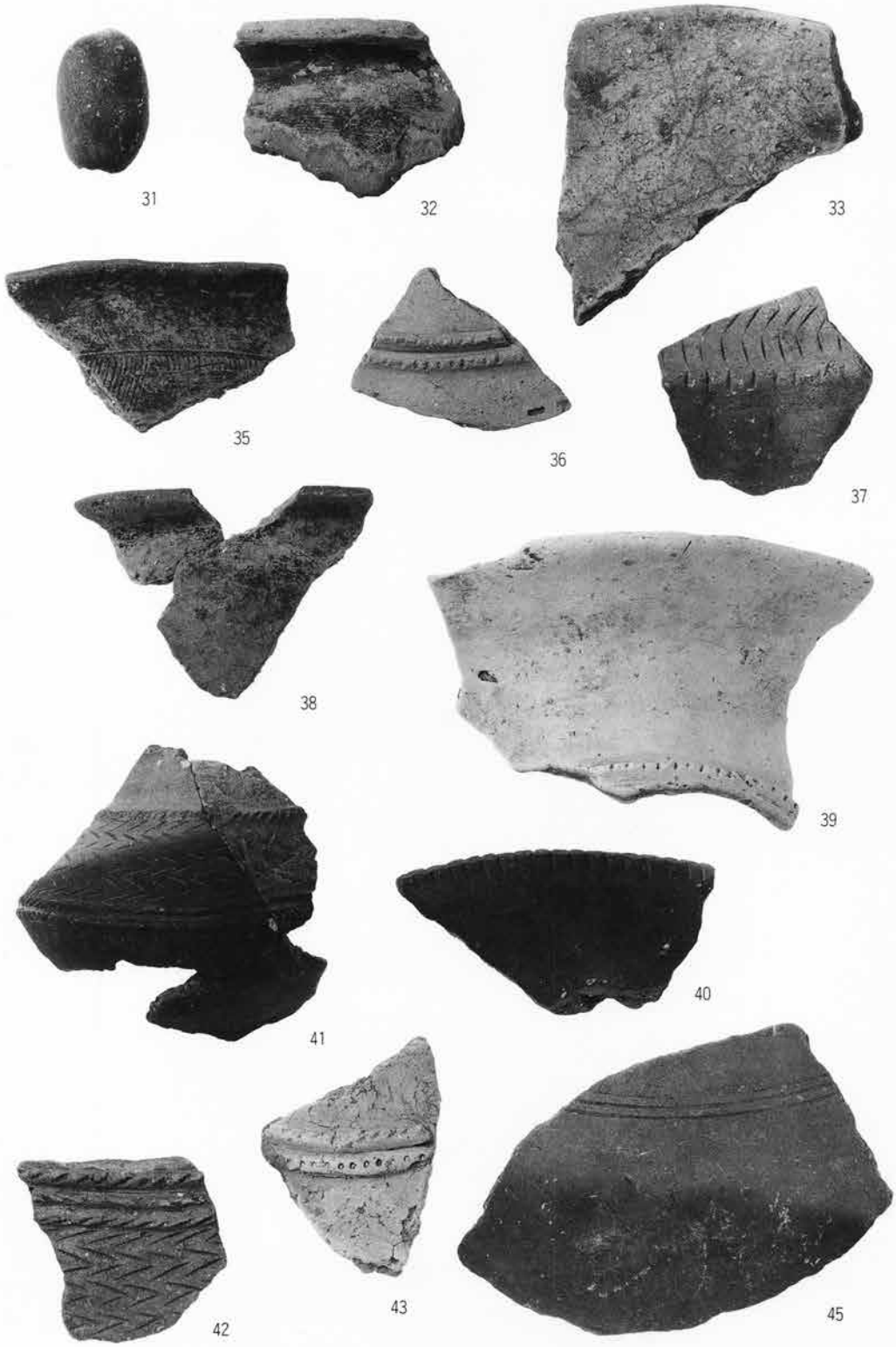
(2)　Aトレンチ矢板列2（西から）

図版第6　蔵ケ崎遺跡

(1)　SD202（南から）

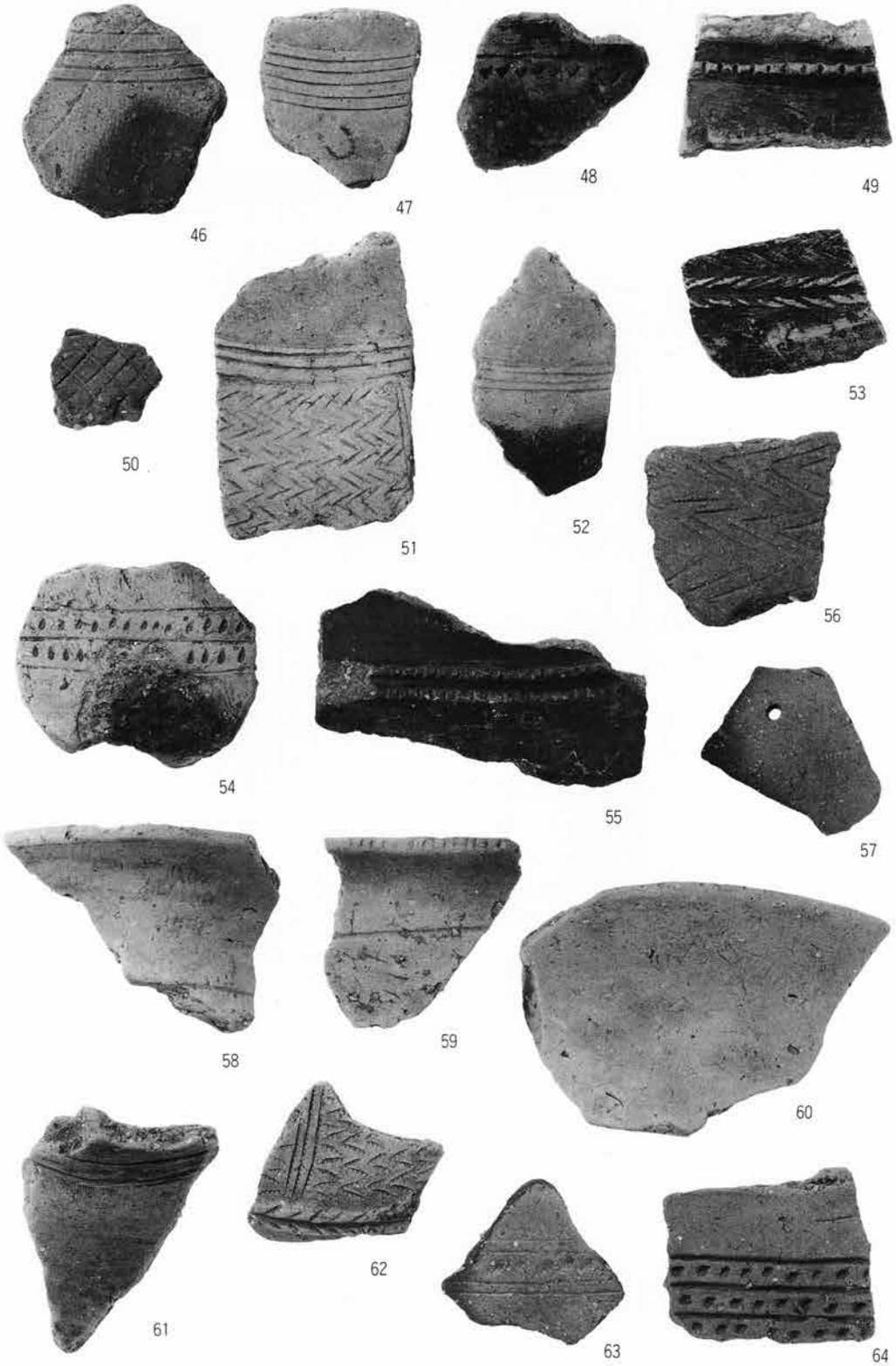
(2)　SD201（北から）

図版第7　蔵ケ崎遺跡



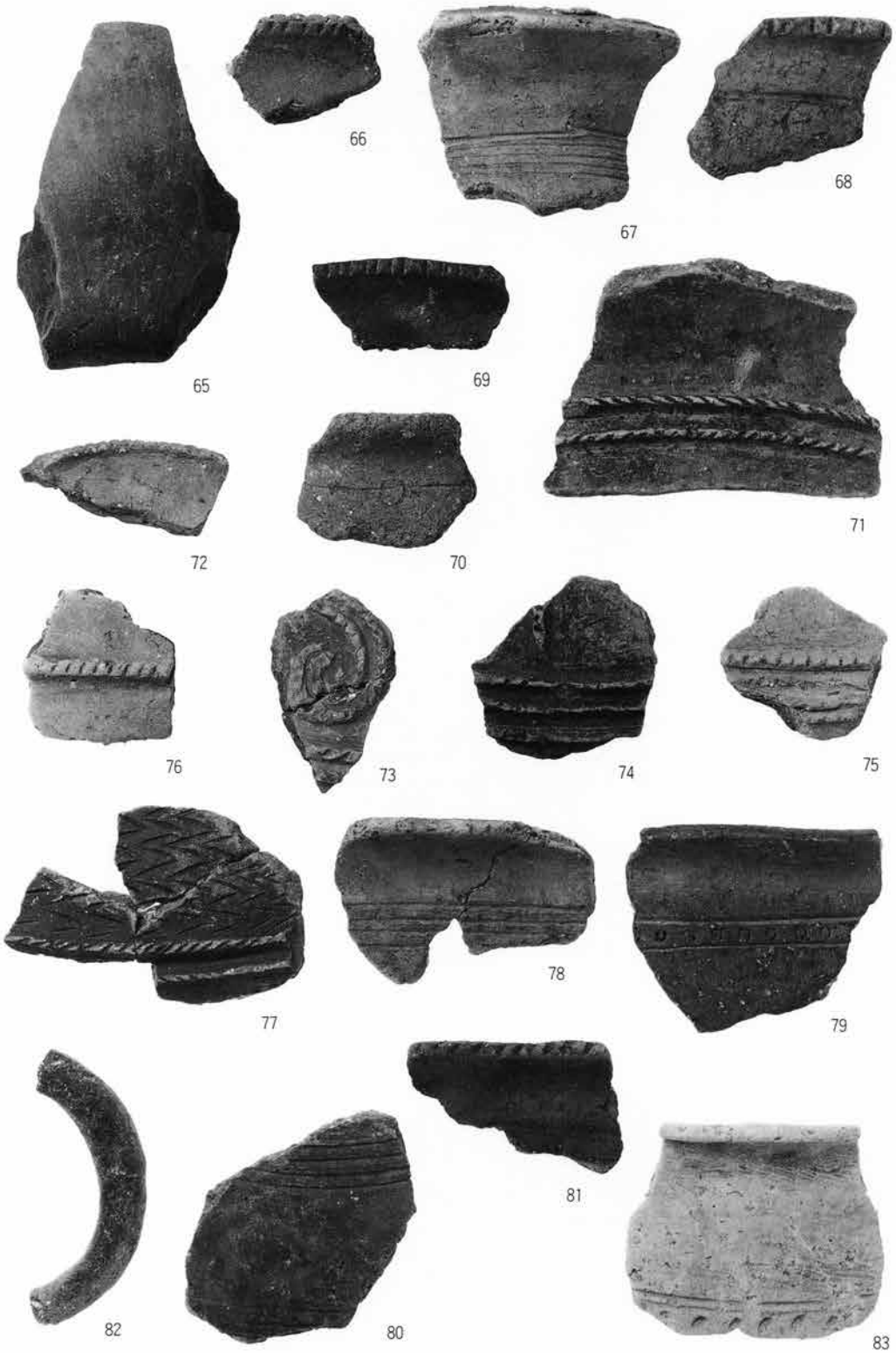
出土遺物 (1)

図版第8　蔵ケ崎遺跡



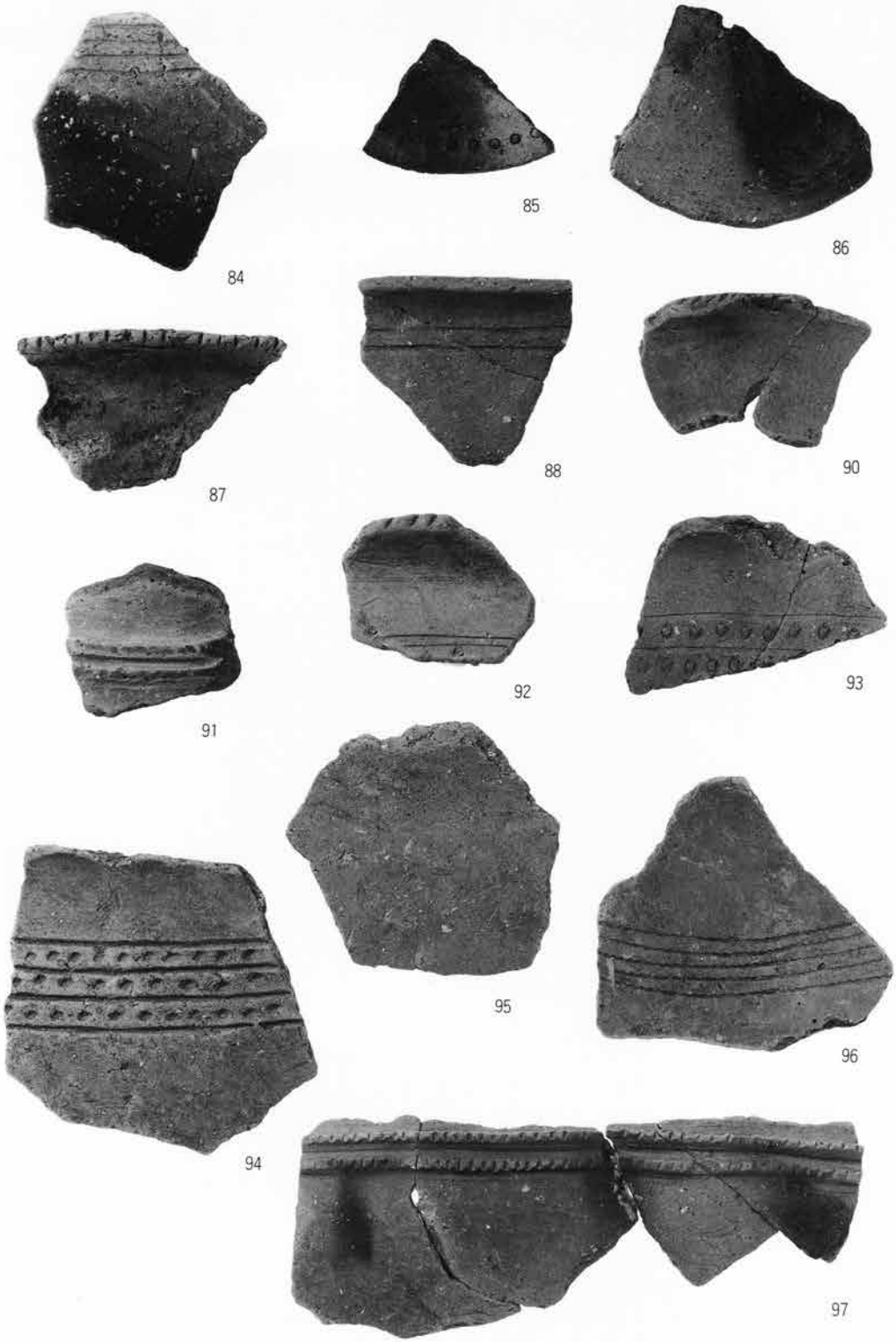
出土遺物 (2)

図版第9　蔵ケ崎遺跡



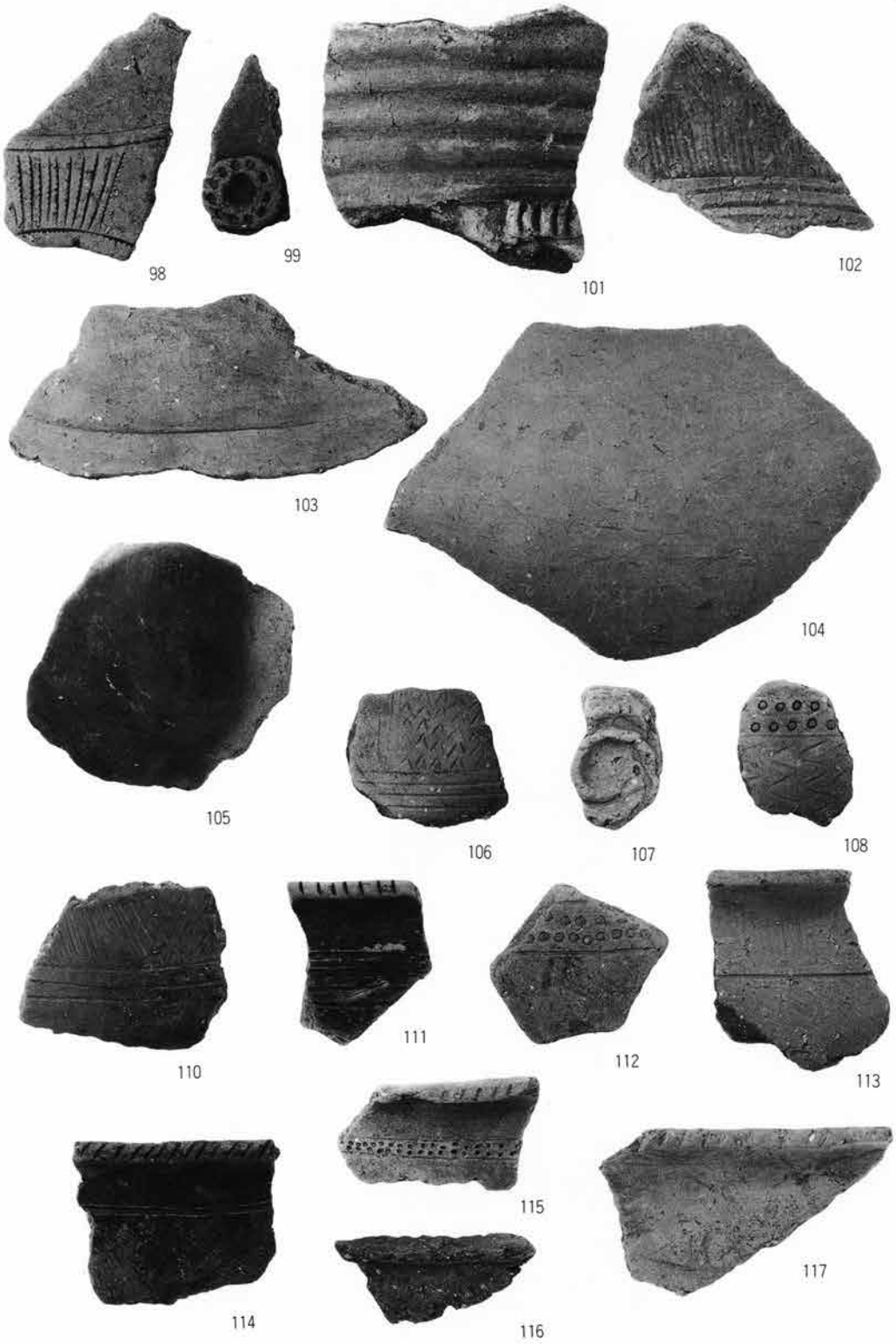
出土遺物 (3)

図版第10　蔵ケ崎遺跡



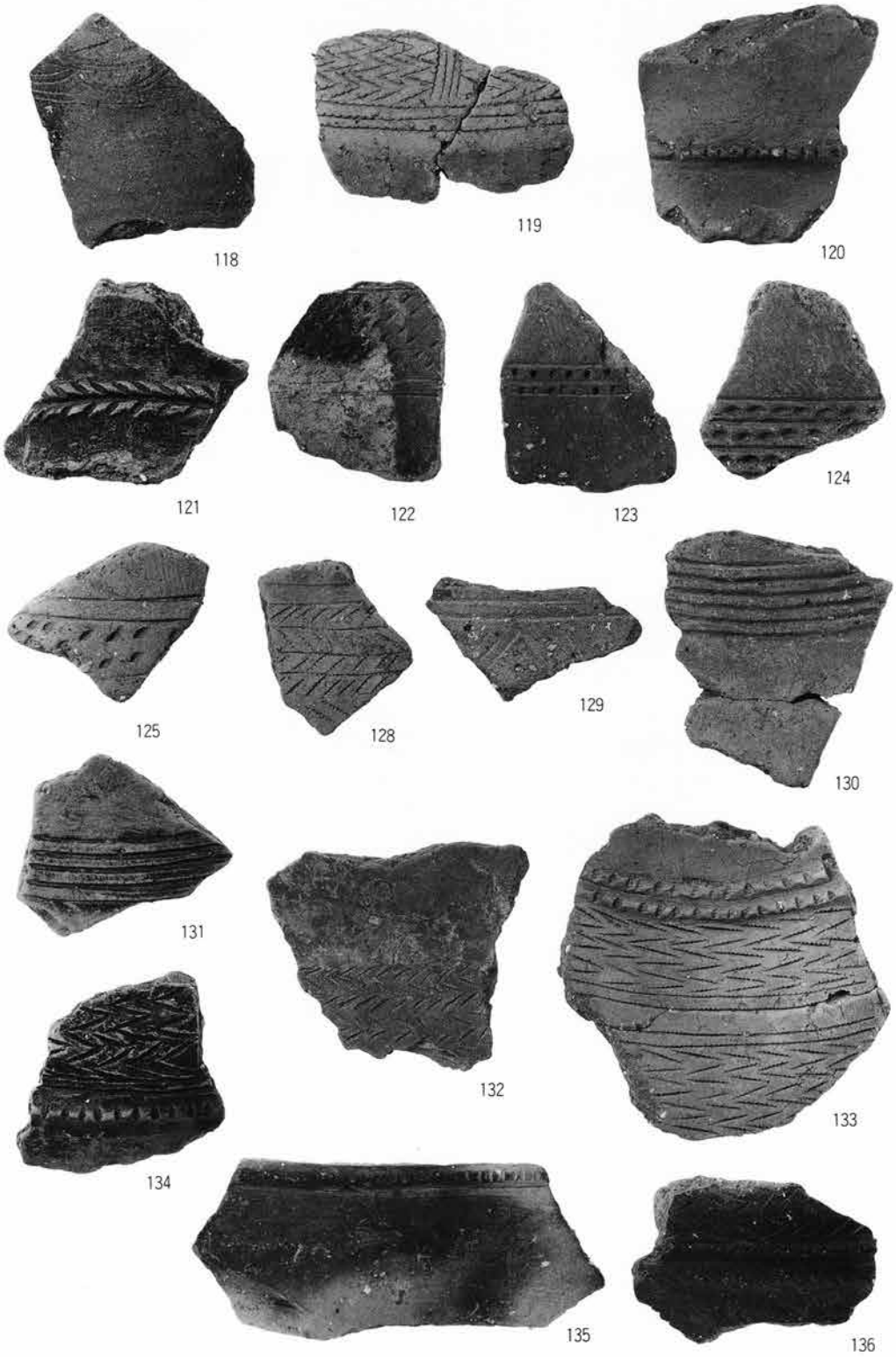
出土遺物 (4)

図版第11　蔵ケ崎遺跡



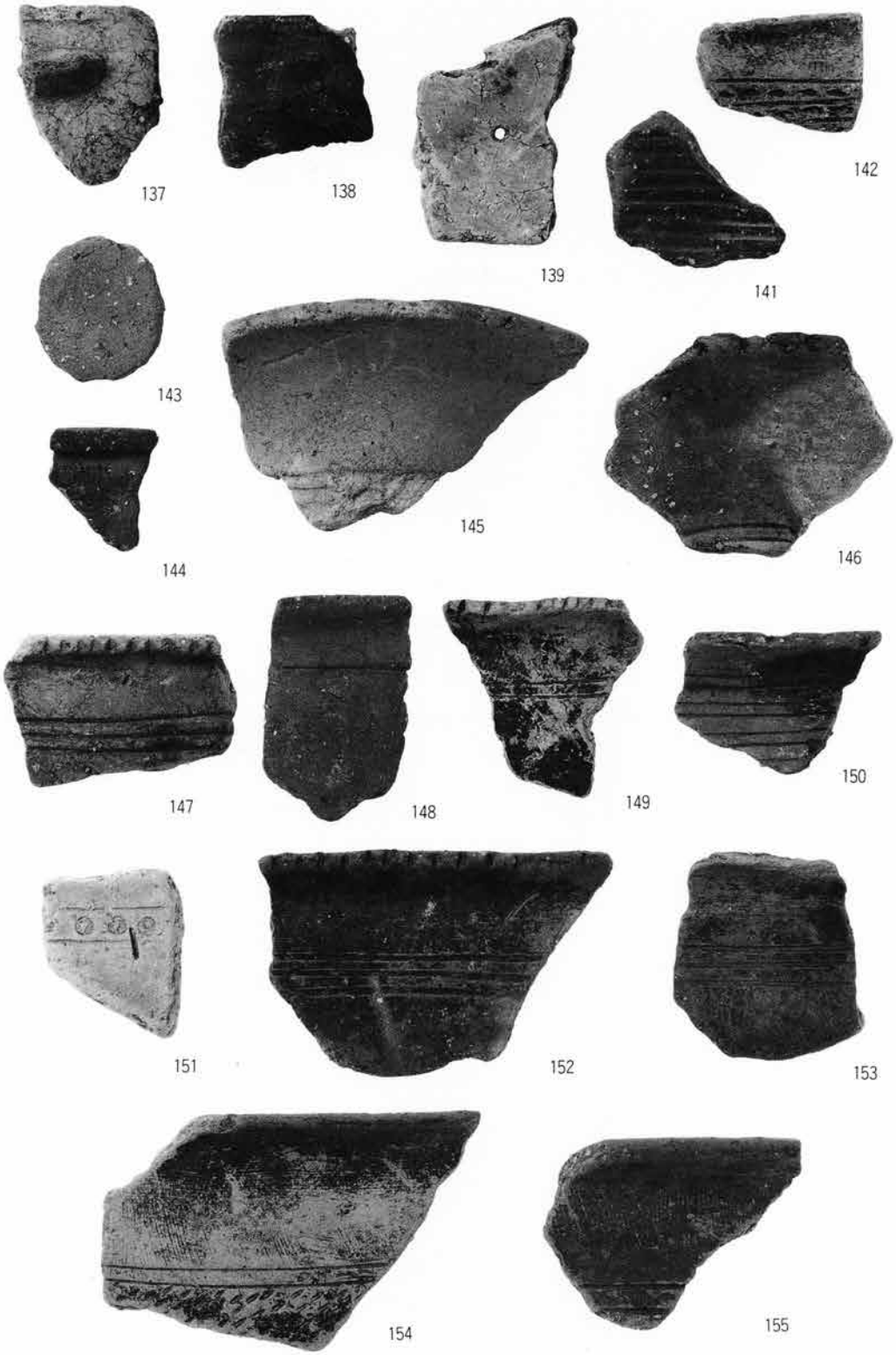
出土遺物 (5)

図版第12　蔵ケ崎遺跡



出土遺物 (6)

図版第13　蔵ケ崎遺跡



出土遺物 (7)

図版第14　蔵ケ崎遺跡

156

157

158

159

160

161

162

163

166

167

168

169

173

170

図版第15　下 岡 古 墳

(1)　調査前墳丘全景（南から）

(2)　南側平坦部試掘地点（東から）

図版第16　下　岡　古　墳

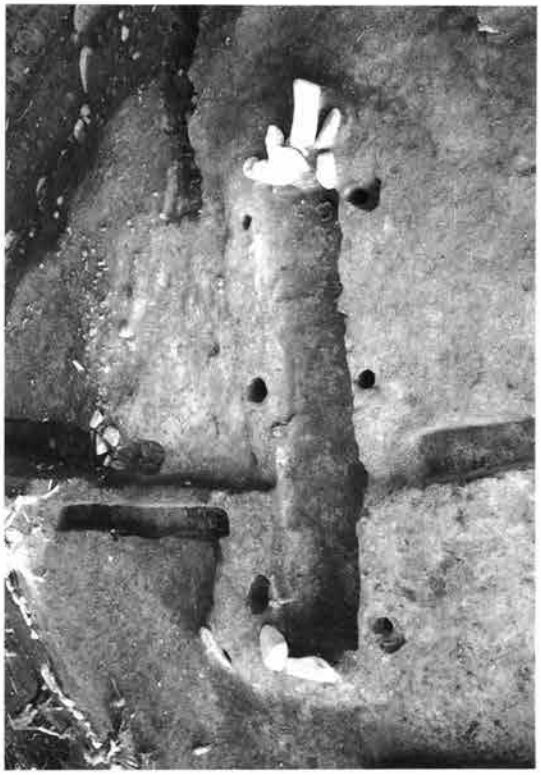
(1)　墳丘掘削風景（南西から）

(2)　主体部上面土層断面

(3)　主体部検出状況（南から）

(4)　主体部東側石組細部

図版第17　下　岡　古　墳



(1)　杭跡と主体部ライン検出状況

(2)　杭跡と墓壙断面

(3)　主体部掘削状況（南から）

(4)　杭跡

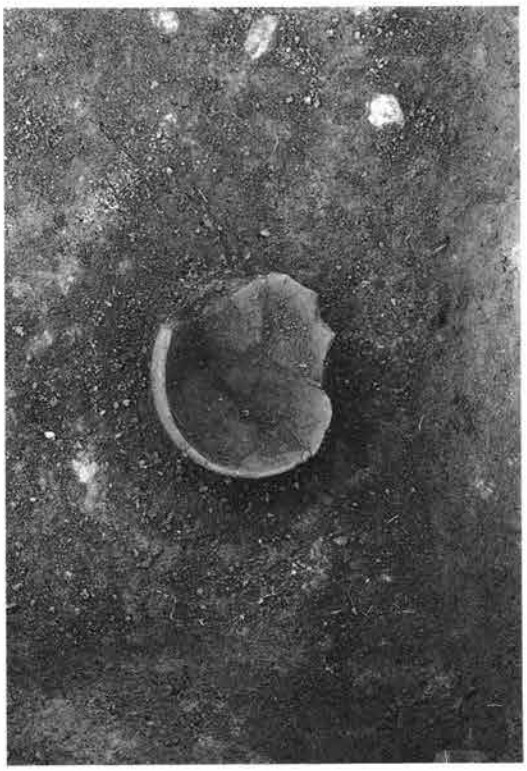
図版第18　下 岡 古 墳

(1)　主体部墓壙（南東から）

(2)　主体部完掘状況（東から）

図版第19　下　岡　古　墳

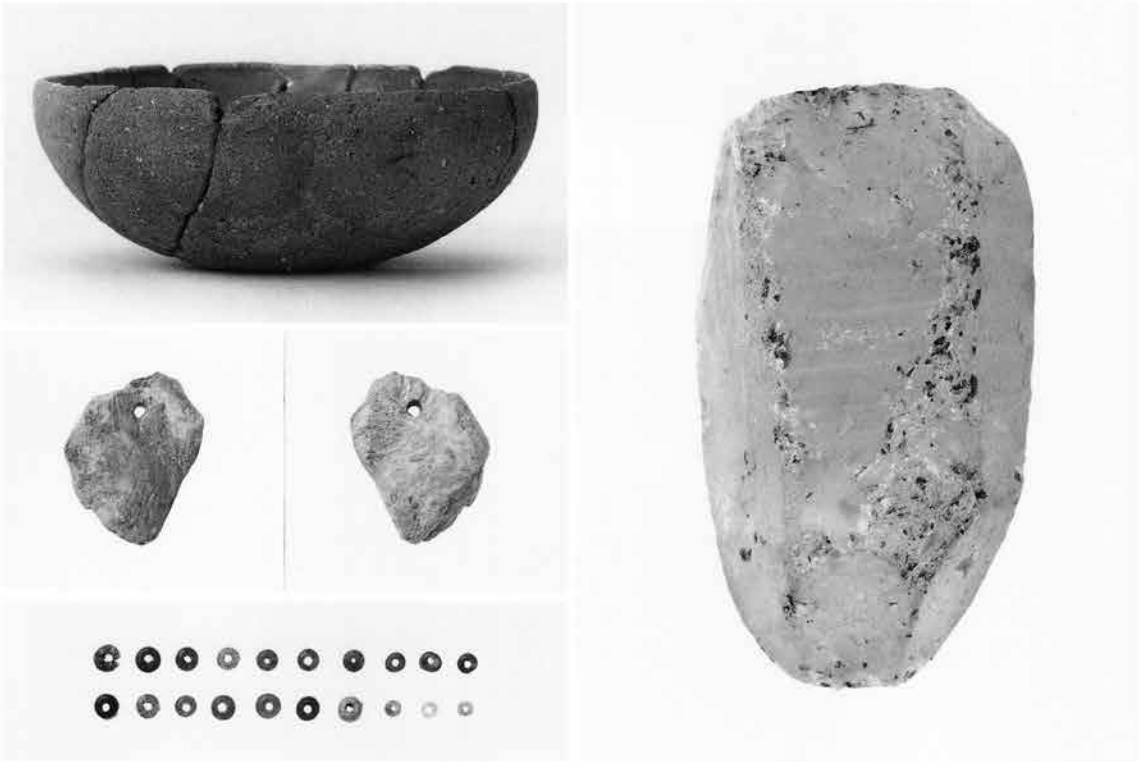
(1)　主体部完掘状況



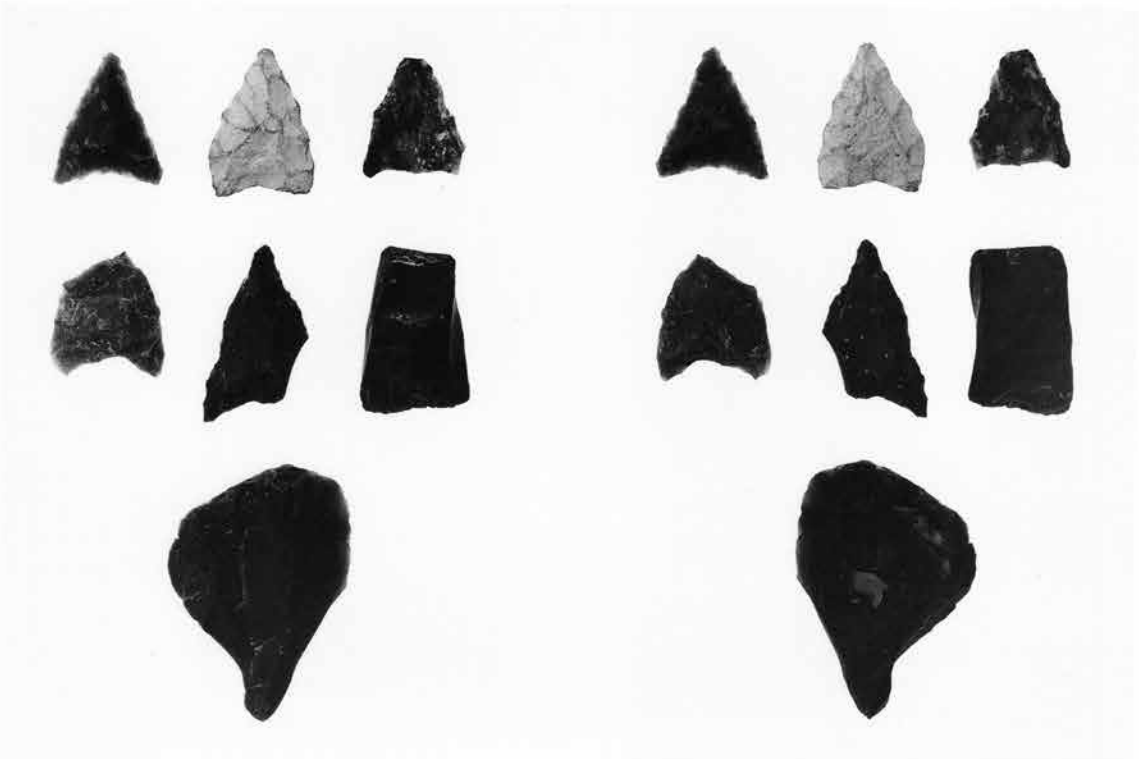
(2)　土師器杯出土状況

(3)　ガラス製小玉出土状況

図版第20　下 岡 古 墳



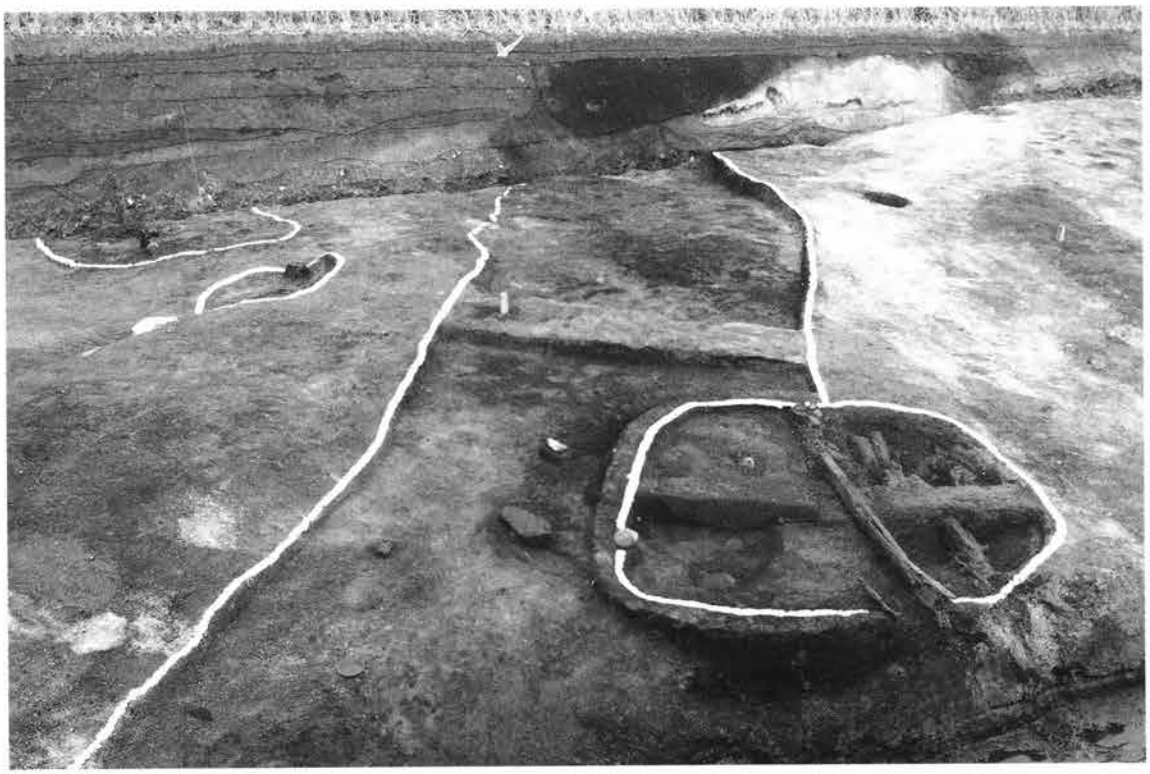
(1) 出土遺物（主体部内 他）



(2) 出土遺物（盛り土中）

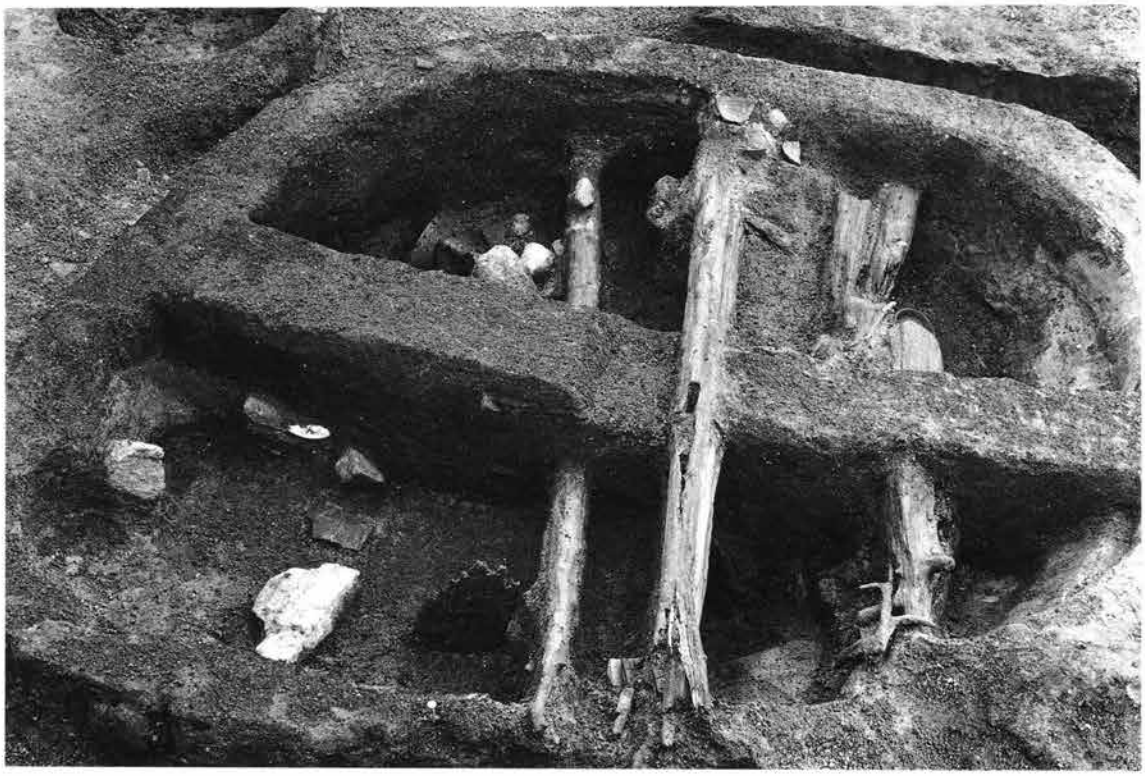
図版第21　桜内遺跡

(1)　調査風景（南から）



(2)　溝（SD03）と井戸（SE01）

図版第22　桜内遺跡



(1) 井戸（SE01）上面

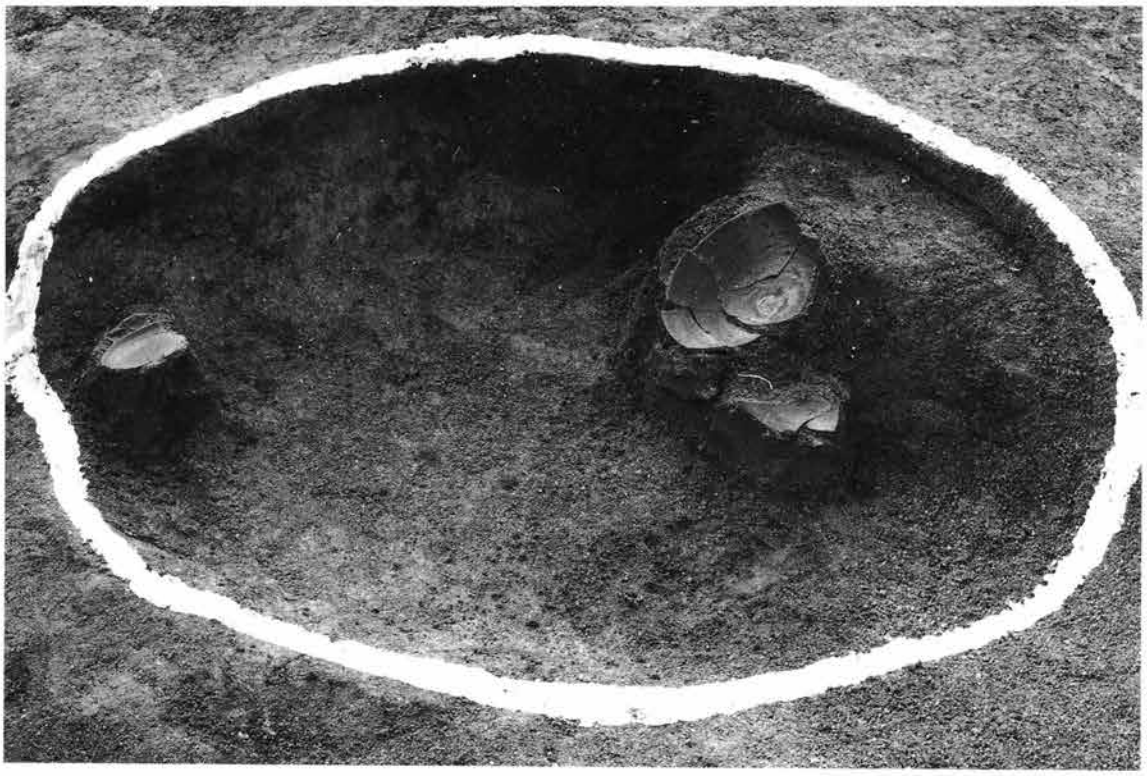
(2) 井戸（SE01）完掘状況

図版第23　桜内遺跡

(1)　井戸（SE02）

(2)　井戸（SE02）内土器出土状況

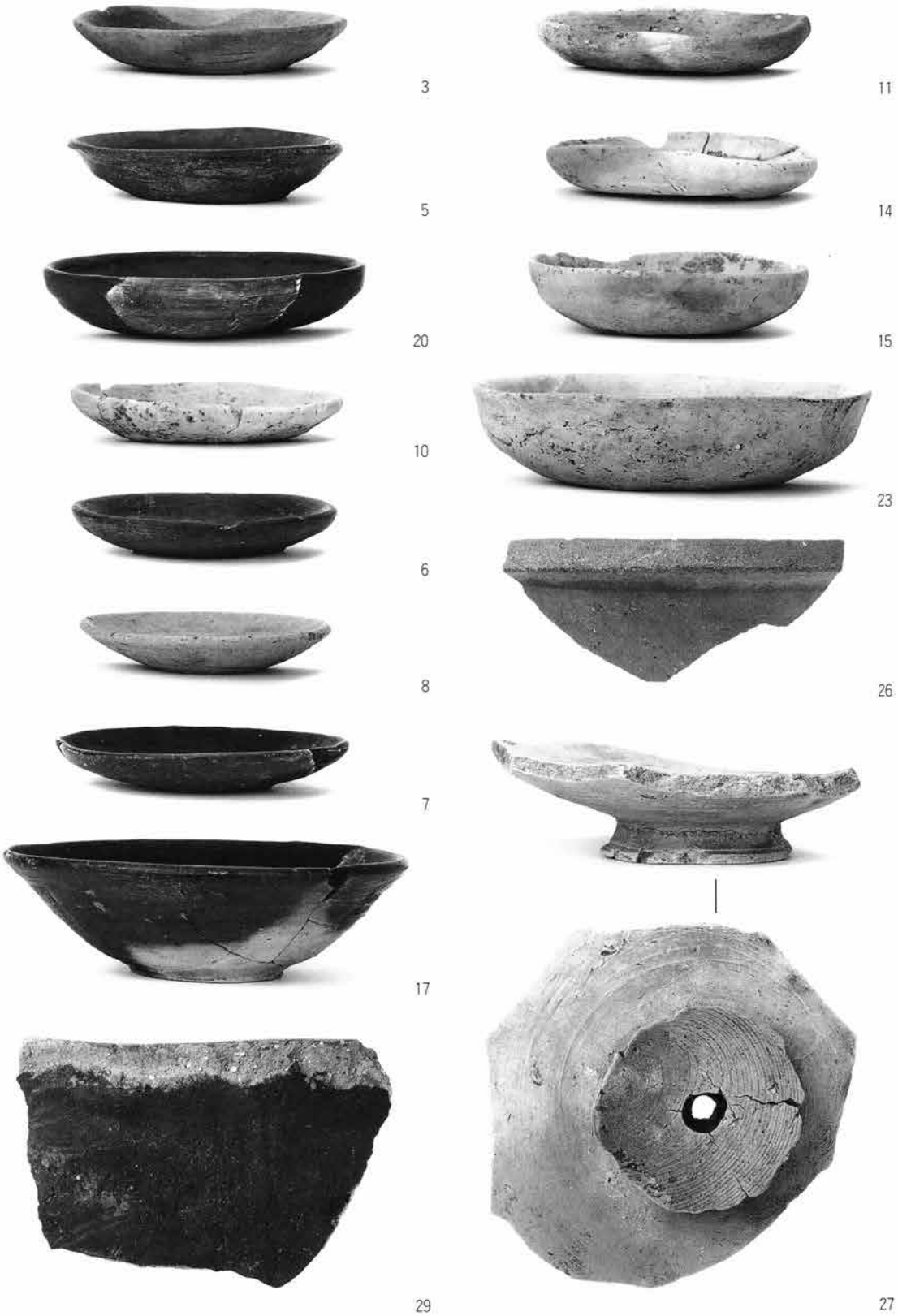
図版第24　桜内遺跡



(1) 土坑（SK02）

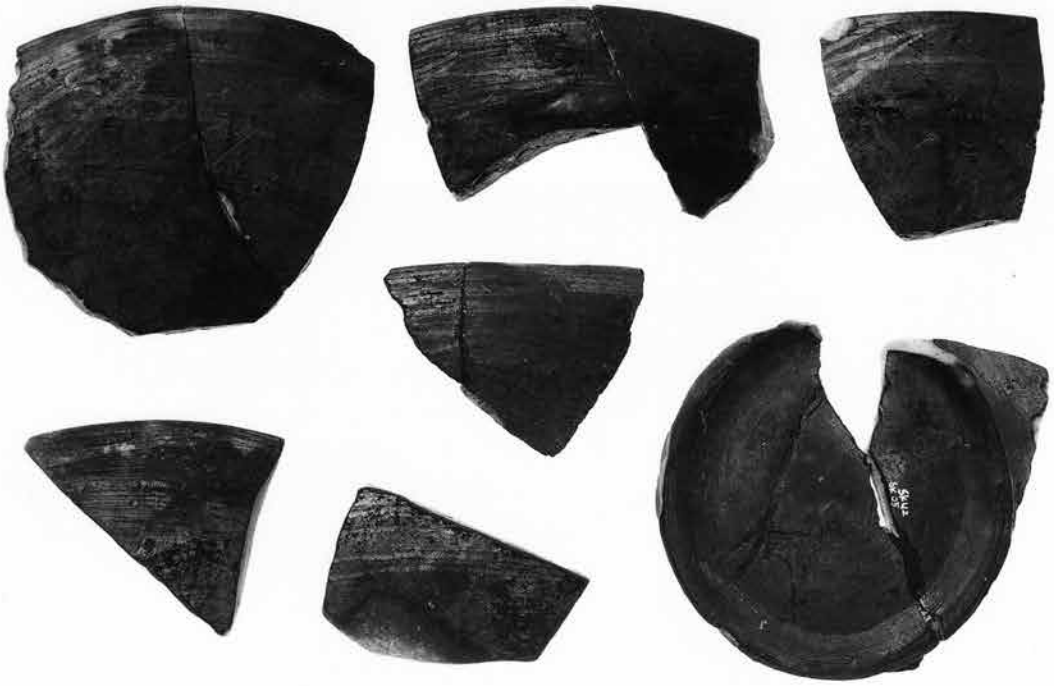
(2) 土坑（SK02）内黒色土器出土状況

図版第25　桜内遺跡



出土土器

図版第26　桜内遺跡

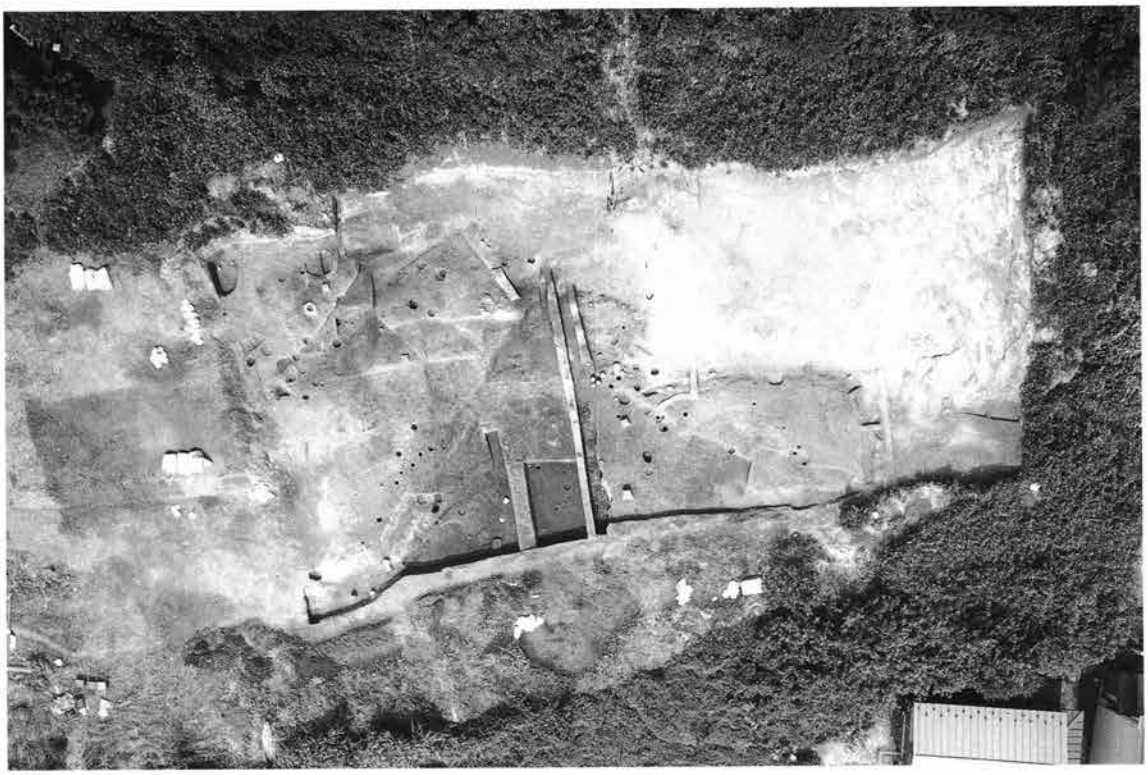


(1)　SE03出土瓦器椀（表面）

(2)　同（裏面）

図版第27　定山遺跡第３次

(1)　調査地遠景（東から）



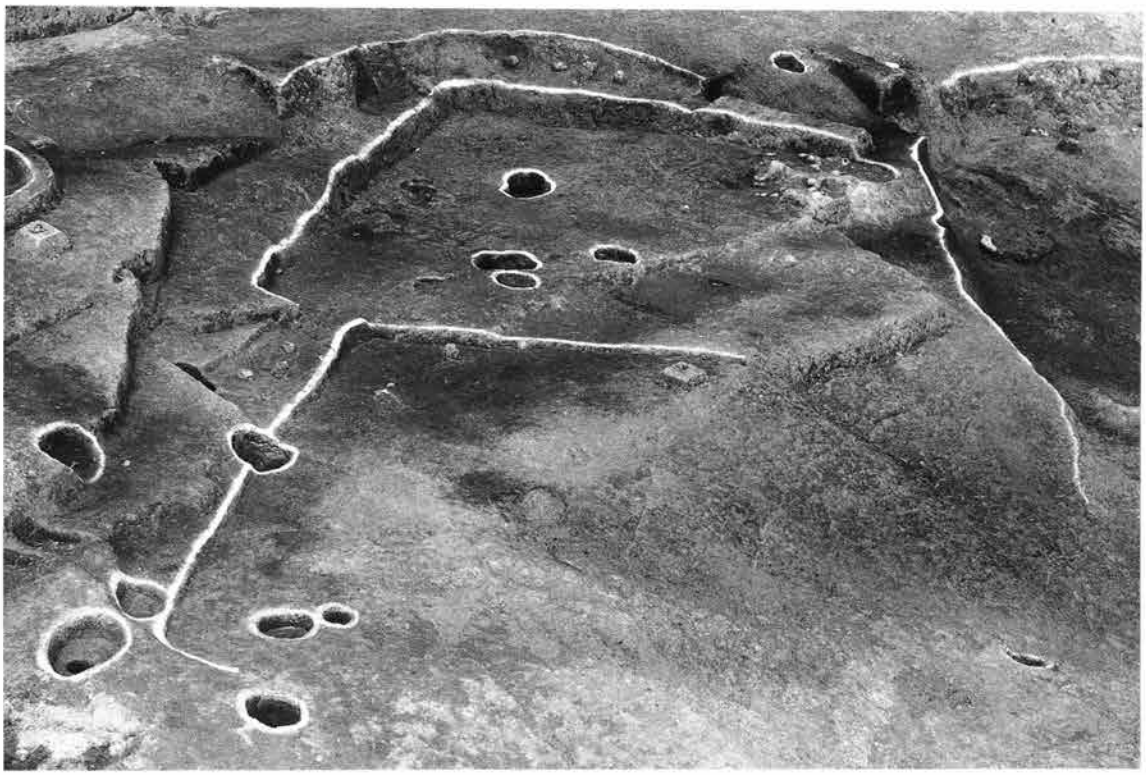
(2)　調査地全景（上空から　上が西）

図版第28　定山遺跡第３次

(1)　調査地全景（上空　北東から）

(2)　調査地全景（南から）

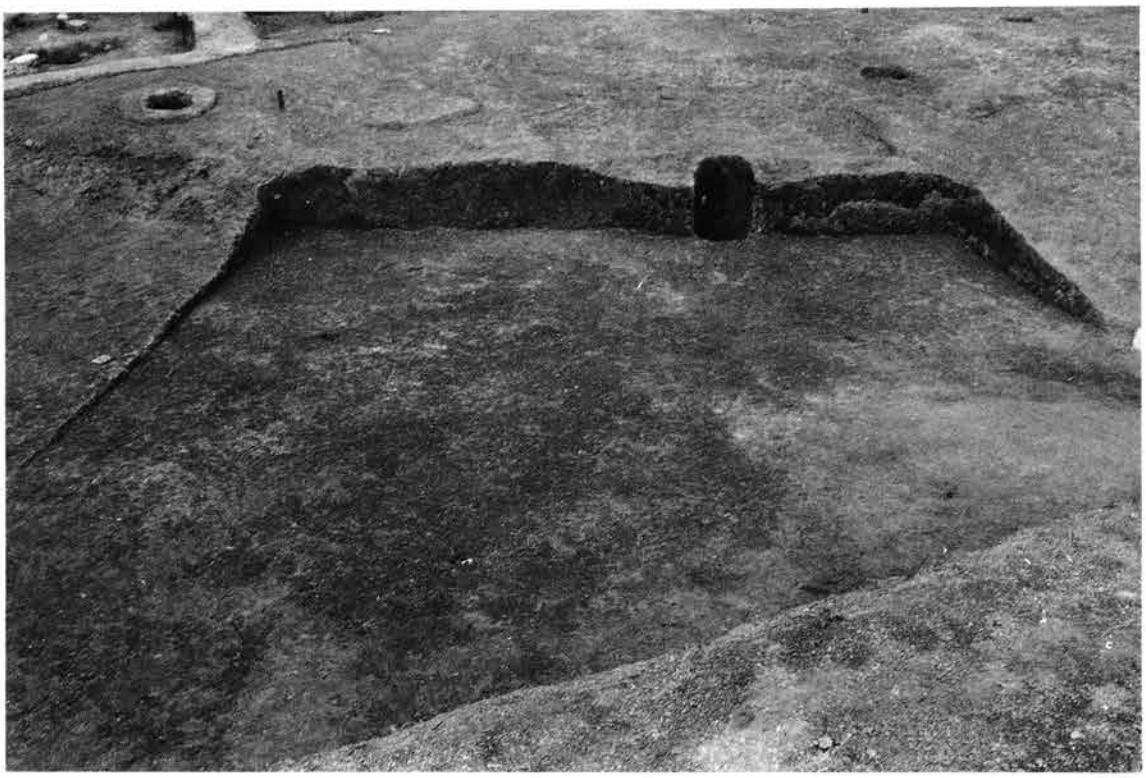
図版第29　定山遺跡第３次



(1)　SH01・02全景（南から）

(2)　SH01竈検出状況（南西から）

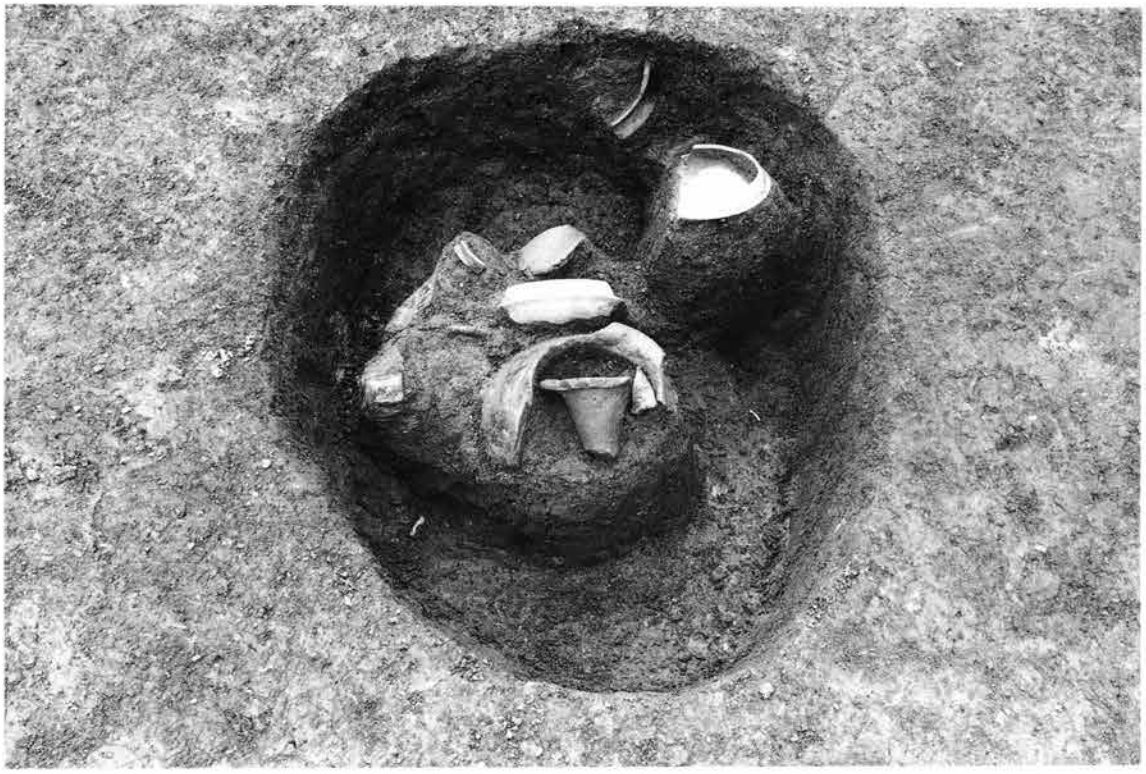
図版第30　定山遺跡第３次



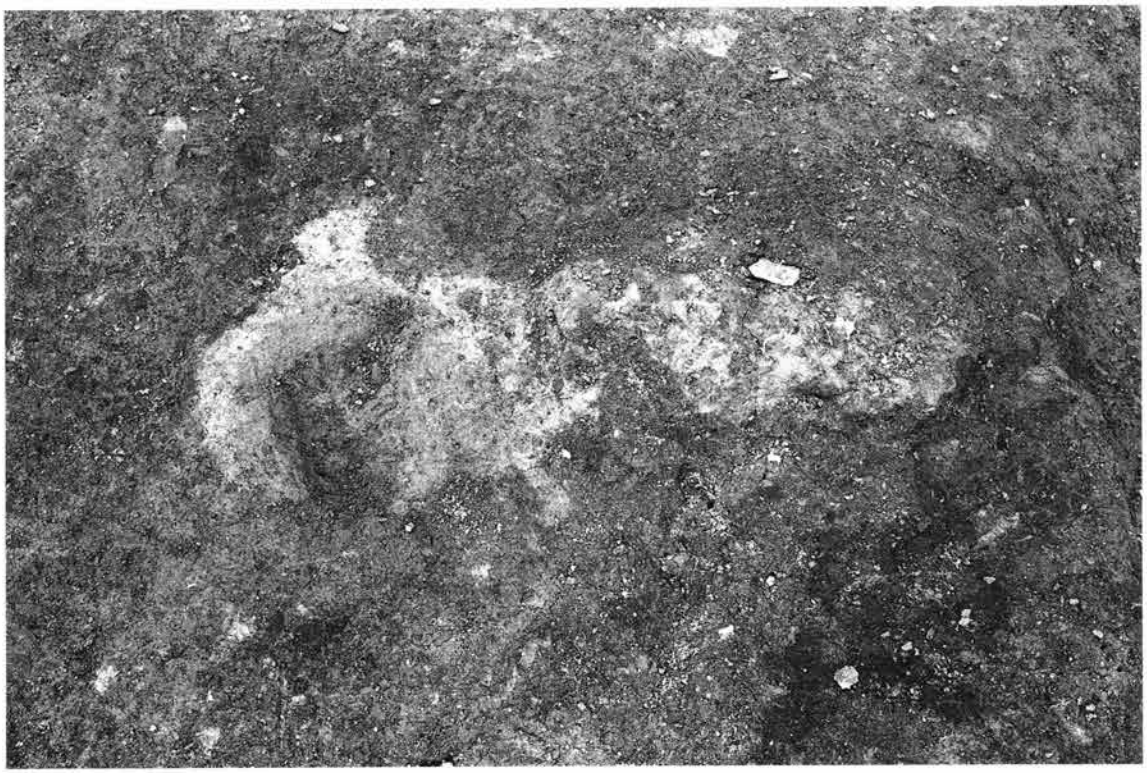
(1)　SH03全景（南東から）

(2)　SH04・05全景（東から）

図版第31　定山遺跡第３次



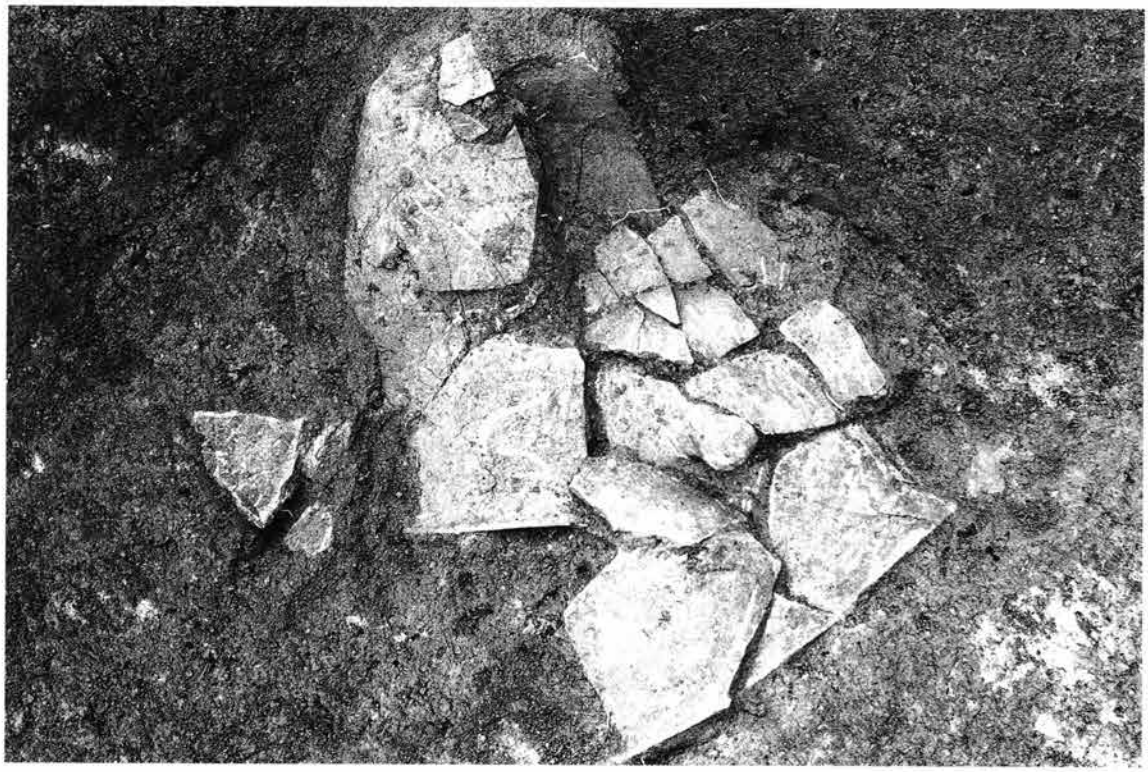
(1)　SK01全景（北から）



(2)　SX02鍛冶炉検出状況（東から）

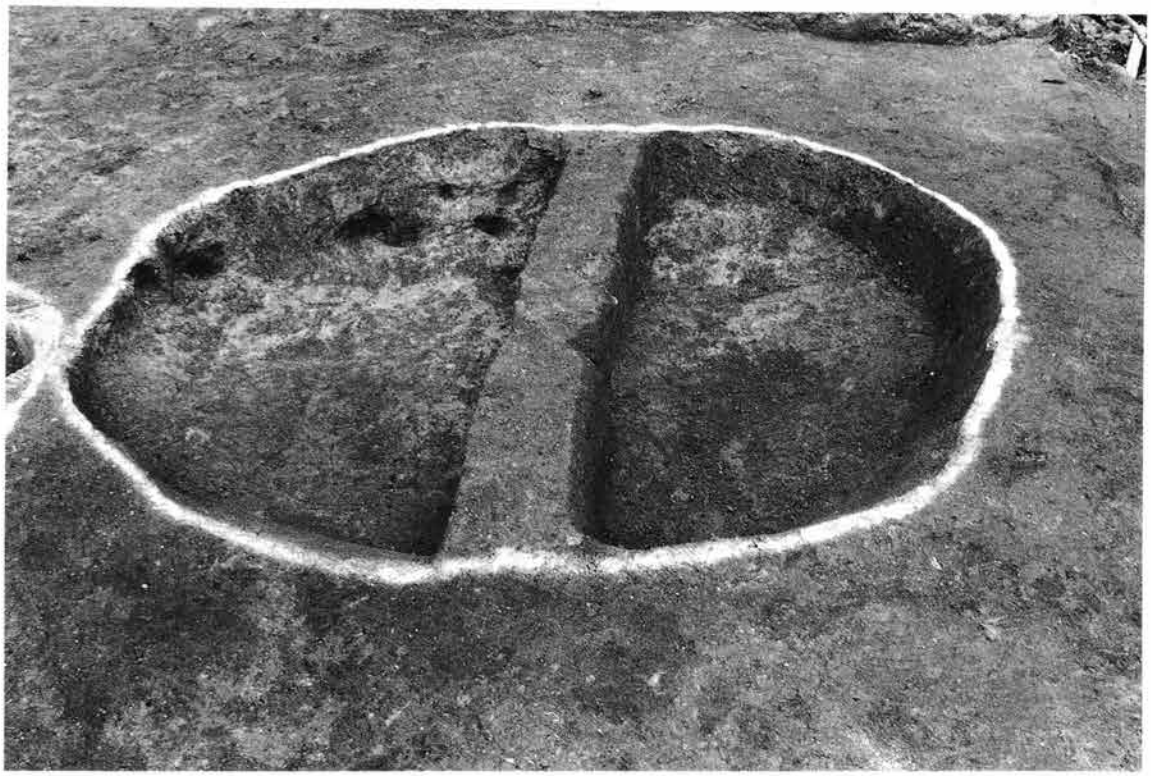
図版第32　定山遺跡第３次

(1)　SX02遺物出土状況 (1)（南から）

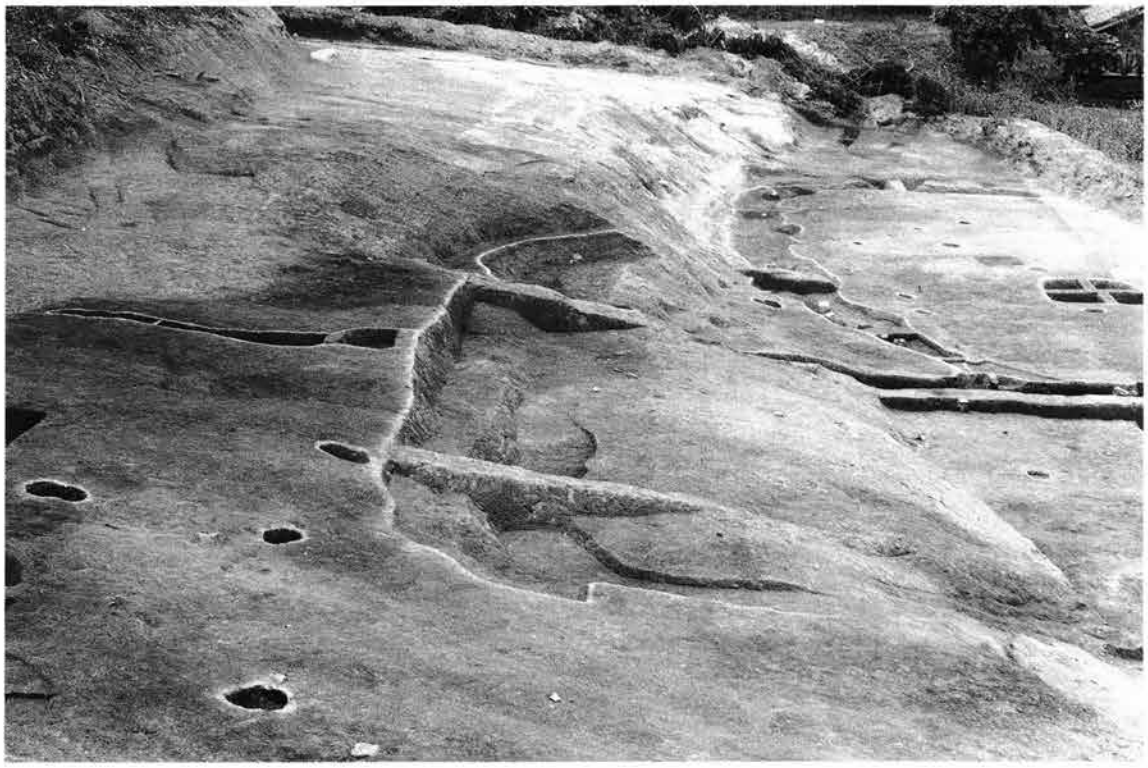


(2)　SX02遺物出土状況 (2)（東から）

図版第33　定山遺跡第３次



(1)　SK03検出状況（東から）



(2)　SX01検出状況（南から）

図版第34　定山遺跡第３次

(1)　調査地北半全景（南から）

(2)　SD01検出状況（北東から）

図版第35　定山遺跡第３次

12

13

14

16

15

19

20

48

24

23

28

29

出土遺物 (1)

図版第36　定山遺跡第３次

30

33

34

35

36

41

42

出土遺物 (2)

図版第37　定山遺跡第３次

44

43

54

53

52

47

出土遺物 (3)

図版第38　定山遺跡第３次

56

57

60

61

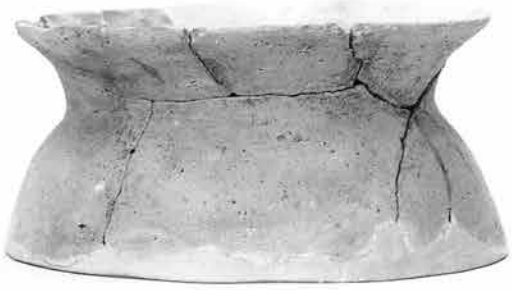
62

58

64

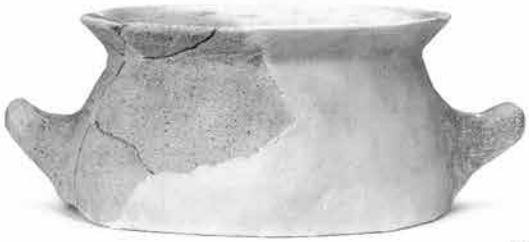
65

77


92

出土遺物 (4)

図版第39　定山遺跡第３次



104

100

102

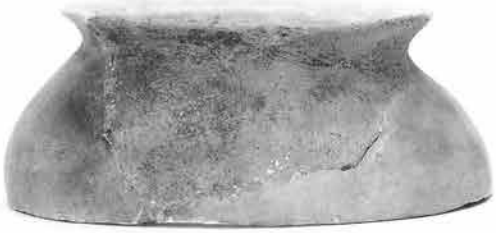
SX02出土 鉄滓

106

105

113

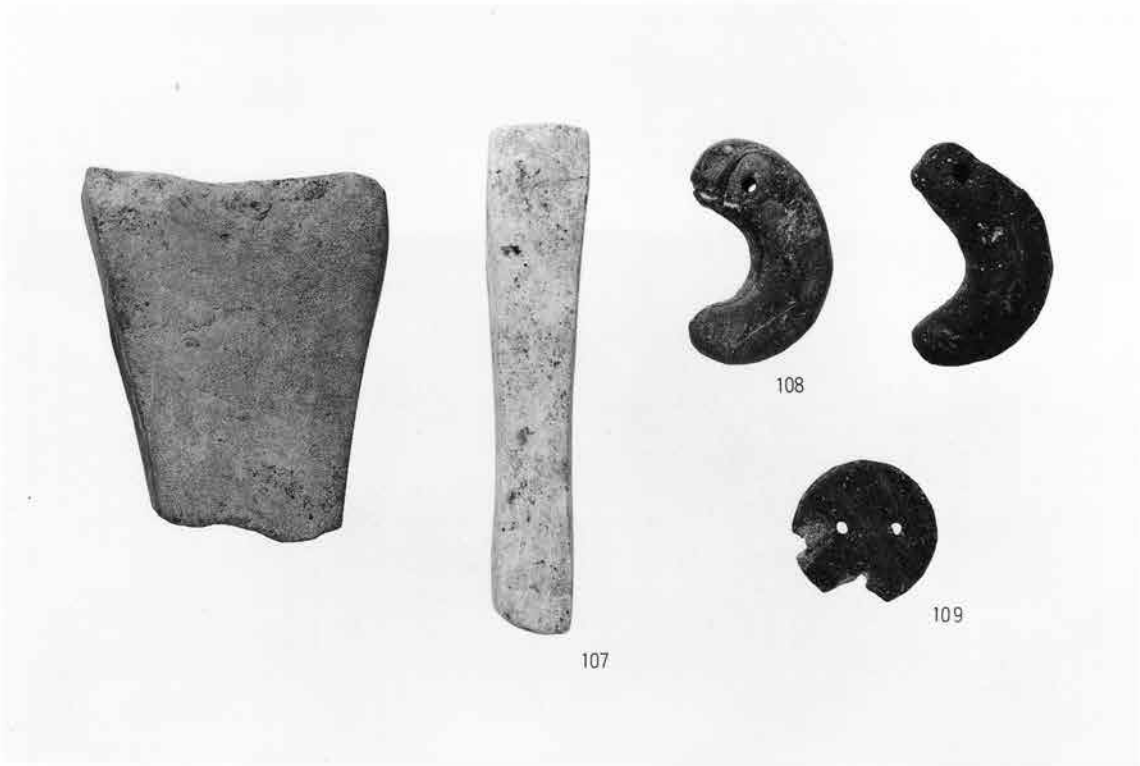
2

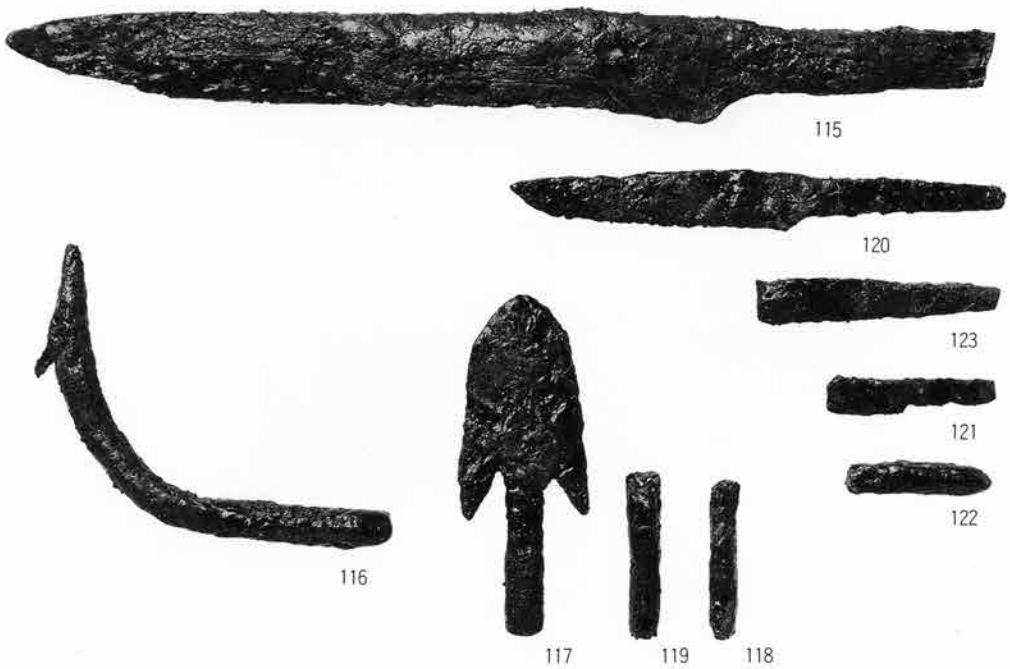


3

114

図版第40　定山遺跡第３次





出土遺物 (6)

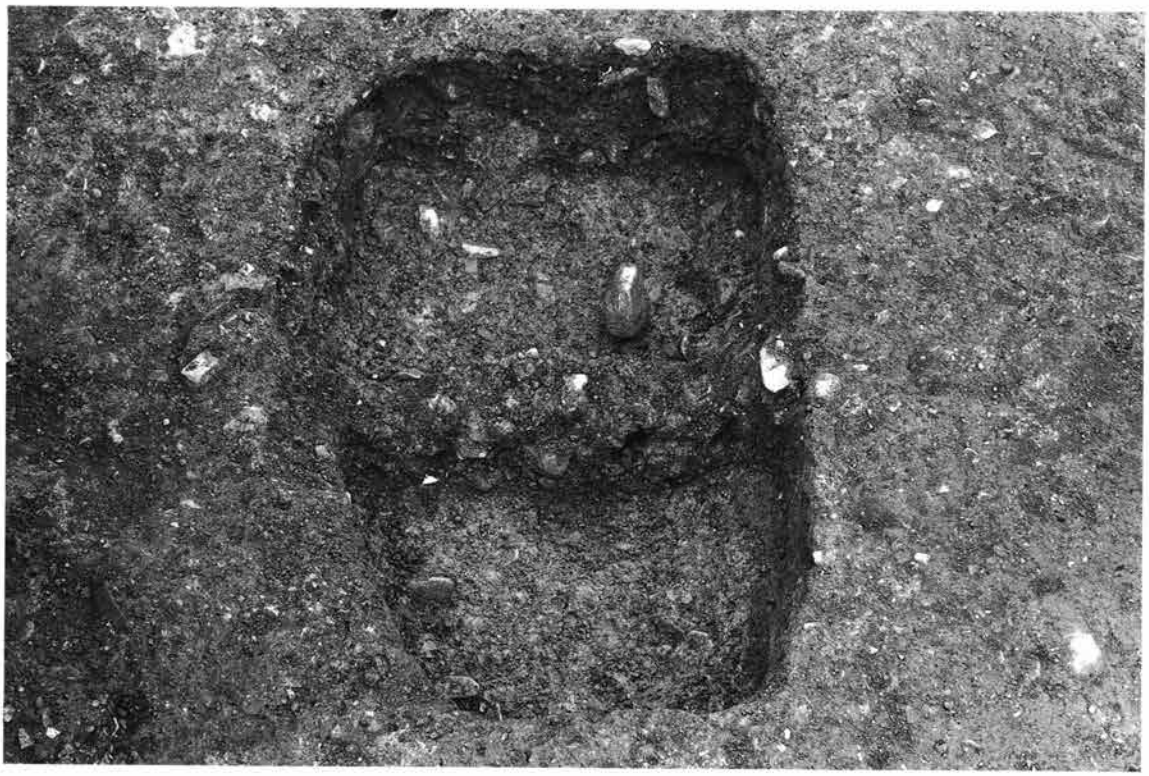
図版第41　平安京跡（聚楽第跡）

(1)　調査地全景（江戸時代　北から）

(2)　地下室１断面（南から）

図版第42　平安京跡（聚楽第跡）

(1)　地下室１完掘状況（南から）



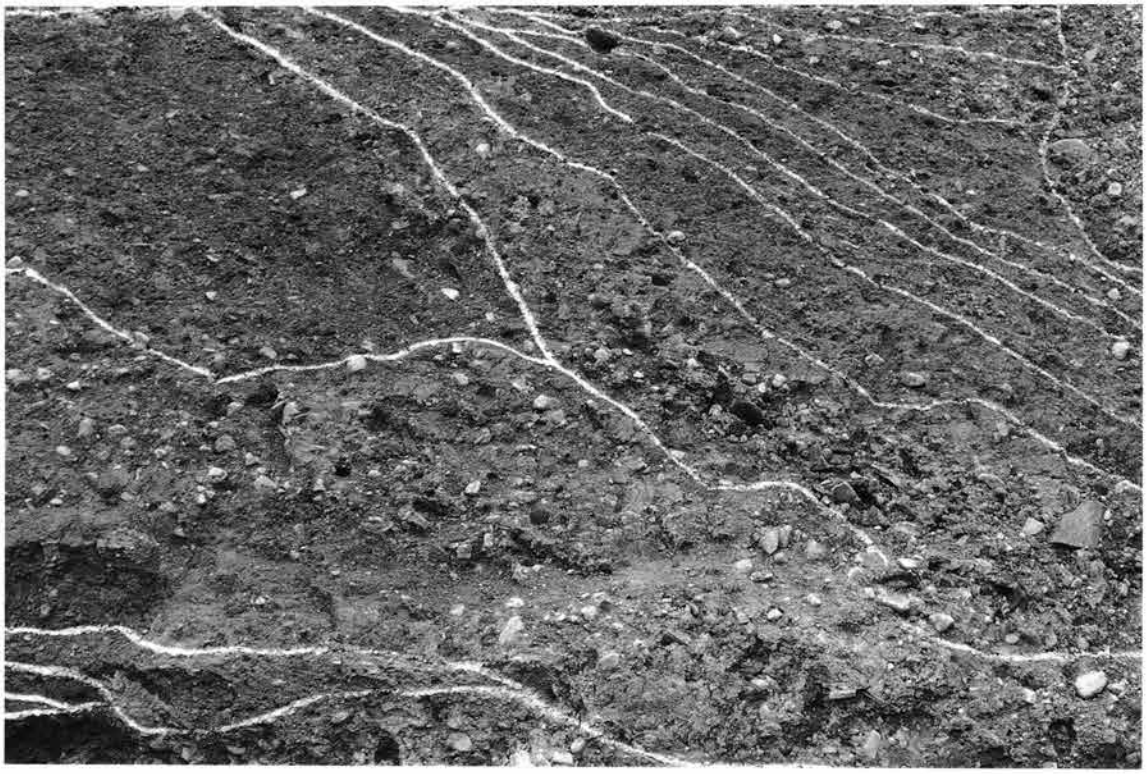
(2)　土坑２全景（東から）

図版第43　平安京跡（聚楽第跡）

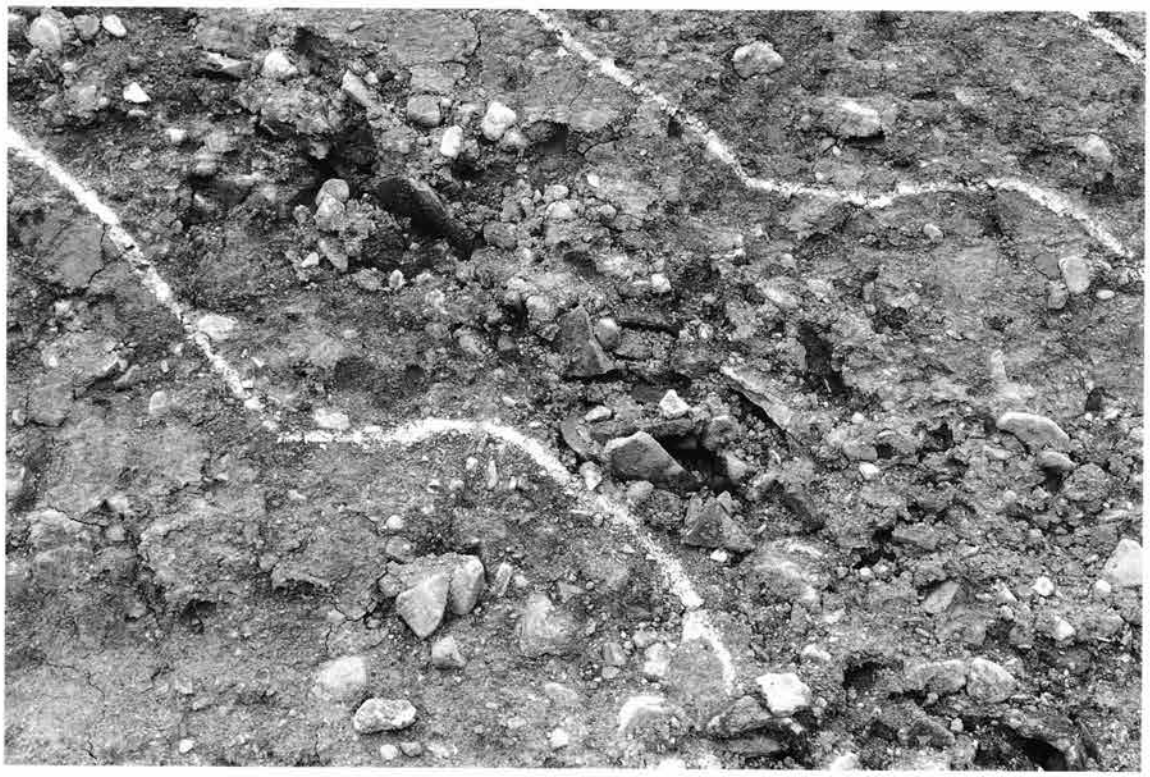
(1)　土坑３遺物出土状況（東から）

(2)　土坑１・２・３完掘状況（南から）

図版第44　平安京跡（聚楽第跡）



(1)　堀埋土堆積状況（Aトレンチ北壁）



(2)　堀埋土内瓦堆積状況（Aトレンチ北壁）

図版第45　平安京跡（聚楽第跡）

21

22

23

24

26

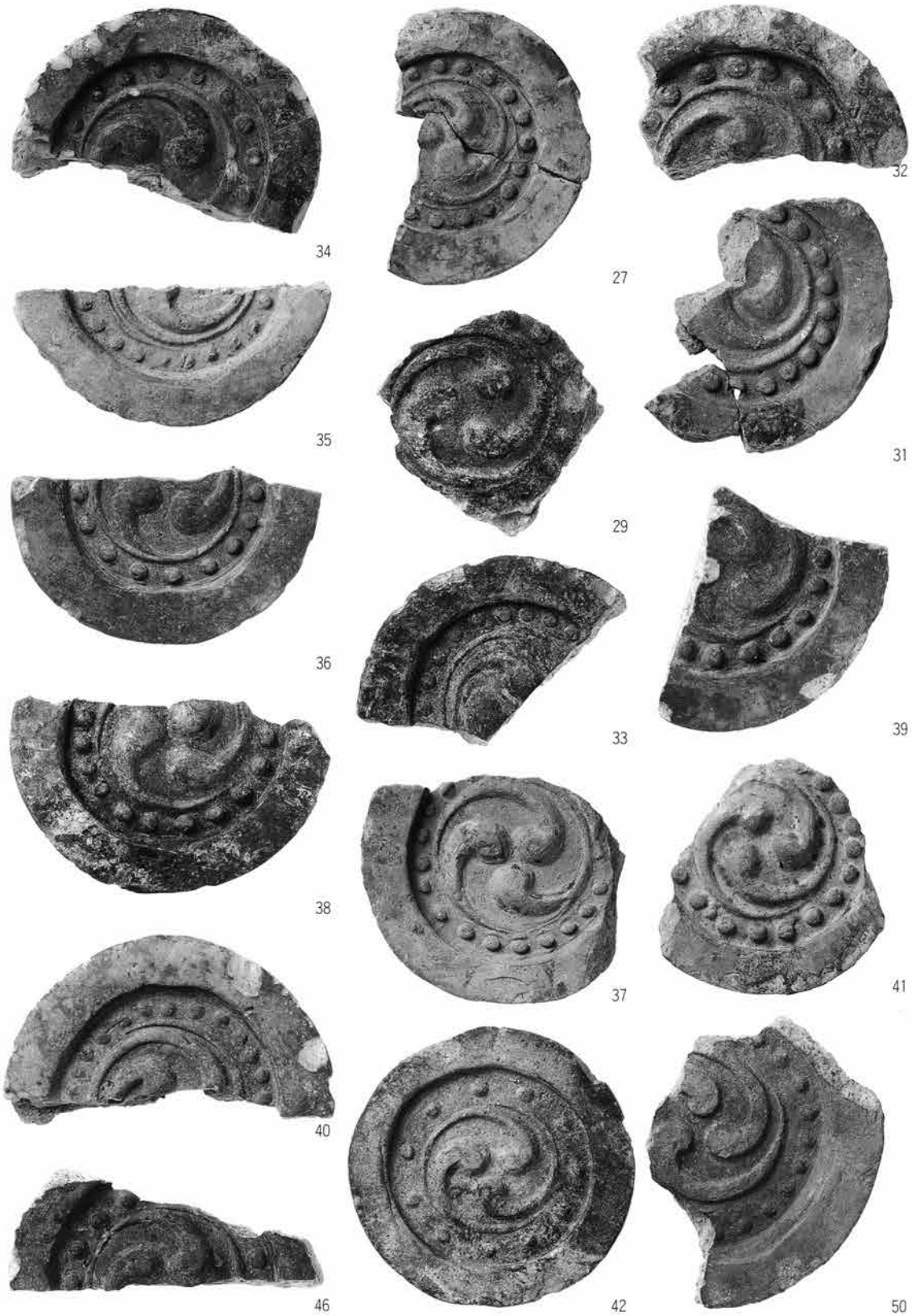
25

30

28

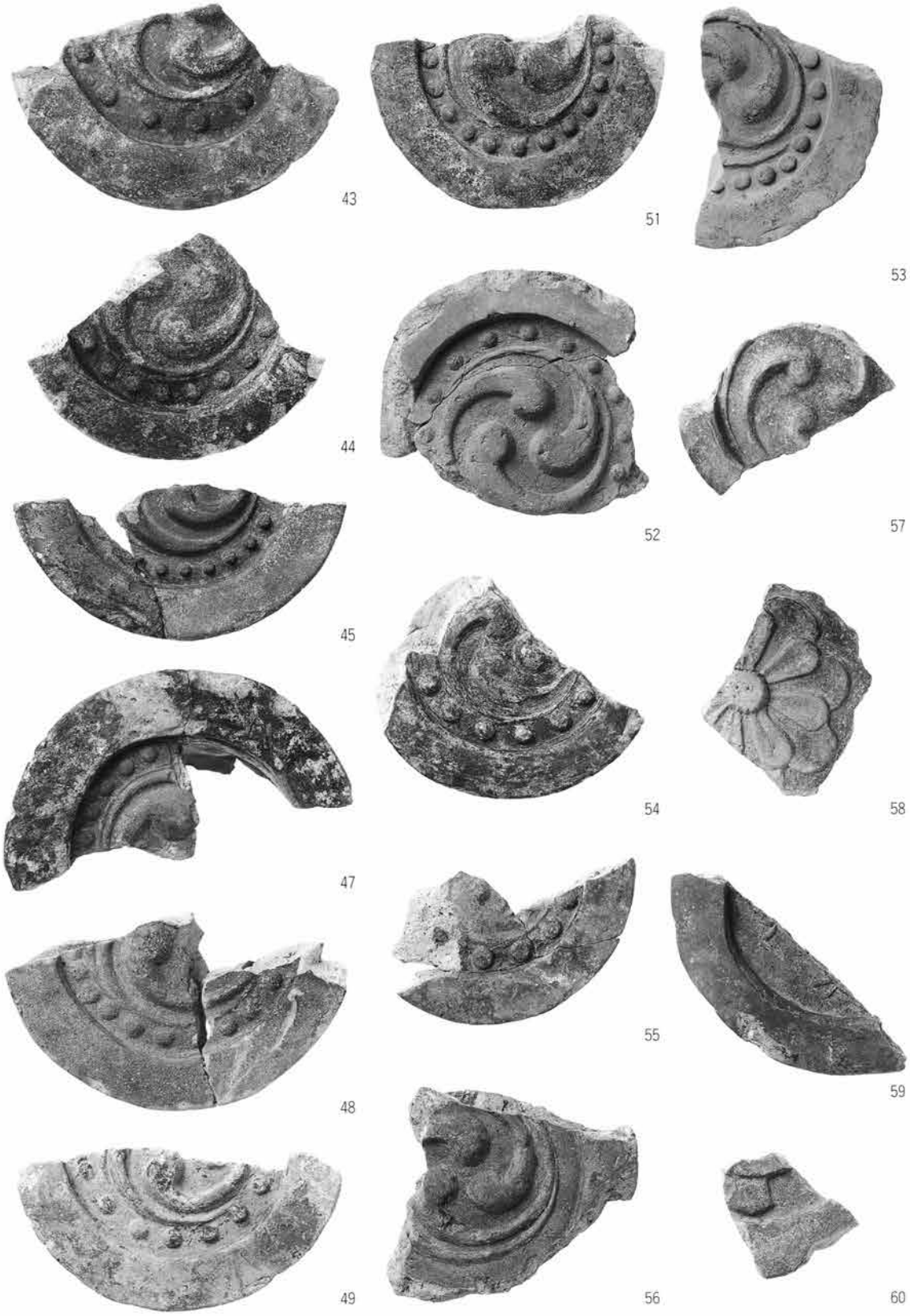
堀出土　軒丸瓦　1

図版第46　平安京跡（聚楽第跡）



堀出土　軒丸瓦　2

図版第47　平安京跡（聚楽第跡）



堀出土　軒丸瓦　3

図版第48　平安京跡（聚楽第跡）

61

63

62

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

堀出土　軒平瓦　1

図版第49　平安京跡（聚楽第跡）

79

80

81

82

83

85

84

86

87

88

89

90

91

92

93

堀出土　軒平瓦　2

図版第50　平安京跡（聚楽第跡）

94

95

96

97

98

99

100

102

103

104

105

106

107

108

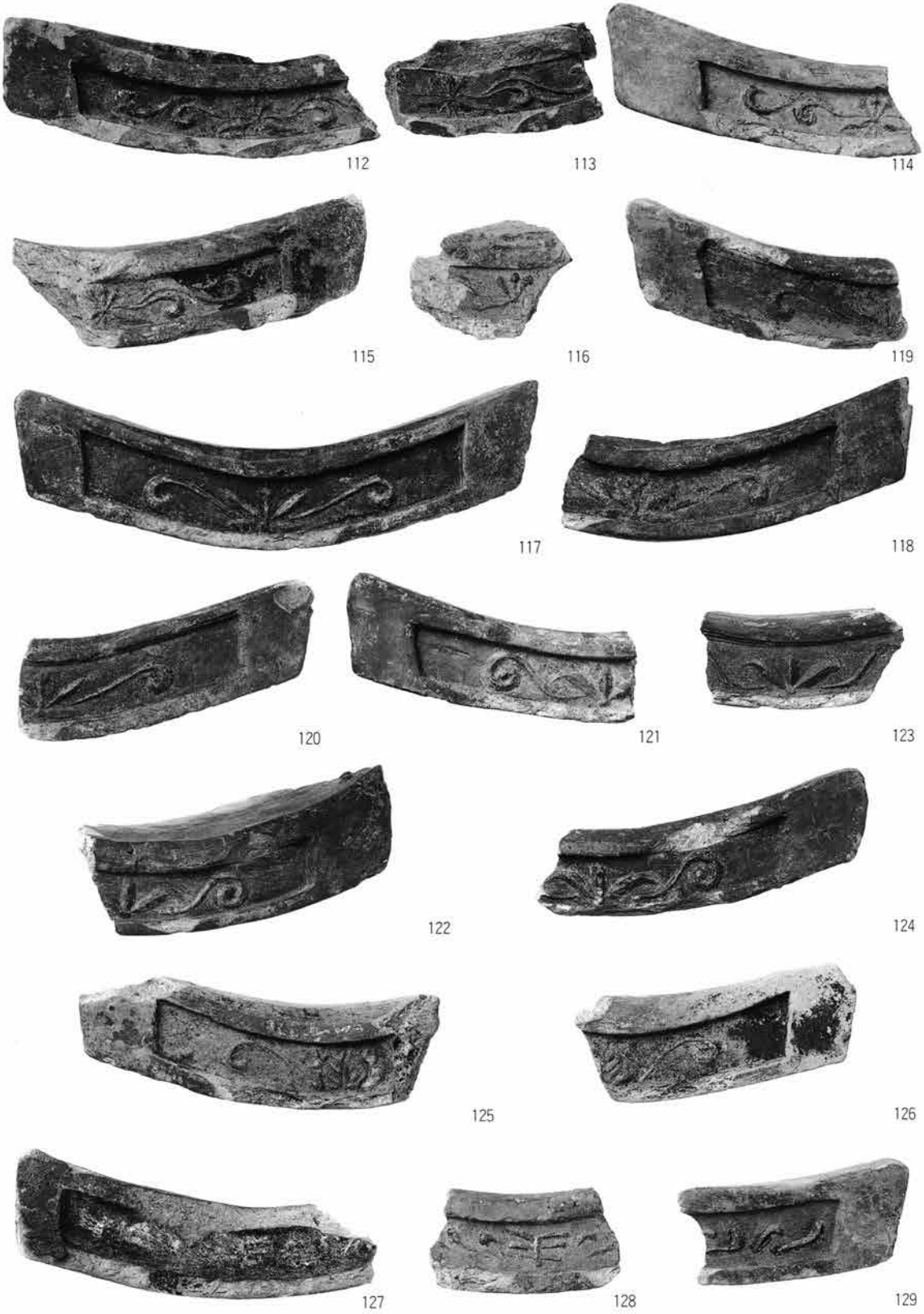
109

110

111

堀出土　軒平瓦　3

図版第51　平安京跡（聚楽第跡）



堀出土　軒平瓦 4

図版第52　平安京跡（聚楽第跡）

130

131

132

134

133

135

137

136

138

139

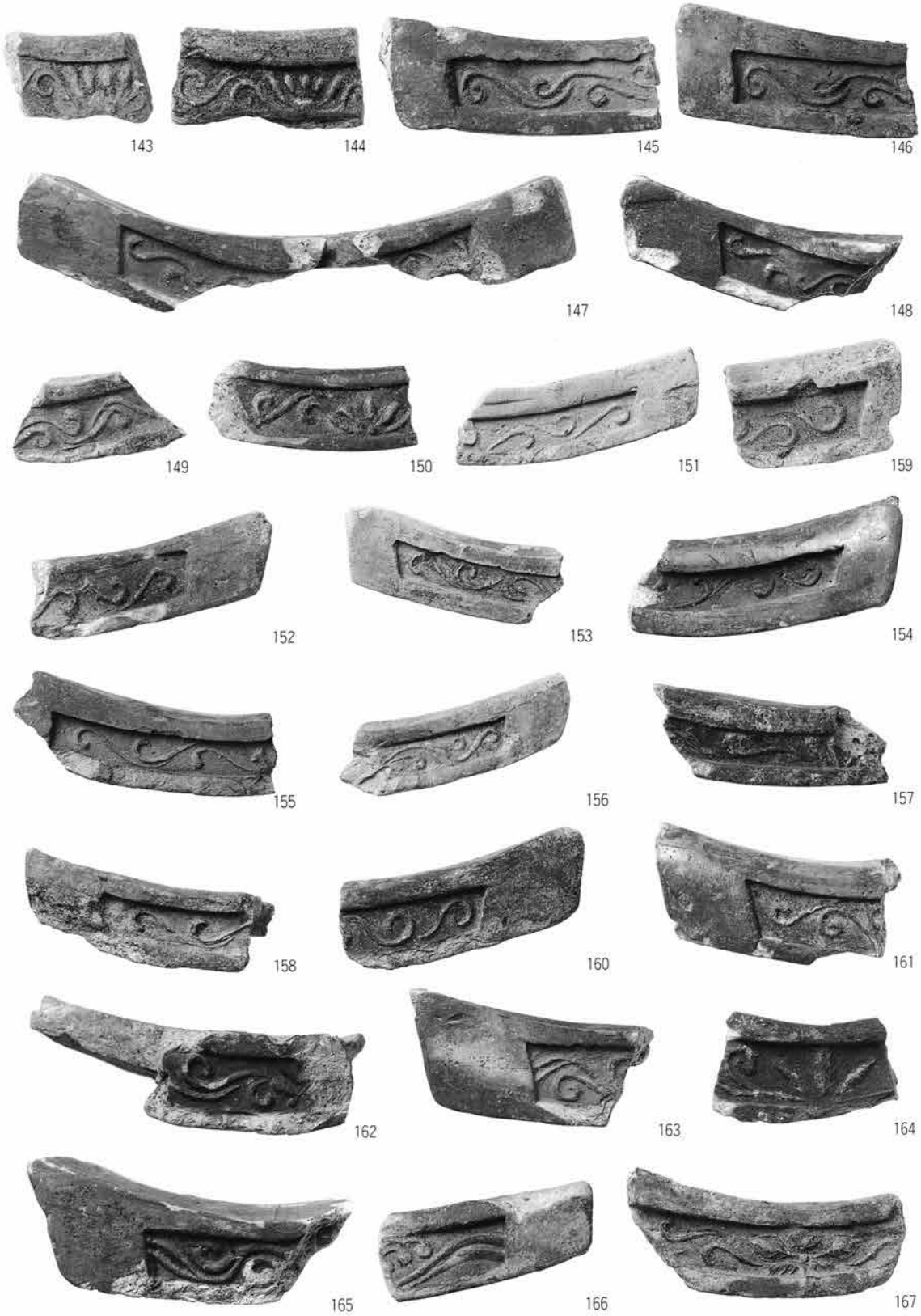
140

141

142

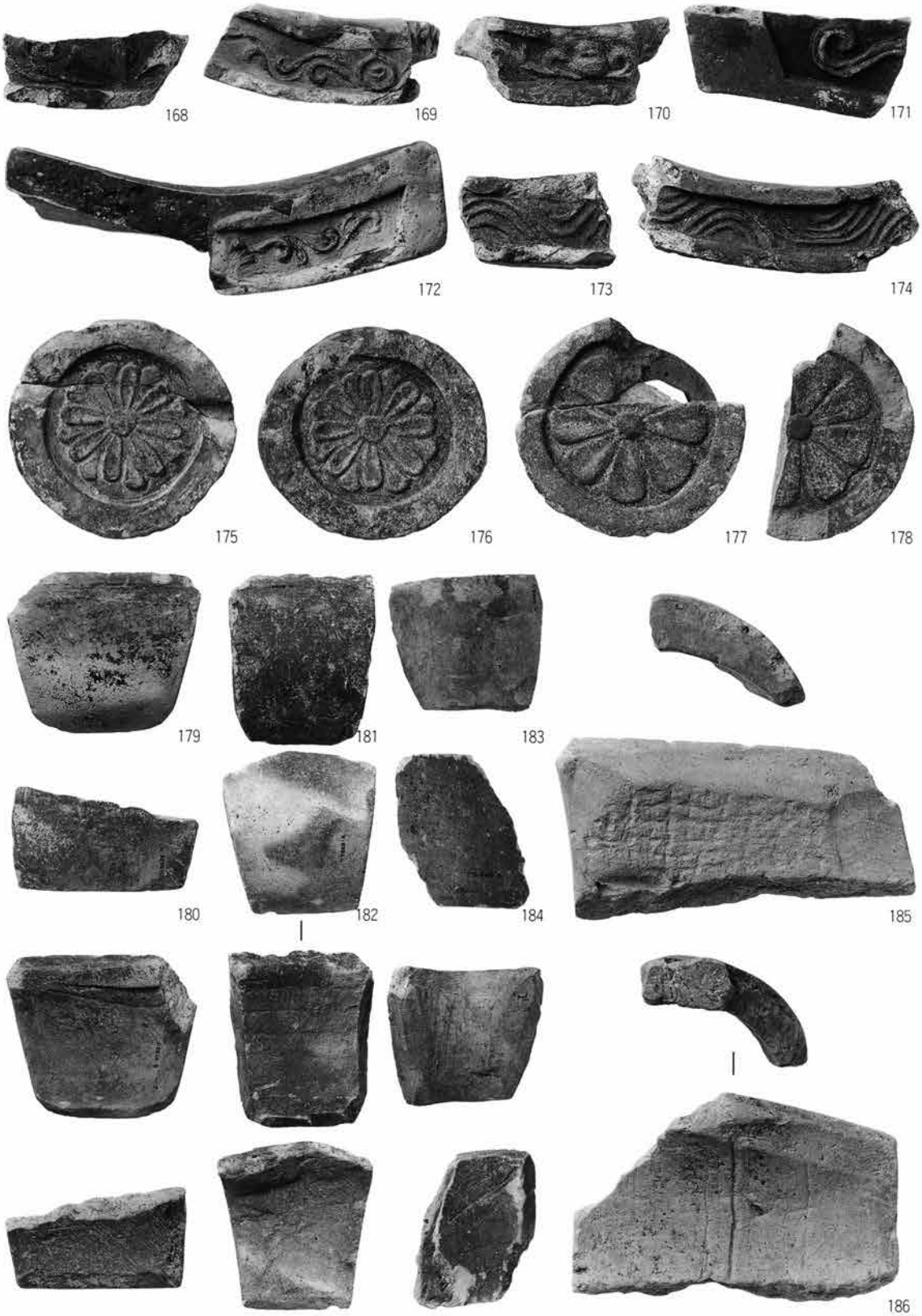
堀出土　軒平瓦 5

図版第53　平安京跡（聚楽第跡）



堀出土　軒平瓦　6

図版第54　平安京跡（聚楽第跡）



堀出土　軒平瓦・棟込瓦類

図版第55　平安京跡（聚楽第跡）

—

187

188

189

190

191

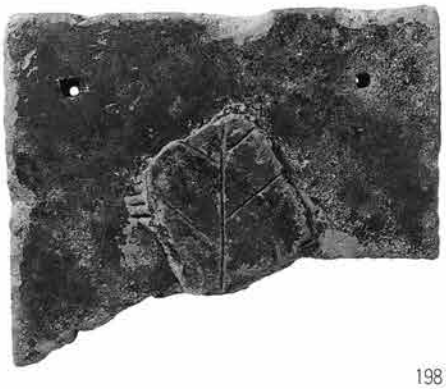
192

193

196

195

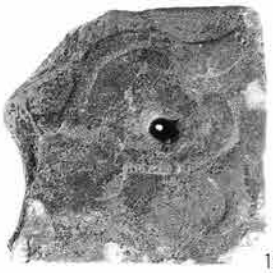
197



198

堀出土　飾瓦類

図版第56　平安京跡（聚楽第跡）


199

200

201

202

203

204

205

207

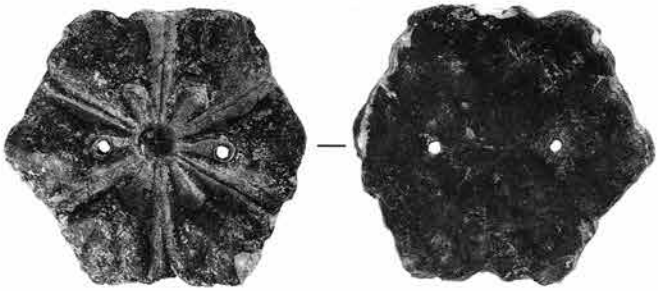
206

223

堀出土　飾瓦類・鬼瓦類　1

図版第57　平安京跡（聚楽第跡）

208



209

211

212

222

224

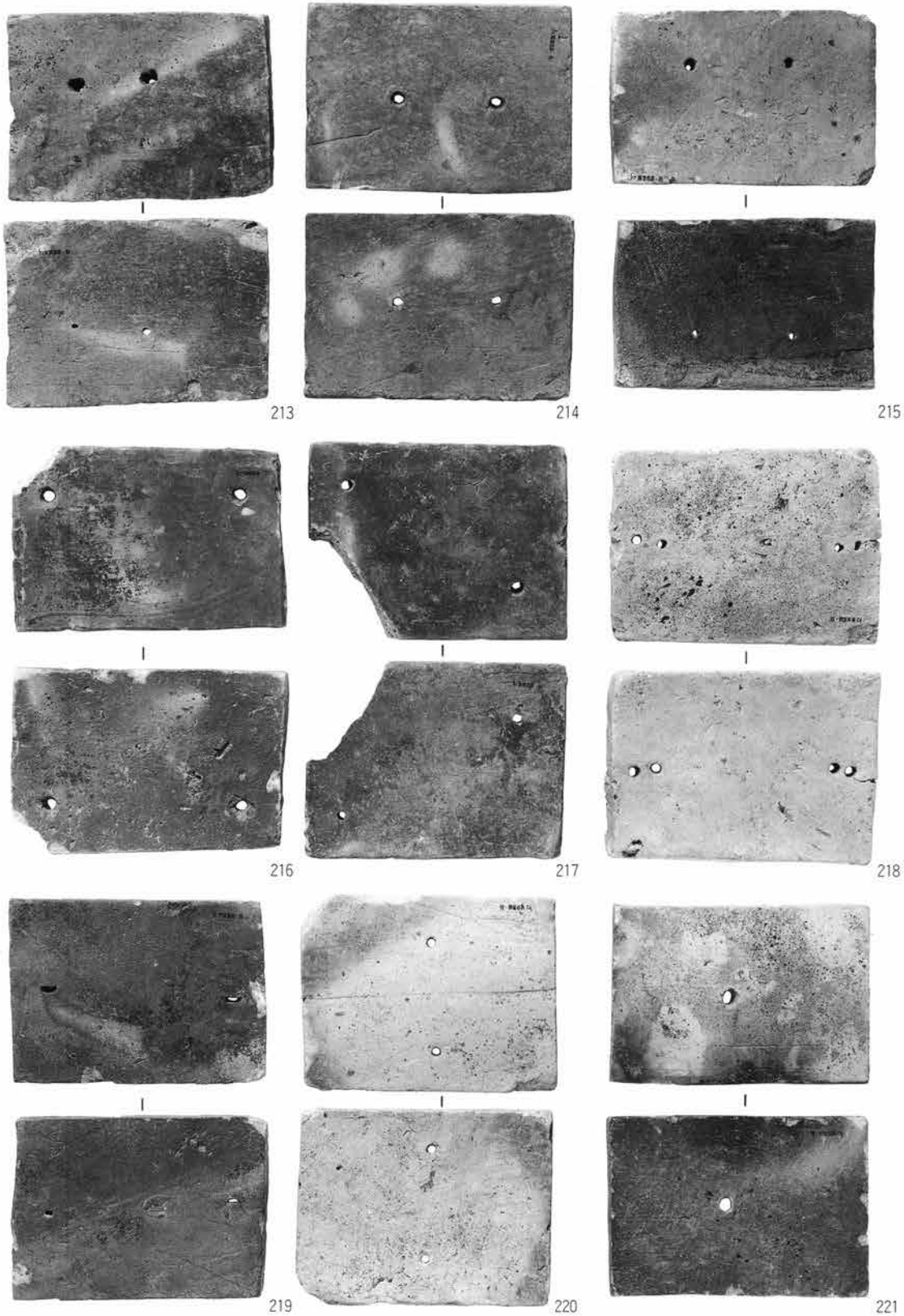
210

226

225

堀出土　飾瓦類・鬼瓦類　2

図版第58　平安京跡（聚楽第跡）



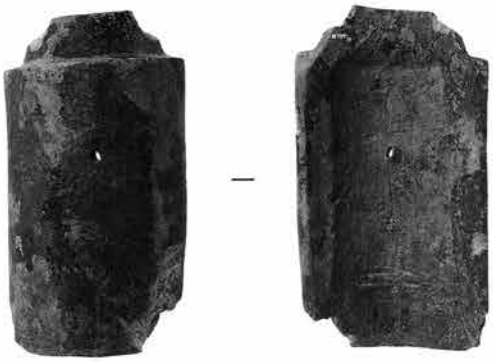
堀出土　方形道具瓦

図版第59　平安京跡（聚楽第跡）

227

228

229



230

231

232

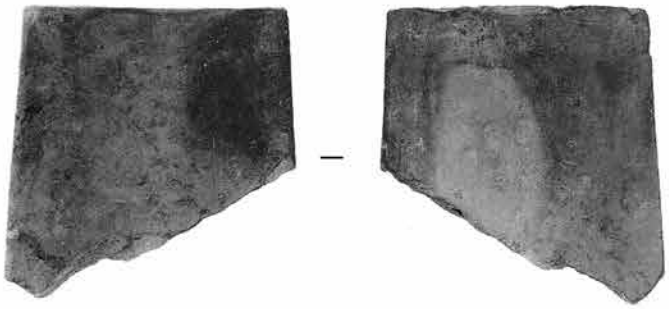
233

242 熨斗瓦

243 熨斗瓦

堀出土　丸瓦・熨斗瓦

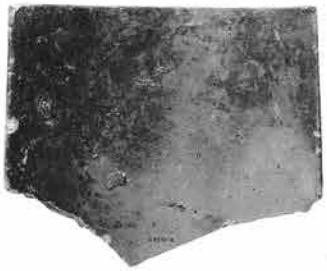
図版第60　平安京跡（聚楽第跡）



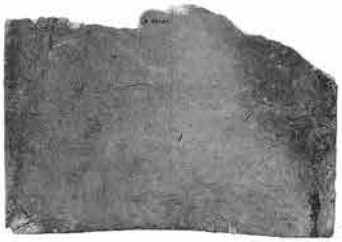
234

235

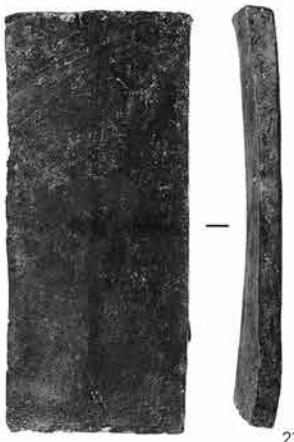
236



237



238



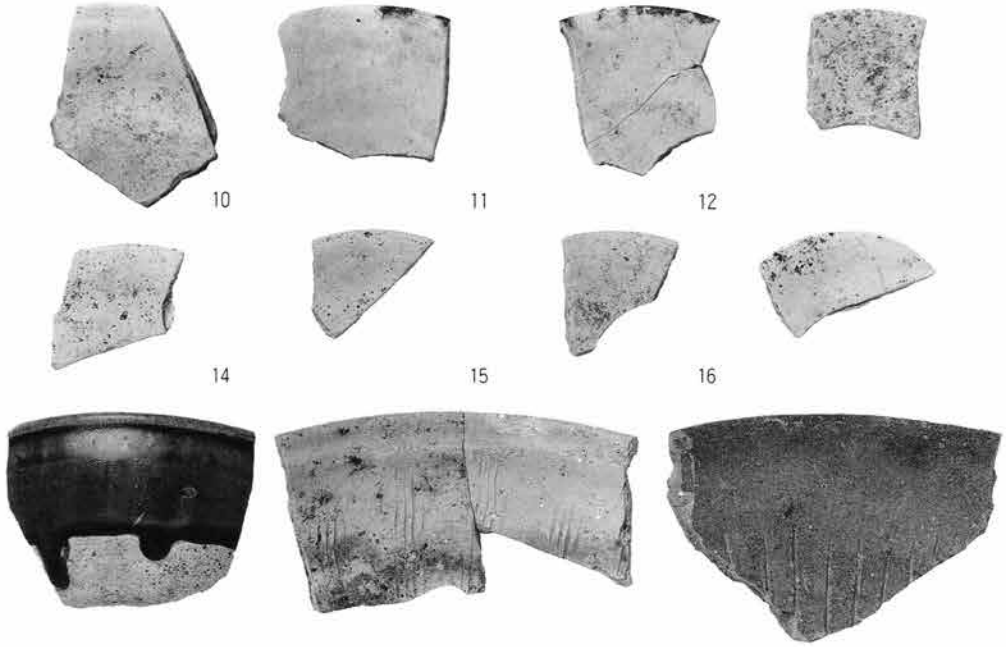
239

240

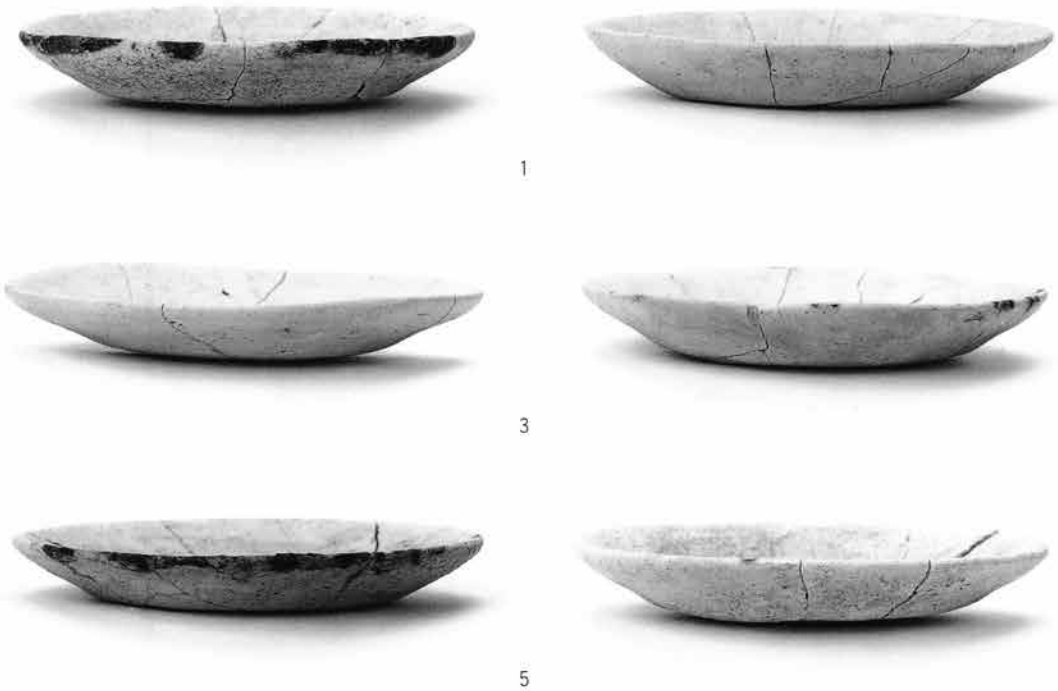
241

堀出土　平瓦・熨斗瓦・文字瓦

図版第61　平安京跡（聚楽第跡）



(1)　堀出土土器類



(2)　土坑１出土土師皿

図版第62　平安京跡（聚楽第跡）

244 肥前磁器椀 口径8.8 器高4.7

245 近世陶器椀 径9.1 高5.4

246 近世陶器燈明皿 径11.6 高2.6

247 ミニチュア竈 18.3×8.3 高7.0

248 近世陶器土瓶 径11.8 高13.5

249 肥前染付壺 径1.6 高12.5(攪乱)

250 チャート製火打ち石 3.8×2.5×1.6(攪乱)

土坑2出土遺物　他

図版第63　平安京跡（聚楽第跡）

251 染付椀 径10.2 高5.6

252 染付椀 径11.0 高6.1

253 染付椀 径9.6 高5.1

254 染付椀 径9.4 高4.6

255 染付椀 径10.6 高5.3

256 染付椀 径12.8 高6.8

257 染付椀 径10.6 高6.2

258 染付椀 径11.4 高6.0

259 染付そば猪口 長径9.4 短径8.7 高5.9

260 染付そば猪口 径7.8 高6.2

土坑３出土遺物　１（肥前磁器）

図版第64　平安京跡（聚楽第跡）

261 京焼椀 径10.5 高6.2

262 京焼椀 径9.0 高5.8

263 京焼椀 径9.0 高5.9

264 京焼椀 径8.0 高5.4

265 京焼椀 径9.1 高5.3

266 京焼椀 径9.2 高5.3

267 京焼椀 径8.8 高5.4

268 京焼椀 径9.1 高5.4

269 丹波焼椀 径7.8 高4.9

270 肥前磁器水滴 6.0×4.0×1.5

土坑3出土遺物 2

図版第65　平安京跡（聚楽第跡）

271 肥前染付皿 径13.7 高3.1

272 肥前染付皿 径10.6 高2.4

273 肥前染付皿 径8.1 高2.1

274 京焼皿 径9.2 高2.4

275 近世陶器燈明皿 径15.1 高3.7

276 近世陶器燈明皿 径12.1 高1.8

277 近世陶器燈明皿 径11.2 高2.2

278 近世陶器燈明皿 径11.1 高2.0

279 丹波焼蓋 径7.6 高2.6

280 近世陶器蓋 径11.0 高2.8

281 近世陶器蓋 径15.5 高3.1

土坑3出土遺物　3

図版第66　平安京跡（聚楽第跡）

282 肥前染付花瓶 径1.7 高8.0

284 丹波焼徳利 径2.6 残高13.1

283 丹波焼徳利 径1.8 高15.5

285 近世陶器火入れ 径10.0 高9.6

286

土坑3出土遺物 4

図版第67　平安京跡（聚楽第跡）

287 染付椀 径13.8 高6.1

288 染付椀 径9.8 高6.8

289 染付椀 径11.2 高6.2

290 染付椀 径9.6 高5.0

291 色絵椀 径9.8 高5.2

292 染付椀 径7.3 高3.6

293 染付椀 径5.8 高3.4

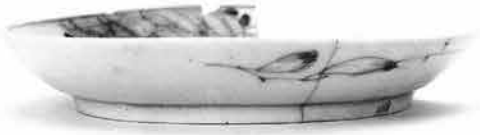
294 染付小杯 径6.6 高4.4

295 染付小杯 径6.6 高4.6

296 色絵椀 径7.3 高3.2

297 染付合子 径5.1 高1.8

298 染付椀 径7.1 高6.2



299 染付皿 径12.6 高2.3

300 染付皿 径18.7 高6.4 外面青磁釉

地下室１出土遺物 １（肥前磁器）

図版第68　平安京跡（聚楽第跡）

301 肥前陶器椀 径11.8 高7.4

302 肥前陶器椀 径10.9 高7.9

303 美濃焼椀 底径3.8 残高2.6

304 肥前陶器椀 径13.6 高5.2

305 肥前陶器椀 径11.4 高5.0

306 近世陶器椀 径11.6 高6.7

307 近世陶器椀 径10.0 高6.5

308 近世陶器皿 径20.6 高5.8

地下室１出土遺物 2

図版第69　平安京跡（聚楽第跡）

309 近世陶器蓋 径9.6 高2.1

310 近世陶器蓋 径9.6 高2.1

311 近世陶器蓋 径10.9 残高1.8

312 近世陶器燈明皿 径9.3 高2.2

313 近世陶器燈明皿 径10.6 高2.1

314 近世陶器燈明皿 径11.2 高2.6

315 京焼香炉 径6.8 高5.4

316 近世陶器鍋 径15.0 体部高4.2

317 近世陶器鍋 径20.5 体部高10.6

318 近世陶器鍋 径18.0 高9.3

319 近世陶器片口鉢 径12.4 高6.9

320 信楽焼匣鉢 底径17.5 残高11.3

地下室１出土遺物　3

図版第70　平安京跡（聚楽第跡）

321 土師皿 径5.3 高1.4

322 土師皿 径5.1 高1.3

323 土師皿 径5.3 高1.3

324 土師皿 径5.3 高1.0

325 土師皿 径4.6 高1.3

326 土師器壺 径2.9 高2.0

327 土師皿 径9.0 高2.0

328 土師皿 径9.0 高1.8

329 土師皿 径10.1 高2.3

330 土師皿 径10.4 高2.2

8

331 土師皿 径13.2 高3.5

332 伏見人形 幅2.4 高さ3.4 厚さ1.4

333

334

335

333～335 焼塩壺「天下一堺ミなと藤左衛門」　333. 径6.2 高10.8

地下室１出土遺物 4

図版第71　植物園北遺跡

(1)　試掘トレンチ全景（北から）

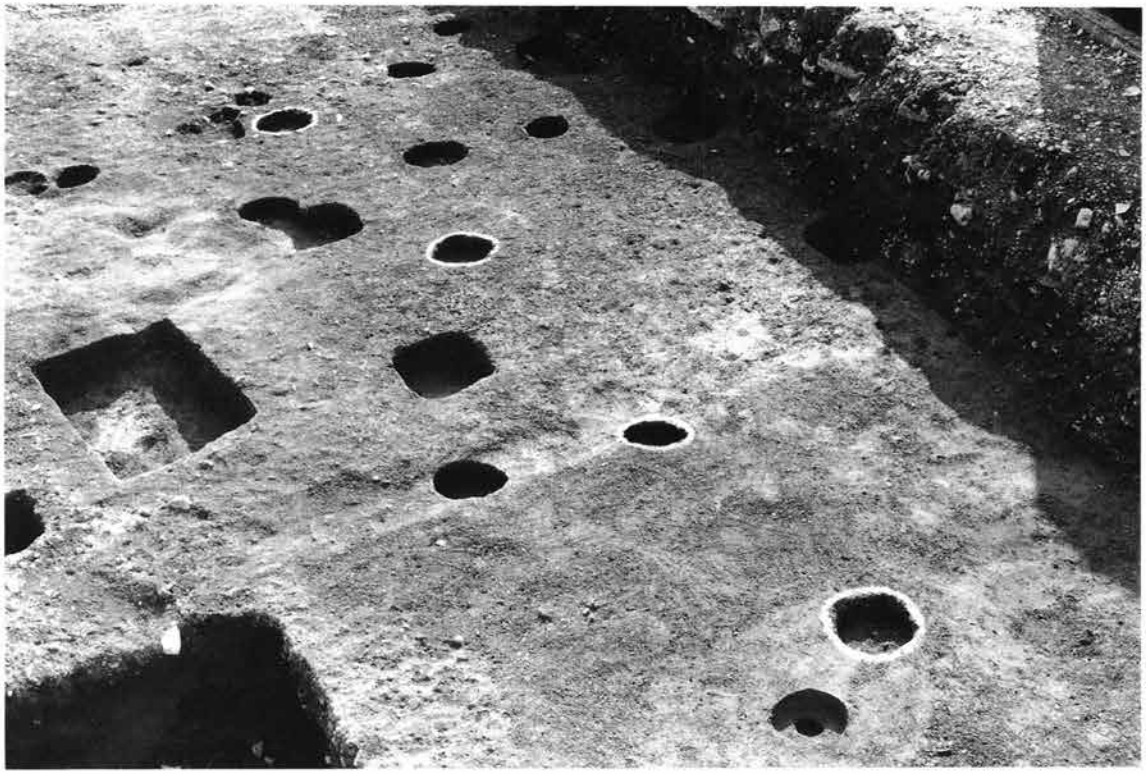
(2)　拡張調査区全景（南から）

図版第72　植物園北遺跡

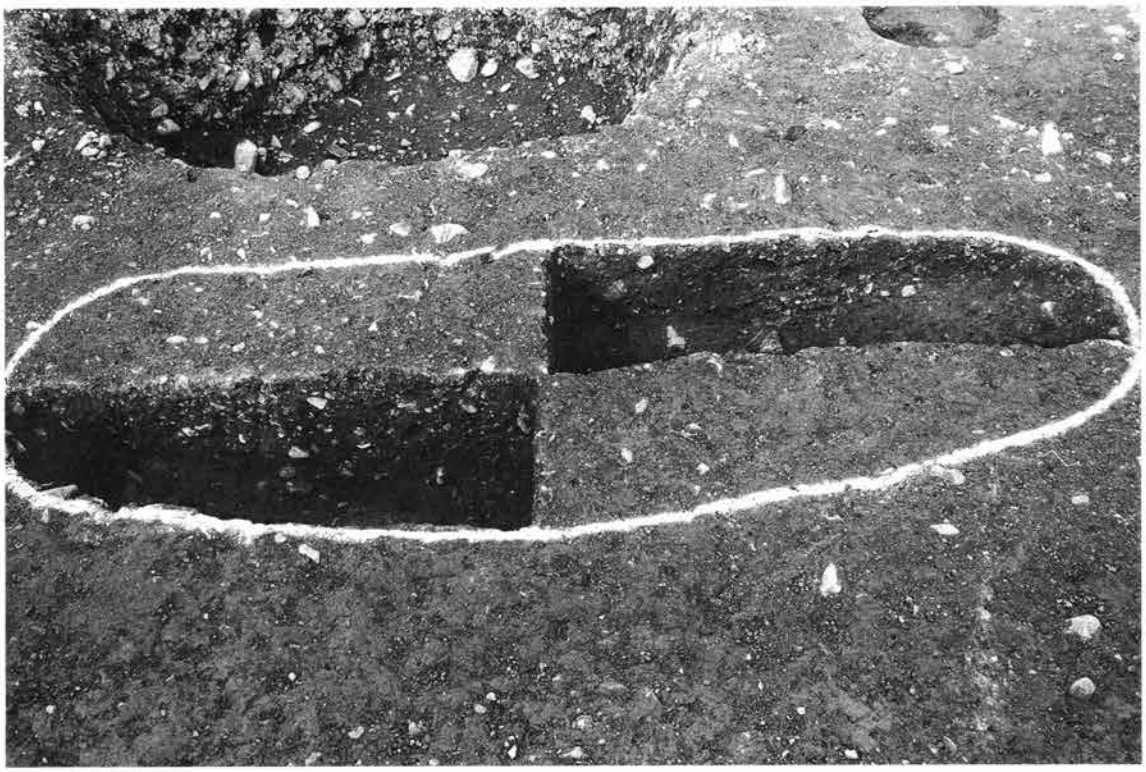
(1)　拡張調査区全景（北から）

(2)　建物跡SB１（北から）

図版第73　植物園北遺跡



(1) 柱穴列SA 1（北東から）



(2) 土坑SK 4（南から）

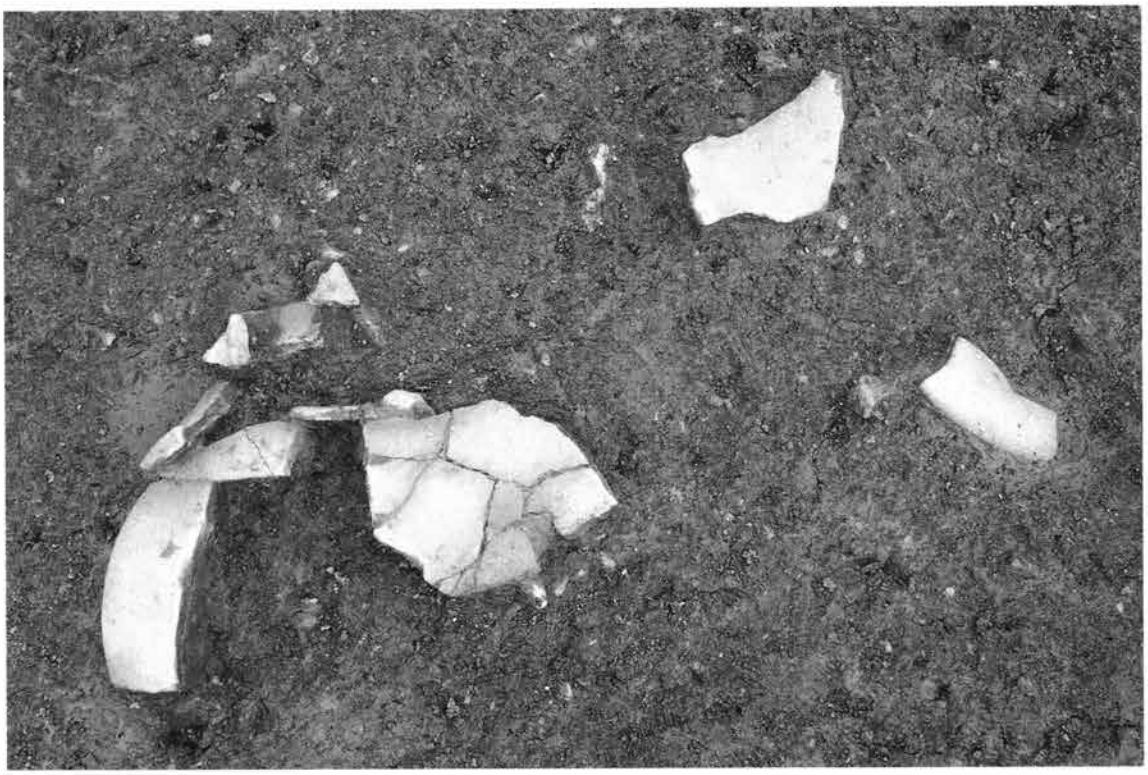
図版第74　植物園北遺跡

(1)　焼土坑SX１セクション（東から）

(2)　焼土坑SX１砂礫層除去（西から）

図版第75　植物園北遺跡

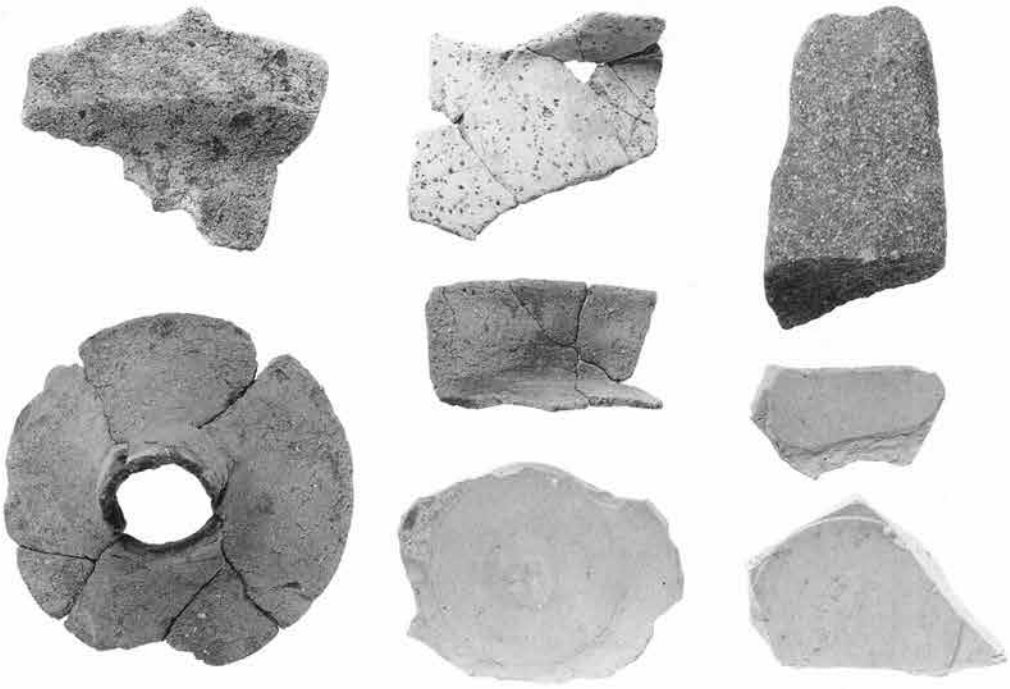
(1)　焼土坑SX１完掘状況（西から）



(2)　遺物出土状況

図版第76　植物園北遺跡

(1)　高杯



(2)　その他の出土遺物

京都府遺跡調査概報　第54冊

平成５年３月２４日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の３
Tel(075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel(075)441-3155（代）